

東京大学構内遺跡調査研究年報 8

2009・2010 年度

東京大学埋蔵文化財調査室

東京大学構内遺跡調査研究年報 8

2009・2010 年度

東京大学埋蔵文化財調査室

例 言

1. 本書は 2009 年 4 月 1 日から 2011 年 3 月 31 日までに東京大学埋蔵文化財調査室が実施した埋文化財発掘調査およびそれに関わる研究、教育、普及などの諸活動をまとめたものである。
2. 上記期間に行った発掘調査のうち、埋蔵文化財が確認できたものについてその略報を第 1・2 部に掲載した。
3. 「東京大学構内遺跡調査一覧表」および報告内で使用されている調査地点名に続く（ ）内の記載内容は、当該地点の略称である。
4. 遺構の略号は独立行政法人奈良文化財研究所で採用している方式を参照し、前に遺構の性格、後ろに各調査地点ごとに 1 から通し番号を付与した。遺構番号の性格の略称は個々の報告の凡例を参考にされたい。
5. 本文の執筆者は、第 1・2 部は文頭、第 3 部は例言、第 4 部は文頭に記した。
6. 本書の作成は室員があたり、成瀬晃司、小林照子が編集を行った。
7. 本書に添付した CD-ROM には、印刷本と同内容の電子版（pdf 形式）に加え、「第 3 部東京大学構内遺跡発掘調査報告」では、内容に関わる遺構、遺物の写真データ（jpeg 形式）、観察表（xls 形式）を収録している。但し、著作権保護の観点からデジタルデータ作成に制約を受ける資料には墨塗りを施している。
8. 本書掲載・収録の諸データは、営利を伴わない学術目的の個人論文などを除いて無断転載を禁止する。
9. 発掘調査に伴う出土文化財等は、東京大学埋蔵文化財調査室が、東京大学駒場Ⅱリサーチキャンパス（東京都目黒区駒場 4 - 6 - 1）および東京大学工学系研究科柿岡教育研究施設（茨城県石岡市柿岡 414）において管理、運用、保管を行っている。

目 次

例 言

目 次

東京大学構内遺跡調査一覧

第1部 2009年度調査室事業概要

第I章 埋蔵文化財調査の概要（事前・試掘・立会）

第1節 本郷構内の事前調査	5
1.〔本郷74〕医学部附属病院看護師宿舎地点Ⅲ期（HHN308）	5
2.〔本郷91〕医学部附属病院立体駐車場地点（HHP09）	13
3.〔本郷92〕学生支援センター地点（HGG09）	18
4.〔本郷93〕伊藤国際学術研究センター地点（H7I09）	22
5.〔本郷87〕東京都下水道工事地点（HTG08）	52
6.〔本郷97〕基幹整備（流域⑧排水）A区地点（HKS09）	54
第2節 本郷構内の試掘調査	56
1.〔本郷90〕薬学部研究実験棟地点	56
2.〔本郷91〕医学部附属病院立体駐車場地点	58
3.〔本郷94〕分生研・農学部総合研究棟地点	60
4.〔本郷96〕工学部新3号館建替時待避用仮設建物地点	62
第3節 本郷構内の立会調査	64
1.〔本郷88-2〕耐震対策事業ガス管改修地点	64
2.〔本郷95〕農学生命科学研究科フードサイエンス棟地点	65
第4節 駒場I構内の試掘調査	66
1.〔駒場I 22〕理想の教育棟地点	66
第5節 駒場I構内の立会調査	68
1.〔駒場I 21〕基幹整備（排水）地点	68

第II章 調査資料の整理・研究および公開・活用

第1節 調査資料の整理	69
第2節 調査成果の公開・活用	70
第3節 室員研究・活動内容	80
第4節 埋蔵文化財調査室要項	83

第2部 2010年度調査室事業概要

第I章 埋蔵文化財調査の概要（事前・試掘・立会）

第1節 本郷構内の事前調査	91
1.〔本郷94〕分生研・農学部総合研究棟地点（HNS09）	91
2.〔本郷97〕基幹整備（流域⑧排水）B区地点（HKS09）	96

3. [本郷 101] 医学部附属病院ドナルド・マクドナルド・ハウス地点 (HMH10) ……	98
4. [本郷 99] 法学部 3 号館増築地点 1 期 (HLS10-1) ……	102
5. [本郷 99] 法学部 3 号館増築地点 2 期 (HLS10-2) ……	107
第 2 節 本郷構内の試掘調査	
1. [本郷 98] 原子動力実験棟地点 ……	112
2. [本郷 99] 法学部 3 号館増築地点 1 期 ……	114
3. [本郷 101] 医学部附属病院ドナルド・マクドナルド・ハウス地点 ……	116
4. [本郷 103] 春日門横教育研究棟地点 ……	118
第 3 節 本郷構内の立会調査	
1. [本郷 99] 法学部 3 号館増築地点 2 期 ……	120
2. [本郷 102] 本郷通り囲障改修地点 ……	121
3. [本郷 104] 防犯ネットワークカメラ賃貸借地点 ……	122
4. [本郷 105] 弥生地区屋外ガス配管改修地点 ……	124
5. [本郷 106] 薬学ゲート前舗装改修地点 ……	125
6. [本郷 114] 下水本管改修地点 ……	126
第 4 節 白山構内の事前調査 ……	127
1. [白山 6] 理学系研究科附属植物園本園・ 下水・電源ケーブル埋設枿・埋設溝地点 (KGB10) ……	127
第 5 節 白山構内の立会調査 ……	136
1. [白山 7] 理学系研究科附属植物園本園・旧小石川養生所井戸柵改修地点 ……	136
第 II 章 調査資料の整理・研究および公開・活用	
第 1 節 調査資料の整理 ……	138
第 2 節 調査成果の公開・活用 ……	139
第 3 節 室員研究・活動内容 ……	141
第 4 節 埋蔵文化財調査室要項 ……	144
第 3 部 東京大学構内遺跡発掘調査報告	
[本郷 59] 工学部基幹整備共同溝地点 (KK) ……	155
[駒場 I 2] 駒場情報教育棟地点 (FGE) ……	173
[白山 4] 農学生命科学研究科附属小石川樹木園根圏観察温室地点 (KNK) ……	215
第 4 部 東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要 8	
東京大学構内遺跡出土人形・玩具の分類 ……	259
東京大学構内遺跡出土人形・玩具の年代的推移について ……	289
報告書抄録	

東京大学構内遺跡調査一覧

表1 本郷地区

番号	年度	遺跡名・調査地点名(略称)*1	調査種別	調査期間	面積(m ²)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
1	1983	山上会館(U)	事前	1984.3.7 ~ 1986.7.17	1500	西田・谷大貫	「東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書4 山上会館・御殿下記念館地点」
2	1984	法学部4号館(法)・文学部3号館(文)	事前	1984.4.1 ~ 1985.3.31	2500	大塚	「東京大学遺跡調査室発掘調査報告書2 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡」
3	1986	御殿下記念館(G)	事前	1986.7.29 ~ 1988.6.30	6000	寺島・大貫倉林	「東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書4 山上会館・御殿下記念館地点」
4	1984	医学部附属病院中央診療棟(病中)・設備管理棟(エネゼン)・給水設備棟(給水)・共同溝(共同溝)	事前	1984.10.1 ~ 1987.3.31	7700	藤本・小川	「東京大学遺跡調査室発掘調査報告書3 医学部附属病院地点」
5	1984	理学部7号館(理D)	事前	1985.2.1 ~ 10.8	750	羽生	「東京大学遺跡調査室発掘調査報告書1 理学部7号館地点」
6	1986	バス通り上水(上水)	立会	1986.5.12 ~ 7.20	-	寺島	「東京大学構内遺跡調査研究年報」2所収
7	1987	タンデム棟(タンデム)	試掘	1988.2.15 ~ 17	28	成瀬・武藤	「東京大学構内遺跡調査研究年報」7所収
8	1987	弥生門脇変電施設	立会	1987.12.15 ~ 16	-	武藤	江戸
9	1989	農学部家畜病院(VMC)	事前	1990.1.31 ~ 3.14	1040	武藤	「東京大学構内遺跡調査研究年報」1所収
10	1990	医学部附属病院外来診療棟(HG)	事前	1990.6.27 ~ 1991.2.21	5500	成瀬・堀内武藤	「東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書5 医学部附属病院外来診療棟地点」
11	1991	農学部ガラス室	試掘	1991.8.12 ~ 13	7	堀内	遺構・遺物なし
12	1992	農学部図書館(FAL)	事前	1993.3.9 ~ 3.25	408	武藤	「東京大学構内遺跡調査研究年報」4所収
13	1992	農学部7号館A棟I期(FA792)	事前	1992.10.6 ~ 11.16	1170	武藤	「東京大学構内遺跡調査研究年報」4所収
14	1992	工学部14号館(工14)	事前	1992.11.26 ~ 1993.2.23	1785	成瀬・堀内	「東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書7 工学部14号館地点」
15	1992	薬学部新館(YS)	事前	1992.10.21 ~ 12.18	1300	堀内・寺島	「東京大学構内遺跡調査研究年報」1所収
16	1993	農学部7号館A棟II期(FA793)	事前	1993.11.3 ~ 26	1000	武藤	「東京大学構内遺跡調査研究年報」4所収
17	1993	工学部1号館(FE1)	事前	1993.12.6 ~ 1994.2.10	616	武藤	「東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書6 工学部1号館地点」
18	1993	教育学部総合研究棟(SK)	事前	1993.11.18 ~ 12.28	1007	堀内	「東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書10 教育学部総合研究棟地点・IML地点」
19	1993	医学部附属病院看護師宿舎(HN)	事前	1993.8.4 ~ 1994.1.17	746	成瀬	「東京大学構内遺跡調査研究年報」1所収
20	1993	総合研究博物館新館(TUM)	事前	1994.2.14 ~ 4.8	600	堀内	「東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書11 総合研究博物館新館地点」
21	1993	医学部附属病院MRI-CT棟(MRI)	事前	1994.1.18 ~ 3.12	400	成瀬	「東京大学構内遺跡調査研究年報」1所収
22	1994	山上会館龍岡門別館(HF)	事前	1994.8.17 ~ 10.17	593	武藤	「東京大学構内遺跡調査研究年報」4所収
23	1994	医学部附属病院入院棟A(HW)	事前	1994.4.21 ~ 11.16、 1995.1.31 ~ 1996.5.31	6096	成瀬・原 鮫島・大成	「東京大学構内遺跡調査研究年報」2所収
24	1994	医学部教育研究棟(医研)	事前	1994.11.17 ~ 1995.4.28、 1997.3.10 ~ 4.25、1998.11. 2 ~ 12.25、2002.9.3 ~ 12.25	2415	堀内・鮫島 大成	「東京大学構内遺跡調査研究年報」2所収
25	1994	医学部附属病院看護師宿舎ゴミ置き場(HND)	事前	1995.1.30 ~ 3.3	45	原	「東京大学構内遺跡調査研究年報」1所収
26	1994	法文十字路外灯	立会	1994.9.5	-	成瀬・鮫島	江戸
27	1994	理学部1号館	立会	1994.10.3 ~ 18	-	寺島	遺構・遺物なし
28	1995	薬学部資料館(FPS)	事前	1995.7.24 ~ 9.1	600	武藤	「東京大学構内遺跡調査研究年報」1所収
29	1995	情報基盤センター変電室1(ACC)	事前	1995.7.18 ~ 31	78	鮫島	「東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9 浅野地区I」
30	1995	工学部風工学実験室支障ケーブル地点(AFC)	事前	1995.8.22 ~ 9.22	63	鮫島	「東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9 浅野地区I」
31	1995	ATMネットワーク施設整備	立会	1995.11.20 ~ 24	-	武藤・堀内 鮫島・原	江戸
32	1994	医学部附属病院看護師宿舎電気ケーブル埋設	立会	1995.3.2	-	原	遺構・遺物なし
33	1996	地震研テレメタリング地震観測施設(EQL)	事前	1996.4.15 ~ 5.2	360	武藤	「東京大学構内遺跡調査研究年報」4所収
34	1996	野球グラウンド	立会	1996	-	寺島	遺構・遺物なし
35	1993	経済学部前路面陥没	立会	1993.9.28、1994.5.14	-	成瀬	江戸
36	1993	農学部ガス管理設	立会	1993.10.15	-	成瀬	江戸
37	1994	屋外環境整備等工事龍岡門~附属病院	立会	1994.10.13	-	成瀬・原	江戸
38	1994	医学部附属病院内エアタンク設置	立会	1994.12.18	-	成瀬	遺構・遺物なし
39	1994	史料編纂所前埋設	立会	1995.3.10	-	成瀬	江戸
40	1995	工学部風工学実験室(AFL)	事前	1996.1.22 ~ 3.7	252	鮫島	「東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9 浅野地区I」

番号	年度	遺跡名・調査地点名(略称)	調査種別	調査期間	面積(m ²)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
41	1996	インテリジェント・モデリング・ラボラトリー (IML)	事前	1996.4.15 ~ 6.20	626	堀内	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書10 教育学部総合研究棟地点・IML地点』
42	1996	医学部附属病院基幹整備に伴う樹木移植	立会	1996.4	-	成瀬	江戸
43	1996	医学部附属病院基幹整備共同溝等 (HWK1)	事前	1996.5.12 ~ 5.18	20	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
44	1996	医学部附属病院基幹整備共同溝等 (HWK2)	事前	1996.5.20 ~ 6.28	102	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
45	1996	医学部附属病院基幹整備共同溝等 (HWK3)	事前	1996.5.20 ~ 6.28	179	大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
46	1994	龍岡門門衛所移築	立会	1994.8.24	-	成瀬	江戸
47	1996	医学部附属病院基幹整備共同溝等 (HWK4)	事前	1996.5.20 ~ 6.28	3	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
48	1996	医学部附属病院看護師宿舍Ⅱ期 (HNⅡ)	事前	1996.11.5 ~ 1997.1.31	525	原・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
49	1997	外灯整備工事1	立会	1997.4.13 ~ 30	-	原	江戸
50	1997	外灯整備工事2	立会	1997.4.13 ~ 30	-	原	江戸
51	1997	外灯整備工事3	立会	1997.4.13 ~ 30	-	原	江戸
52	1997	農学部 (21世紀館) 木質ホール	試掘	1997.7.14 ~ 18	50	大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
53	1998	工学部風環境シミュレーション風洞実験室 (AFⅣ)	事前	1999.1.17 ~ 25	300	原	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9 浅野地区Ⅰ』
54	1999	総合研究棟 (文・経・教・社研) (HES99)	事前	1999.5.24 ~ 11.2	1000	堀内・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』3所収
55	1999	医学部附属病院第2中央診療棟 (2中→HHC299)	事前	1999.10.12 ~ 2000.2.25、 2001.7.23 ~ 2002.12.19	4017	成瀬・原 追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
56	1999	文系4研究所等暫定建物	試掘	1999.12.16 ~ 17	16	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』3所収
57	1999	環境安全センター	立会	2000.1.17	-	成瀬	遺構・遺物なし
58	1999	医学部附属病院受電設備棟Ⅱ期 (YM)	事前	2000.2.5 ~ 3.31	300	原	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書12 医学部附属病院受電設備棟地点』
59	2000	工学部基幹整備共同溝地点 (KK)	事前	2000.7.3 ~ 7.12、10.11 ~ 10.14、2001.2.21 ~ 2.28	900	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
60	2000	医学部附属病院基幹整備外構施設等 (HWK6)	事前	2000.9.21 ~ 11.14	200	成瀬・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
61	2001	工学部武田先端知ビル (TS)	事前	2001.6.4 ~ 8.7、11.28 ~ 12.28	740	原	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9 浅野地区Ⅰ』
62	2001	農学部生命科学総合研究棟 (NSK01)	事前	2001.9.21 ~ 10.19	1800	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
63	2001	薬学部暫定建物	立会	2002.2.5 ~ 6	-	成瀬	遺構・遺物なし
64	2001	情報学環暫定建物	立会	2002.2.7	-	成瀬	江戸
65	2002	法学系総合研究棟 (LS03)	事前	2003.2.17 ~ 4.18	946	成瀬・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
66	2002	薬学系総合研究棟1期 (YGS01)	事前	2002.8.1 ~ 2003.2.28	1260	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
66	2004	薬学系総合研究棟2期 (YGS04)	事前	2004.7.26 ~ 8.4、11.17 ~ 2005.5.24	540	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
67	2002	地震研究所総合研究棟	試掘	2002.5.9 ~ 17	32	堀内	近代・江戸・古墳・弥生・縄文
68	2002	インキュベーション施設 (INC)	事前	2003.3.6 ~ 6.7	1051	堀内・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
69	2002	地震研仮設建物	立会	2002.5.14 ~ 16	-	堀内	遺構・遺物なし
70	2002	工学系総合研究棟	立会	2003.2.28	-	堀内	遺構・遺物なし
71	2004	地震研究所総合研究棟 (HEQ04)	事前	2004.8.30 ~ 2005.2.28	1474	追川・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
72	2004	理学部1号館前 (SC1)	事前	2004.11.29 ~ 12.3	32	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
73	2004	クリニカルリサーチセンター A棟Ⅰ期 (旧名: 疾患生命研究センター)	試掘	2004.11.29 ~ 12.1	24	成瀬	江戸・古墳
74	2008	医学部附属病院看護師宿舍Ⅲ期 (HHN308)	事前	2008.4.1 ~ 8.1	550	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
75	2005	工学系総合研究棟立坑 (KOS05)	事前	2005.9.13 ~ 14	17	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
76	2005	ベンチャープラザ (HVP06)	事前	2006.3.6 ~ 5.16	760	追川・堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
77	2005	農学部弥生講堂アネックス	立会	2006.1.12	5	大成	江戸
78	2006	情報学環・福武ホール (HJF06)	事前	2006.6.5 ~ 12.8、2007.2.5 ~ 23	1766	大成・成瀬 追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
79	2006	農学部コイトロン温室	立会	2007.1.16	-	成瀬	遺構・遺物なし
80	2006	工学部もの作り実験工房	立会	2007.2.22	-	成瀬	遺構・遺物なし
81	2007	経済学研究科学術交流棟 (HEA07)	事前	2008.3.17 ~ 7.11、9.11 ~ 24、2009.2.2 ~ 10	433	成瀬	近代・江戸
82	2007	懐徳門 (HKM07)	事前	2007.6.20 ~ 7.20	34	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
83	2007	向ヶ丘ファカルティハウス	試掘	2007.10.22 ~ 25	50	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
84	1984	農学部共同溝 (NK84)	事前	1984.7.9 ~ 23	50	今村啓爾	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
85	2007	薬学部東法面階段設置	立会	2008.3.14	-	成瀬	遺構・遺物なし
86	2008	雨水管改修工事	立会	2009.2.2 ~ 16	-	成瀬	遺構・遺物なし
87	2008	東京都下水道工事 (HTG08)	事前	2008.12.7 ~ 12.25、 2009.11.27 ~ 12.8	39	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
88-1	2008	耐震対策事業ガス管改修工事	立会	2008.11.19、11.20	-	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
88-2	2008	耐震対策事業ガス管改修工事	立会	2009.5.11 ~ 13、15、23、 31、6.18、8.27	-	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
89	2008	弥生地区屋外ガス配管改修工事	立会	2008.11.25 ~ 12.17	-	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
90	2009	薬学部研究実験棟	試掘	2009.4.16	10	大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
91	2009	医学部附属病院立休駐車場 (HHP09)	事前	2009.12.13 ~ 2010.2.25	3034	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
92	2009	学生支援センター (HGG09)	事前	2009.7.21 ~ 7.30	440	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収

番号	年度	遺跡名・調査地点名(略称)	調査種別	調査期間	面積(m ²)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
93	2009	伊藤国際学術研究センター(H7I09)	事前	2009.7.30～2010.2.12、5.17～5.31	1710	成瀬・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
94	2009	分生研・農学部総合研究棟(HNS09)	事前	2010.1.25～3.31、7.28～8.11	1731	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
95	2009	農学生命科学研究科フードサイエンス棟	立会	2009.10.22、11.2	-	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
96	2009	工学部新3号館建替時待選仮設建物	試掘	2009.12.14～12.17	64	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
97-1	2009	基幹整備(流域⑤排水)A区(HKS09)	事前	2010.2.16～3.19	26	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
97-2	2010	基幹整備(流域⑤排水)B区(HKS09)	事前	2010.11.27～12.6	42	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
98	2010	原子動力実験棟	試掘	2010.4.9	16	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
99	2010	法学部3号館増築工事(HLS10)	事前	2010.7.20～8.23、2011.1.18～26	734	追川・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
100	2010	工学部新3号館(HK311)	事前	2011.1.4～10.11	4595	堀内	近代・江戸・古代・縄文
101	2010	ドナルド・マクドナルド・ハウス東大(HMH10)	事前	2010.1.29～2011.1.26	30	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
102	2010	本郷通り開路改修立会	立会	2010.12.2、13	-	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
103	2010	春日門横教育研究棟(HKK11)	試掘	2011.3.14～18	-	大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
104	2010	防犯用ネットワークカメラ貸借工事	立会	2010.7.30～8.11	-	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
105	2010	弥生地区屋外ガス配管改修工事	立会	2010.8.31～9.11	-	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
106	2010	薬学ゲート前舗装改修工事	立会	2011.2.7、9、15～16、18、21～22	-	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
114	2010	下水本管改修	立会	2010.17、21	-	原	遺構・遺物なし

表2 駒場I地区

番号	年度	遺跡名・調査地点名(略称)	調査種別	調査期間	面積(m ²)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
1	1992	教養学部保健センター	試掘	1992.3.19	28	武藤	遺構・遺物なし
2	1993	教養学部情報教育棟(FGE)	事前	1993.8.10～10.20	940	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
3	1993	数理学部研究科棟	試掘	1993.5.8～15	350	堀内	縄文
4	1994	数理学部研究科棟擁壁工事	立会	1995.1.20～27	-	武藤	近代
5	1994	数理学部研究科棟関連東電マンホール増設・管路新設工事	立会	1995.1.24～4.12	-	武藤	平安・縄文
6	1995	教養学部伝統文化活動施設	試掘	1995.9.11	8	武藤	遺構・遺物なし
7	1995	教養学部学生用浴室・シャワー施設	試掘	1995.9.11	8	武藤	遺構・遺物なし
8	1995	数理学部研究科棟ガス・水道管理設工事	立会	1995.5.17～18、6.27～28	-	武藤	遺構・遺物なし
9	1996	数理学部研究科II期棟(数理)	事前	1996.12.12～1997.2.6	1160	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
10	1997	教養学部キャンパス・プラザ	試掘	1997.4.24	41	武藤	遺構・遺物なし
11	1999	教養学部総合研究棟	試掘	1999.7.26～8.3	130	原	遺構・遺物なし
12	2000	駒場図書館(KL)	事前	2000.7.27～8.30	1778	大成・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
13	2001	教養学部総合研究棟	試掘	2001.10.24～25	60	堀内	遺物・遺構なし
14	2002	教養学部総合研究棟	試掘	2002.3.25～26	53	大成	遺物・遺構なし
15	2002	コミュニケーションプラザ和館	試掘	2004.12.6～7	80	成瀬	遺構・遺物なし
15	2005	コミュニケーションプラザ(KCP)	事前	2005.4.22～7.21	4327	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
16	2003	国際学術交流棟(KGK)	事前	2003.5.16～7.9	620	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
17	2005	教養学部5号館他改修工事	立会	2005.8.10、17、19	300	大成	遺構・遺物なし
18	2006	教養学部8号館エレベーター敷設工事	立会	2006.10.20	-	堀内	遺構・遺物なし
19	2006	教養学部ロッカー棟	試掘	2006.11.13～16	21	堀内	遺構・遺物なし
20	2007	初年次活動センター新築工事	立会	2007.12.20	85	追川	遺構・遺物なし
21	2009	基幹整備(排水)工事	立会	2010.1.14、21、28	34	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
22	2009	理想の教育棟	試掘	2010.2.1～5	220	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
22	2009	理想の教育棟	試掘	2010.2.1～5	220	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収

表3 駒場Ⅱ地区

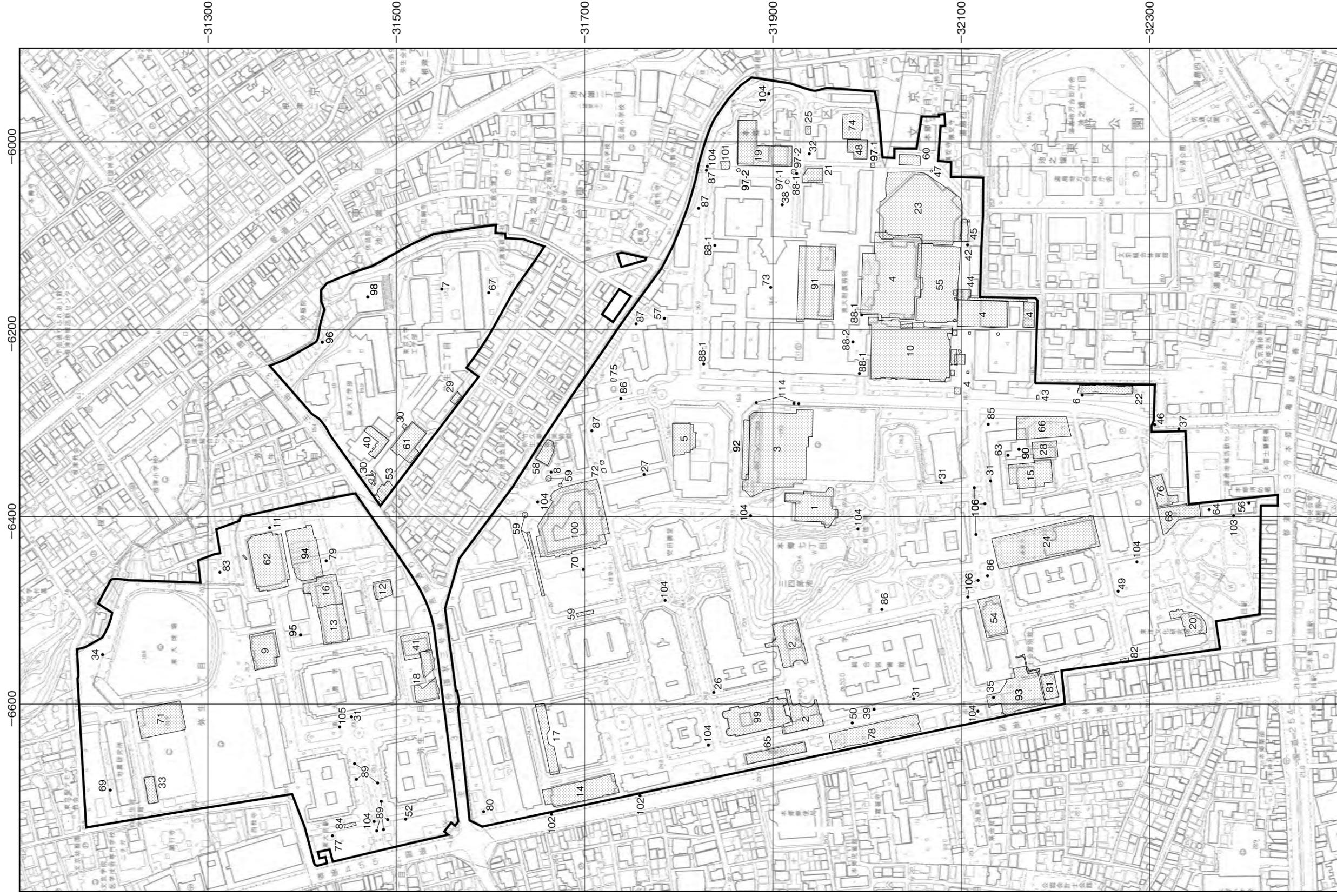
番号	年度	遺跡名・調査地点名(略称)	調査種別	調査期間	面積(m ²)	担当者	遺構・遺物の年代
1	1996	生産技術研究所校舎	試掘	1996.5.14	25	武藤	遺構・遺物なし
2	1996	先端科学技術研究センター校舎4号館	試掘	1996.5.15～17	92	武藤	遺構・遺物なし
3	1996	生産技術研究所校舎	試掘	1996.10.24～25	20	武藤	遺構・遺物なし
4	1998	設備センター	試掘	1998.4.27	13	武藤	遺構・遺物なし
5	1998	国際・産学共同研究センター	試掘	1998.8.5	90	原	縄文
6	1998	生産技術研究所事務図書棟暫定施設	試掘	1998.12.13～15	50	大成	遺構・遺物なし
7	2002	駒場オープンラボラトリー	試掘	2002.12.5	55	成瀬	縄文土器(阿玉台)
8	2003	総合研究実験棟	試掘	2003.8.6	34	追川	遺構・遺物なし
9	2008	保育施設	立会	2008.7.9～14	-	大成	遺構・遺物なし

表4 白山地区

番号	年度	遺跡名・調査地点名(略称)	調査種別	調査期間	面積(m ²)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
1	1991	理学部附属植物園研究温室Ⅰ期[原町遺跡]	試掘	1991.7.24～25	5	武藤	縄文
2	1992	理学部附属植物園研究温室Ⅱ期[原町遺跡](KO)	事前	1992.5.25～6.6	200	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
3	2000	総合研究博物館小石川分館増築(KI)	事前	2000.11.27～12.4	70	成瀬・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
4	2002	農学生命科学研究科附属小石川樹木園・根圏観察室(KNK)	事前	2002.9.24～10.7	91	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
5	2007	理学系研究科附属植物園・医学部創設150周年記念(小石川養生所復元)建物(BGY07)	試掘	2007.9.3～4	43	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
6	2010	理学系研究科附属植物園本園・下水・電源ケーブル埋設槽・埋設溝地点(KBG10)	事前	2010.9.6～15	102	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
7	2010	理学系研究科附属植物園本園・旧小石川養生所井戸欄改修	立会	2011.1.17	-	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収

表5 その他の地区

行政区	年度	遺跡名・調査地点名(略称)	調査種別	調査期間	面積(m ²)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
文京区	1991	追分学寮	試掘	1991.8.23～24	16	成瀬	江戸
豊島区	1991	豊島学寮	試掘	1991.8.26～30	29	武藤	遺構・遺物なし
三鷹市	1991	井の頭学寮	試掘	1991.9.30～10.15	20	成瀬	遺構・遺物なし
港区	1991	白金学寮	試掘	1991.11.25～26	10	武藤	江戸
三鷹市	1992	三鷹国際交流会館[長嶋遺跡]Ⅰ期(三广1)	事前	1992.6.29～9.19	2100	堀内・成瀬	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書8長嶋遺跡』
港区	1992	医科学研究所看護部宿舎	試掘	1992.7.1	8	武藤	遺構・遺物なし
三浦市	1992	理学部附属臨海実験所新研究棟[新井城](MMBS)	事前	1992.7.20～9.25	1700	武藤・寺島	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
三浦市	1993	理学部附属臨海実験所新研究棟関連電機・水道管路新設工事	立会	1993.4.20～23	-	武藤	中世
三浦市	1993	理学部附属臨海実験所新研究棟関連海水循環水路新築工事	立会	1993.5.7～8	-	武藤	中世
三鷹市	1993	三鷹国際交流会館[長嶋遺跡]Ⅱ期(三广2)	事前	1993.5.28～11.8	3280	堀内	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書8長嶋遺跡』
三鷹市	1994	三鷹国際交流会館[長嶋遺跡]Ⅲ期(三广3)	事前	1994.5.13～8.17	1950	堀内・鮫島	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書8長嶋遺跡』
千葉市	1994	検見川運動場体育セミナーハウス[玄藩所遺跡](GMB)	事前	1994.7.19～8.21	496	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
港区	1994	医科学研究所MRI-CT棟装置棟	試掘	1995.3.9	8	武藤	遺構・遺物なし
港区	1995	医科学研究所ヒトゲノム解析センター棟	試掘	1995.7.11	8	武藤	遺構・遺物なし
柏市	1996	柏キャンパス校舎	試掘	1996.10.28～29	125	武藤	遺構・遺物なし
港区	2000	医科学研究所附属病院診療棟・総合研究棟(SBS00)	事前	2000.10.27～2001.3.9	4280	堀内・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
文京区	2007	追分国際学生宿舎	事前	2007.12.3～2008.3.25	776	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収



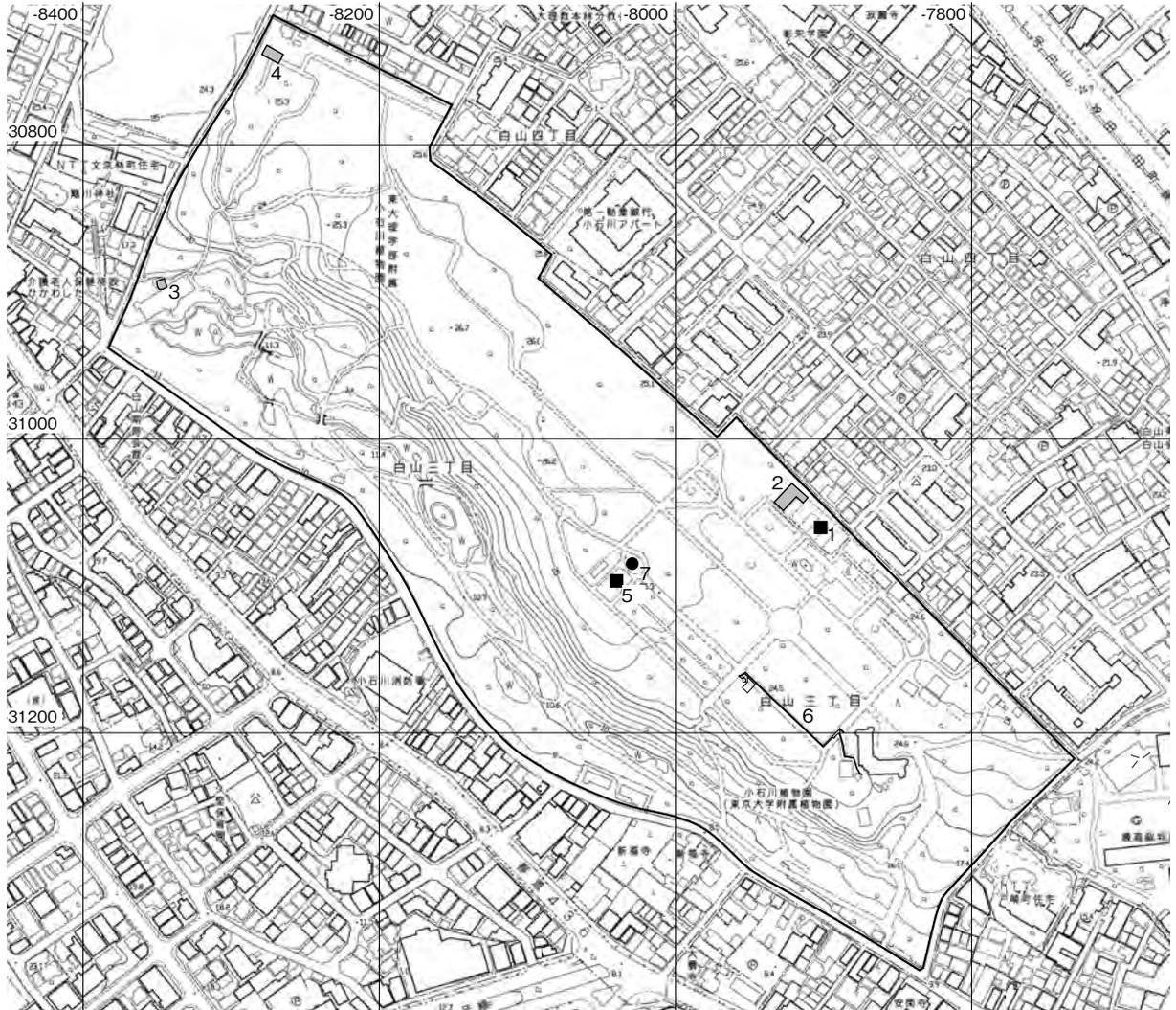
世界測地系

本郷地区調査地点



世界測地系

駒場I地区調査地点



白山地区調査地点

第 1 部 2009 年度調査室事業概要

第 I 章 埋蔵文化財調査の概要（事前・試掘・立会）

東京大学は、全国 15 都道県に、327,203,682㎡を所有（一部借入）している。そのうち本郷（東京都文京区）、駒場（東京都目黒区）、柏（千葉県柏市）の 3 地区を拠点キャンパスと位置付けている。本郷地区は本郷、弥生、浅野の 3 キャンパス全体で 559,176㎡、駒場地区は I（教養学部）、II（リサーチキャンパス）全体で 352,213㎡、柏地区は 320,452㎡である。またその他の地区で周知の遺跡として登録され、現在までに埋蔵文化財調査室が調査を実施した所有地に、研究関連施設では理学系研究科附属植物園本園・農学生命科学研究科附属小石川樹木園・総合研究博物館小石川分館が所在する白山地区（東京都文京区、160,787㎡）、医科学研究所が所在する白金地区（東京都港区、68,906㎡）、理学系研究科附属臨海実験所（神奈川県三浦市、68,737㎡）、福利厚生関連施設では追分国際学生宿舎（東京都文京区、1,576㎡）、白金学寮（東京都港区、2,453㎡）、三鷹国際学生宿舎（東京都三鷹市、32,380㎡）、検見川総合運動場（千葉県千葉市、273,027㎡）がある。

本郷地区は旧石器時代（ブロック・礫群）、縄文時代（早期末集落・後晩期包蔵地）、弥生時代（後期集落）、古墳時代（前～後期集落）、平安時代（集落）、江戸時代（大名屋敷・武家地・町屋・寺社地）、近代にわたる大規模複合遺跡群で、「文京区No.47 本郷台遺跡群」として登録されている。またその一部（浅野地区内）は、「文京区No.28 弥生町遺跡群」と登録され、1975年に文学部考古学研究室・理学部人類学教室が合同調査を行った「向ヶ丘貝塚」（No.28-C 地点）は、1976年に国史跡に指定されている。

駒場地区のうち駒場IIリサーチキャンパスは、近年の再開発に伴い構内の試掘調査を実施しているが、遺跡の存在は確認されていない。駒場Iキャンパスは、旧石器時代（ブロック・礫群）、縄文時代（早期末集落）、平安時代、近世（農村）の遺跡が確認され、キャンパス全域が「目黒区No.1 東京大学駒場構内遺跡」として登録されている。

柏地区（現状所有範囲）は開発前に千葉県教育委員会によって試掘調査が行われたが、遺跡は確認されていない。

白山地区は、すでに明治初頭、エドワード・S・モースによって貝塚の存在が紹介されており、小石川植物園内貝塚として周知されてきた。また大正7年には東京府の旧跡として指定された歴史を持つ。現在では構内全域が縄文時代（前～晩期集落・貝塚）、江戸時代（大名屋敷・幕府御用地・武家地）の複合遺跡「文京区No.81 小石川御薬園跡」、その一部が「文京区No.21 小石川植物園内貝塚・原町遺跡」として登録されている。

医科学研究所は、旧石器時代（ブロック）、江戸時代（大名屋敷）の遺跡が確認され、「港区No.135 遺跡」として登録されている。

理学系研究科附属臨海実験所は、中世城館跡（新井城跡）が確認され、「新井城跡」として登録されている。

追分国際学生宿舎は、江戸時代（武家地）の遺跡が確認され、「文京区No.64 駒込追分町遺跡」として登録されている。三鷹国際学生宿舎は、旧石器時代（ブロック・礫群）、縄文時代、江戸時代（農村）の遺跡が確認され、「三鷹市No.24 長嶋遺跡」として登録されている。

検見川総合運動場は、旧石器時代（ブロック）、縄文時代（前期集落）、古墳時代、平安時代（集落）の複合遺跡で、「玄蕃所遺跡」として登録されている。

2009年度は以下の通り、本郷地区、駒場地区において、事前調査、試掘調査、立会調査を実施した。

本郷地区では、事前調査6件、試掘調査5件、立会調査2件を行った。

事前調査のうち、〔本郷91〕医学部附属病院立体駐車場地点、〔本郷87〕東京都下水道工事地点、〔本郷97〕基幹整備（流域⑧排水A区）地点では、江戸時代（富山藩邸）、古墳時代、〔本郷92〕学生支援センター地点では、江戸時代（加賀藩本郷邸）、〔本郷93〕伊藤国際学術研究センター地点では、江戸時代（加賀藩本郷邸・本郷六丁目町屋）、縄文時代、旧石器時代、〔本郷94〕分生研・農学部総合研究棟地点では、江戸時代（水戸藩駒込邸）、弥生時代後期に関する遺構・遺物が検出された。

また、〔本郷87〕東京都下水道工事地点は、東京都下水道局が原因者となる事業であるが、文京区、東京都下水道局、本学施設部、埋蔵文化財調査室で協議を行った結果、大学敷地内にあることから、調査室が調査を実施することになった。

〈事前〉

- ・2009年12月13日～2010年2月25日 〔本郷91〕医学部附属病院立体駐車場地点（担当 追川）
- ・2009年7月21日～30日 〔本郷92〕学生支援センター地点（担当 堀内）
- ・2009年7月30日～2010年2月12日 〔本郷93〕伊藤国際学術研究センター地点1次調査（担当 成瀬・大成）
- ・2009年11月27日～12月8日 〔本郷87〕東京都下水道地点（担当 原）
- ・2010年1月25日～月31日 〔本郷94〕分生研・農学部総合研究棟地点（担当 原）
- ・2010年3月3～19日 〔本郷97〕基幹整備（流域⑧排水A区）地点（担当 原）

〈試掘〉

- ・2009年4月16日 〔本郷90〕薬学部研究実験棟地点（担当 大成）
- ・2009年9月16～17日 〔本郷91〕医学部附属病院立体駐車場地点（担当 追川）
- ・2009年9月1～2日 〔本郷94〕分生研・農学部総合研究棟地点（担当 原）
- ・2009年12月14～17日 〔本郷96〕工学部新3号館建替時待避用仮設建物（担当 原）
- ・2010年2月16日・3月12日 〔本郷97〕基幹整備（流域⑧排水A区）地点（担当 原）

〈立会〉

- ・2009年5月11～13・15・23・31日、6月18日、8月27日 〔本郷88〕耐震対策事業ガス管改修工事地点（担当 原）
- ・2009年10月22日・11月2日 〔本郷95〕農学生命科学研究科フードサイエンス棟地点（担当 原）

駒場I地区では、試掘調査1件、立会1件を行った。

〈試掘〉

- ・2010年2月1～5日 〔駒場I 22〕理想の教育棟地点（担当 堀内）

〈立会〉

- ・2010年1月14・21・28日 〔駒場I 21〕基幹整備（排水）地点（担当 堀内）

第1節 本郷構内の事前調査

1. 本郷 74 医学部附属病院看護師宿舎地点Ⅲ期 (HHN308)

所在地 東京都文京区本郷7-3-1 (文京区 No.47 本郷台遺跡群内)

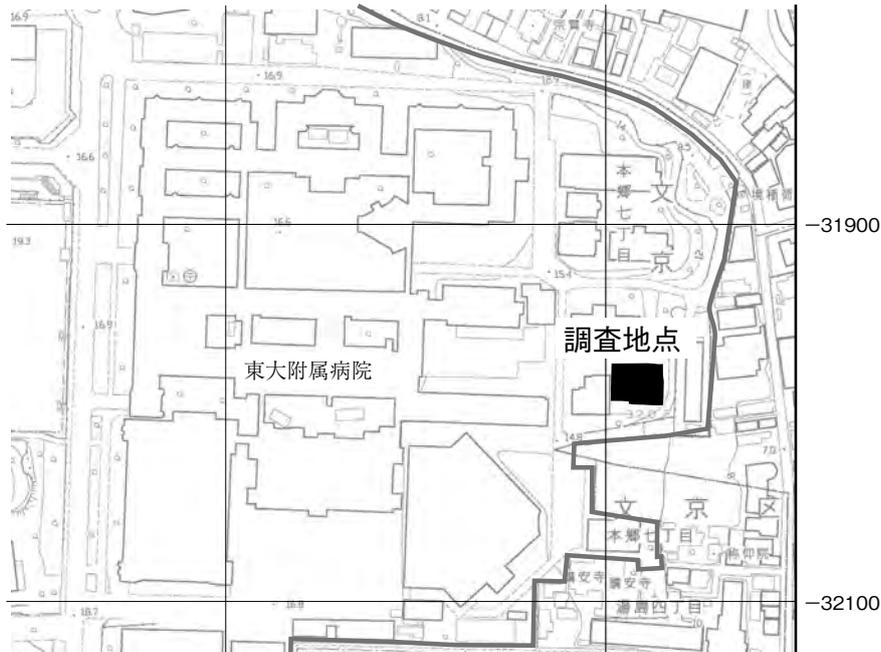
調査期間 2008年4月1日～8月1日

調査面積 550㎡

調査担当 堀内 秀樹

1. 調査の経緯と経過

東京大学は、池之端門付近下記の位置に新たに看護師宿舎の建築を計画した(1図)。建設予定地点は文京区 No.47 本郷台遺跡群として周知の遺跡の範囲内であり、発掘調査の必要があった。発掘調査は2008年4月1日から実働80日間の予定で開始され、8月1日に全ての調査を終了した。



1図 調査区位置

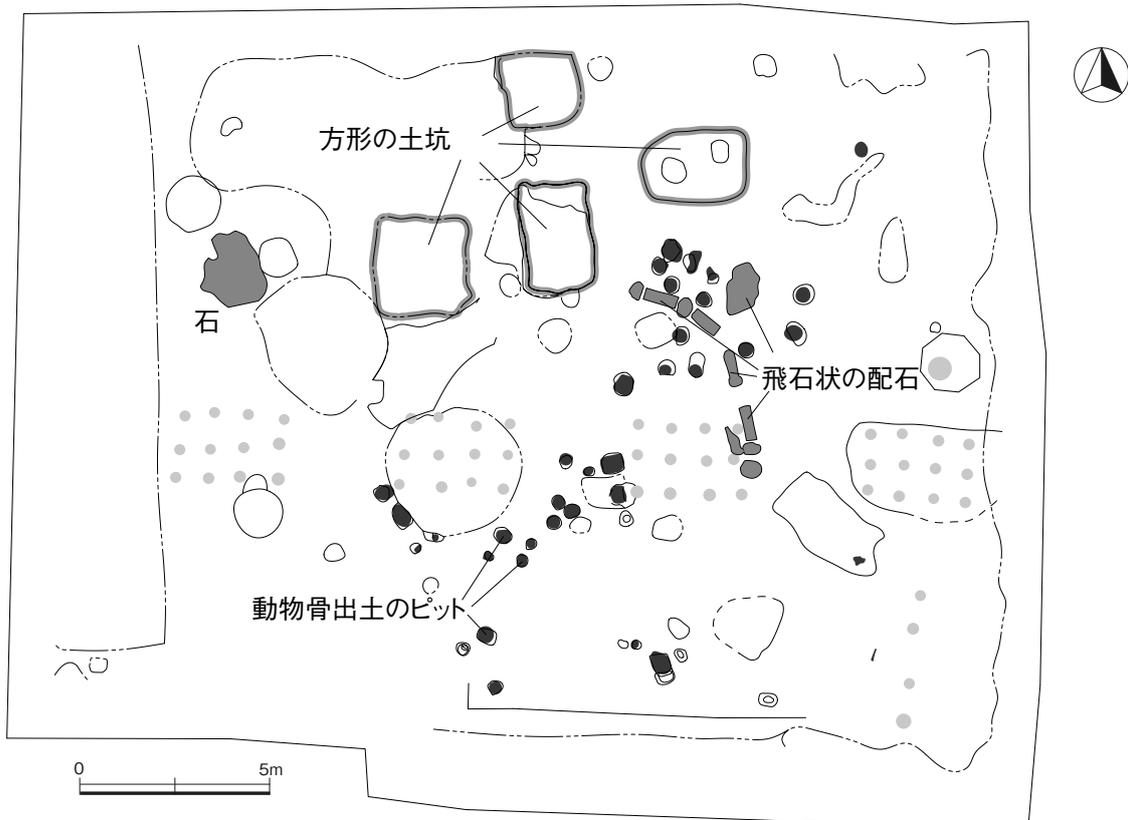
2. 調査結果

発掘調査の結果、確認された遺構・遺物は、近代初期、江戸時代、古墳時代、縄文時代、旧石器時代と広範にわたった。確認された遺構数は、近代が64基、江戸時代が180基、古墳時代が114基、縄文時代が23基の合計381基、旧石器時代の遺物数は122点を数える。

(1) 近代 (2図)

良好な黒色土で平坦な硬化面を作り出していた。この硬化面とともに平石を並べた配石遺構と硬化面を掘り込んで、ウサギを中心とした実験動物を廃棄（あるいは埋葬）した遺構、方形の土坑などが確認された。

配石遺構は、やや曲がって円形と長方形交互に配石されたものと大型の不整形ものが確認された（3図）。この配石に使用されている石の一つにキリシタン灯籠と呼ばれる灯籠の基部が再利用されていた。また、径30～70cm、深さ30～50cm程度のピットが調査区中央部を中心に40基確認された（2図濃灰色遺構）。このピットはいずれも動物骨が遺構底部から中位にかけて密に出土しており、上部



2図 近代遺構配置図



3図 配石遺構



4図 動物骨出土

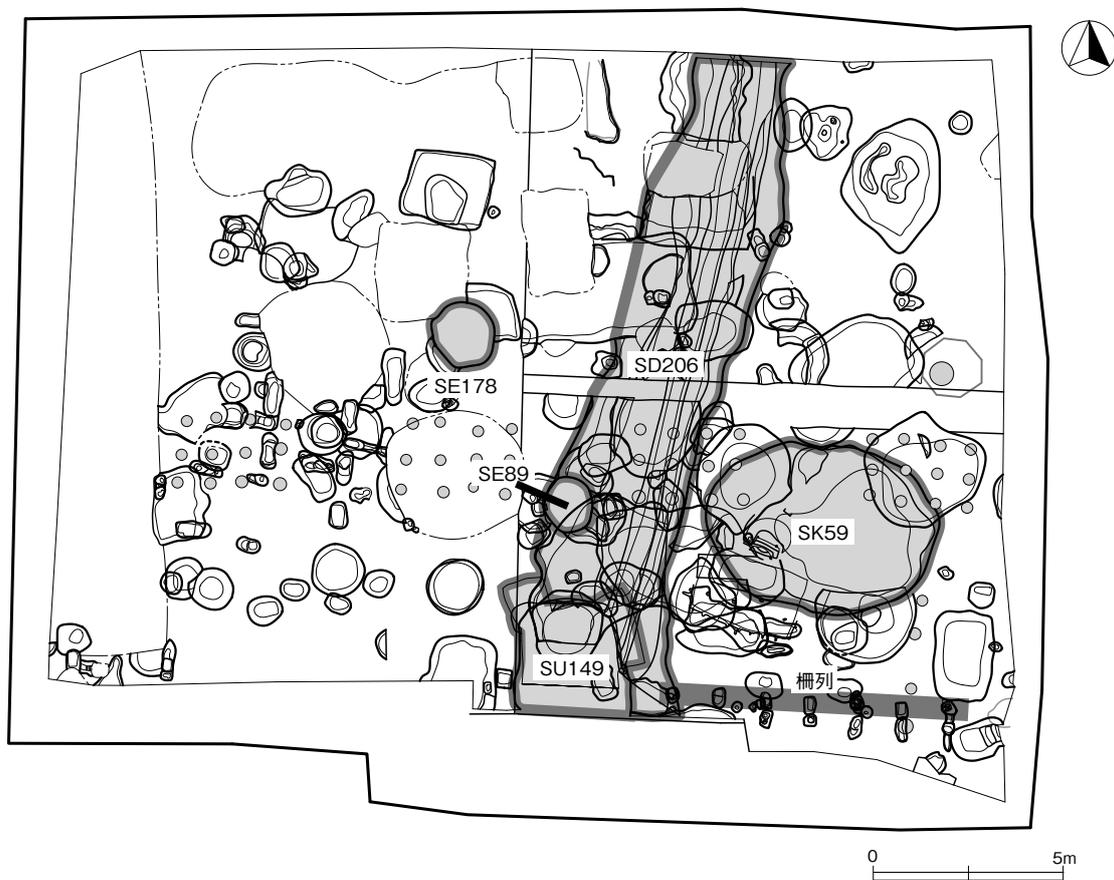
確認面付近には土がかぶせられている状態で確認された(4図)。骨は、ウサギ、イヌ、ネコなどが確認されたが、その大部がウサギであった。土坑は長方形あるいは方形を呈しているもので、生活道具の他に医療器具やインク瓶などが出土した。これらは帝国大学で使用廃棄されていたものと判断された。

調査区付近は近代初期、帝国大学が江戸時代の富山藩邸の旧御殿を「別課教場」として解剖学、化学など実地修練の場として明治26年まで利用している。『東京大学医学部一覧 明治13～14年』によると別課教場東の庭園風に描かれている場所にあたる。庭には教場東から南東方向に飛び石風の配石が描かれており、調査区で確認された配石はこれに該当するものと推定できる。

(2) 江戸時代 (5図)

江戸時代は、溝、地下室、井戸、植栽痕、廃棄土坑、柵列、土坑などが出土したが、生活面などは確認されなかった。溝(SD206、6図)は調査区を南北に貫くように構築されており、断面は逆台形を呈し、上部は大きく広がるような形状をしていた。遺物はSD206に切られている古墳時代の住居のものと思われる土器が多く出土したが、瀬戸・美濃系志野皿などが溝底付近から少量確認され、元和年間に加賀藩が本郷邸を拝領した当初に構築された地境の溝であろうと推定された。17世紀に遡る遺構はこの他には確認されていない。

18世紀の遺構は、調査区南端に位置する地下室(SU149、7図)、井戸(SE89、SE178)などがあるが少ない。SU149は、南側が調査区域外になるため全体の様子は伺えなかったが、東西3m、南北



5図 江戸時代遺構配置図



6図 溝 (SD206)



7図 地下室 (SU149)

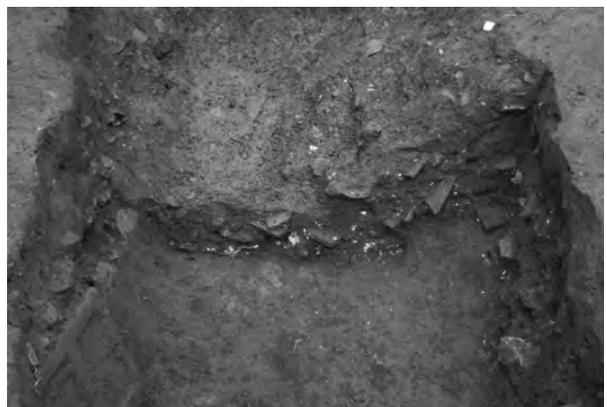
3m、確認面より3mの大型の遺構であった。入口はほぼ中央にあったと推定され、北側、東側に室部が設けられている。18世紀前半の遺物が比較的多く出土した。井戸は中央付近に2基確認されたが、比較的規模は大きく、径が130cm、160cmを計測する。いずれも足掛けと思われる掘り込みが壁面に一定間隔で穿たれていた(8図)。当該時期は密度濃く分布しているとは言えないが、地下室、井戸など生活に関係した遺構が確認されていることから、居住空間であった可能性がある。

今回の調査で確認された江戸時代の遺構は、大半が19世紀のものである。植栽痕と思われる円形遺構が、調査区全域に多数確認されている。また、これと伴って硬化面を有する溝(道)状遺構、地下室、柵列など庭を想起させる遺構群が確認された。これらの遺構は切り込みのレベルが異なって構築されており、当該期の景観が起伏に富むものであったことが想定できた。また、植栽痕の規模も大小あり、景観に応じた樹木の植え替えを行っていたことが看取された。柵列と推定されたピット列は、調査区南東部に東西方向に約1.3m間隔で延びていた。ピットは南北に50cmの間隔で対になっており、主杭とそれを支える副杭で構築されていたことが推定できた。調査区で最も多く遺物が出土したSK59は調査区南東部に位置する土坑である。出土した遺物は完形の碗、皿、灯火具、土瓶などが多く確認できた。また、陶磁器には、木型打込の磁器製品なども含まれ、幕末に年代的下限があると思われることから、富山藩邸引き上げに伴う廃棄である可能性を考えている(9図)。

現存する富山藩邸の図面は、製作年代が不明である。庭園部分の詳細は描かれてはいないが、『富山藩上屋敷絵図』によると当該地は表御殿東側に展開する庭園部分に相当している。



8図 井戸 (SE89)

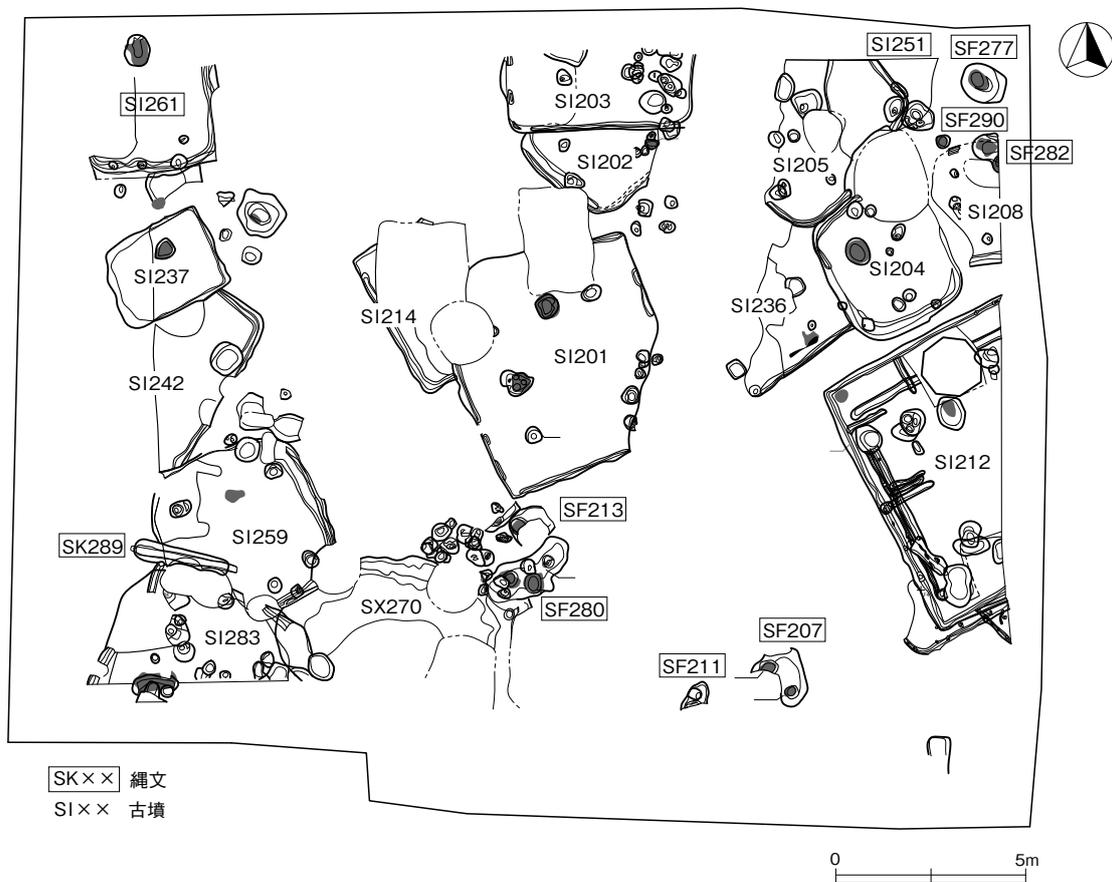


9図 廃棄土坑 (SK59)

(3) 古墳時代 (10 図)

古墳時代の遺構は、住居跡 15 軒、道状遺構 1 基、ピット 70 基が確認された。住居跡は 4 世紀後半～5 世紀、古墳時代前期 (五領式期)～中期 (和泉式期) に比定される。調査区は南北に延びる本郷台地東端にあたり、南は支谷が西に延び、東・南側に緩やかな傾斜を有する台地上に位置している。東側低地は旧石神井川が南流し、現在も不忍池が存在するように沼沢地が点在する環境であった可能性が高い。調査区近辺には、西接する看護師宿舍 (Ⅱ期) 地点では住居跡が 6 軒、北側の看護師宿舍 (Ⅰ期) 地点では古墳時代前期 (五領式期) に比定される住居跡 6 軒、後期 (鬼高式期) に比定される住居跡が 1 軒確認されている。更に北側には、弥生二丁目遺跡が存在し、3 世紀～5 世紀までの間に当該地付近に集落が継続的に経営されていたことが確認された。

住居の多くは江戸時代以降の遺構に切られ、良好な遺存状態ではなかったが、調査区中央の SI201 と東端の SI212 からは遺物が多く出土した。SI201 は北側を SK96 と SE178、南東側を SD206 に切られている。平面形は方形を呈しており、1 辺 540cm、確認面から床面までの深さは最大 70cm を計測する。支柱穴、周溝、貼床、地床炉など明瞭に確認された。遺物は、古墳時代中期の壺、甕、高坏、坏、甑、五徳、ガラスビーズなど 2,000 点を超える量が出土した (11、12 図)。また、SI212 は住居の東半が調査区域外で遺構の全容は復元できなかったが、遺存部分から方形を呈すると思われる。1 辺 720cm、確認面から床面までの深さは最大 100cm を計測する大型のものであった。床面下には内側に周回する溝が確認され、拡張の痕跡が認められた。支柱穴、貼床、貯蔵穴、間仕切り、地床炉などの施設が良好な状態で確認された。遺物も古墳時代前期の壺、甕、高坏、坏、石製ビーズなど出土



10 図 古墳時代・縄文時代遺構配置図



11 図 SI201 出土土器 (壺)



12 図 SI201 出土土器 (甑)



13 図 SI212 罎穴



14 図 SI212 出土土器 (高坏・甕)

した (13、14 図)。

(4) 縄文時代 (10 図)

縄文時代の遺構は、住居跡 2 軒、陥穴 1 基、炉穴 9 基、土坑、ピットなどが確認された。住居跡は、調査区北西端に前期 (SI261、15 図)、北東端に早期の住居跡が合計 2 軒確認された。SI261 は平面形隅丸方形を呈すると思われるが、西、東側に近代以降の攪乱、北側は調査区域外で遺構の全容は窺えなかった。周溝、地床炉などが明瞭に確認された。炉穴は調査区東、南側の地形が緩やかに傾斜し始める位置付近より確認された。ほとんどの炉穴は、古墳時代以降の遺構に壊されているが、1 基



15 図 SI261 罎穴



16 図 SF277 炉穴

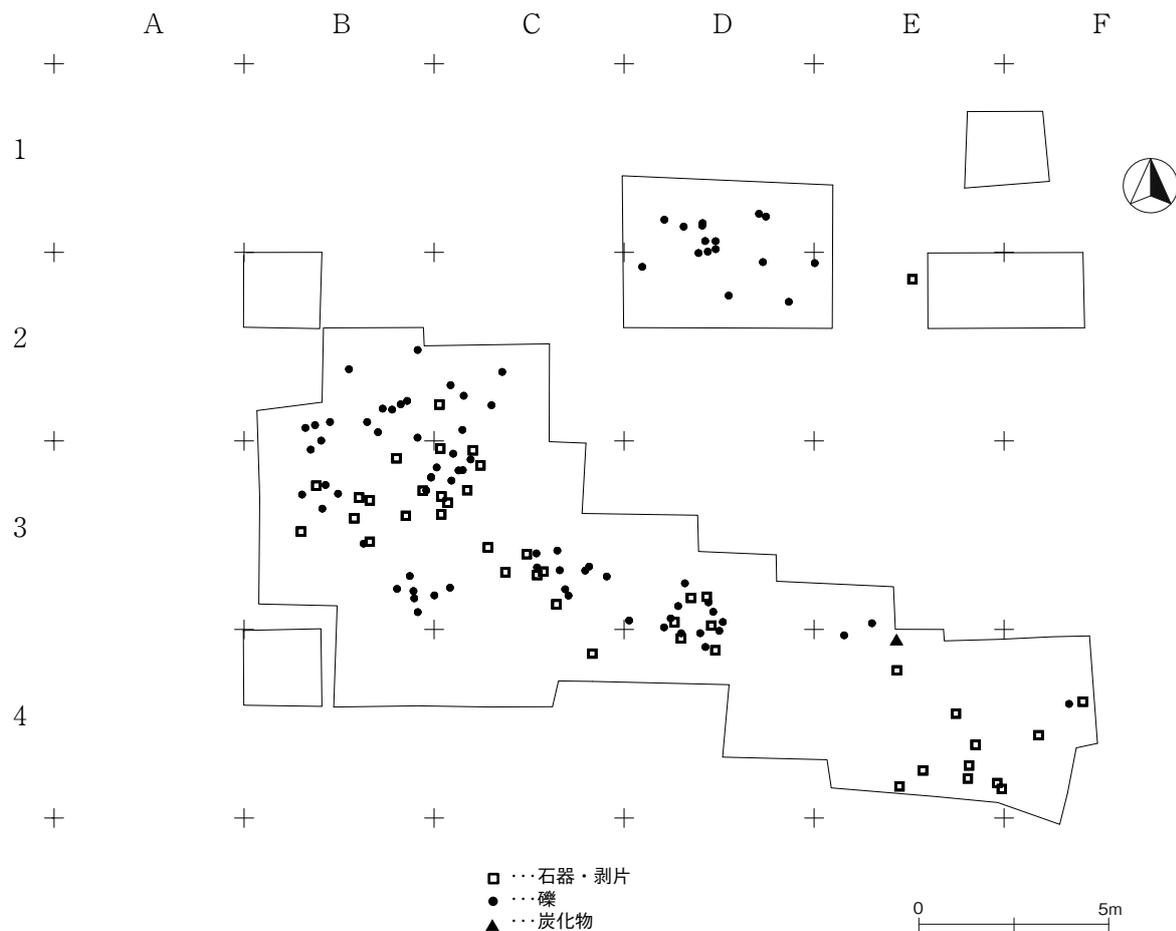
に複数の火床が確認された例は、SF280 が 3 箇所、SF207 と SF282 が 2 箇所のみで、作り替えなどがそれほど頻繁ではなかった。遺構からは縄文時代早期末の土器が出土している。陥穴 (SK289、17 図) は、いわゆる T ピットと称される形態のもので、上部は後世の削平のため確認されなかったが、東西方向に主軸を持つ長楕円形を呈し、坑底は主軸方向にオーバーハングしていた。



17 図 SK289

(5) 旧石器時代 (18 図)

旧石器時代の遺物は、D1 ~ 2 区および B2 ~ 3・C2 ~ 4・D3 ~ 4 区、E4・F4 区にかけて出土した。D1 ~ 2 区および B2 ~ 3・C2 ~ 4・D3 ~ 4 区からは武蔵野標準層位Ⅶ層からチャートのフリイク、焼礫が約 110 点 (19、20 図)、E4・F4 区からⅣ層に黒曜石のフリイク、ブレード、ナイフ形石器などが計 10 点ほど確認された。関東ロームの堆積は、他遺跡と比較してⅣ層が薄く、クラックがⅤ層まで入っている状況であった。Ⅹ層以下にはシルト質のブロックが斑状に混入する状態で、第Ⅱ黒色帯以上は



18 図 旧石器時代遺物出土図



19 図 E5 区遺物出土



20 図 C2・C3 区遺物出土

おおむね E ライン付近から東に向かって緩やかな傾斜が始っていた。

3. 調査の成果と課題

本調査は、近代、江戸時代、古墳時代、縄文時代、旧石器時代の重層的な遺跡であった。各時期の遺構・遺物は良好な状態で確認されており、本郷キャンパス東縁部の歴史の変遷を追えたことで、収穫は大きかった。しかし、これは反面与えられた課題も多い。

近代では、ベルツやモースなどいわゆる「お雇い外国人教師」の時代に該当する帝国大学初期の状況、特に医学関係の資料が出土しており、以前調査した看護師宿舎Ⅰ期、Ⅱ期を含めて、お雇い外国人教師館や「別課教場」として利用していた富山藩邸の旧御殿周辺の復元ができることが期待できる。

江戸時代では、庭園跡が確認された。植栽痕や園道や築山など確認され、回遊式の庭園の状況が確認できた。看護師宿舎Ⅱ期調査で確認された漆喰を伴う池状遺構などを含め富山藩邸の庭園跡の景観復元が課題となろう。

今回の調査の最大の成果は古墳時代集落跡の発見、調査であったろう。今回の調査で出土した集落跡は、都内では足立区伊興遺跡、狛江市和泉遺跡などしか確認されていない類例の少ない古墳時代中期に比定される。3世紀から連続する当該地付近の弥生時代末から古墳時代にかけての展開が今後の課題となろう。

縄文時代は早期末から前期にかけての生活跡が確認できた。特に早期末の炉穴の集中から前期の住居跡の確認は、東大構内で初めて確認された成果であった。定住化へ向けてのプロセスが議論されるこの段階の課題は多い。

旧石器時代は、Ⅳ層とⅦ層に文化層が確認された。近年、東京大学駒場構内遺跡を含めて調布市明治大学構内や野水遺跡など B.B.2 以下に相当する石器文化層の発見が相次いでいる。これら新しい発見、研究との対比が必要なのは言うまでもない。

他の事例を含め調査報告では、上記課題を踏まえ一定の成果を収めたい。

2. 本郷 91 医学部附属病院立体駐車場地点 (HHP09)

所在地 東京都文京区本郷7-3-1 (文京区 No.47 本郷台遺跡群内)

調査期間 2009年12月13日～2010年2月25日

調査面積 3033.8㎡

調査担当 追川 吉生

1. 調査の経緯と経過

東京大学医学部附属病院では、旧中央診療棟の北側跡地に立体駐車場の建設を計画した。建設予定地は本郷遺跡群の範囲内で、隣接する中央診療棟地点、第2中央診療棟地点および看護師宿舎地点などでは、旧石器時代～江戸時代までの遺跡が発掘調査されている。本予定地では、建物基礎によって遺構の大部分は破壊されていることが予想されたが、中庭部分については破壊を免れている可能性が高かった。そこで埋蔵文化財調査室では、2009年9月16日～17日にかけて試掘調査を実施した。

その結果、建設予定地の大部分は旧中央診療棟の基礎によって破壊されているものの、南東側に遺跡が残されている部分が存在すること (A区)、および予定地内の法面の一部にも遺跡が存在すること (B区)が明らかになった。そこで2009年12月13日～2010年2月25日にかけて本調査を実施した。



1 図 調査位置図

2. 調査の経緯と経過

(1) A区 (2図)

A区では地下室6基、溝2基、柱穴8基が検出された。

SU8 (4 図)

AI16～AJ16グリッドに位置する、東西191cm、南北757cmの、南北に細長い地下室。深さは現状で111cm。遺構の西側をSU10、SU48によって壊され、南側は調査区外へと続いているため、本来の規模は不明。東西両側縁は内側にハンゲアップしており、天井部が設けられていたことがうかがえるが、後代の削平により形状は不明。現段階では地下室と分類しているが、半地下式の構造であった可能性もある。遺構の年代を明確に示す遺物は出土していない。

SU48 (4 図)

AI16グリッドに位置する地下室。南北192cm、東西176cm、深さ108cmで遺構の平面形状は方形を呈する。暗灰色の粘土をブロック状に含む遺構最下層から陶磁器、瓦などの遺物が出土する。特にカワラケの比率が他の遺構に比べて高いことが特徴としてあげられる。金泥の痕跡を僅かに残す耳カワラケが1点出土した。床面直上で炭化物の集中する範囲を検出した。

(2) B区 (3 図)

B区では地下室12基、溝1基、柱穴22基のほか、土坑11基、井戸2基、便所1基、不明の遺構1基の計50基の遺構が検出された。

SU44 (6、7 図)

AC11～AD11グリッドにかけて位置する地下室。南側と東西の大部分を攪乱で壊され、北側は調査区外に更に続いているため遺構の規模は不明。現状では南北420cm、東西385cm、深さ279cm。遺構底部から30～40cmまでは青灰色粘土層を含む覆土の堆積がみられる。それより上部ではロームブロックを含む暗褐色の覆土と、ロームブロックのほか、直径1～3cm程度の礫を含む暗褐色の覆土とが交互に堆積する。床面は黄褐色ロームブロックを主体とする土によって突き固められており、遺構のやや南側に、南北120cm、東西90cm、深さ50cmの炭化物の集中する部分が認められる。遺物は陶磁器を中心に多量に出土した。

SU70 (8 図)

SU44によって西側を壊されている地下室(AC12～AD12グリッド)。南北181cm、東西は現状で244cm、深さ202cm。東側70cmの部分はハンゲアップする部分がみられる(高さ最大で8cm)。遺物は多量に出土した。特に青灰色粘土層中からは、カワラケとともに貝殻、魚骨などの食物残滓がまとまって出土している(5 図)。

SL28 (9 図)

AC6グリッドに位置する便所。南北108cm、東西142cm、深さ(最大)158cm。遺構の平面形態は東西に長い方形を呈する。中央の便槽にあたる掘り込みは、南北60cm、東西80cm。遺構の四隅と便槽の四隅に直径10～20cm柱穴が認められる。覆土は暗灰色～青灰色で粘性がある。

SE65 (10 図)

AD12グリッドに位置する井戸。検出面での規模は南北97cm、東西94cm。井戸枠は痕跡が認められるのみだが、直径70～90cm。390cmほど掘削(標高10.8m)して調査を中断した。湧水は確認していない。遺物は陶磁器片が少量出土するのみである。

3. 調査結果

旧中央診療棟の解体によって、調査区は現地表面から約280cmほど掘り下げられていた(11 図・

2. 医学部附属病院立体駐車場地点 (HHP09)

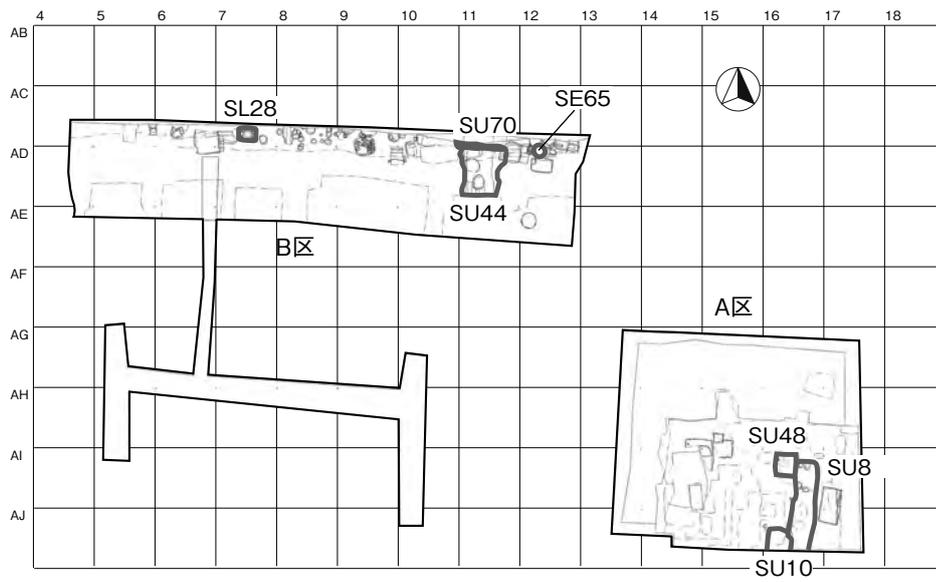
病院駐車場に接する法面部分である B 区を除く)。遺構が残っていた A 区でも、確認面は更に 100cm ほど低いレベルであり、立川ローム層は全て削平された状態だった。したがって A 区で検出された江戸時代の遺構は、遺構の底部が現地表 -500cm のレベル (標高約 12m) に達するものだけである。調査地点のこうした状況から、遺構の疎密を論じることは難しいといえる。とはいえ 2 図にあるように、2 つの地下室 (SU10 と SU48) が南北に並ぶという検出状況は、A 区周辺の土地利用状況を反映しているものなのかもしれない (SU3 はこの南北列から西にほぼ 3 間の位置となるが、周囲は攪乱が著しいためここでは措いておく)。

A 区はまた、古墳時代の住居址を検出した中央診療棟地点の北側にあたる。加えて立川ローム VII 層から石器が出土した看護師宿舎地点 (Ⅲ期) にも近い。そのため江戸時代以前の遺跡の検出も予想された。しかし上記のような状況のため、該期の遺跡の検出には至らなかった。

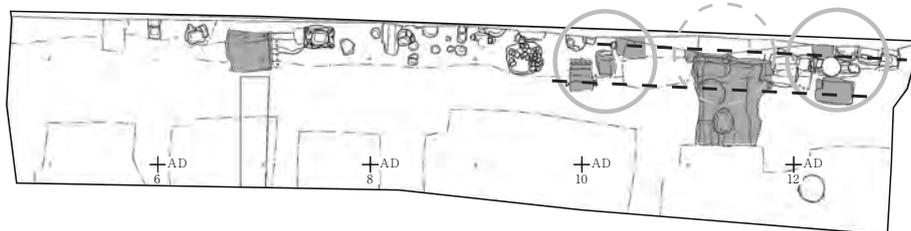
B 区は病院駐車場と歩道に接する法面部分である。一部で立川ローム III 層を確認したものの、大部分は IV 層からの調査だった。法面部分ということもあり、調査が可能だった範囲は南北 1 ~ 2m 程度と狭い範囲に限られていた。その中で、地下室 12 基をはじめ、江戸時代の遺構を比較的多く検出したことは、B 区の遺構分布が本来は密であったことをうかがわせる。こうした遺構の分布状況は B 区周辺、特に北側の駐車場についても同様な状況が予想される (駐車場の一角は 2004 年に医学部附属病院総合研究棟・疾患生命工学センター地点として試掘調査が実施されている)。

3 図は B 区の地下室の分布状況である。12 基検出した地下室のうち、AD6 グリッドに 1 基ある以外は全て AD10 グリッド以東に分布している。これら 11 基の地下室の規模は、本稿でとりあげた SU44・SU70 は大型だが、他の地下室はほぼ同程度のものである。分布状況は、AD10、AD12 のグリッド杭周辺に集中するように見受けられる (3 図の円)。また東西方向に並んだ配置状況にも見受けられる (3 図の破線)。しかし地下室群の分布や配置の傾向は、周辺の攪乱が著しいこと、中間に巨大な地下室 (SU44) があって遺構の切り合い関係を複雑にしていることから、遺物の分析を進めていくなかで、検出された地下室を群として捉えることの可否も含めて、慎重に検討していく必要がある。

医学部附属病院一帯は、1683 (天和 3) 年以降は北側が富山藩邸、南側が大聖寺藩邸だった。両藩邸の地境は中央診療棟地点 2 号石組として調査されている。この遺構よりも北側に位置する本調査地点は、富山藩邸ということになる。各遺構の時期や分布状況を検討することに加え、富山藩邸内での本調査地のあり方の検討も今後の課題である。立川ローム層が遺存していた B 区では、X 層まで掘削した上で遺物の検出を試みた。しかし石器・礫ともに出土していない。本調査地点における江戸時代以前の調査成果は、附属病院地区の古墳時代の集落の範囲、あるいは旧石器の分布状況といった点を考えていく上で、一つの指標になると思われる。



2図 検出遺構全体図



3図 B区地下室分布状況

2. 医学部附属病院立体駐車場地点 (HHP09)



4図 SU8 (東から。北西にSU48)



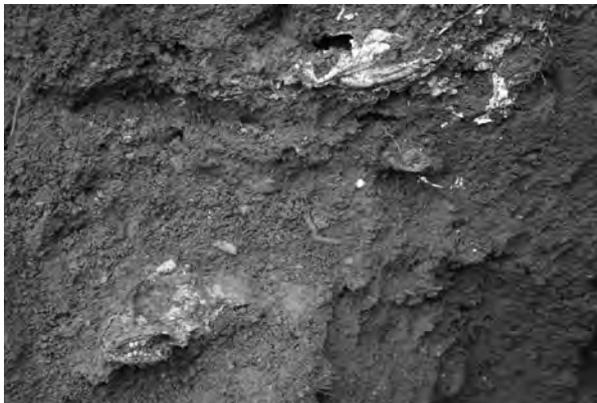
5図 SU48



6図 SU44・SU70 土層断面 (南から)



6図 SU44・SU70 (南から)



8図 SU70 食物残渣検出状況



9図 SL28 (南から)



10図 SE65 (南から)



11図 調査区近景

3. 本郷92 学生支援センター地点 (HGG09)

所在地 東京都文京区本郷7-3-1 (文京区 No.47 本郷台遺跡群内)

調査期間 2009年7月21日～7月30日

調査面積 約440㎡

調査担当 堀内 秀樹

1. 調査の経緯と経過

東京大学は、御殿下記念館北側付近に旧来存在した店舗を改修し、学生支援センターの建築を計画した(1図)。建設予定地点は、文京区 No. 47 本郷台遺跡群として周知の遺跡の範囲内であり、発掘調査の必要があった。当該地は、帝国大学時代に建築された御殿下グラウンド北側のレンガ積みの壁によって大きく削平を受けていることが現状や遺存している設計図面などより確認されていたが、隣接する御殿下記念館建設時の発掘調査成果から一部の埋蔵文化財については遺存している可能性が強いことが想定された。

発掘調査は2009年7月21日から実働10日間の予定で開始され、7月30日に終了した。



1図 学生支援センター位置図

2. 遺跡の概要

発掘調査の結果、確認された遺構は、レンガ積みの基礎の下から確認された江戸時代の土坑、ピット、井戸など7基、旧石器時代の性格不明の落ち込み1基である。遺物は、江戸時代の陶磁器・土器、

金属製品、瓦、自然遺物などコンテナ箱に12箱出土した。

隣接する御殿下記念館地点では、江戸時代の生活面が重層的に確認されたが、本調査では遺構確認面が立川ローム層最下層（X層相当）であったため、埋蔵文化財の遺存状態は不良であった。

(1) 出土した遺構 (2図)

確認された遺構は、井戸（SE2、SE8）、土坑（SK3～5、SK7）、ピット（SP6）およびローム面に走る噴砂の痕跡と思われるクラックである。

江戸時代の遺構は、隣接する御殿下記念館地点の生活面から勘案すると2m以上の深度を有していた可能性が高いが、上部は大きく削平されていたため、井戸を除いて浅かった。

確認された2基の井戸は、出土遺物から19世紀前半の廃棄であった。SE8からは多量の棧瓦片が出土した(4図)が、瓦には火を受けた痕跡がないことから火災による廃棄ではないことが推定された。SE2(7図)は明瞭に井戸側の痕跡が確認できた。これら双方の遺構の位置は、梅之御殿の様子が描かれた「梅御殿惣絵図」に照射すると長局北側に位置する井戸の位置と合致しており(3図)、梅之御殿に伴う遺構であることが確認できた。したがって、梅之御殿の棄却に伴って廃棄され、出土している瓦は梅之御殿に葺かれていたものと推定された。

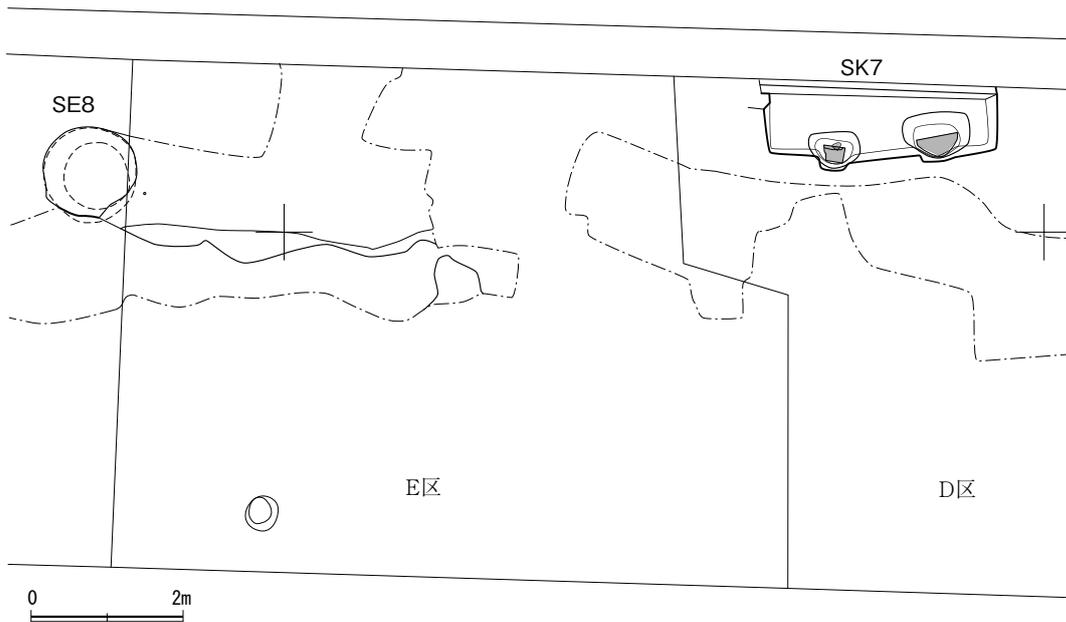
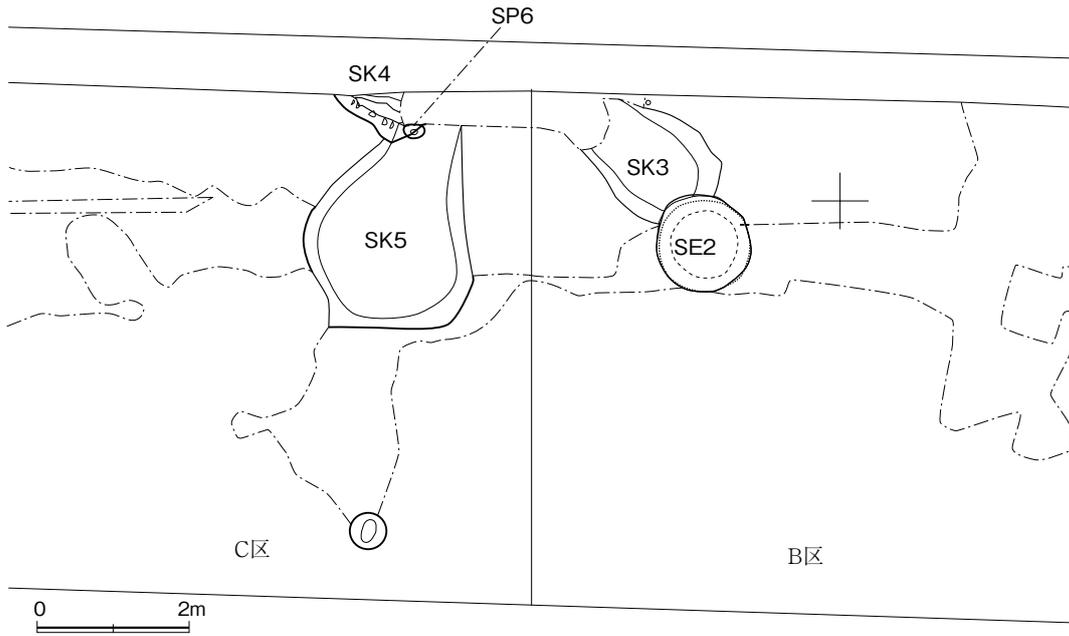
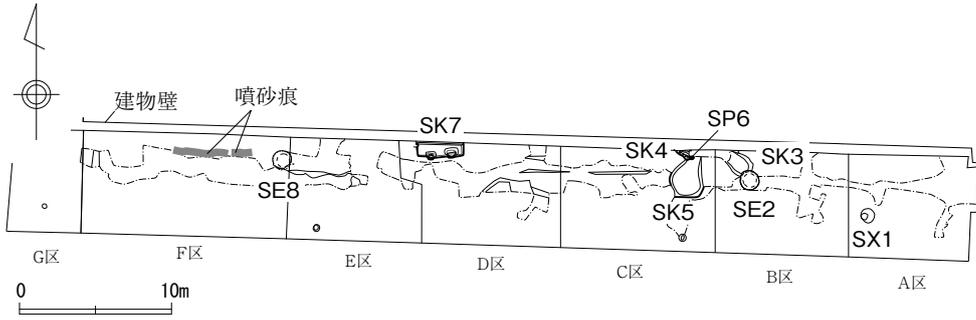
土坑は、4基確認された。SK5は平面形不整形の土坑である(5図)。深度は浅く確認されたものの、出土遺物は17世紀中葉の製品で構成されており、御殿下記念館地点最下面から確認された土採り穴と推定されている270号遺構と関連も考えられる。また、SK7は南北に主軸を有する方形の土坑である(6図)。北半が調査区域外であるため全体の様子を窺うことはできないが、壁周囲に配石を伴うピットが確認されており、地下室であった可能性が強い。出土遺物は17世紀末ころが中心であり、元禄年間の絵図面「武州本郷第図」によると「役所」と書かれている部分にあたる。その他、ピットが1基確認されている。

また、人為によるものではないと思われるものとして、X層上面で、鉄分を多く含む赤褐色の落ち込みがいくつか確認された。サンプルとしてSX1として状況を図化した。この他にロームに走る噴砂の痕跡が確認された(8図)。

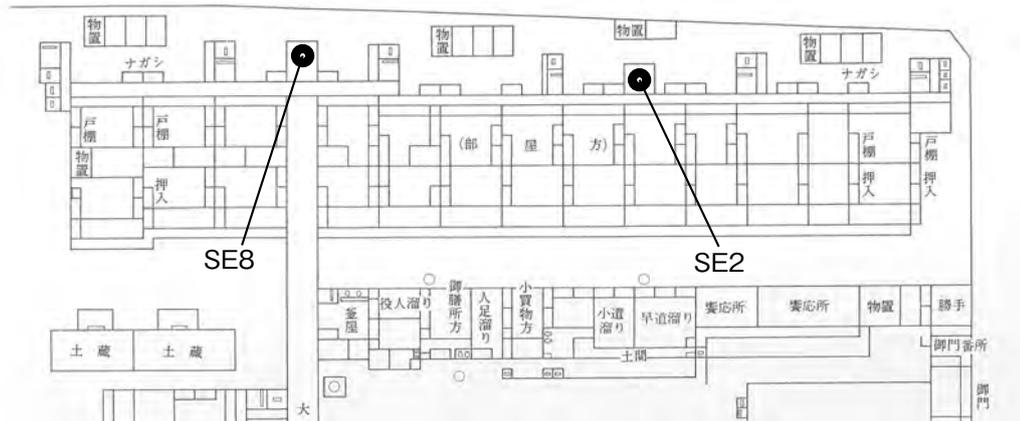
3. 調査の成果と課題

本調査は、遺構の遺存状況が全体的にわたり不良であったが、御殿下記念館地点北側の状況が確認できた。上記のように当該地域が御殿空間に組み込まれる以前の遺構が確認されたこと、梅之御殿に伴う遺構とその廃絶に関する遺物が確認できたことは収穫であった。

梅之御殿は当該地区に存在した藩主夫人の隠居所としての性格を有する御殿で、その存続期間は19世紀前半の中に収まり、比較的短期間であった。加賀藩の御殿としては御殿下記念館地点調査後、医学部教育研究棟地点や経済学部総合研究棟地点などの発掘調査が行われている。これらは建築時期や建築目的などが異なるものであり、今後、他藩の事例も含めて一定の成果を収めたい。



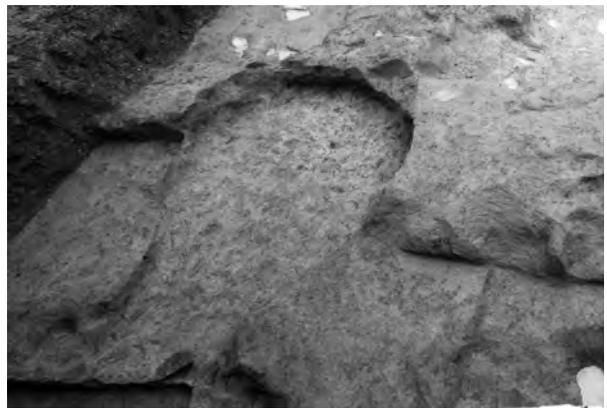
3. 学生支援センター地点 (HGG09)



3図 梅之御殿と井戸



4図 SE8 瓦出土状況



5図 SK5



6図 SK7 配石検出状況



7図 SE2



8図 填砂の痕跡

4. 本郷93 伊藤国際学術研究センター地点 (H7109)

所在地 東京都文京区本郷7-3-1 (文京区 No.47 本郷台遺跡群内)

調査期間 2009年7月30日～2010年2月12日、5月17日～31日

調査面積 約1710㎡

調査担当 成瀬 晃司、大成 可乃

1. 調査の経緯と経過

東京大学は、赤門南側に位置する学士会分館跡地に、伊藤国際学術研究センターの新営を計画した。当地点は、「文京区遺跡No.47 本郷台遺跡群」として周知の遺跡に該当するため、文化財保護法第92条に基づく事前発掘調査の必要があった。そのため本学施設部との協議の結果、平成21年7月30日から平成22年2月12日にかけて1次調査を同年5月17日～31日にかけて2次調査を実施した。1次調査は学士会分館解体の進捗状況、発生土の搬出量との関係から、便宜上3区に分割し、北から1区とした(1～4図)。

2. 調査の概要

本地点の調査では、近代、近世、縄文時代、旧石器時代の遺構、遺物が確認された。旧石器時代では、遺物集中区が調査区南東部で立川ロームV層より出土、縄文時代では調査区南西部でいわゆるTピットと称される土坑が1基検出された。調査の主体となった近世から近代にかけては文政10(1827)年の溶姫輿入れに伴う屋敷割り変更以降の遺構面2面、それ以前の遺構面(一部2面)が確認され、1,253基の遺構(そのうち近代遺構19基)を検出、コンテナ840箱(そのうち近代遺物6箱)の遺物が出土した。

しかし全体的な様相として調査地点のほぼ中央に位置する学士会分館建物範囲は、その基礎によってローム層中に及ぶ大きな攪乱を受けていたため、ピットなどの小遺構は全て消失し、地下室、半地下室、井戸などの大形遺構がかろうじて遺存する状況であった。全体図の遺構分布密度が調査地点中央で低く、周縁部で高いのはこの攪乱によるものである。

検出遺構、出土遺物の大半は本郷六丁目町屋に帰属するものである。しかし、大規模な攪乱を受けているにも関わらず、調査区全域にわたり、夥しい数の遺構が検出され、文政9(1826)年の町屋引き払いまでの間、全ての屋敷地で限られた土地に対し、活発な構築と廃絶が繰り返されていたことが明らかになった。その結果が、極めて複雑な重複関係という形で顕れている。

しかも地下式翹室室部天井の崩落による地表面の陥没は、周辺遺構も巻き込みその形を変え、またその凹地自体も廃棄遺構として利用された。その結果、ただでさえ激しく重複し合う遺構の個体認識に三次元的要素が加わる極めて複雑な様相を呈した。覆土の様相も通常の自然または人為的堆積に加え、陥没による“自然流入”断層などの難解な状況が加わった。また陥没による亀裂から上部遺構の遺物が下部遺構へ流れ込むこともあり、陥没の影響を受けた覆土の流れを慎重に押さえながら調査する必要も生じた。遺構、遺物量に加え極めて困難な調査を強いられた。

4. 伊藤国際学術研究センター地点 (H7I09)



93 本調査地点、78 情報学環・福武ホール地点 (HJF06)、81 経済学研究科学術交流棟地点 (HEA07)
 54 経済学部総合研究棟地点 (HES99)、24 医学部教育研究棟地点、a 本郷五丁目東遺跡

1 図 調査地点の位置

3. 近世以前の遺構・遺物

(1) 旧石器時代

調査地点南部、R～S64グリッドにおいて、近世遺構写真精査中にフレイクが1点出土した。全遺構調査終了後に、フレイク出土位置周辺を対象に、調査を実施した結果、立川ロームV層（第一黒色帯）中より、チャート製のフレイク、チップ類が53点出土した（5、7図）。定形石器はなく、調査深度がVI層に達すると石器類の出土も観られなくなった。



2図 1区全景（東から）



3図 2区全景（南から）



4 図 3 区全景 (東から)

(2) 縄文時代

O64 グリッドより、いわゆるTピットと称される土坑が検出された (SK920)。平面形は長楕円形を呈し、南北両端の壁面が坑底にかけてオーバーハングしている。断面形はT字状を呈す。規模は、長さ 265cm (オーバーハング部長 294cm)、幅 36cm、確認面からの深さ最大 65cm を測る。遺物はなく、詳細な時期は不明である (6、7 図)。



5 図 旧石器時代遺物出土状況

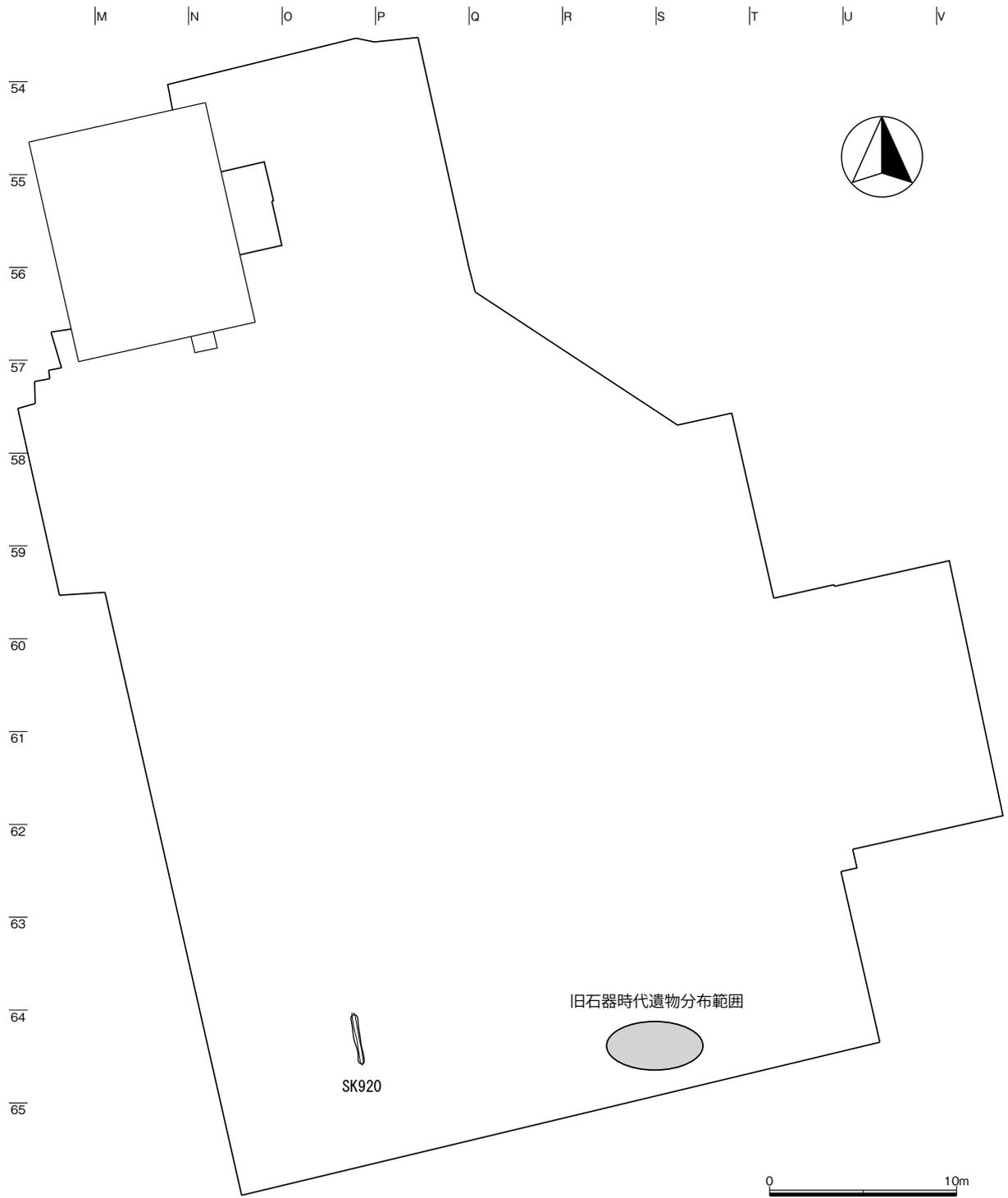
4. 近世以降の遺構・遺物

先述したように、検出された遺構・遺物群の大半は近世以降に帰属するものである。近世以降の本地点は、切絵図、加賀藩本郷邸絵図との対比から、文政9年まではおおよそSライン以西が本郷六丁目町屋に、Sライン以东が加賀藩邸に位置する。そして文政10年以降は溶姫輿入れに伴う町屋引き払い、屋敷割り改変によって加賀藩邸の地境はOライン付近に変更され、それ以东が加賀藩邸、以西が火除け地となる。



6 図 縄文時代遺構検出状況

第1部 2009年度調査室事業概要



7図 近世以前の遺構・遺物分布図

明治に入ると本郷邸の大半は文部省用地となり、前田邸は江戸時代の本郷邸南西部の一角に縮小される。その地境は、58～59ライン付近に位置し、それより以北が大学用地、以南が近代前田邸用地となる。以下、その変遷に沿って、検出された遺構概要について記す。

(1) 文政9年以前の様相

a. 加賀藩邸域 (9、10 図)

本地点の藩邸内での位置は、絵図との対比から御表門北側付近に該当する。調査では溝状遺構、門跡、塀跡、布掘建物跡、礎石列、植栽痕などが検出された。

藩邸に帰属する最も古い遺構に SA873 がある (8 図)。本遺構は隅丸長方形の柱穴列を伴う溝状遺構で、主軸方位はほぼ東西方向を示しており、元禄以前の御殿空間主軸に共通する。また今までの本郷キャンパス内加賀藩邸、大聖寺藩邸の調査事例から 17 世紀中葉頃を下限に類例が認められる形態である。いずれも藩邸内の地境として機能した遺構である。SA873 では、本遺構の特徴でもある隅丸長方形ピット内から 1 辺 4 寸を測る柱痕が検出され、本遺構が塀跡であることが立証された。また、検出された柱痕を中心にピットの主軸方向に半截し、柱痕、柱穴の状態を観察したところ、柱穴の立ち上がりが溝の覆土を切っていることが判明し、溝が埋め戻された後にピットが構築されたことが明らかになった。過去の調査事例では、溝の横断面にセクションを設定していたことから、ピットが検出されるのは溝の完掘時であったため、溝とピットの関係を押さえることができなかった。今回の成果で溝とピットの構築時期に差があることが確認されたが、過去の事例も含めてピットは溝内に重なり主軸方向も同一であることから、邸内の地境施設構造が溝から塀へと変化したことが推定される。

SB659 は、門跡と考えられる建築遺構である (9、11 図)。平面形は「工」字状を呈し、上辺と下辺から礎石が 2 基検出された。共に西側の礎石には 1 辺約 60cm の切石を東側の礎石には 1 辺約 40cm の割石が用いられている。その形状と規模から西側の礎石が主柱、東側が支柱と考えることができる。確認面から礎石上面までの深さは約 120cm を測る。礎石直上から約 30cm 角の柱痕が検出されたが、その四方には柱の固定補強材として人頭大程度の割栗石が充填され、確認面付近まで積み上げられていた (12 図)。東西柱痕間は芯々で 120cm、南北は 270cm を測る。坑底、壁面の様相や覆土の観察から何度も作り替えられたことが窺われる。本遺構は絵図との対比から御表門北側に設置された猿楽門に比定されることが考えられるが、現存する赤門や、医学部教育研究棟地点で検出された下屋敷時代の門跡、第 2 中央診療棟地点で検出された天和 2 年までの大聖寺藩邸表門では、いずれも地上に面した礎石上に柱を設置する構造を取っており、本遺構のような地中に柱を埋めて固定する構造の門は天和 2 年火災後の大聖寺藩邸に設置された仮設の表門など類例は非常に少なく、興味深い。また本遺構の南北両側には、門から続く塀跡も検出されている (SB312、SB755)。SB755 は長方形の掘方を呈



8 図 SA873



9図 17世紀代の遺構

4. 伊藤国際学術研究センター地点 (H7I09)



10 図 文政 9 年以前の遺構
(9 図に示した遺構を除く)

し、覆土にはローム土が充填されている。柱痕が認められる事例もあり、掘立柱の塀と考えられる。この塀跡の西側には町屋に帰属する採土坑と推定される大形遺構が多数検出されたが、その多くが18世紀初頭に廃絶され、覆土上部には玉砂利を大量に入れて、突き固めて埋め戻された共通点を持つ。絵図面によると町屋の裏手に猿楽門に通じる袋小路の露地が描かれており、この一帯がそれに該当すると考えられる。即ち猿楽門と路地の構築年代は元禄年間以降に求められ、元禄16年の藩邸火災がその候補に挙げられる。門北側のSB312は砂利敷き路地西辺の延長線上に位置している(13図)。

SB412は、布掘構造の建築遺構である(9、14図)。南北長は礎石の芯々で540cm、東西長は現存で920cmを測る。礎石は半間間隔で配置されている。主軸方位が本郷通りとほぼ平行であることから元禄年間以降の建物と考えられ、18世紀前半から中葉の絵図面に描かれているL字形の建物に比定される可能性が高い。

b. 本郷六丁目町屋域 (9、10図)

本郷六丁目町屋跡に関しては、今までに情報学環・福武ホール地点(以下、HJF06地点と略す)、経済学研究科学術交流棟地点(以下、HEA07地点と略す)の調査で、多量の遺構、遺物が検出され、江戸時代初期から文政9年の屋敷引き払いまで活発な土地利用と生業活動が行われていたことが明らかになった。本地点も同様な状況で、限られた空間のなか地下式麴室、地下室、半地下室、採土坑、フラスコ形井戸などの夥しい遺構の切り合いと大量の遺物が確認された。また学士会分館基礎による攪乱を受けていない区域から断片的ではあるが、町屋地境と推定される柱穴列が検出されている。57～59ライン付近で5間幅、63～65ライン付近で3間幅を確認している(10図)。HEA07地点においても最下遺構面のみ地境柱穴列が検出されていることから、



11図 SB659



12図 SB659 柱痕と栗石



13図 SB755 (中央左)とSB659 (中央下)



14図 SB412

本地点検出の柱穴列も17世紀段階の地境の可能性が高い。また屋敷地奥行きは、南側の本郷五丁目において明治16年の地形図から約40m（京間約20間）であったことが確認でき、本地点の町屋も同規模であったことが推定される。調査区域は加賀藩邸との地境から28～32mの範囲に掛かることから屋敷地の奥手約3/4が対象となり、母屋に該当する建築遺構が検出されていないことから、屋敷地裏手空間に位置するといえよう。以下に時代の変遷を踏まえながら、検出遺構と出土遺物からみた生業との関わり、土地利用の状況を概説する。

17世紀前葉～中葉に廃絶された遺構の多くがPライン以東に分布し、遺構種別では採土坑と推定される不定形遺構、地下式麴室、ピットなどがある。採土坑は、17世紀中葉頃までの廃絶年代を与えられるものが多く、屋敷地最奥部加賀藩邸地境際に分布する特徴を有す。そのなかで最も古い遺構SK1227は、工具痕が顕著に認められる不定隅丸方形の土坑である（15図）。出土遺物には有田窯場統合以前の肥前磁器や口縁に緑釉を施し見込みに蘭竹文を描いた「織部」皿などを含み、1620年代から遅くとも1630年代前半には廃絶された遺構と位置付けられる（16図）。HJF06地点、HEA07地点でも織部製品を含む廃棄資料が出土しており、町屋が元和～寛永期には成立していたことを裏付けるものである。またSU1070は、袋状を呈する不整楕円形を呈し、壁面に沿って螺旋状のスロープが敷設されている（17図）。全体的に工具痕が顕著に認められ、採土坑と推定される。本遺構覆土最下層には炭化物を含む暗褐色土と燈褐色を呈する純焼土層が堆積しており、火災後の焼土整理の様相を呈している（18図）。織部水注、有田百間窯類似製品を含む出土遺物の様相から、慶安3（1650）年、本郷五丁目同心屋敷を火元とした火災と推定される。

地下式麴室ではSU836が本段階に帰属する（9、19図）。北西（1室）、南東（2室）、南西（3室）に3室を有する地下式麴室で、室部への通路部縦断面が皿状を呈する特徴を持つ。また竪坑床面標高は19.6m、室部奥行きは1室：450cm、2室：370cm、3室：480cmを測る。3室ともに床面竹杭痕、壁面杭痕が少ない傾向がある。3室からは高台内二重圏線の肥前磁器碗を含む遺物が出土したことより、延宝年間頃を下限とする地下式麴室と考えられる。

17世紀後葉～18世紀初頭に廃絶された遺構も、前段階同様屋敷地奥域に多く分布する傾向が看取される。しかし遺構種別に目を向けると、採土坑以外に天井部を有する地下室が新たに構築されるようになる。階段を有するタイプ、梯子を掛け直接室部へ降りるタイプなど構造は種々あるが、室内床面は正方形～長方形を呈し、内面整形が丁寧に施され、1辺200～260cmを測る比較的大形の遺構が多い点で共通する。加賀藩邸境界際のS～T・60～64グリッド付近には、藩邸内遺構でも触れた、不整隅丸方形を呈する採土坑が密に分布する。これらは17世紀後葉から18世紀初頭までの間、継続的に構築、廃絶を繰り返していたことが遺構の切り合い、出土遺物の年代観から確認され、この区域特有の様相と位置付けられる。

地下式麴室はP57グリッドに正方形の竪坑を持つSU485（9、20図）がある。室部は竪坑コーナー部から展開し、4室を数える。本遺構は竪坑の覆土最上部に宝永の火山灰が廃棄されていることから、18世紀初頭に廃絶年代が求められる。室部奥行きは490～580cmを測り、SU836よりも相対的に長い。床面の線状痕、竹杭痕も顕著に認められる。

18世紀以降になると、屋敷地奥域の他、調査区全域にわたって、夥しい数と種類の遺構が構築と廃絶を繰り返した様相が認められた。しかし、先述した攪乱の影響によって帰属遺構面を把握することができなかった遺構も多く、また出土遺物の年代観による廃絶年代の詳細な把握まで至っていないことから、本報告では遺構種別を基本にして特徴的な様相についてのみ触れるにとどめたい。

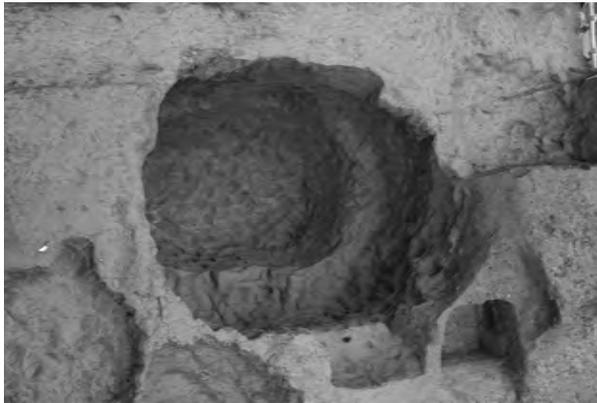
Q・R～60・61グリッドに分布する礎石群は、本地点町屋区域から検出された唯一の建築遺構で



15 図 SK1227



16 図 SK1227 出土遺物



17 図 SU1070



18 図 SU1070 焼土堆積状況



19 図 SU836 (2次調査)



20 図 SU485 (2次調査)



21 図 SU26-1 室入口補強施設



22 図 SU202-1a



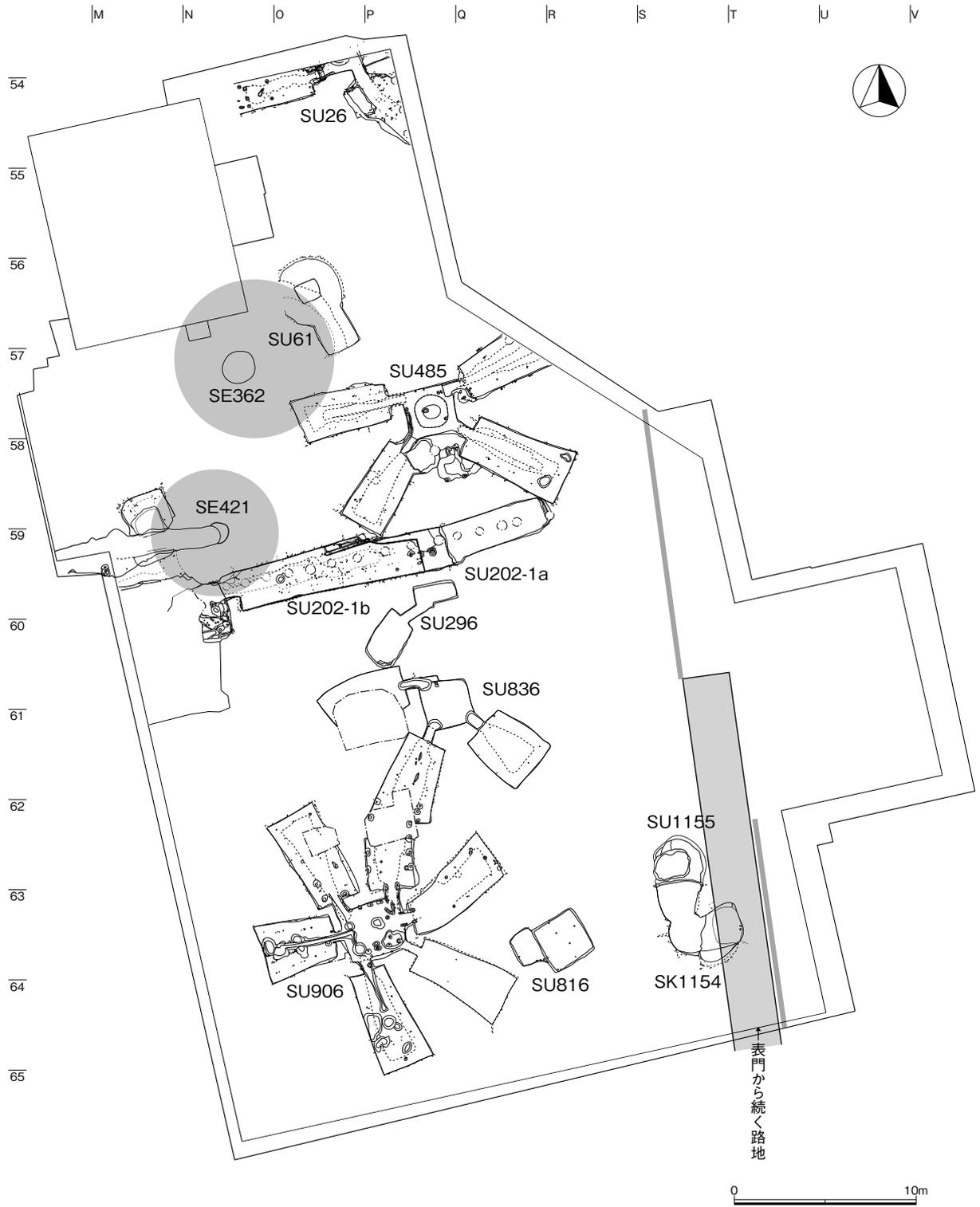
23 図 SU202-1b

ある (10 図)。断続的な布掘掘方内にはほぼ半間隔で礎石を配した遺構である。特に SU1070 上では、構造補強のため深い掘方を掘り、その中に割栗石を数段版築状に積み上げる工法が取られていた。

前節で触れた地下式廻室を含め、本地点からは 6 基の竪坑が検出されたが、そのうち 2 基は先述した 17 世紀代に帰属する遺構である (24 図)。残りの 4 基については、現段階では廃絶時期を確定できる根拠に乏しく、特徴のみを述べる。SU26 は、調査区北端 O53 グリッドに竪坑が位置し、調査区域内で 2 室を確認した。そのうち西側の部屋入口は、壁面、天井の三方に切石による補強が施されていた (21 図)。本事例は HJF06 でも認められる。N59 ~ 60 グリッドに竪坑が位置する SU202 は、西側が地下水槽の攪乱を受け、攪乱北側で検出された室部との関連は不明である。確実に帰属する室部は東側で 1 室確認された。本室は当初奥行き約 11m であったが、床面レベルを嵩上げしさらに東側へ室部を拡張し、奥行き 18.3m の大形室部へと改築された (22、23 図)。しかし、拡張部奥壁に工具痕が認められること、壁面、床面に杭痕や線状痕が認められないことから、拡張途中で廃絶された可能性を指摘できる。その要因として SU485-3 室に貫通してしまった可能性が考えられる。もう 1 基 P59 グリッドに竪坑が位置する SU296 は、製作途中で廃絶された典型例である (25、26 図)。本地点では他に類例を観ない平面長方形の竪坑を有し、南西側に室部が設けられている。この室部は本地点で唯一天井が崩落していない遺構で、竪坑完掘時に入口通路天井部付近の空洞より室内を垣間見ることができた。室内には入口からの土砂の流入とは別に奥壁左角付近の天井からの流入が認められた。天井斜め上方向には SU836-1 室床面が位置しており、奥壁天井付近掘削時に床面を貫通してしまったことが廃絶につながったと考えられる。ところで、室部壁面は掘削中の奥壁左から東壁にかけては工具痕が顕著に残っているが、竪坑から入口通路そして前壁と西壁は非常に丁寧に整形されている。この状態から地下式廻室構築に携わる職人は、掘削担当と整形担当の役割分担のもと作業に当たっていたことが考えられ、地下式廻室をはじめ地下室の製作工程を知る上で有用な情報が得られた。O ~ P63 グリッドに竪坑が位置する SU906 は、本郷構内でのこれまでの調査事例の中でも最も多い 6 室を有する地下式廻室である (27 図)。平面正方形の竪坑コーナー部から 4 室、東西両壁ほぼ中央から各 1 室が広がる。室部奥行きは 400 ~ 580cm を測る。本遺構の特徴として、3 室での壁柱穴、1、6 室での排水溝?がある。

天井を有する地下室は 18 世紀前半以降減少し、半地下室がそれに替わる様相が窺える。SU61 は 18 世紀前半に廃絶された地下室で、開口部は 120 × 100cm を測る長方形を呈し、確認面からの深さは約 4m と深い (28 図)。室部は直径約 4m の円形部の南側に 1 辺約 2m の正方形の張り出し部を有する鍵穴形を呈する特徴的な形状である。半地下室の形態は、壁柱穴を有するタイプ、床面に根太を配置するための溝を有するタイプ、壁柱穴、根太固定用溝の両方を有するタイプに大別できる (29 ~ 32 図)。また SK996 からは、根太固定溝はないものの、掘方床面直上に根太に使用された角材が認められ、壁柱穴のみのタイプでも床材が設置されていたことが確認された。半地下室の分布は、地下室同様屋敷地最奥部と母屋寄りの屋敷地中央部に分かれる。

町屋に伴う井戸は 14 基検出された。ほぼ L ~ O ラインに分布し、屋敷内では母屋裏手の中央部付近に位置する。地下室と同様に個々の屋敷を越えて、類似する土地利用のあり方をみることができ。そのうち SE362 と SE421 は、フラスコ形井戸と名付けた、地中でフラスコ状のオーバーハング部が付設された井戸である (33、34 図)。2 次調査時に井戸周辺に同心円状のクラックが確認され、ミニバックホーで井戸を中心にサブトレンチを設定して立ち割ったところ、三角フラスコ状のオーバーハングが確認された。2 基とも重機のアーム限界まで掘り下げたが、オーバーハング部の坑底に達することはできなかった。SE326 を取り巻くクラック径は約 11 m を測る。



24 図 2次調査対象遺構
(地下式廻室、地下室、フラスコ形井戸)

4. 伊藤国際学術研究センター地点 (H7I09)



25図 SU296 (2次調査)



26図 SU296 室内工具痕検出状況



27図 SU906 (2次調査)



28図 SU61 (2次調査)



29図 SK996



30図 SK996 根太検出状況



31図 SK848



32図 SK885

町屋に伴う遺構で特徴的な遺構の一つに「壁面柱穴土坑」と名付けた遺構がある（35 図）。本遺構は 61 ラインより南側で 3 基検出されている。平面形は不整形～不整方形を呈し、坑底の壁際に不整長方形の土坑を有す。そして壁面には多いもので 7 基の壁面柱穴がほぼ水平方向に穿たれている。平面形は横長の長方形を呈し、底面は平坦に整形されている。柱穴内が空洞の事例や奥壁に硬化した覆土が張り付いている事例から角材が挿入されていたと考えられる。奥行きは約 10～100cm と個々の差が激しいが、いずれの遺構も坑底土坑上の壁面に穿たれたピットが 60～100cm と最も深い。また柱穴が存在する壁面は 2～4 面と遺構毎にまちまちであるが、向かい合う両壁面で対になる例も認められなければ、1 点を中心にして放射状に拡がっている訳でもなく、規則性は認められない。覆土の堆積状況も遺構の性格を連想させるような特徴は認められず、現段階では遺構の性格を示す手掛かりはない。

炉状遺構は 4 基検出された（36、37 図）。そのうち SF833 は、火床部より方形の切石が 3 点検出された。他の 3 基は粘土枠がわずかに残存するか、火床と推測される焼土・灰層が検出されたにすぎず、形態を復元するには至っていない。

今回の調査で出土した遺物の大半は、本郷六丁目町屋に伴う。先述したように陶磁器のうち最も古い様相は、寛永 14 年窯場統合以前の肥前磁器、織部製品などがあり、渡来銭が供伴する。全体的な様相としては、今まで行ってきた町屋の調査同様、多量の人工遺物、動物遺体が出土している。そのなかでも今回の調査地点にみられる特徴的な様相を以下に列記する。

魚介類は、アサリ、ハマグリ、アカガイなどの特定種の大量廃棄が多く、またマグロが廃棄された遺構も数例認められているなど、居住者の生業に関する資料が、これまでの調査同様確認された（38 図）。さらに今回の調査では、イノシシ、シカが 10 体以上まとめて廃棄された遺構が検出され、居住者の生業が海産物にとどまらず、獣類も対象していたことが明らかになった（39 図）。

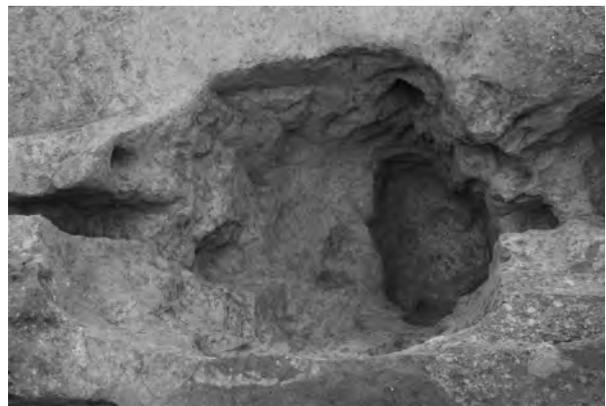
植物遺体では、SX1059 から直径約 20cm を測る饅頭形を呈する炭化米の碗が 2 例出土した（40、41 図）。いずれも饅頭形の山形面にそれよりも一回り小さい正方形のスノコ状木製品が付着していた。この木製品は割り箸状の角材を紐で束ねており、山形に合うように



33 図 SE326



34 図 SE326 (2次調査断ち割り状況)



35 図 SK916

4. 伊藤国際学術研究センター地点 (H7I09)



36図 SF883



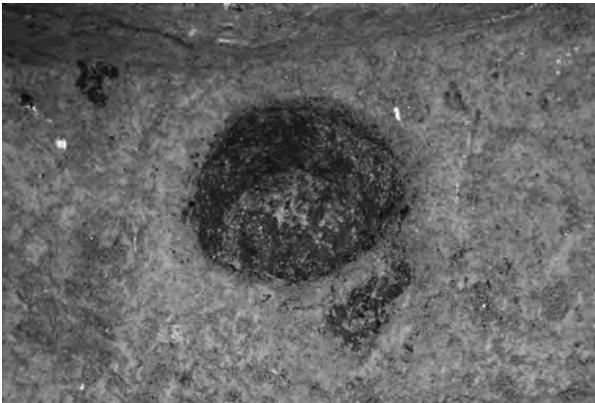
37図 SF445



38図 SK490 大形魚骨出土状況



39図 SU511 獣骨出土状況



40図 SX1059 炭化米碗出土状況



41図 SX1059 スノコ状木製品出土状況

全ての材が緩やかに湾曲している。炭化米碗が円形を呈しているの対し、スノコ状木製品は正方形を呈していることや、炭化米碗より一回り小さいことから、セイロの中敷とは考えがたい。

そのほか、17世紀中葉に廃棄されたSU1149から、鉄釘が大量に入った備前産徳利が出土し、小鍛冶もしくはベンガラ生産が行われていた可能性も指摘できる。

(2) 文政10年以降の様相

a. 加賀藩邸域 (48図)

NラインからOラインにかけて南北に伸びる石組溝 (SB60、SD95、SB840) を境に東側が加賀藩邸、西側が火除け地となる (48図)。本遺構の延長はHJF06、HEA07でも検出されている。残念ながら



42図 SB60



43図 SD95 (2区調査部分)



44図 SB16 (1区調査部分)



45図 SB33 (2区調査部分)



46図 SK41

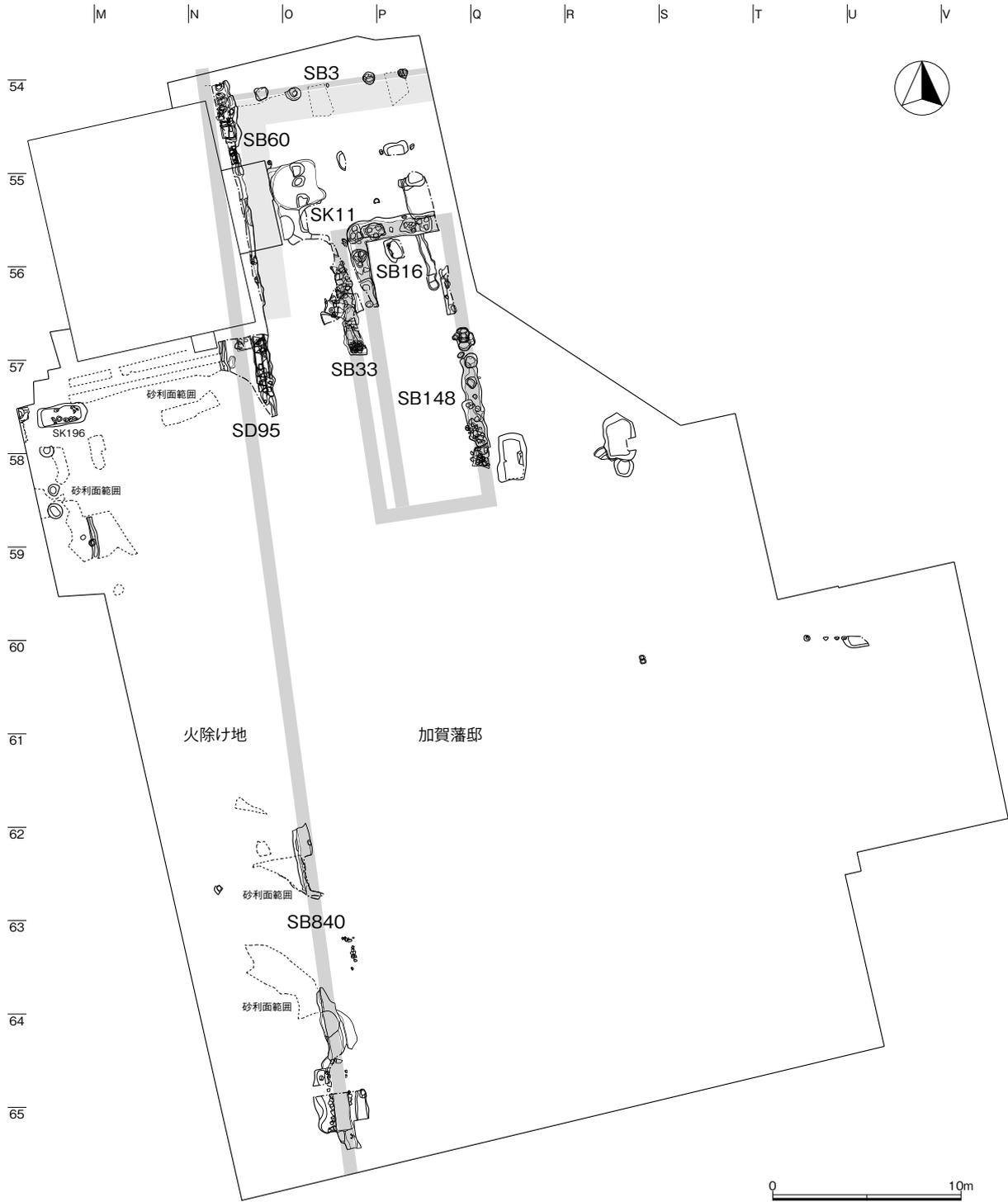


47図 SK11 出土軒丸三ツ葉葵紋瓦

ほとんどの築石は抜き取られ、根石と溝底の漆喰がわずかに残っているのみである。最も残りの良かったN54～57グリッドでは、石組溝内から玉石敷きの硬化面が検出されている(42、43図)。調査区北端で石組溝から直角に折れて東へ伸びる礎石列がある(SB3)。本遺構はその位置関係から御守殿門(赤門)へ通じる塀の支柱跡と考えられる。

O55～Q58グリッドにかけて建築遺構が1基検出された(SB16、SB33、SB148)。南側は攪乱によって残存していない。布掘の掘方内に半間間隔に根石を配置し、その直上全面に瓦片を敷き詰め、さらにその上に礎石が置かれていたことが判明した(44図)。西側のみ掘方が2列になっており、そこには矢穴と丸に卍の刻印を持つ巨石が設置されていた(45図)。刻印を有することから17世紀代に本郷邸に運ばれてきた可能性もある。19世紀中葉の絵図面には赤門南側にこの建物に該当する土蔵が

4. 伊藤国際学術研究センター地点 (H7I09)



48 図 文政 10 年以降の遺構

描かれている。当初は入口と思われる張り出しを東側に4箇所備えた建物であったが、文久3（1863）年頃の絵図ではそのうち3箇所分が取り壊され、大幅に縮小している。しかし明治に入ってからも大学建物として使用され、明治41年の配置図まで確認することができる。

石組溝東側、O55グリッドに位置するSK11、SK12は多量の瓦片が廃棄された不整形遺構である（46図）。瓦は棧瓦を主体とし、被熱の痕跡は認められない。そして梅鉢文と三ツ葉葵文の軒丸瓦が含まれていることから、溶姫御守殿解体に伴う瓦廃棄遺構と推定される（47図）。

b. 火除地（48図）

土地利用の性格上、地面を掘削する遺構は存在しない。学士会分館基礎による攪乱を免れたL・N-57・58グリッドで、火除け地段階に該当する砂利敷き硬化面が確認された。

(3) 近代の様相

a. 東京帝国大学（50図）

近代に入り、前田邸は江戸時代本郷邸の南西部の一角に縮小し、それ以外のほとんどが大学用地となる。その地境が58～59ラインにあたる。大学西側のラインは本郷邸の地境を踏襲していたが、明治24年、江戸時代から中山道に面していた加賀藩邸の張り出し部分（現在の大学正門周辺）のラインに合わせ、大学敷地が西側へ拡張されたことにより、火除け地も学内に取り込まれていった。さらに明治36年には赤門が本道通り側へ50尺移動し、現在の位置になった。その2年前（明治34年）には石組溝の地境ラインは廃され、赤門移動に伴い、SB3も廃されたと考えられる。



49図 SL175（右）SL224（左）

大学側の遺構としては先述した江戸から続く土蔵の他に、井戸、便槽などが検出された。便槽はQ57グリッドで切石組の方形便槽と、常滑焼大甕を埋設した円形便槽が南北に並んで配置されていた（49図）。常滑焼大甕にはマンガン釉が施されており大正まで下る可能性もある。切石組の便槽は切石の内側に漆喰を貼っており、坑底には水抜きと考えられる円形の孔が存在する。

そのほか明治44年に附属病院地区から史料編纂掛建物として移設された旧医学校本館の基礎、大正4年に新築され現存する史料編纂掛書庫（現、レストラン）と史料編纂掛建物を結ぶために大正5年に建設された渡り廊下の基礎などが検出されている。

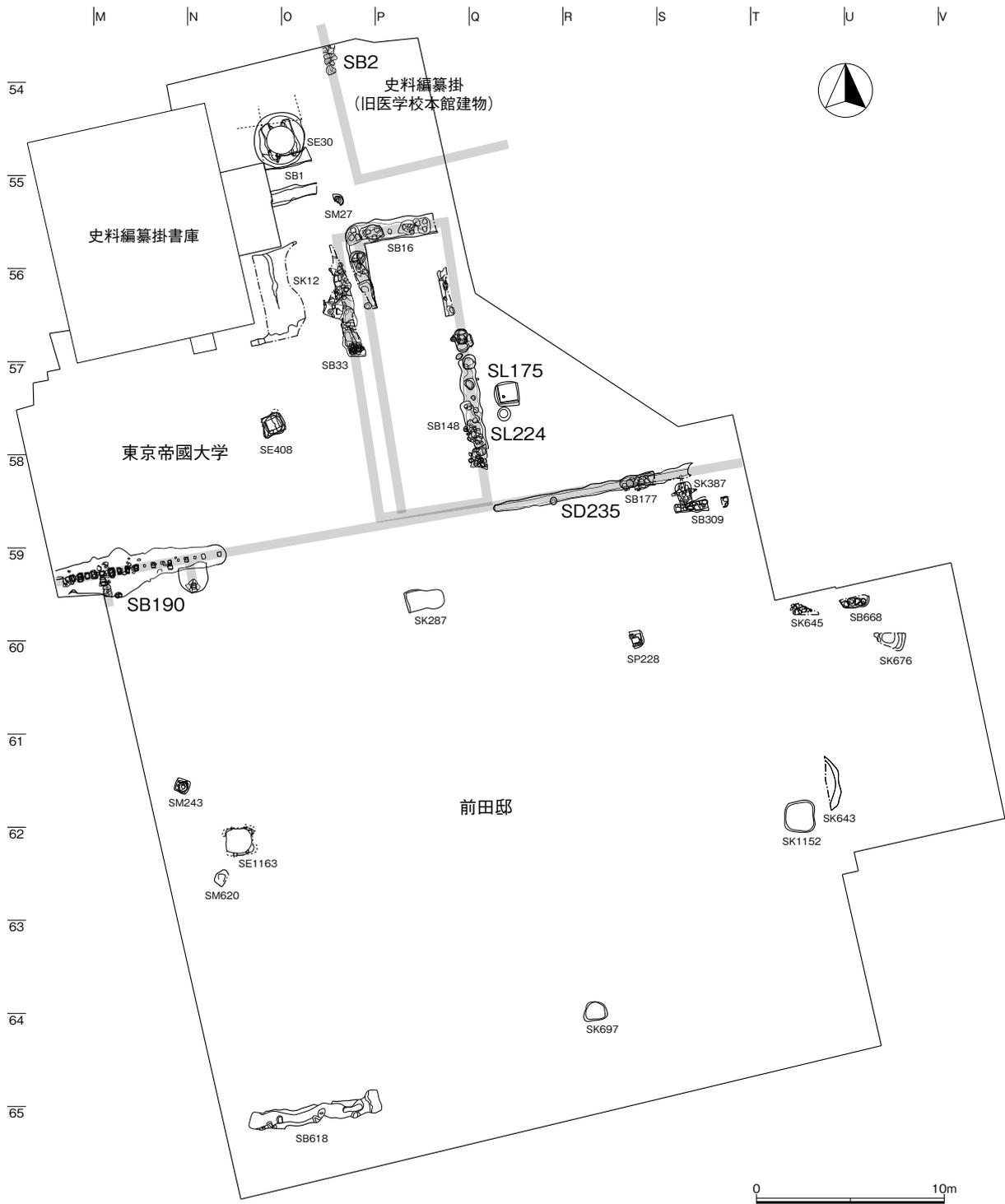
b. 近代前田邸（50図）

近代前田邸では邸を取り囲む塀跡が検出された。特にL～N59グリッドに位置するSB190は、塀基礎でありながら、江戸時代の地下式麴室（SU1276、SU1279）、フラスコ形井戸（SE421）の真上に位置したため、プライマリーなロームが検出されるまでその区間を



51図 SB190

4. 伊藤国際学術研究センター地点 (H7I09)



50 図 近代の遺構

トレンチ状に掘削し、半間間隔のロウソク地業を行っている(51、52図)。ロウソク基礎は5段が確認されている。また2間間隔で塀の控えを設けているが、その部分もロウソク地業を行っている。この塀と控えは明治期の前田邸絵図面にも描かれているが、本郷通りから大学に取り込まれた土蔵西側までの範囲で塀本体、控え共に二重線で面として描かれていることから、レンガ塀などの厚みを持つ施設と考えられ、それを保持するために強固な基礎構造をとったものであろう。



52図 SB190 ロウソク基礎
3段目検出状況

5. 調査の成果と課題

本地点の調査では、前節で述べたように江戸時代以降では文政9年を下限とした本郷六丁目町屋に関する資料と、文政10年～大正15年までの前田邸、文政10年から明治24年までの火除け地、明治10年以降の大学に関する資料が確認された。

本郷六丁目町屋の遺構・遺物に関しては、やはり過去2地点の調査同様、土地利用と生業が大きなテーマになる。

加賀藩邸との地境が確認され、短冊状地割りを呈した屋敷地の中央部から最奥部までのいわゆる裏庭区域での土地利用を考える上でひとつの定点を見いだすことができた。その結果、17世紀代を通して最奥部での活発な遺構の構築が認められ、そのなかでも採土坑から天井部を有する地下室への変遷を読み取ることができた。さらに18世紀に入ると中央部でも活発な土地利用が行われるようになり、天井部を有する地下室に替わり、半地下室が構築されるようになることが確かめられた。過去の調査では地下式麴室の廃絶年代が古いものでも18世紀初頭であったことと、17世紀代の遺構から大量の動物遺体(魚介類)が出土したことから、居住者の生業が水産(加工)業から麴生産業者へと変化していくイメージを抱いていたが、本地点からは延宝年間頃に廃絶された地下式麴室が検出され、単純な変遷では捉えることができなくなった。さらに獣骨の出土も加え、居住者の生業を改めて考えさせられる情報が得られた。

加賀藩邸に関しては、過去の調査事例から引き続き、文政10年以降の藩邸地境遺構の位置を把握することができたことに加え、御守殿門へ通じるクランクの地割を確認できたことは江戸時代の御守殿門(赤門)の正確な位置を復元する上で大きな成果といえる。また文政9年以前の町屋との地境の様相、位置関係が塀跡、路地から確認されたことをはじめ、路地に面する猿楽門の基礎構造が持つ課題も大きい。

今後の整理作業において、目の前に立ちはだかる膨大な遺構、遺物量との取り組みも含めて、担当者に課せられた課題は山積している。しかし、この豊富な遺構、遺物からの情報量が、江戸の場末近くでありながらも中山道という幹線に面し、周囲には多くの大名屋敷を配した本郷六丁目町屋の復元にとって最良の資料であることはもちろん、江戸の町屋研究にとっても最良の情報であることは疑い

4. 伊藤国際学術研究センター地点 (H7I09)

の余地はない。

付編

東京帝国大学文科大学史料編纂掛書庫渡廊下基礎遺構調査報告

1. 調査に至る経過

東京大学では、学士会分館跡地に伊藤国際学術研究センターの新営を計画した。

当該地を含む本郷キャンパスは、本郷台遺跡群（文京区No. 47）内に位置するため、文化財保護法第92条に基づく事前発掘調査の必要があった。そのため本学施設部との協議の結果、平成21年7月30日より、記録保存としての発掘調査を実施することとなった。

弥生地区、浅野地区を除く本郷キャンパスの大部分は、江戸時代の加賀藩本郷邸に比定されるが、キャンパス周縁部では、屋敷割りの改変や近代以降の用地買収などにより、幕臣屋敷、寺社、町屋が含まれている。キャンパス西縁辺部に位置する本地点は、近代前田邸、近世加賀藩本郷邸、近世本郷六丁目町屋に関連する多量の遺構・遺物を検出した、隣接する経済学研究科学術交流棟地点の調査での成果から、同様の土地利用変遷とそれらに伴う遺構、遺物の検出が想定される。ただし、学士会分館基礎及びその解体工事による攪乱によって遺構・遺物の遺存状況に影響が及んでいることは避けられない状況にある。

大学事務局との当初打合せでは、解体工事の終了を待って調査を実施する予定であったが、今後の建設計画日程との絡みから、解体範囲以外にあたる煉瓦倉庫（旧史料編纂掛書庫）前の更地（約140㎡）を先行して行うことが、大学事務局、契約業者（鹿島建設）との最終打合せで決まり、当該地の樹木、電気関連施設などの撤去作業完了を受けて、調査を開始することになった。

2. 調査の経緯

施行担当者から樹木、電気関連施設などの撤去、舗装面の剥ぎ取り終了連絡を受け、2009年7月30日より重機による表土掘削を開始した。現地状況は、煉瓦倉庫廻りは入口庇部分を除き、全て更地になっており（6図）、後述する渡り廊下（5図参照）はすでに撤去されていた。表土掘削は煉瓦倉庫側から東に向けて、幕末から近代初頭の構築と推定される第1遺構面の検出レベルを基本として掘り下げていった。その結果、第1遺構面より新しい煉瓦拵とそれに接続する土管溝や、さらにそれらより新しい埋設管が多数検出され、それらの撤去を並行し掘削を進めた。

煉瓦倉庫入口土間北寄りから、東西方向に伸びる2条の溝状遺構が検出された（以下、SB1と称す）。遺構内には多数の破碎礫が充填されており、何らかの建築物の基礎遺構であることが推定されたが、南北方向に伸び、本遺構と交差する土管溝を切って構築されていることが確認されたため、破碎礫検出状況の写真撮影を行い、礫を除去した（7図）。本基礎遺構に関しては、「東京帝国大学平面図（大正5～6年）」より、東京帝国大学文科大学史料編纂掛書庫（煉瓦倉庫）、史料編纂掛（旧東京医学校本館）の両建物を結ぶ構造物の基礎遺構にあたりと推定される（1、2図）。以下SB1及び関連基礎遺構について述べる。

3. 検出された遺構

SB1 (3、4、7～9 図)

先述したように、伊藤国際学術研究センター新営に伴う事前発掘調査は、学士会分館解体工事と並行し、煉瓦倉庫入口前約 140m²を先行実施している (3 図)。SB1 は煉瓦倉庫入口コンクリート土間に隣接して検出された。

本遺構は、東西方向に伸びる 2 条の溝状遺構で、断面形は長方形を呈する。遺存範囲内での規模は南側の溝が、最大長 260cm、幅 60～80cm、確認面からの深さ 25cm、北側の溝が最大長 250cm、幅約 65cm、確認面からの深さ 25cm、溝間は芯々で約 180cm、内法で約 120cm を測る。断面構造は、煉瓦倉庫側のカッター切断面より、掘方内に約 20cm 大の扁平破碎礫を立てた状態で充填し、その上にコンクリートによる基礎を打ち、縁石となる砂岩質の切石を配置していたことが確認された。また溝間には拳大の円礫を栗石として敷き詰め、その上にコンクリートを流し込んで路面を整形している。縁石部分の基礎に破碎礫が意識的に使用されていることは、断面図の溝南側に観られる縁石基礎部分の状況からも確認される。

縁石に使用された切石は長辺 80cm、短辺 30cm、厚さ 15cm を基本としているが、コンクリート土間南側縁では長辺 100cm、北側縁では煉瓦倉庫躯体壁面寄りの 3 点が長辺 94cm の切石を使用している。切石はいずれも上面及び外側にあたる一側面のみが丁寧に整形されており、角は約 2cm 幅で面取りされている。もう一方の側面はコンクリートとの接着を考慮してか、台形状に粗加工されている。

本遺構の上部構造であるコンクリート土間・栗石・縁石は、樹木、舗装面などの撤去作業時に、すでに撤去され遺存していなかったが、舗装カッターによる切断部以西の現存部構造から煉瓦倉庫前入口前のコンクリート土間の延長部分の基礎遺構であると判断される。

SB2 (3、8、10 図)

本遺構は、調査区内で北から東へ L 字状に伸びる断面長方形の布掘状基礎遺構である。溝幅は確認面で約 100cm、溝底で約 90cm を測り、江戸時代遺構との重複部を除き、確認面からの深さは約 140cm を測る。基礎構造は溝底に人頭大破碎礫を充填し (厚さ約 60cm)、その直上に破碎煉瓦片主体層 (厚さ約 15cm) で整地を行った後に、コンクリート土台 (厚さ約 40cm) を流し込んでいる。そしてコンクリート土台上に幅 40cm、厚さ 25cm の切石を設置し、基礎としている。江戸時代遺構と重複し、地山である関東ローム層がない部分に関しては、約 100cm の溝幅をほぼ維持し、地山にあたるまで、即ち遺構の埋土が無くなるまで掘削し、破碎礫を充填している。使用された破碎礫には多量の煉瓦粒子が付着しており、他所における煉瓦建物解体時に発生した基礎栗石を再利用した可能性も考えられる。本基礎遺構は、煉瓦片、コンクリート土台の使用から、近代建築物基礎遺構と判断され、「東京帝国大学平面図」との比較から、明治 44 年頃に移築された旧東京医学校本館 (移築後、史料編纂掛建物) の基礎遺構と判断される。

4. 検出遺構と大学建物との比較

両遺構に関しては「東京帝国大学平面図」の建物変遷からも以下に述べる情報を読み取ることができる。

明治 44～45 年 旧東京医学校本館が病院地区より移築され、史料編纂掛建物となる。

大正 4～5 年 史料編纂掛建物西側に同書庫が建設される。

大正 5～6 年 両建物を結ぶ渡り廊下施設が建設される (1、2 図)。

昭和4年頃 史料編纂掛建物（旧医学校本館）は、営繕課建物となる。

昭和42年 経済学部研究室建設のため、旧医学校本館は理学部付属植物園内に移設され、それに伴い渡り廊下の東側部分が撤去される。

以上の変遷と両建物の位置関係から、SB2は、移築された旧東京医学校本館基礎に、SB1はそれと史料編纂掛書庫とを結ぶ渡り廊下基礎であることが確認できる。

また、SB1（渡り廊下）と旧東京医学校本館の接続部分から約150cm間は、昭和42年の再移築時に解体され、基礎も撤去されていたことが今回の調査で確認された。

5. SB1、SB2 と近代建築基礎構造

SB1、SB2の基礎構造のあり方を評価するために、以下の事例と比較検討を行い、調査報告のまとめにかえたい。

経済学研究科学術交流棟地点SR8（11図）

SR8は、近代前田邸に伴う破碎礫敷設遺構で、幅は約5mを測る。確認面からの深さは約20cmを測り、遺構内には手のひら大の扁平破碎礫が立てた状態で極めて密に充填されていた。礫層上は砂利製地層が、本遺構を含む調査区一帯に広がっていた。また本遺構は明治13年に岩崎弥太郎らによって再興され、明治40年まで運用された千川水道株式会社時代の上水道と考えられるSD27（木樋を伴う溝状遺構）及び煉瓦柵に接続する鉄管埋設溝設置後に構築されている。本遺構は、表門から本郷通りを結ぶアプローチに伴う路面基礎遺構と考えられ、馬車などの重量車輛通行に対応するための補強構造と推定される。使用された破碎礫の表面には加工位置を示す朱線が引かれたものもあり、これらが建築廃材をリサイクルしたことを窺わせている。

医学部附属病院外来診療棟地点SB70（12図）

神田和泉町にあった東京医学校の本郷移転は明治7年に決定し、本郷構内に明治9年には完成していた。『東京大学本郷キャンパスの百年』（東京大学総合研究資料館編1988）によれば、「医学校校舎は、木造2階建の軽快な建築である。正面入口部にはポーチコが設けられており、屋上には時計塔が載っていた。後に医学部の校舎が赤門付近に集中すると、病院として活用されたが、明治末に赤門脇に移されて史料編纂掛に使われ、さらに昭和44年には理学部附属小石川植物園に移築された」とあり翌年には重要文化財に指定されている。また同書に載せられた明治30年の配置図によれば、この建物は医科大学仮事務室となっている。

本地点の発掘調査で検出されたのは「ポーチコ」部分を含む建物本体の大部分と、両翼建物のうち、西側の一部である。明治末年の赤門脇移転のさいには、基礎部分は放置されたらしく、一部残りの悪い部分もあるが、概して用いられていた石材はよく残されていた。基礎構造は、外壁部分は溝状に地山を掘った「布掘」で、その中に川原石や切石を密に詰め込んでいた。外壁部分以外は、「ポーチコ」をふくめ柱の部分のみを掘削し、根石・礎石を置く工法であった。

この基礎の工法で興味深いのは、江戸時代に数多く掘られた地下室などの跡の処理である。基礎の掘方の底が、ロームであれば、そのまま石を詰めるが、地下室を埋めたような軟弱な基盤の場合、かならずロームが出てくるまで（地下室の底まで）掘り下げ、そこに石を詰めこんでいる。柱がその上に乗るような場合、凝灰岩の柱石（ローソク石）を何段も積み重ね、基礎が沈み込まない工夫をしている。また江戸時代に掘られた遺構規模が大きく、基礎の溝の壁が軟弱となる場合には、規定の幅より溝を広く掘って、全体に石を詰めて強度を増している様子も見てとれた（東京大学埋蔵文化財調査

室編 2005『医学部附属病院外来診療棟地点発掘調査報告書』より抜粋、一部改変)。

明治末に移築された医学校本館は、木造二階建て構造に関連してか、基礎構造に煉瓦は使用されず、明治初頭の建築時同様に破碎礫を充填して栗石とする工法をとっている。大きな相違点は、明治初頭では、栗石は礎石を固定する役割を持っていたのに対し、明治末では、コンクリート土台を保持するための用途に変化している点である。但し、確固たる土台として機能させるために、関東ローム層に達するまで掘り下げる工法は同様である。これは、煉瓦建築にも共通する工法で、地中杭による基礎工法が行われるようになるまで続けられた可能性もある。

一方、大正5年に構築された渡り廊下基礎は、土間の四周をしっかりと維持、保護するための縁石基礎に破碎礫縦置き充填工法が用いられている。同様の工法で施工された近代前田邸表門前アプローチ基礎も路面の強化を目的としている。この路盤基礎工事は、煉瓦工法使用以降に行われていること、使用された破碎礫に加工位置を示す朱線が引かれたものがあり、建築廃材をリサイクルしたと考えられることから、施工年代は、明治40年に竣工した前田侯爵邸洋館建築時と考えられ、破碎礫縦置き充填工法が、明治末から大正初頭にかけて、土間、路面などの基盤強化工法として用いられていたことが考えられる。

(2009.8.19)

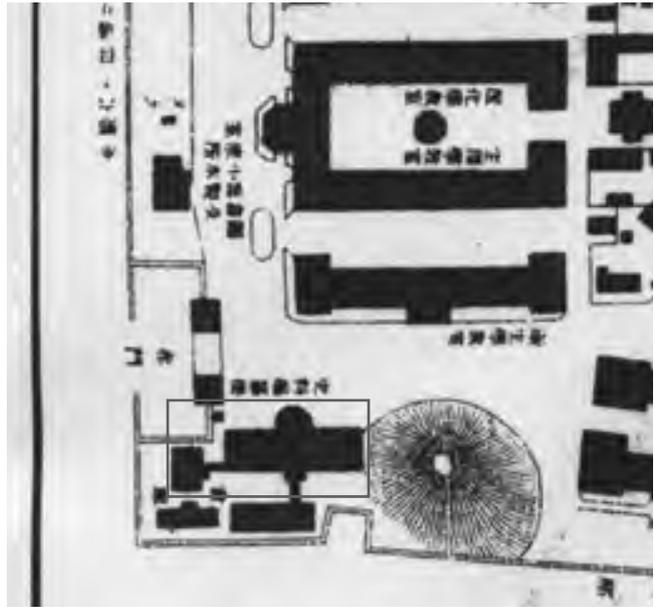
【引用・参考文献】

東京大学総合研究資料館 1988『東京大学本郷キャンパスの百年』

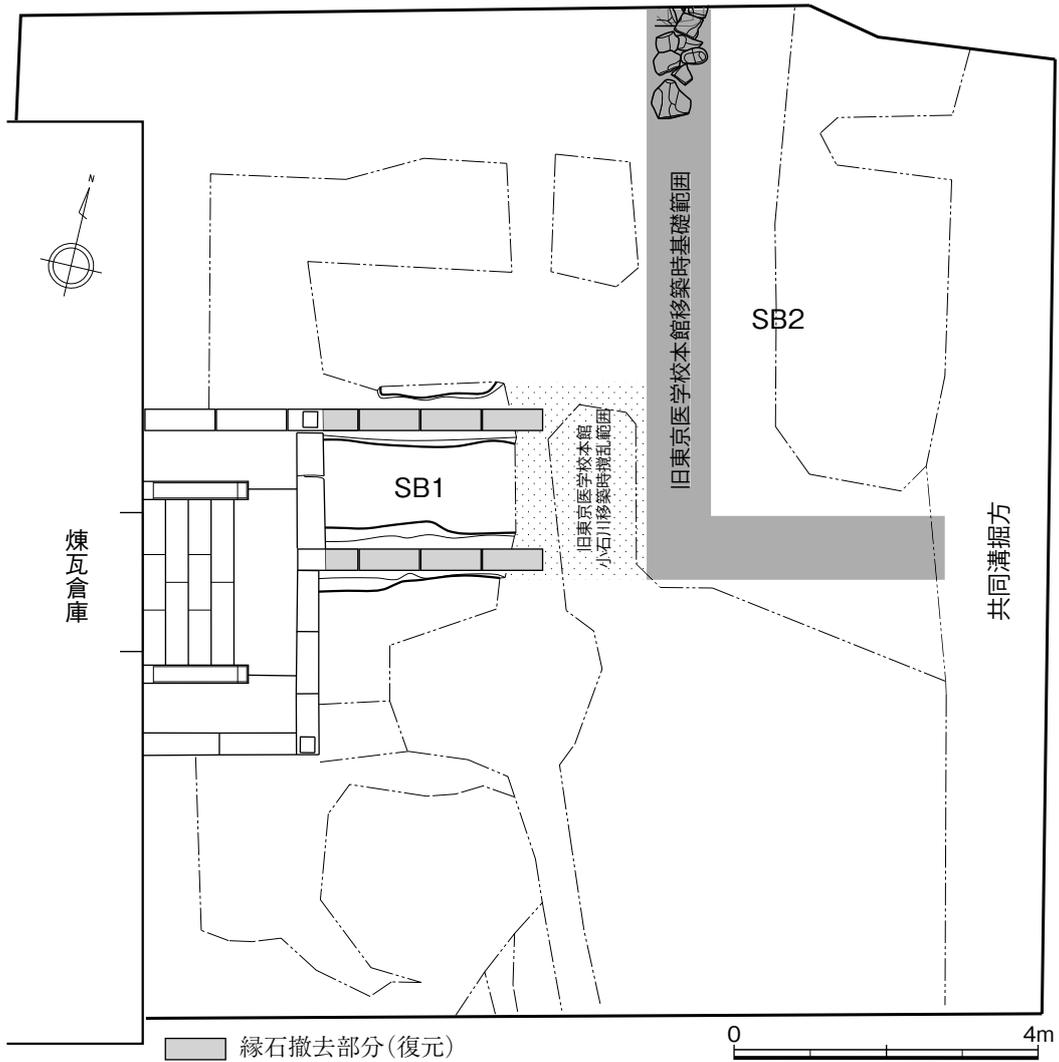
東京大学埋蔵文化財調査室 2005『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書5 東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院外来診療棟地点』



1 図 東京帝國大学平面図(大正5～6年)

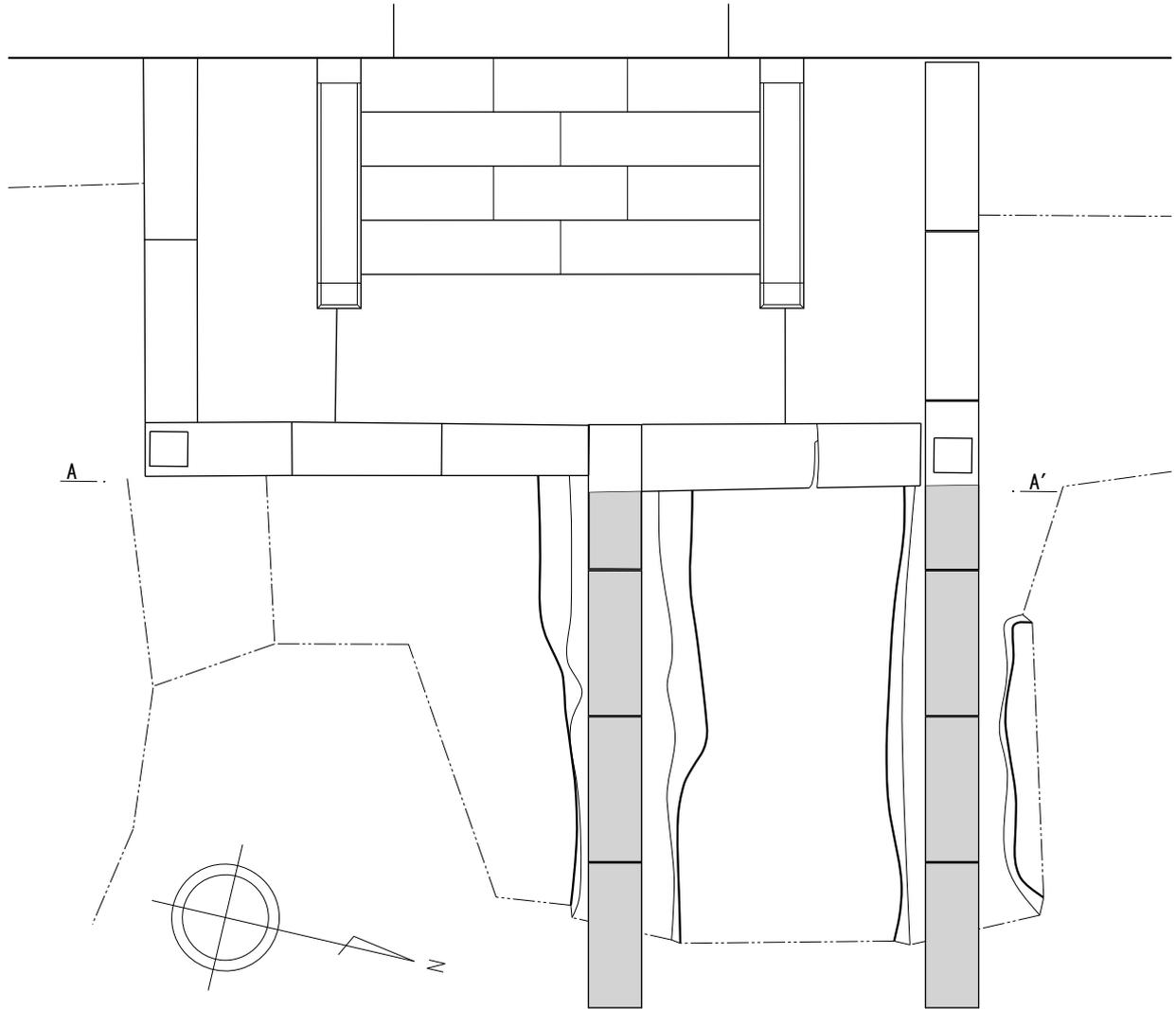


2 図 左図の調査区周辺部分図
(枠内、左が煉瓦倉庫、右が旧東京医学校本館)

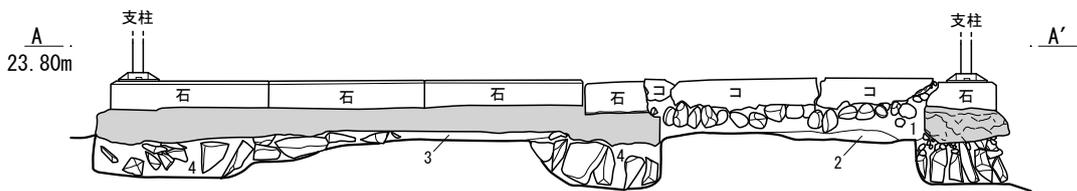


3 図 調査区全景(平成21年8月11日現在)

4. 伊藤国際学術研究センター地点 (H7I09)



 縁石撤去部分(復元)



- 「コ」 コンクリート
-  砂利入コンクリート
- 第1層 砂利層 (上部: 直径10mm大の玉石、下部: 直径2~3mm大の玉砂利)
- 第2層 褐色土 (ローム粒少量、煉瓦片含、粘性やや弱、砂質土)
- 第3層 砂利層 (直径3mm大の砂利主体)
- 第4層 破碎礫層

0  2m

4 図 SB1 (煉瓦倉庫渡り廊下) 平面図・断面構造図



5図 工事前の状況(3月)



6図 調査開始前の状況
(写真左は渡り廊下を含む除去された縁石)



7図 渡り廊下基礎栗石検出状況



8図 渡り廊下及び旧東京医学校本館
移築時の基礎掘方



9図 土間及び渡り廊下基礎断面
(カッター部分)



10図 旧東京医学校本館移築時の基礎構造

4. 伊藤国際学術研究センター地点 (H7I09)



11 図 前田侯爵邸表門前アプローチ路盤基礎遺構
(経済学研究科学術交流棟地点)



12 図 旧東京医学校本館基礎遺構 (写真手前の石組遺構は江戸時代の遺構)
(医学部附属病院外来診療棟地点)

5. 本郷87 東京都下水道工事地点 (HTG08)

所在地 東京都文京区本郷7-3-1 (文京区 No.47 本郷台遺跡群内)

調査期間 2009年11月27日～12月8日

調査面積 38.5㎡

調査担当 原 祐一

1. 調査の経緯と経過

本調査は2008年度から行われている、東京都下水道局北部第1下水道事務所の事業工事に伴うものである。今回の調査地点は工学系総合研究棟新営工事立坑地点 (KOS05) の北西に位置する。KOS05の成果から、本調査地点も「御歩町 (おかちまち)」長屋 (1840～45年頃) の一角に位置することが確認されている。西側に近接する理学部1号館前地点では遺跡が良好な遺存状態で確認されていること、当地点周辺は大規模な工事が行われていないことから、遺跡が残っている可能性が高いと思われ、協議の結果、事前調査を行うことになった (11図)。



1図 調査地点位置図

2. 調査の結果

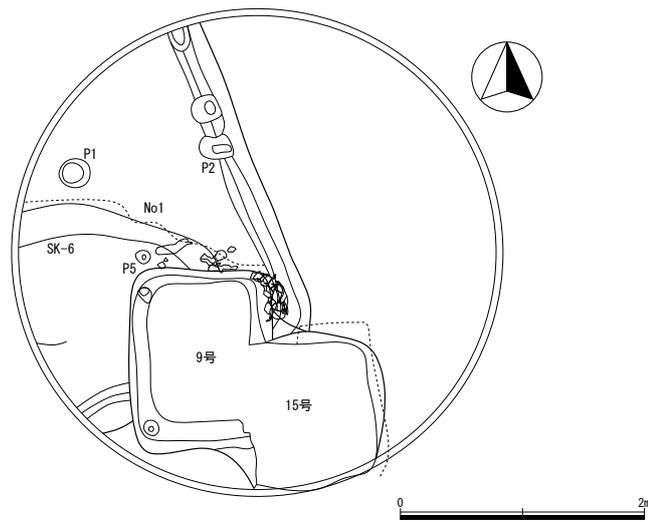
遺構総数は17基である (2・3図)。古墳時代と考えられる方形の竪穴式住居跡1基を検出。住居跡の角から壺が出土した。床面から炭化材、住居内の柱穴から柱と考えられる炭化材が出土したことから火事を受けた住居と考えられる (4図)。江戸時代の遺構は地下室、土坑、小穴である。

調査地点周辺では理学部7号館、理学部1号館前地点、KOS05が調査されている。

5. 東京都下水道工事地点 (HTG08)

調査の規模は小さいが、住居跡を確認することができた。この遺構は火事を受けたと考えられることから構内で確認された集落の年代指標となることから C14 年代測定を行いたい。

江戸時代は土地利用状況を示す地下室を検出した。加賀藩邸では絵図が残されており「御歩町（おからまち）」長屋の土地利用状況が明らかになると考える。



2 図 遺構全体図



3 図 完掘状況



4 図 遺物および炭化物検出状況

6. 本郷97-1 基幹整備（流域⑧排水）A区地点（HKS09）

所在地 東京都文京区本郷7-3-1（文京区No.47本郷台遺跡群内）

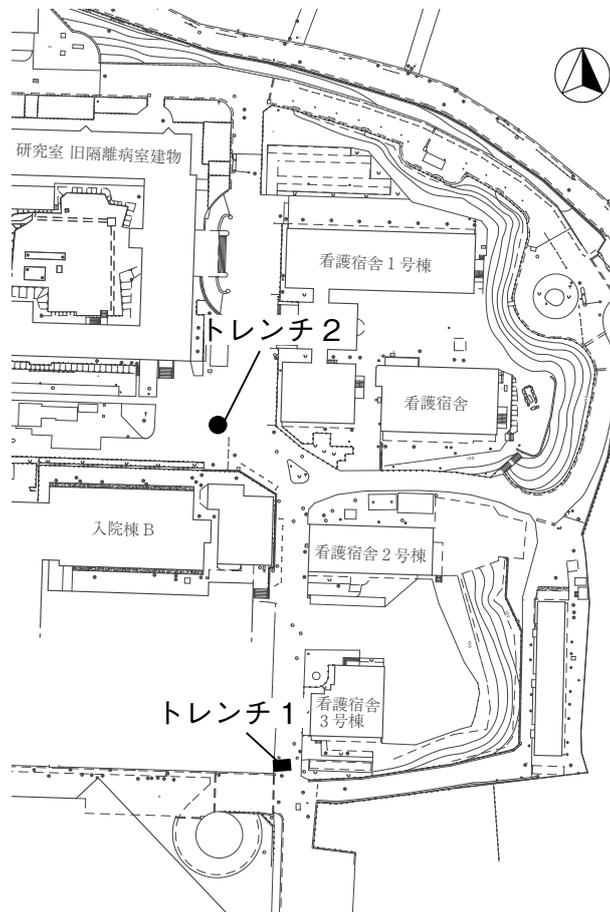
調査期間 2009年11月29日～12月6日

調査面積 29.6㎡

調査担当 原 祐一

1. 調査の経緯と経過

東京大学は本郷構内で基幹整備（流域⑧排水）工事を計画、2009年度埋蔵文化財調査室に埋蔵文化財の存在確認に関する問い合わせがあった。立会調査の結果、1区、2区で遺跡の存在を確認したことから、事前調査を行った（1図）。



1図 調査地点位置図

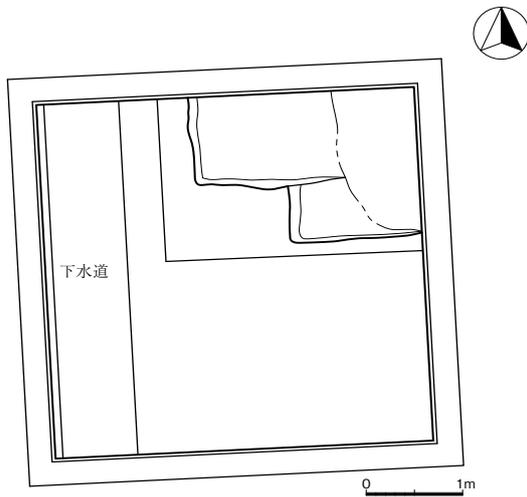
2. 調査の結果

トレンチ1（2図）

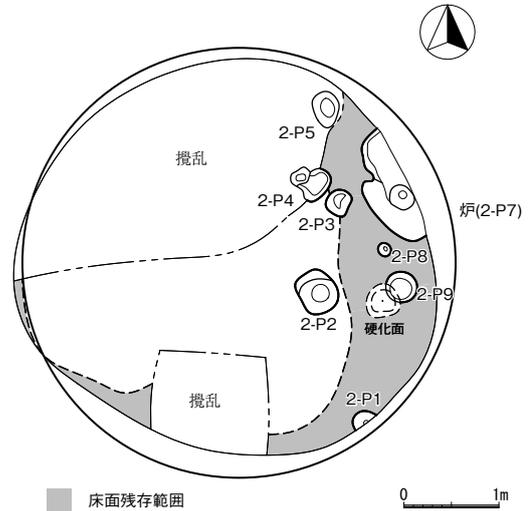
現代の盛土を除去後、明治時代以降の遺物が含まれる盛土を確認した。盛土を除去すると江戸時代の地下室2基を確認した。

トレンチ2（3図）

現代の盛土を除去後、古墳時代の住居跡を確認した。住居跡西側から炉を検出した。埋土から土器が出土した。



2図 トレンチ1平面図



3図 トレンチ2平面図

第2節 本郷構内の試掘調査

1. 本郷 90 薬学部研究実験棟地点

所在地 東京都文京区本郷7-3-1(文京区 No.47 本郷台遺跡群内)

調査期間 2009年4月16日

調査面積 10㎡

調査担当 大成 可乃

調査の経緯と概要

平成20年8月、企業(エーザイ(株))から客員教授等が利用する研究室を大学院薬学系研究科キャンパス敷地に建設(寄付)する申し出があり、平成21年1月には企業側から東京大学への建物寄贈の意向が確認された。建設予定地は薬学系研究科キャンパス敷地のほぼ中心部に位置し、周知の遺跡(文京区 No.47 本郷台遺跡群)内に該当する。隣接する薬学部南館、図書館、総合研究棟においては発掘調査が実施され、遺構・遺物の存在が確認されている場所であり、当該地においても遺構・遺物の存在が予想された。そのため薬学部から照会を受けた埋蔵文化財調査室では、上記の日程で埋蔵文化財の遺存状況を確認するための試掘調査を実施した。

調査地点は薬学部本館、南館、図書館、総合研究棟に囲まれた場所であり、建設予定面積は約100㎡である。トレンチは調査区南西隅と東端にそれぞれ1箇所ずつ、南西隅のトレンチ(以下、トレンチ1)は東西3m、南北1m、東端のトレンチ(以下、トレンチ2)は東西1m、南北7mで設定し、調査を実施した。以下、トレンチ毎に結果をのべる。

トレンチ1 地表面から-1.6~2mほどは近現代の表土・攪乱層であり、-2.8mほどで立川ロームⅢ層(地山)が確認された。この間に江戸時代と考えられる生活面や客土は認められなかった。表土・攪乱層と地山までの間に茶褐色~黒色土が堆積しているのが確認されたが、遺物、遺構は確認されなかった。ただし地山面でその黒色土を覆土とするピットが検出された。

トレンチ2 トレンチ1とほぼ同様の土層堆積状態が確認された。地表面から-1.6~2.3mほどは近現代の表土・攪乱層であり、遺存状態が良いところでは-1.6mほどで立川ロームⅢ層(地山)が確認された。ただしトレンチ南端では地表面-2.5mまで重機による掘削を行っても地山を確認することはできなかった。また1と同様に江戸時代と考えられる生活面や客土は認められなかったが、表土・攪乱層の下で溝1基、土坑(?)1基が、地山面でピットが2基検出された。

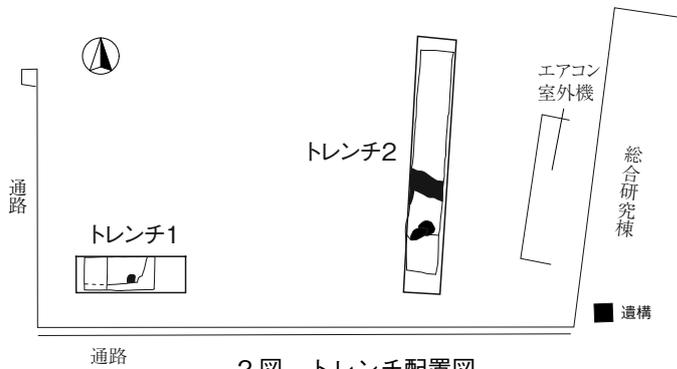
調査結果

トレンチを2箇所設定したが、周囲の調査地点と同様に既存建物基礎により地表面-2.0m前後までは表土・攪乱層が堆積し、遺構、遺物の遺存状態はあまり良くない。しかしトレンチ1で確認された黒色土と地山との間には凹凸がみられ、茶褐色~黒色土の中にロームブロックが含まれることなどから、これらの土は人為的な土層である可能性が高い。また遺物こそ出土していないが、各トレンチ内で溝やピットなどが検出されており、少なくとも表土・攪乱層の下と、地山面の計2面での調査が必要である。特にトレンチ2で検出された溝は、その位置関係などから当該地東側に隣接する総合研究棟地点([本郷66]略称 YGS04)で検出されたSD17から続く溝と推測される。今回の試掘調査で

は確認されなかったが、YGS04 ではこの溝に伴うピット列や道路状遺構なども確認されている。また YGS04 では縄文時代の陥穴、南側に隣接する資料館地点（現・図書館、〔本郷28〕略称 FPS）では縄文土器や旧石器などの江戸時代以前の遺構、遺物が検出されており、当概地でも同時代の遺構、遺物が検出される可能性がある。なお本工事の工事方法が変更されたことにより、建物基礎が遺構確認面にまで達しない状況となった事から本調査は実施されなかった。



1 図 調査地点位置図



2 図 トレンチ配置図



3 図 トレンチ1 北壁土層断面



4 図 トレンチ2 西壁土層断面

2. 本郷91 医学部附属病院立体駐車場地点 (HHP09)

所在地 東京都文京区本郷7-3-1 (文京区 No.47 本郷台遺跡群内)

調査期間 2009年9月16日～9月17日

調査面積 40㎡

調査担当 追川吉生

調査の経緯と概要

東京大学埋蔵文化財調査室は、医学部附属病院立体駐車場新営工事に伴う発掘調査のために建設予定地において試掘調査を実施した。

試掘調査は調査範囲内に設定した3箇所の試掘坑（トレンチ1～3）を対象とした。試掘坑は幅2mを基本とし、長さは埋設管や埋設基礎の状況に応じた（1図）。

トレンチ1

南北14m、東西2m。既存建物とそれに伴う工事によって削平をうけているものの、現地表面から30cmの深さで江戸時代の遺構（地下室3基・土坑3基・柱穴状土坑4基）を検出した。遺構検出面は立川ローム層Ⅲ層である（2図）。

トレンチ2

工区北側フェンスから法面下まで1の範囲に設定した。南北6m、東西2m（3図）。ここでは①法面上の調査成果と、②法面下の調査成果とにわけて報告する。

①歩道から140cm下で江戸時代の盛土層を確認した。従ってこれより下位には江戸時代の遺跡が良好に遺存していると考えられる。トレンチ内に遺構の検出はみられなかった。

②現地表面から深さ80cmまでは部分的に埋設管による攪乱を受けているが、それ以外の地層の堆積状態は良好である。トレンチ2の南端でコンクリート製基礎の厚さを確認した結果、現地表面から120cm以下の関東ローム層は破壊を免れていることが判明した。

以上、①と②の成果から、トレンチ内では遺構は未検出ながら、トレンチ1同様に江戸時代の遺構の検出が予想される。またローム層の破壊が限定的だったことから、旧石器時代から平安時代の遺跡の存在も予想される。

トレンチ3

トレンチ1北側で確認した基礎の埋設状況を確認するために設定した。掘削の結果、現地表面から深さ230cmまでフーチング基礎によって大きく破壊されていることが明らかになった。

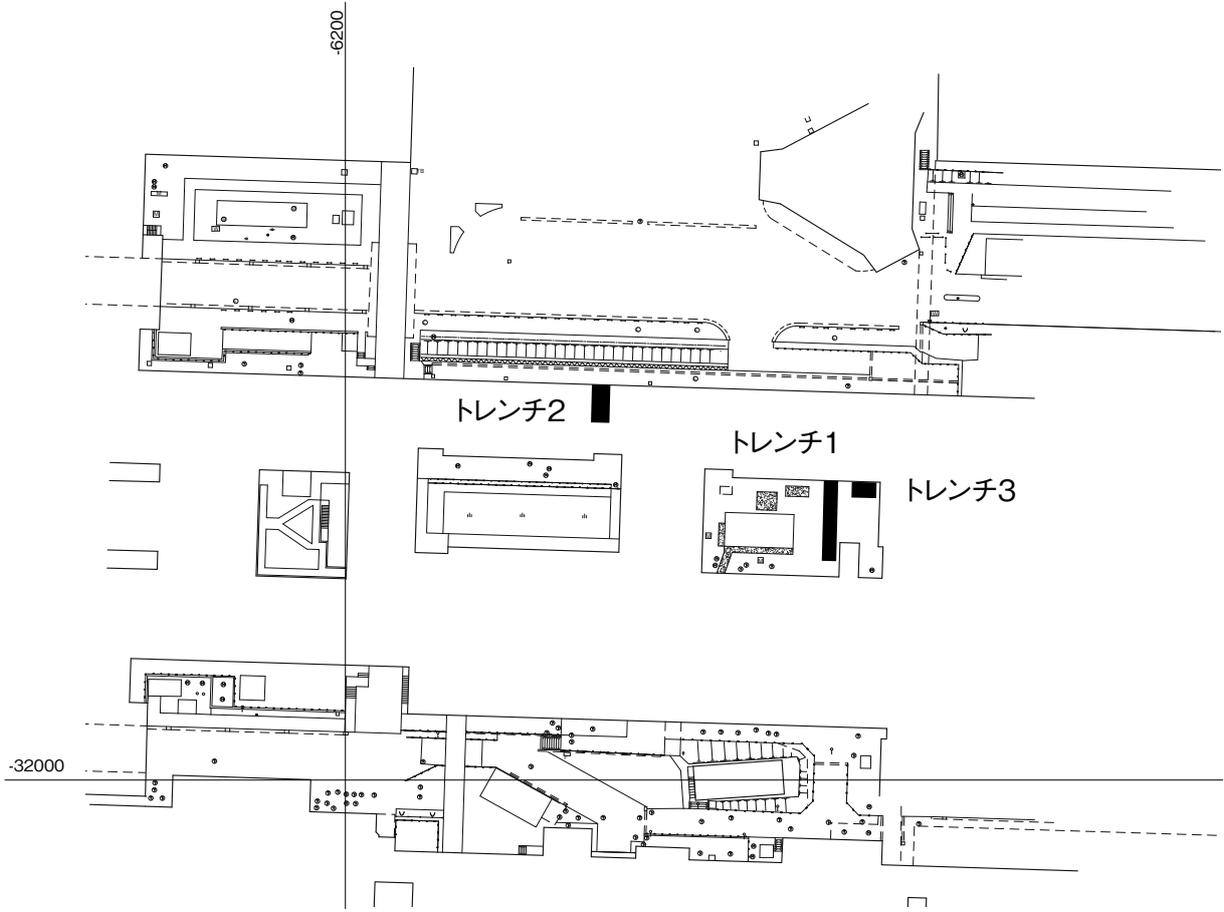
調査結果

トレンチ1～3の調査によって、次のことが考えられる。

- (1) 調査区全体（法面部を除く）で立川ロームⅢ層以上の地層は削平されている。
- (2) 立川ロームⅢ層面上においても、江戸時代の遺構が検出される。
- (3) 基礎とフーチングのある部分は、当該工事の掘削範囲（現地表面から250cm）は破壊されている。
- (4) コンクリート製基礎の厚さは120cmのため、その直下ではローム層中より遺跡が検出される可能性が高い。

従って立体駐車場を建設するに際しては、事前調査が必要と思われる。また本地点に隣接する中央診療棟、第2中央診療棟、看護師宿舎の発掘調査では、旧石器時代から平安時代の遺構・遺物も確認されているので、本地点の事前調査でも該期の調査を実施する必要がある。

本郷構内の試掘調査



1図 トレンチ配置図



2図 トレンチ1



3図 トレンチ2

3. 本郷94 分生研・農学部総合研究棟 (HNS09)

所在地 東京都文京区弥生1-1-1 (文京区 No.47 本郷台遺跡群内)

調査期間 2009年9月1日～9月2日

調査面積 32㎡

調査担当 原 祐一

調査の経緯と概要

東京大学は、東京大学弥生地区分生研・農学部総合研究棟の新営を計画、埋蔵文化財調査室に対して建築予定地の遺跡存否について問い合わせがあった。隣接する農学部総合研究棟地点では水戸藩駒込邸関連遺構を検出しており、建設予定地でも遺跡の存在が予想されることから協議の結果、試掘調査を行うことになった。

調査結果

試掘調査は、16×2m (32㎡) のトレンチを設定、掘削深度1.2mで遺構を検出した (1、2 図)。

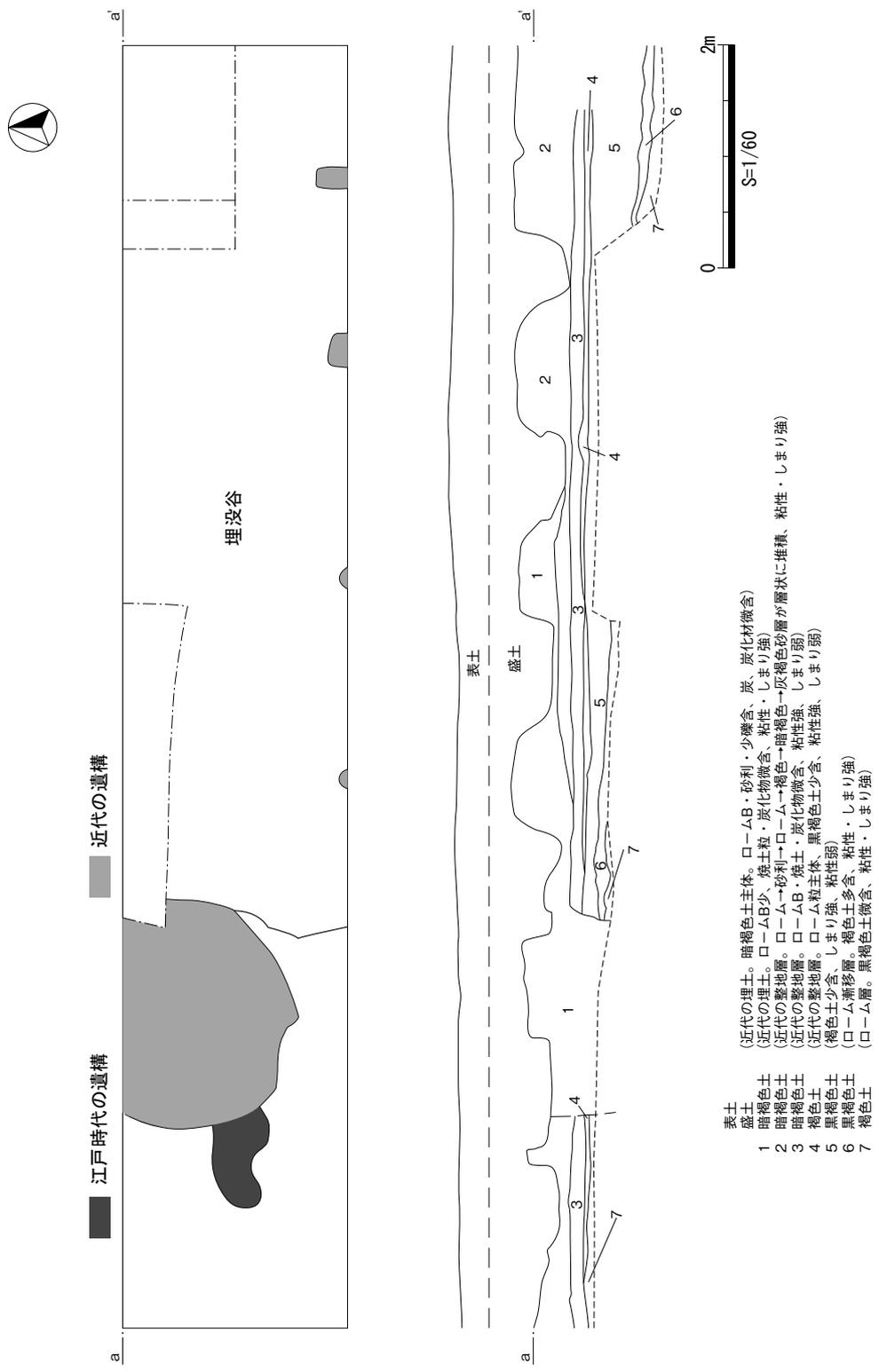
検出遺構：埋没谷、江戸時代 土坑1基、明治時代以降 柱穴4基、土坑1基

出土遺物：陶磁器、縄文土器

江戸時代と明治時代の遺構の検出状況は農学部総合研究棟地点と同じで、駒込邸を南北に縦断する道が建設予定地にかかっていることからこの道の存在が予想された。埋没谷は、浅野地区武田先端知ビルまで伸び、方形周溝墓が3基検出されていること、埋没谷に広く分布することから建築予定地でも方形周溝墓の存在が予想された。また、過去の建築図から建設予定地では、研究棟建設等に伴う大規模な掘削が行われていないことから建設予定地には遺跡が良好に遺存している可能性が高く協議の結果、事前調査を行うことになった。



1 図 トレンチ配置図



2 図 トレンチ1 平・断面図

4. 本郷96 工学部新3号館建替時待避用仮設建物地点

所在地 東京都文京区弥生2-11-16 (文京区No.47本郷台遺跡群内)

調査期間 2009年12月14日～17日

調査面積 64㎡

調査担当 原 祐一

調査の経緯と概要

東京大学は、工学部新3号館建替時待避用仮設物を浅野地区官舎跡地に建設を計画、埋蔵文化財調査室に対して建設予定地の遺跡存否について問い合わせがあった。建設予定地では水戸藩駒込邸(中屋敷)関連遺構の存在が予想された。また、国指定遺跡の弥生二丁目遺跡の崖下に建設予定地が位置することから、弥生土器の出土も予想された。トレンチ設定は、駒込邸の絵図である『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』に描かれた「道」「門」「築山」「建物」等の施設の存在が予想される場所に設定した(1図)。

以下各トレンチごとに概要を記す

トレンチ1 (7×2m (14㎡)・遺跡確認標高:GL-0.5m・掘削深度:1.65m)

トレンチ東側の7～11層は道の舗装でしまりは硬質である。浅野地区の地境と同じ方向に伸びている。7層の検出標高は約7.4mである。道を切る平面形が方形の遺構(5層)、西側でローム土を主体とした築山と考えられる盛土(4・6層)を確認した。

トレンチ2 (5×2m (1m×2mに変更2㎡)・遺跡確認標高:GL-0.45m・掘削深度:1.3m)

盛土(3・4層)、ローム層(5層)を確認した。ローム層には直径4cmの竹が打ち込まれていた。竹は4層と5層の間で切断されており、5層の削平に伴い切断されたと考えられる。湧水のため掘削を中止した。

トレンチ3 (5×2m (10㎡)・遺跡確認標高:GL-0.45m・掘削深度:0.75m)

硬化面(4層)、礎石を検出した。湧水のため掘削を中止した。

トレンチ4 (9×2m (18㎡)・遺跡確認標高:GL-0.5m・掘削深度:1m)

4層は自然堆積層で湧水により粘土化していた。3層は盛土でトレンチ調査部分は自然堆積層(ローム層)が削平されたと考えられる。湧水のため掘削を中止した。

トレンチ5 (5×2m (10㎡)・遺跡確認標高:GL-0.3m・掘削深度:0.9m)

7層はローム層で湧水により粘土化(水つきのローム層)していた。7層上層は盛土でトレンチ調査部分では自然堆積層(ローム層)が削平されたと考えられる。湧水のため掘削を中止した。

トレンチ6 (5×2m (10㎡)・遺跡確認標高:GL-0.5m・掘削深度:1.4m)

7～11層は道の舗装でしまりは硬質である。7・8・11層は砂を含む。9層の平面的な広がり浅野地区の地境の方向とは異なり南西方向へ伸びている。7層は標高約7.1mで検出した。ローム層(13層)を標高約6.7mで確認した。

調査結果

建設予定建物基礎の掘削深度は0.5m、建設工事は基礎部分のみで行われることから遺跡の破壊は少ないと判断し、事前調査の必要はないと判断した。今後、工学部新3号館立て替え時待避用仮設建物が撤去され、この地点で建設工事が計画された際、事前調査を行うためのデータを得ることができた。

調査の結果、トレンチ1・2・3・6で水戸藩駒込邸の遺構を確認した。トレンチ4・5では台地上で確認されるローム層は確認されず、粘土化したローム層を確認したことから上層が削平されたと考えられる。トレンチ1・2で検出した自然堆積層と考えられる土は由来を検討するためサンプリングを行った。

『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』（以下、絵図）によれば、建設予定地は水戸藩駒込邸東側、地境辺りに位置する。藩邸東側の「清水御門」から邸内に入るとT字路があり、右に曲がると藩邸北側の長屋・役所の区域に至る。左に曲がると藩邸南側の殿舎（表御殿・裏御殿）の区域に至る。トレンチ1部分には門がある。門の東側には台地上の道があり、この道と門の間に緑色に彩色された帯がある。トレンチ1で門に関連する遺構、回遊式庭園に至る道を検出した。道の東側では盛土を確認した。門との位置関係から、盛土は上部が削平されているものの絵図の緑色に彩色された部分で、これまでの研究と調査結果から築山の痕跡と判断した。道の検出標高は現在の地表面より低い。『明治16年陸軍参謀本部測量原図』（建設省国土地理院所蔵・（財）日本地図センター複製1984「明治16年第一測期第二測図 参謀本部陸軍部測量五千分之一ノ尺東京府武蔵国本郷區本郷本富士町近傍」『参謀本部陸軍部測量局五千分一東京図測量原図』）の標高は現在の道の標高に近いことから、道の上の盛土は明治16（1883）年までに行われたと考えられる。トレンチ6で検出した道は、回遊式庭園へ至る道とは方向が異なることと位置関係から、台地上の殿舎（表御殿・裏御殿）へ至る道と考えられる。トレンチ2・3は、江戸時代の遺構を検出したことから、絵図の台地突端が削平され建物が建てられた部分と考えられる。トレンチ5・6の削平は絵図と現在の地形が異なることから江戸時代以降と考えられる。『明治16年陸軍参謀本部測量元図』では、回遊式庭園へ至る道の範囲が広げられ梅毒検査所が建設されていることから、この段階で台地の突端が削平されたと考えられる。浅野家の昭和11（1936）年の図面によれば、調査地点東側、台地のラインは緩やかに屈曲しているが、現在は直線に変更されている。この変更は、東京大学の建設図面によれば昭和22（1947）年までに行われている。

今回の調査は短期間であったが、建設予定地は住宅地に隣接しているため工事場に遺跡調査の成果をまとめ掲示した。掲示資料は向ヶ岡弥生町会に配布した。



1 図 トレンチ配置図

第3節 本郷構内の立会調査

1. 本郷 88-2 耐震対策事業ガス管改修地点

所在地 東京都文京区本郷7-3-1 (文京区 No.47 本郷台遺跡群内)

調査期間 2009年5月11～13・15・23・31日、6月18日、8月27日

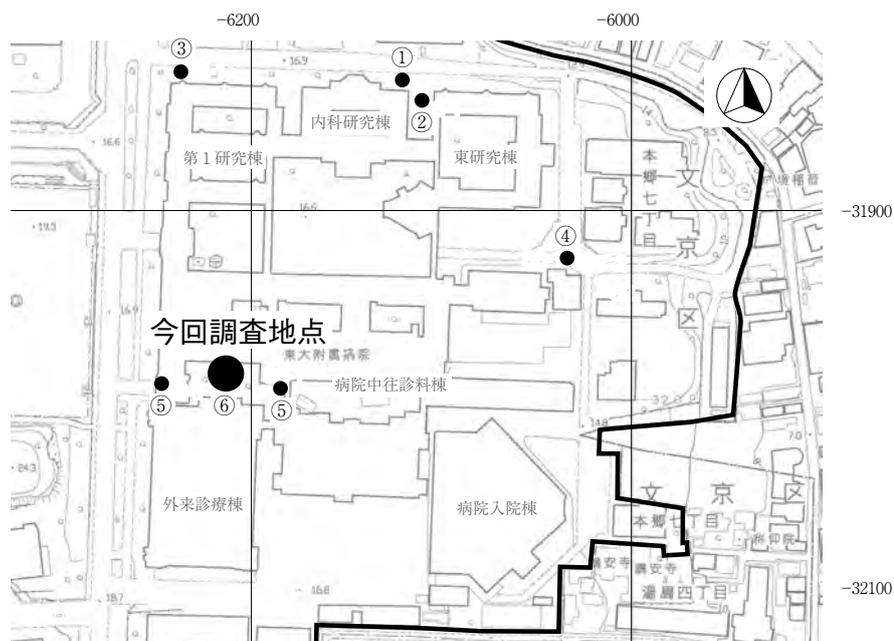
調査担当 原 祐一

調査結果

東京大学は2008年から耐震対策事業に伴いガス管埋設工事を進めている。①～⑤地点は2008年度立会調査を行ったため、今回は⑥地点を中心に立会を行い、他の地点については、掘削開始時に立会を行った(1図)。

⑥地点は、江戸時代の加賀藩邸に位置する。明治時代以降は、内科病室が明治37(1904)年から昭和5(1930)年まで置かれていた。立会の結果、加賀藩邸の盛土と硬化面、焼土層、埋没谷、明治時代に建設された内科病室のレンガ基礎を検出した。

⑥地点の北側バス通りの標高は16.9m、「明治16年陸軍参謀本部測量原図」の⑥地点周辺に描かれる等高線の標高は16m、焼土層と硬化面の標高は現地表面から約-0.7mで明治時代の標高とほぼ同じで、内科病室基礎の検出レベルと江戸時代の生活面のレベルがほぼ同じであることから江戸時代の生活面を生かして内科病室が建設されたと考えられる。東側では関東ローム層、西側ではほぼ同レベルで自然堆積層と考えられる黒色土を確認したことから、⑥地点に埋没谷があることが確認された。しかし、調査面積が狭いことから谷の方向を確認することはできなかった。



● 2008年度調査位置

1図 調査地点位置図

2. 本郷 95 農学生命科学研究科フードサイエンス棟地点

所在地 東京都文京区弥生1-1-1 (文京区 No.47 本郷台遺跡群内)

調査期間 2009年10月22日、11月2日

調査担当 原 祐一

調査結果

東京大学は、弥生地区に東京大学農学生命科学研究科フードサイエンス棟新営を計画した。建設予定地と農学部7号館の敷地はすでに段切りされており、遺跡が破壊されている可能性が高いため試掘調査を行わず、工事中に立会を行うことになった。

立会は、2009年10月22日、11月2日、文京区教育委員会池田悦夫氏、鈴木啓介氏、株式会社大林組、本部プロジェクトグループ建築チーム、本部施設企画グループ事業企画・地域連携チーム立会のもと行った。

立会調査の結果、遺跡は確認できなかった。調査地点は元々傾斜地であったが、建設予定地と農学部7号館の敷地は段切りされ全域が平坦に整えられていた。関東ローム層は西側で道路面より4m、東側で現在の道路面とほぼ同じレベルで確認された。調査地点は圍場などで確認された明治時代の削平と、研究棟建設工事によって掘削深度が低い建物跡だけでなく、地下室などの掘削深度が深い遺構も破壊されたと考えられる。



1 図 調査地点位置図

第4節 駒場Ⅰ構内の試掘調査

1. 駒場Ⅰ 22 理想の教育棟地点

所在地 東京都目黒区駒場3-8-1(目黒区No.1 東京大学駒場構内遺跡内)

調査期間 2011年2月1日

調査面積 約220㎡

調査担当 堀内 秀樹

調査の経緯と概要

東京大学は、目黒区駒場3丁目に所在する駒場Ⅰキャンパスに理想の教育棟の建築を予定している(1図)。建設予定地点は、目黒区遺跡番号1「東京大学駒場構内遺跡」として登録されており、工事を行うにあたって埋蔵文化財の遺存状況を確認する必要がある。試掘調査は、埋蔵文化財調査室により2010年2月1日～5日にかけて合計約220㎡について行った。調査は、同室員堀内秀樹が担当した。

試掘調査は、2図のように予定建物の位置を勘案し、9本の試掘トレンチを設定し、埋蔵文化財の有無、遺存状況を確認した。各試掘トレンチは、トレンチ1が30×2m、その他は2×2mに設定した。トレンチ8のみは近代以降の攪乱による削平が少なく、ほぼ全域に武蔵野標準層位Ⅲ層上面が確認されたため、南東側に拡張して遺構確認を行った。

各トレンチは、おおむね30～50cm程度でⅢ層上面が確認され、当該面で縄文時代以降の遺構の確認調査を行った。このうちトレンチ8の南東側、ローム漸移層付近に落ち込みが確認された。落ち込みはドーナツ状を呈し、その周囲には新旧が判然としない不整形の落ち込みが複数確認された(3図)。このため、これらの落ち込みを半截し、土層の堆積状況を確認したが、いずれも壁や坑底が不明瞭で、人為的な掘り込みではないと判断された。これらのことからドーナツ状の落ち込みは倒木痕、周囲の落ち込みは倒木の際に根によってできた落ち込みであろうと判断された。

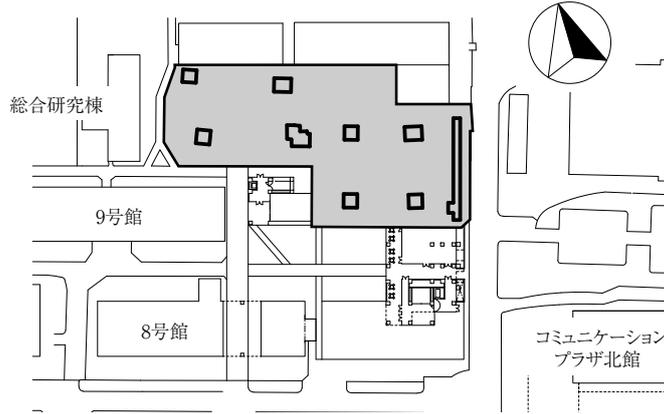
遺構確認の後、比較的ロームが良好に遺存していたトレンチ1、5、9において旧石器時代の調査を行った。調査は、トレンチ1が武蔵野標準層位Ⅹ層上面、その他のトレンチはⅤ層まで行った。

調査の結果

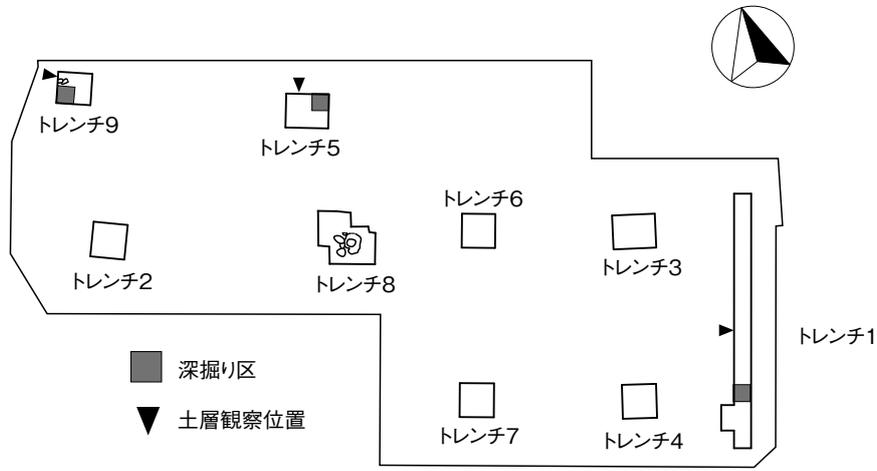
試掘調査の結果、トレンチ1～9の多くは近代以降に大きく攪乱されていることが確認された。いずれのトレンチからも縄文時代から大学以前までの人工的な遺構、遺物は確認できなかった。また、旧石器時代の遺物も調査を行ったトレンチからは確認できなかった。

当該地域の旧地形は、トレンチ9とトレンチ1のⅢ層上面のレベル差が120cm程度あり、傾斜を有することが認められたが、極端に変わる場所は確認できなかった。全体的に西から東に緩やかに傾斜を有することが推定できた。

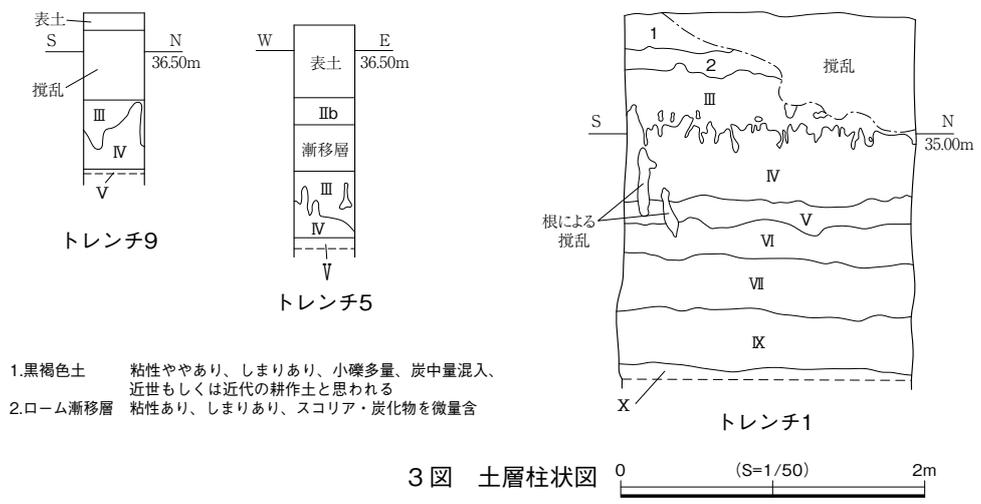
駒場 I 構内の試掘調査



1 図 調査地点位置図



2 図 トレンチ配置図



3 図 土層柱状図

第5節 駒場I構内の立会調査

1. 駒場I 21 基幹整備（排水）地点

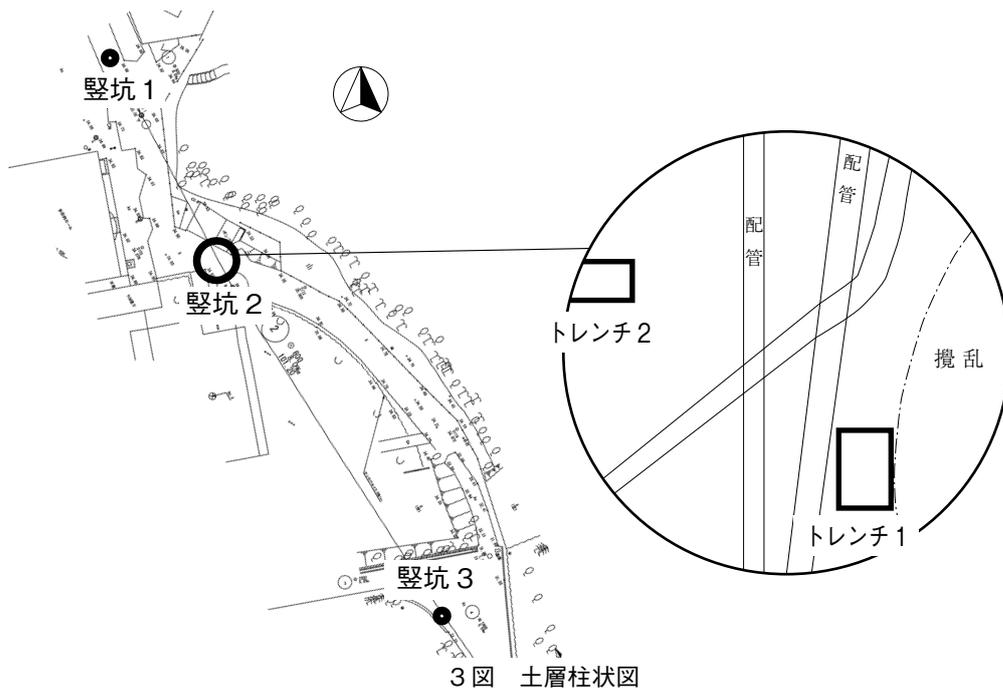
所在地 東京都目黒区駒場3-8-1（目黒区No.1 東京大学駒場構内遺跡内）

調査期間 2010年1月14日、21日、28日

調査担当 堀内 秀樹

調査結果

東京大学は、目黒区駒場3丁目に所在するキャンパス基幹整備の一環として排水管理設工事を進めている。建設予定地点は、目黒区遺跡番号1「東京大学駒場構内遺跡」として登録されており、工事を行うにあたって埋蔵文化財の遺存状況を確認する必要がある。確認調査は配水管埋設のための縦坑、柵掘削予定地について行った。縦坑1、3は排水柵設置のために掘削径160cmの円形に埋設されたライナープレート内法範囲径120cmについて、確認を行ったが対象範囲が狭隘でかつ深度があったため、立会調査にせざるを得なかった。縦坑1、3とも掘削深度現表下4m付近で近代以降の攪乱によって埋蔵文化財は確認できなかった。縦坑2は、推進工法による掘削機械搬入のための掘削径600cmについて確認を行った。近代以降の盛土が現表下約120cmまで堆積しており、それ以下に関東ローム層（Ⅲ層）が確認された。ローム上面にて遺構確認を行ったが、3本の配管埋設溝および東側には落ち込みが確認されたが、廃棄はいずれも近代以降に年代比定されるものであった。旧石器時代の確認は、トレンチ2箇所を設定して行い、武蔵野標準層序V～VI層までの調査を行った（1図）。確認調査の結果、縦坑1～3のいずれも近代以降に大きく攪乱されており、近代以前の遺構、遺物は確認できなかった。また、旧石器時代の遺物も確認できなかった。



第Ⅱ章 調査資料の整理・研究および公開・活用

本年度も引き続き、調査報告書刊行に向けての基礎整理作業を実施した。また保管遺物量の増加に対応するために駒場リサーチキャンパス内（39号館西隣）にプレパブ倉庫（床面積64㎡、平屋建て）1棟を建設した。

第1節 調査資料の整理

1. 刊行物

2009年度は『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9 東京大学構内の遺跡 浅野地区Ⅰ 情報基盤センター変電室1地点・工学部風工学実験室地点・工学部風工学実験室支障ケーブル地点・工学部風環境シミュレーション風洞実験室地点・工学部武田先端地ビル地点』を刊行した。

本書は、浅野地区内にて1995～2002年度に実施した5地点の本報告書である。研究編では、武田先端地ビル地点で検出された方形周溝墓の年代分析とはぎ取り保存、出土した弥生土器の保存修復、ガラス玉の材質分析などの原稿を外部委託した。

2. 整理事業概要

情報基盤センター変電室1地点・工学部風工学実験室地点・工学部風工学実験室支障ケーブル地点・工学部風環境シミュレーション風洞実験室地点・工学部武田先端地ビル地点の浅野地区5地点は報告書刊行に向け、遺構及び遺物図版作成、遺物観察表作成、CD-ROM用写真撮影など全ての整理・分析及び文章作成・編集作業を完了し、本年度に報告書を刊行した。

医学部附属病院受変電設備棟地点は、遺物図版作成を完了した。

農学部生命科学総合研究棟地点は、出土遺物デジタルトレース・写真合成が完了し、遺物図版作成を行う。

医科学研究所附属病院診療棟・総合研究棟地点は、出土遺物デジタルトレース、遺物写真撮影を行う。

インテリジェント・モデリング・ラボラトリー地点、教育学部総合研究棟地点、総合研究博物館地点は、出土遺物の実測が完了し、デジタルトレース・写真合成を行う。

法学系総合研究棟地点は、出土遺物の実測を完了した。

経済学研究科棟地点は、出土遺物接合・分類作業を完了し、実測、写真撮影を行う。

農学生命科学研究科附属小石川樹木園根圏観察温室地点は、出土遺物接合・分類作業を完了した。

医学部附属病院第2中央診療棟地点は、出土遺物接合・分類を開始する。

駒場Ⅰ情報教育棟地点は、出土礫に関する基礎整理を完了した。

駒場図書館地点は、遺構図版作成を完了した。

入院棟A地点は、遺構図版作成基礎整理（遺構図デジタルトレース）継続して行う。

また一般労務謝金を運用し、人形・玩具類新分類の再検討、動物遺体の分類・分析を2名の方に依頼し行っている。

3. 外部委託

(1) 基礎整理

遺構図面の基礎整理（デジタルトレース・図版作成）を（有）文化財コムに委託し、インテリジェント・モデリング・ラボラトリー地点、教育学部総合研究棟地点の2地点の基礎整理を完了した。

ジェットマーカーによる機械注記を第一合成（株）に委託し、経済学研究科学術交流棟地点、追分国際学生宿舎地点、医学部附属病院看護師宿舎Ⅲ期地点、懐徳門地点の4地点の注記作業を完了した。

駒場Ⅰ地区・情報教育棟地点の遺構図デジタルトレース・図版作成、出土遺物基礎整理（実測、トレース、拓本）と、駒場コミュニケーションプラザ地点の出土石器実測・トレースを（株）盤古堂に委託し、完了した。

医学部附属病院第2中央診療棟地点の遺構断面図デジタルトレース、土層注記入力（エクセル形式ファイル）を加藤建設（株）に委託し、完了した。

(2) 保存

伊藤国際学術研究センター地点第2次調査で、検出された地下式麴室室部床面線条痕および壁面工具痕のレプリカ製作について、東京国際大学丑野毅氏に委託し、現地にて製作及び技術指導を受けた。

2008年から工学部1号館地点、経済学研究科棟地点、医学部附属病院入院棟A地点から出土した木製品の保存処理を京都市埋蔵文化財研究所に委託し、2009年度に完了した。保存処理および活用の詳細は本節末「本郷キャンパス出土木製品の保存処理と活用について」参照。

第2節 調査成果の公開・活用

1. 広報活動

(1) 遺跡見学会

3月26・27日 分生研・農学部総合研究棟地点

(2) ホームページ

『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9 東京大学構内の遺跡 浅野地区Ⅰ 情報基盤センター変電室1地点・工学部風工学実験室地点・工学部風工学実験室支障ケーブル地点・工学部風環境シミュレーション風洞実験室地点・工学部武田先端地ビル地点』PDF版のアップロードをはじめ、発掘調査速報、遺跡見学会案内などを掲載した。

2. 教育・普及

(1) 非常勤講師

文学部より、堀内秀樹、成瀬晃司が非常勤講師の委嘱を受け、野外考古学（1）（夏学期、木曜日4・5限）を担当した。

(2) 学内外授業

東京都立向丘高等学校日本史選択2年生「東京大学と周辺の史跡・遺跡見学」授業

(3) 見学会の実施

見学会の詳細は本節末「東京大学弥生地区分生研・農学部総合研究棟地点遺跡見学会報告書」参照

3. 資料の提供・貸出（貸出、出版物、マスメディア）

貸出先	目的	貸出・掲載内容	貸出・掲載資料
東京国立博物館	貸出	常設展示 平成館考古展示室 資料展示	御殿下記念館地点 391 号出土「色絵花卉文大皿片」ほか計 65 点
国立歴史民俗博物館	貸出	総合展示「都市の時代」資料展示	御殿下記念館地点 678 号出土「染付大皿海浜文」ほか計 28 点
江戸東京博物館	貸出	常設展「武士の暮らし・町の暮らし」資料展示	医学部附属病院中央診療棟地点 Z35-5 出土「座り猿」理学部 7 号館地点 SK1 出土「焼塩壺」ほか計 107 点
飯能市郷土館	貸出	常設展 資料展示	医科学研究所附属病院診療棟・総合研究棟地点 SX207 出土「秋草文鍋蓋」ほか計 2 点
学校法人香川栄養学園	貸出	特別展示「播る－すり鉢」資料展示	農学部家畜病院地点 SK09 出土「播鉢」ほか陶器計 5 点
吉川弘文館	出版物	江原絢子・石川尚子・東四柳祥子『日本食物史』口絵写真掲載（発行年月 2009.6）	医学部附属病院入院棟 A 地点 D 面焼土出土「皿」計 1 点
新潮社	出版物	とんぼの本『古伊万里 磁器パラダイス』写真掲載（発行年月 2009.9）	医学部附属病院入院棟 A 地点 C2 層出土「青手九谷」「古九谷大皿」片計 19 点
豊田市郷土資料館	出版物	特別展「塩の歴史と民俗」資料展示・図録掲載（会期 2009.10.31-12.6）	御殿下記念館地点 678 号出土「伊万里染付文大皿」「青花皿」医学部附属病院中央診療棟地点池出土「かわらけ」「木簡」ほか計 34 点、理学部 7 号館地点出土 貝・魚骨 1 箱
武蔵野文化財修復研究所	出版物	谷中芸工展 宣伝チラシ、展示パネル写真掲載（会期 2009.10.10-10.25）	武田先端知ビル地点 1 号方形周溝墓出土「弥生式土器」修復記録写真、浅野地区「向岡記」碑保存修復記録写真計 3 点
(株) オンザロード	マスメディア	NHK「美の壺－蕎麦猪口」放映（放映日 2009.12.11）	医学部附属病院入院棟 A 地点 D1 層出土「松樹文猪口」計 1 点
長崎歴史文化博物館 たばこと塩の博物館 岡崎市美術博物館	出版物	企画展「日欄通商 400 周年記念「阿蘭陀と NIPPON 展」資料展示、図録掲載（会期 2009.10.31-2010.8.29）	法学部 4 号館地点 B7-2 出土「火消し壺・蓋」計 4 点
板橋区郷土資料館	貸出 / 出版物	特別展「中山道板橋宿と加賀藩下屋敷」資料展示、図録掲載（会期 2010.2.11-3.22）	医学部附属病院第 2 中央診療棟地点「金箔鯉瓦」、医学部附属病院入院棟 A 地点 D1 層出土「一分金」ほか計 138 点、解説パネル 2 点
土岐市埋蔵文化財センター	出版物	特別展「公と武」写真展示、図録掲載（会期 2009.2.27-5.9）	御殿下記念館地点「調査区全景」、医学部附属病院中央診療棟地点「調査区全景」、「12 組石検出」写真計 3 点
高島 裕之	出版物	江戸遺跡研究会第 23 回大会「都市江戸とやきもの」発表要旨掲載（開催日 2010.1.30-1.31）	医学部附属病院入院棟 A 地点 C2 層出土「雪輪・牡丹文」製品写真計 12 点
文化財保存支援機構	出版物	「文化財保存修復専門家養成実践セミナー」講義録掲載	浅野地区「向岡記」碑、武田先端知ビル地点 1 号方形周溝墓出土「弥生式土器」写真、「発掘調査地点」写真計 3 点
佐賀県立名護屋城博物館	出版物	東中川忠美『古武雄』写真掲載（発行年月 2010.6）	医学部附属病院中央診療棟地点 H32-5 出土「緑褐彩櫛目文鉢」写真計 1 点
茨城県陶芸美術館	貸出 / 出版物	10 周年記念展「THE KASAMA ツと展開」資料展示、図録掲載（会期 2010.4.17-6.20）	医学部附属病院受変電設備棟Ⅱ期地点出土「二彩流掛甕」、「黒釉湯たんぽ」計 2 点

本郷キャンパス出土木製品の保存処理と活用について

追川 吉生

1. 目的

本郷キャンパスでは、大名屋敷跡を中心に、旧石器時代から江戸時代まで、約100地点の発掘調査が実施されている。これらの調査で出土した大量の陶磁器・土器は、キャンパス内の遺跡はもとより、近世都市・江戸の遺物編年の規準ともなっている。一方、江戸の生活には陶磁器や土器ばかりでなく、豊富な木製道具（木製品）が用いられていた。

こうした木製品に関しては、キャンパスの大部分が台地上に位置する立地環境から、地中で分解が進んでいるためほとんど出土しない。ただし調査地点の土壌、とりわけ遺構覆土の状態によっては木製品が出土することがある。調査室では当時の暮らしの様相を具体的に知る手がかりとすべく、出土木製品のいくつかを保存処理を実施した。

これまで下駄や門扉などを対象に保存処理を実施してきた（京都市埋蔵文化財研究所2006）が、2008年度・2009年度は漆器椀の保存処理を実施した（保存処理は京都市埋蔵文化財研究所に委託した）。

2. 対象遺物

各年度で保存処理の対象とした遺物は次のとおりである（1表、1～3図）。

(1) 2008年度

	2008年度	2009年度
工1地点 SK1	漆器椀 30	
経済地点 SK110	金箔瓦 1	
病棟地点 SK3		漆器椀ほか 34点

1表 対象遺物

工学部1号館地点（以下、工1地点）SK01から出土した漆器椀30点と、総合研究棟（文・経・教・社研）地点（以下、経済地点）SK110から出土した瓦1点の、計31点を対象とした。

工1地点SK01は南北6m以上（調査区外に続く）、東西12.5m、深さ5m以上の土坑である。5202個体と推定される多量の陶磁器とともに、106個体の漆器椀が出土した。出土陶磁器の様相から18世紀後葉～19世紀前葉に位置づけられる一括資料である（東京大学埋蔵文化財調査室2005）。漆器椀は遺存状況の良好な資料を中心に抽出した。また遺存状況はやや劣るものの、施文されたものについては保存処理の対象とした（2表）。

経済地点SK110は溶姫（景德院）の御守殿の一角にあたり、陶磁器とともに大量の食物残渣が出土した土坑である。瓦は前田家の家紋（梅鉢紋）を象った鬼瓦の一部で、梅鉢紋に金箔が施されている。金箔は瓦上の梅鉢に直接添付されるのではなく、梅鉢の部分にはめ込んだ木製ソケットに添付している。これは文様が立体的でシャープになることを意図した工程だと思われる。保存処理の対象としたのは、この木製ソケットである。

(2) 2009 年度

医学部附属病院入院棟 A 地点（以下、病棟地点）から検出された漆製品 34 点を対象とした。病棟地点は 1994 年から 1996 年にかけて実施された発掘調査で、調査面積はおよそ 6,000㎡、検出遺構は約 4,000 にのぼるキャンパスでも大規模な調査地点である。

SK3 は南北約 50m、東西約 20 m、深さ約 5m の大型土坑である。加賀藩邸は天和 2（1682）年の火災で大きな被害を受け、翌 1683 年に屋敷割りの変更を伴う盛土造成がおこなわれる。SK3 はこの盛土造成後に掘削された採土坑と考えられる（東京大学埋蔵文化財調査室 1999）。覆土は灰黒色を呈する水成堆積土で、ブロック状に泥炭が含まれていた。こうした含水率の高い覆土のため、多量の木製品とともに約 780 点の漆器碗が出土した（破片も含む）。そのうち 34 点の漆器碗を抽出し、匙 3 点、曲物 1 点、湯桶の取手 1 点とともに保存処理を実施した（2 表）。

3. 保存処理

保存処理に関しては、ポリエチレングリコール含浸法と真空凍結乾燥法とを併用した。ポリエチレングリコール（以下、PEG）は PEG - 4000 を用いた。キャンパス出土の木製品については、濃度 20% の水溶液への含浸から開始することもあるが、対象遺物が漆器製品という点を考慮して、10% の水溶液への含浸から開始した。以後、PEG 水溶液の濃度を徐々に高めていき、55% の濃度の水溶液に含浸した後、真空凍結乾燥を行った（3 表）。

4. 活用

保存処理を実施した漆器碗は、調査室（駒場第Ⅱキャンパス）に設置している展示ケースに展示している（5 図）。展示ケースは資料見学を訪れた来室者に対応する部屋にあり、一般公開を目的としたものではない。またケースのスペースも限られているため、漆器碗を常時展示できる状態でもない。しかしこの点に関しては、保存処理した木製品に限らず、キャンパス内の調査成果全体に当てはまることであり、調査室の今後の課題である。

一方学外では、これまで 1 件の特別展で展示されている。展示された特別展は以下の通りである。

「中山道板橋宿と加賀藩下屋敷」（板橋区立郷土資料館）：2010 年 2 月 11 日～3 月 22 日

本展は板橋区内に所在した加賀藩下屋敷のあり方や、国元との関係をテーマとしたものであり、漆器碗は上屋敷の藩士たちの生活を示す資料として、本郷キャンパス諸地点出土の陶磁器・土器とともに展示された。

保存処理事業を開始してから日が浅いことと、本郷キャンパスの遺跡が台地上の遺跡という印象が強いことから、現状では 1 件の貸出に留まっている。しかし大名家の食器の一翼を担った食器として漆器碗が位置づけられている展示であり、そうした展示に本件資料が活用されたことは、保存処理事業の目的に適った活用であると言える。今後もこうした面で学内・学外を問わず広く活用を図りたい。

【引用・参考文献】

板橋区郷土資料館 2010 『中山道板橋宿と加賀藩下屋敷』

京都市埋蔵文化財研究所 2006 「医学部附属病院病棟地点出土木製品保存処理完了報告書」『東京大学構内遺跡調査研究年報』5

第1部 2009年度調査室事業概要

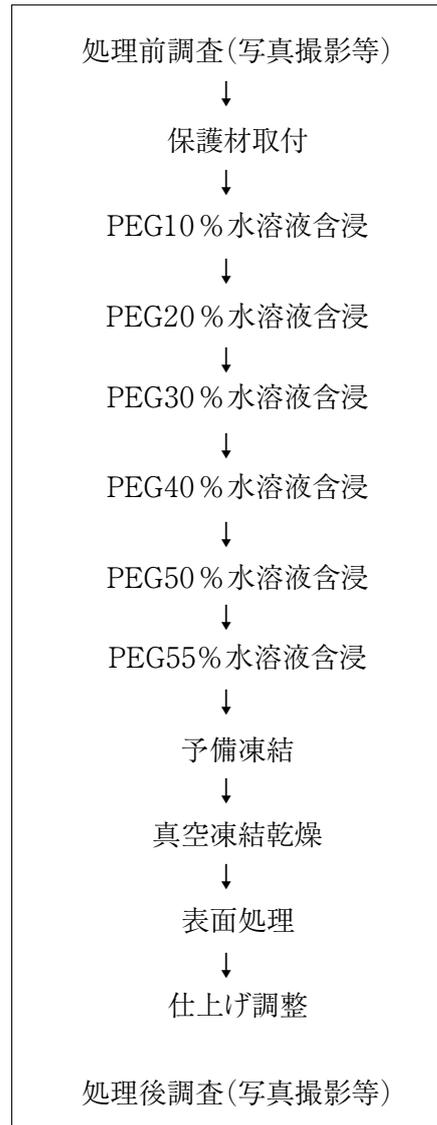
東京大学埋蔵文化財調査室 1999 『東京大学構内遺跡調査研究年報』2

東京大学埋蔵文化財調査室 2005 『東京大学本郷構内の遺跡 工学部1号館地点』

成瀬晃司・長佐古真也 1998 「江戸遺跡における17世紀第の「供膳具」の様相」『上方と江戸－近世考古学から見た東西文化の差異－』

工1地点	種類	病棟地点	種類
2	漆器椀	3	漆容器
3	漆器椀	14	漆容器
13	漆器椀	22	漆容器
15	漆器椀	2	匙
17	漆器椀	11	匙
18	漆器椀	15	匙
19	漆器椀	2	漆器
21	漆器椀	7	漆器
22	漆器椀	8	漆器
23	漆器椀	9	漆器
26	漆器椀	11	漆器
27	漆器椀	33	漆器
28	漆器椀	58	漆器
29	漆器椀	60	漆器
30	漆器椀	80	漆器
32	漆器椀	88	漆器
34	漆器椀	93	漆器
37	漆器椀	110	漆器
38	漆器椀	116	漆器
39	漆器椀	125	漆器
40	漆器椀	126	漆器
41	漆器椀	127	漆器
45	漆器椀	128	漆器
46	漆器椀	129	漆器
54	漆器椀	131	漆器
55	漆器椀	137	漆器
78	漆器椀	155	漆器
79	漆器椀	166	漆器
82	漆器椀	167	漆器
83	漆器椀	169	漆器
81	漆器椀	171	漆器
52	漆器椀	189	漆器
57	漆器椀	190	漆器
56	漆器椀	199	漆器
58	漆器椀		
59	漆器椀		
61	漆器椀		
60	漆器椀		
62	漆器椀		
49	漆器椀		
36	漆器椀		

2表 対象遺物一覧



3表 保存処理行程



1a図 48



1b図 48



2a図 51



2b図 51



3図 金箔瓦処理状況



4図 真空凍結乾燥工程



5図 駒場展示状況

東京大学農学部分生研・総合研究棟地点遺跡見学会報告書

原 祐一 西嶋 尚子（早稲田大学教育学部4年）

はじめに

2010年1月25日から3月30日まで調査を行った東京大学（本郷）弥生地区分生研・農学部総合研究棟地点では、遺跡を常時公開を行い、3月26・27日に説明会を開催した。また、東京ケーブルネットワークが調査・浅野地区の史跡の紹介番組を制作、説明会の告知を行った。

1. 調査の完全公開と速報の掲示

調査の公開の告知は、調査区外に設置した掲示板に掲示した。掲示板には調査速報を1～17号まで作成（I-1図）掲示した。向ヶ岡弥生町会、向丘町会に調査速報を配布した。調査終了後を含めた説明を行った見学者数は62名であった。

2. 説明会

説明会は2010年3月26・27日（金・土）10：00～16：00に開催した。告知は2010年3月10日に行った。学内の告知は農学系総務課総務チーム、東京大学広報センターにお願いした。学内の告知は向ヶ岡弥生町会、向丘町会、文京ふるさと歴史館、文京区教育委員会にお願いした。また、埋蔵文化財調査室のホームページで告知を行った。説明会の見学者は133名であった。

a. 公開の方法

説明会では10：00、11：00、12：00、13：00、14：00、15：00に説明時間を設定し説明を行った。見学者が分散して自由に見学できるように以下の点に配慮した。工事堀の一部を撤去し外部から見学できるようにする。遺物洗浄の見学。遺物の展示。映像の投写。ポスターを作成・掲示。現場内に遺構の説明板を設置（I-2図）。

b. 配布資料の作成

配布資料の内容は、調査地点だけでなく浅野地区をはじめとする周辺の遺跡についてもふれた。遺跡は弥生時代から農学部の施設までを対象とした。浅野地区の史跡と「向岡記」碑、弥生土器の保存修復、方形周溝墓の移築についても触れた（I-3・4図）。

c. アンケート調査の実施

今回の見学会では見学者にアンケートを実施しデータ化を行った。弥生二丁目を含めた遺跡がどう認識されているか、埋蔵文化財調査室がどのように認識されているか、告知方法が有効であったかについての調査を目的とした（I-5図）。

3. 成果と今後の方向

見学会参加者は2日間で133名であった。金曜日は学内関係者、土曜日は学外者を対象に考えてい

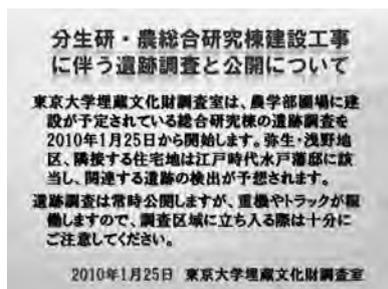
たが、見学者は学内外に関係なく外部の方が多かった。年齢は20代から70代までまんべんなく、文京区内在住がほぼ半数を占めた。文京区内の見学者は弥生町からの参加と他の町からの参加が同数であった。遺跡の認知度については参加者が遺跡に興味があることもあり、弥生土器の発見、水戸藩の屋敷については知られており、これまでの活動の生活成果と考えられる。今回の見学会で浅野地区の史跡についても知っていただくことができた。見学会の告知については学内の掲示、町会の掲示、口コミ、その他がほぼ同数で、遺跡の立地は農学部の奥であったが「たまたま見学した」見学者も多かった。インターネットによる見学者はなかった。調査の進捗状況、天候、準備などのため早めに決定できないのが現状であるが早期の告知が重要である。また、ホームページを多くの人々に見ていただく努力も必要であろう。ケーブルテレビを見て参加された方もおり、テレビの影響も大きかった。終了後、武田先端知ビル、農学部総合研究棟01の説明会に参加していただいている方から「説明会があったことを後から知った、見学したかった」との連絡があったため、説明会資料を郵送することで対応した。「遺跡調査をしたいか」については、多くの見学者が「やってみたい」と回答している。

今回、アンケート調査など新たな試みを行った。見学会の感想は好意的で学内外との連携もできた。展示・公開方法など遺跡公開の基本形はできた。今後も引き続きアンケート調査を行ってゆきたい。

文京区内の中学校に遺跡調査の速報と案内をメールにて送信させていただいた。年中学校用のポスターを作成掲示していただくなど告知方法を検討したい。

遺跡の進捗状況によっては遺跡調査を公開できない場合がある。そういった場合どのように公開を行うか今後の課題としたい。学内外の考古学や発掘調査に対する考え方、予算などは年々厳しい状況となっている。それらを多少なりとも和らげ、市民の考古学に対する理解を得ればこれらの環境は若干かもしれないが改善されると考える。

遺跡の公開にあたり見学会の告知等で向ヶ岡弥生町会、向丘町会、株式会社新星建設、加藤建設株式会社、文京ふるさと歴史館、文京区教育委員会、東京都立向丘高等学校、東京大学農学系総務課総務チーム、東京大学広報センターにお世話になりました。ここに謝辞申し上げます。



I-1 図 調査速報



I-2 図 遺跡見学会

2010年3月26・27日 農学部総合研究棟09 遺跡発掘調査資料

水戸藩駒込邸と東京大学弥生地区・浅野地区と周辺住宅地

東京大学弥生地区、浅野地区と周辺住宅地は江戸時代の水戸藩中屋敷（以下、駒込邸）に該当する。土蔵数は小田川庵楽園と東京ドーム周辺に主に藩政がたてられ、藩士の邸宅、邸舎、小田川庵楽園、役所の邸宅、藩士の長屋等が建設された。駒込邸は「駒込の町」とも呼ばれ、藩士の邸宅のほか、役所の邸宅、藩士の長屋が建設された。また、土蔵数が火災で被災した際、駒込邸は避難所となり藩政の機能が駒込邸に移された。

水戸藩は元和8（1622）年この地に屋敷を移築、天保6（1835）年藩邸北側に位置する安宅藩邸と地蔵堂（地蔵研究所周辺）が水戸藩邸となる。水戸藩は、明治21（1890）年藩邸が明治政府に没収されるまでこの地に屋敷を構えていた。東京大学理学院文化財調査室は、1988年以降駒込邸の発掘調査を行っている。2007年11月に発見された「向後彌生町水戸邸給図面」(文政9（1826）年)の研究によって、家康御前上片岡稲村敷地で大塚に出した土製品は駒込邸に由来したと推定された。農学部総合研究棟09で発掘した遺跡は藩邸を東西に区画した上で、幅10m、深さ4mの切り通しで、今日の調査でも確認されている。調査地点にはこの遺跡に隣接する幅20m(推定)で農学部2号館から西に延びる「大名小路通り」の横出しが予想されたが、明治21年以降の遺跡による影響によって失われており確認することができなかった。

明治時代の東京大学弥生地区・浅野地区と農学部の構構

現在の東京大学弥生地区の旧跡は「向後彌生町」で明治2年に名付けられる。向後彌生町の範囲は水戸藩駒込邸の範囲で、明治5年から東京府が行った「新築事業」によって、旧水戸藩士による家と藩政の跡がなくなり、明治5年以降は浅野地区、文部省用地、東京府用地となる。明治9年、上野の南に土蔵の瓦葺屋根を主とした警備隊射撃場の向後彌生町が計画される。射撃場はフランス式射撃場を長さ300m、幅50m、浅野地区と本郷地区の間の谷を10mに掘削し、掘削した谷を東・西・北に張り巡らす10m以上の射撃場とした。射撃場は南側、約北側に約1kmの距離、倉庫等が建設される。浅野地区は武田先陣知に化して、置き場へ行くための出入り口を掘削し、産地の中からは小銃の弾丸が出土している。射撃場は明治10年に竣工。同年の西南戦争で、上野の弥生町で演習を行った警備隊隊員が九州等に派遣される。その後、射撃場は西南戦争以降、軍部管理から射撃会場へとその性格を変える。大塚射撃場が少なくとも5回も行われ、浅野地区にいった「弥生町」で演習が行われていた。弥生地区は、東京府用地で東京府立第一精神病院（現東京府立第一精神病院）が建設され、コナラが植えられた。現在、弥生町は駒込邸と射撃場の間にあり、現在調査を行っている農学部総合研究棟09では掘削した弾丸が出土している。弥生時代の出土品となった土器が弥生町から発見された明治17年は射撃場が完成していた時期で、東京の学生による土器の採集は射撃場の古い日時に行われたと考えられる。射撃場は明治21年大塚へ移転、射撃場が埋め立てられる。調査地点では射撃場の埋め立てのための掘削場を掘削している。この他に在る稲田家の東京の歴史に際する建築物の基礎、農学部に関する実験施設の跡を掘削している。

「向後彌生町水戸邸給図面」文政9年（個人蔵）

現在の東京大学と水戸藩邸の範囲（航空写真 東京大学本部プロジェクトグループ撮影）

片岡稲村敷地出土土製焼酎土 19世紀 寄附者様出土

六葉文の軒瓦 ベンチャービジネスラボラトリー出土

農学部総合研究棟09遺跡

城内を区画する道の遺跡 農学部総合研究棟09

肥前磁器 17世紀後半～18世紀初頭

仁津水壺（18世紀） ベンチャービジネスラボラトリー出土

城内を区画する道の遺跡 農学部総合研究棟09

明治時代の東京大学弥生地区・浅野地区と農学部の構構

明治17年の向後彌生町（17-8は土蔵発見地）

警備隊射撃場の出入口と出土土器（浅野地区田代橋北側に） 弥生神社の跡（警備隊百年史より）

射撃場遺跡

射撃場の埋め立てのための土壌掘削（農学部総合研究棟09） 掘削場から浅野地区方面を望む

掘削場と掘削する土蔵の基礎（農学部総合研究棟09） 掘削場と掘削する土蔵の基礎（農学部総合研究棟09）

明治45年の向後彌生町（青木文書）

I-3図 配布資料(1)

東京大学浅野地区の遺跡・史跡の保存修復と活用

2001年、建設文化財調査室が行った工学部田代橋北側の発掘調査で弥生時代の遺跡を掘出した。遺跡は方形周溝と呼ばれ、遺物を埋めた土蔵が4本の溝（周溝）で方形に囲まれていた。周溝の中心は弥生土蔵。土蔵から銅製のガラス小玉、石製の玉が出土した。方形周溝は土蔵の年代から、弥生時代の名物由来となった土器を使用した弥生土蔵と推定され、発見された土蔵は保存された。弥生土蔵は展示ができるよう周溝に掘削を止め、彩色を施し展示した。現在、田代橋北側では方形周溝遺跡の周溝に周溝の遺構を示し、柱部分に研究結果をまとめたため土蔵が設置されている。「田代橋」跡は、徳川(寛政)文政11(1828)年水戸藩邸に建てられた土蔵で、後に徳川が向後彌生町の由来となる。遺跡は高水石（茨城産の大理石）で造られ、壁紙による風化が進行し、土蔵の崩壊が深刻になっていたが、東京大学創立130周年記念「知のプラットフォーム」学内整備に併せて保存修復をなし、情報基盤センター一階内に設置した。

江戸時代の調査地点と「向後彌生町水戸邸給図面」の道

明治時代以降の調査地点

保存修復を行った浅野地区出土弥生土蔵

保存修復を行った方形周溝

弥生土蔵出土状況 方形周溝遺跡出土状況（2001年調査）

土蔵の基礎

方形周溝の掘削

工学部田代橋北側小

弥生土蔵出土状況

「田代橋」跡の保存修復

「田代橋」跡の公衆

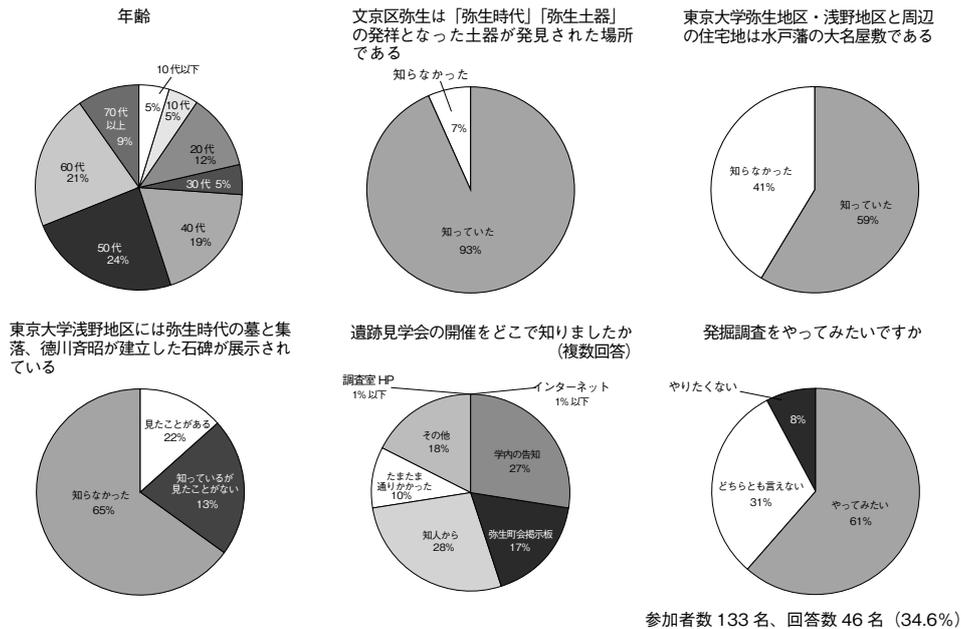
「田代橋」跡の展示 情報基盤センター

協力：建設文化財調査室 農中工務 小林石材株式会社 日本石造文化学会 表具工業 株式会社オカヒコキヤン 株式会社小中 加藤建設株式会社 東京大学田代橋北側 東京大学情報基盤センター 東京大学工学部材料工学系 工学部田代橋北側 東京大学理学院文化財調査室

I-4図 配布資料(2)

感想

- ・是非何かの形でかかわらせていただきたい。
- ・生まれ育った町のことを改めて知りました。子供のころから知ってはいて自慢でしたが射的場とは初めて聞きました。地元の子供や、大人にぜひ教えてほしいです。機会をもうけてください。ありがとうございました。
- ・説明が実にわかり易く勉強になった。関心が高まった。
- ・すごく面白かったです。
- ・私は考古学のことはあまり関心を持たなかったが、ここに来てから面白いなと思った。土の色によっていろいろなことが分かる。
- ・説明して下さった方が、熱心だったので研究がお好きなんだなあと思いました。出土品を見せて頂けて、良かったです。ありがとうございました。
- ・丁寧な説明ありがとうございました。
- ・ビーズや土器が見られてよかった。
- ・もっと多く公開して欲しい。
- ・徳川時代の歴史をかいま見ることができました。原先生の論文抜刷をいただき参考にさせていただきます。
- ・かなり大がかりなトレンチで、私の以前の勤務先とは人員等含め規模が違くと驚きました。今冬は気候に恵まれなかったので、調査も大変だったと思いますが、調査研究の概要のよくわかる素晴らしい見学会でした。
- ・東京大学内で遺物の展示、説明できる資料館が作られることを望みます。
- ・もう少しケーブルテレビ等を通じて宣伝して欲しい。子供たちも興味を持つと思います。
- ・発掘現場を近隣の学校の生徒に見せるべきです。(「向隅記」碑について) 知らなかった。天下の東大の中から出てきた遺跡です。一部でも現地に残すべきです。そのための税金をあてることをおしませぬ。もっと都民に遺跡のことを知らすべきです(税金を払っているのですから)。もっと大学内外にお知らせを出してほしい。学生も考古学に関係なく協力させるべき。大学の広報がもっと協力すべき。
- ・地味な仕事ご苦労様です。歴史にもっと力を入れて勉強させ未来をつくる。子供たちの糧になったら良いと思っている。東京ケーブルネットワークとも宣伝したり工夫してほしい。
- ・たまたまですが、良い勉強になった。これからも頑張ってください。土器の紋の話が興味深かった。
- ・面白かった。もっと大々的に宣伝して欲しい。先生の話術がユーモアがあり素晴らしかった。
- ・親しみのある説明でよかったです。
- ・非常に有意義でした。



I-5図 アンケート調査の結果

第3節 室員研究・活動報告

成瀬 晃司

【論文・資料報告】

「肥前産「呉器手」碗の需要に関する予察」『竹石健二先生・沢田大多郎先生古希記念論文集』 pp.207-223

【研究発表】

2009.10.2

「東京大学本郷構内の大名庭園関連遺構」（第2回 玉泉院丸庭園の調査に係わる学習会）

2010.1.30・31

「江戸遺跡出土陶磁器にみる画期と様相差」（江戸遺跡研究会第23回大会『都市江戸のやきもの』、pp.251 - 264 所収）

【講演・講座】

2009.5.16

「東京大学構内を探る～理学系研究科附属植物園（小石川植物園）の歴史～」(首都大学東京オープンユニバーシティ 講座「江戸の遺跡といま」、於：理学系研究科附属植物園)

堀内 秀樹

【論文・資料報告】

「宴会道具としての貿易陶磁器の再評価－大聖寺藩邸出土貿易陶磁器 L32-1－」『竹石健二先生・澤田大多郎先生古希記念論文集』 pp.185-206

「江戸時代の貿易と薬瓶」『海と千代田の6000年』千代田区立四番町歴史民俗資料館 pp.36-39

「購入・廃棄の判断、行為と情報」『季刊 東北学』22号 柏書房 pp.132-145

『特別展 中山道板橋宿と加賀藩下屋敷』板橋区立郷土資料館（執筆分担：「発掘された加賀藩上屋敷」 pp.163-167

「江戸大名屋敷出土の陶磁器」『季刊考古学』第110号 雄山閣 pp.27-30

「地方窯と消費遺跡」『東洋陶磁』39号 東洋陶磁学会 pp.21-32

【研究発表】

2009.7.4・5

「都市江戸の成立と出土遺物の江戸的様相」（『中世はどう変わったか』第7回考古学と中世シンポジウム pp.25-41 所収）

2009.8.16

「都市江戸と貿易陶磁」（『ベトナム・ホイアンとアジア海域交流』ユネスコ世界遺産登録10周年記念ホイアンシンポジウム pp.73-86 所収）

2010.1.30・31

「都市江戸における貿易陶磁器の消費－江戸の需要とその背景－」（第23回江戸遺跡研究会大会『都市江戸のやきもの』江戸遺跡研究会 pp.7-41 所収）

【講演・講座】

2009.6.6

「江戸・加賀藩邸を掘る」『連続講演会 金沢偉人塾』金沢ふるさと偉人館

2010.2.9

「江戸を掘る」『神奈川埋蔵文化財センター平成 21 年度考古学ゼミナール』

2010.3.12

「陶磁器の見方・楽しみ方」『平成 21 年度文化財講座 文化財鑑賞入門（続編）』豊島区勤労福祉会館

2010.3.14

「武都江戸とやきもの」『公と武 京と江戸のやきもの文化 講演会』土岐市文化会館

2010.3.21

「近世遺跡出土遺物の解釈－都市江戸、宿場の状況から－」『シンポジウム掘り出された江戸時代の藤沢宿』藤沢市役所

原 祐一

【論文・資料報告】

「向岡記」碑の保存修復と駒込邸跡の発掘調査『水葵』No.34 財団法人水府明德会徳川博物館友の会会報 p.3

「附編 水戸藩駒込邸の遺跡と『向陵彌生舊水戸邸繪図面』、明治 16 年『測量図の検討』」『東京都文京区 弥生町遺跡群第 2 地点』株式会社裕企画、東京都文京区教育委員会 p.10

「東大構内発掘調査より 発見された砲弾と上野戦争」『地域雑誌 谷中根津千駄木（季刊）』其の 93、pp.79-83

「向ヶ岡弥生町の研究 一向ヶ岡弥生町の歴史と東京大学浅野地区の発掘調査の成果」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 9 東京大学本郷構内の遺跡 浅野地区 I』 pp.281 - 323

「徳川齋昭と水戸藩駒込邸」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 9 東京大学本郷構内の遺跡 浅野地区 I』 pp.325 - 330

「水戸藩駒込邸の研究 藩邸内外の景観と造園の検討」『東京大学史紀要』第 28 号、東京大学史料の保存に関する委員会、pp.41 - 63

【研究発表】

2009 年 5 月 30・31 日

「文化資源としての考古資料－東京大学における考古資料の教育活用の実践－」（『有限責任中間法人日本考古学協会第 75 回総会研究発表要旨』 pp.166-167 所収）

2009 年 6 月 13・14 日

「P107 弥生時代名称由来「向岡記」碑の保存修復・設置場所の検討と活用」『文化財保存修復学会第 31 回大会発表要旨』 pp.288-289 所収 石原道知、堀江武史、小林善行、森田信博、垂水李、横山淳一、塩原都と共同発表）

「P113 東京大学浅野地区出土弥生土器の修復－最少限の修復への取り組み」（『文化財保存修復学会第 31 回大会ポスター発表要旨』 pp.288-289 所収 堀江武史、石原道知と共同発表）

【講演・講座】

2009 年 9 月 26 日

「弥生土器の発見と『向岡記』碑」『日本考古学 2009』明治大学博物館友の会

追川 吉生

【論文・資料報告】

「家康入府のころの江戸」『名城物語 3 家康の城』pp4-7、学習研究社

【研究発表】

2009.6.14

「江戸遺跡の保存と整備」(『都市遺跡の調査と保存・活用・整備』pp.45-49 文化財保存全国協議会所収)

2009.8.29

「江戸遺跡から出土した埴塙の形態について－江戸における小規模鑄造の実態解明に向けて－」(『アジア鑄造技術史学会研究発表概要集』3、pp.48-51、アジア鑄造技術史学会所収)

【講演・講座】

2009.9.14

「東京発掘－地下に眠る都市、江戸を掘る－」(明治大学リバティーアカデミー『時空交差点 江戸東京を探訪する』)

2009.9.28

「延岡藩内藤家虎御門内屋敷と江戸城内堀」(明治大学リバティーアカデミー『時空交差点 江戸東京を探訪する』)

2009.10.5

「内海御台場と品川宿」(明治大学リバティーアカデミー『時空交差点 江戸東京を探訪する』)

2010.3.14

『江戸切絵図入門－地図の江戸、掘り出された江戸－』(紫紺倶楽部)

第4節 埋蔵文化財調査室要項

東京大学埋蔵文化財運営委員会規則

平成元年7月11日

評議会可決

(設置)

第1条 東京大学に東京大学埋蔵文化財運営委員会(以下「委員会」という。)を置く。

(任務)

第2条 委員会は、東京大学構内における埋蔵文化財に関する重要事項及び埋蔵文化財調査室の運営等に関し必要な事項を審議することを任務とする。

(組織)

第3条 委員会は、委員長及び委員若干名をもつて組織する。

(委員長)

第4条 委員長は、副学長のうちから総長が指名する。

(委員)

第5条 委員は、次の各号に掲げる者に総長が委嘱する。

(1) 人文社会系研究科長、理学系研究科長、工学系研究科長、医学系研究科長、東洋文化研究所長及び史料編纂所長

(2) 埋蔵文化財調査室長

(3) その他総長が必要と認めた者

2 前項第3号の委員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

(幹事)

第6条 委員会に幹事を置く。

2 幹事は、総務・法務系、財務系及び施設・資産系の各本部統括長をもつてあてる。

(庶務)

第7条 委員会の庶務は、本部施設企画グループにおいて処理する。

(補則)

第8条 この規則に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会の定めるところによる。

附 則

この規則は、平成8年5月21日から施行し、改正後の東京大学埋蔵文化財運営委員会規則の規定は、平成8年5月11日から適用する。

附 則

この規則は、平成16年6月18日から施行する。

附 則

この規則は、平成19年7月1日から施行する。

埋蔵文化財調査室規則

平成元年7月11日

評議会可決

(設置)

第1条 東京大学埋蔵文化財運営委員会の下に埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）を置く。

(業務)

第2条 調査室は、東京大学構内の施設整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査（以下「遺跡調査」という。）に関し、次の各号に掲げる事項を処理する。

- (1) 遺跡調査に対する総括的指導助言
- (2) 文化庁等に提出する報告書の作成、監修及び指導
- (3) 遺物等の保管及び管理
- (4) 遺跡調査の方法に関する調査研究
- (5) 前各号に定めるもののほか、研究報告書の作成等遺跡調査に関し必要と認められる事項

(室長)

第3条 調査室に室長を置く。

2 室長は、東京大学専任の教授又は准教授のうちから総長が委嘱する。

3 室長は、調査室の業務を総括する。

(室員)

第4条 調査室に室員若干名を置く。

2 室員は、室長の指示に従い、調査室の業務に従事する。

(庶務)

第5条 調査室の庶務は、本部施設企画グループにおいて処理する。

附 則

この規則は、平成8年5月21日から施行し、改正後の埋蔵文化財調査室規則の規定は、平成8年5月11日から適用する。

附 則

この規則は、平成19年4月1日から施行する。

附 則

この規則は、平成19年7月1日から施行する。

東京大学埋蔵文化財調査室組織表

室長（人文社会系研究科教授）	今村啓爾（～ 2010 年 3 月）
室員（人文社会系研究科助教）	成頼晃司
〃	堀内秀樹
室員（人文社会系研究科助手）	原 祐一
〃	大成可乃
〃	追川吉生
事務補佐員	青山正昭
〃	石井龍太（2009 年 7 月～ 2010 年 3 月）
〃	今井雅子
〃	大貫浩子
〃	加藤理香
〃	香取祐一
〃	小林照子
〃	坂野貞子（～ 2010 年 3 月）
〃	田中美奈子

第 2 部 2010 年度調査室事業概要

第 I 章 埋蔵文化財調査の概要（事前・試掘・立会）

2010 年度は以下の通り、本郷地区、白山地区において、事前調査、試掘調査、立会を実施した。

本郷地区では、事前調査 7 件、試掘調査 4 件、立会 5 件を行った。そのうち〔本 100〕工学部 3 号館地点は、2011 年 11 月末に調査終了を予定している。また、〔本郷 93〕伊藤国際学術研究センターは、昨年度実施した 1 次調査において、地下式麹室、フラスコ形井戸が検出されたことから、山留め、第 1 次根切り後に地下式麹室室部およびフラスコ形井戸オーバーハング部を対象とした 2 次調査を実施した。

事前調査に関し、〔本郷 93〕伊藤国際学術研究センター地点 2 次調査では、江戸時代（本郷六丁目町屋）、〔本郷 99〕法学部 3 号館増築 1、2 期地点では、江戸時代（加賀藩本郷邸）、〔本郷 97〕基幹整備（流域⑧排水 B 区）工事地点では、江戸時代（富山藩邸）、古墳時代前期、〔本郷 101〕医学部附属病院ドナルド・マクドナルド・ハウス地点では江戸時代（富山藩邸）、古墳時代前期、旧石器時代に関する遺構・遺物が確認された。また継続調査中の〔本郷 100〕工学部 3 号館地点では、江戸時代（加賀藩本郷邸、水戸藩駒込邸）、平安時代に関する遺構・遺物が確認されている。

〈事前〉

- ・2010 年 5 月 17～31 日〔本郷 93〕伊藤国際学術研究センター地点 2 次調査（担当 成瀬・大成）
- ・2010 年 7 月 20 日～8 月 23 日〔本郷 99〕法学部 3 号館増築 1 期地点（担当 追川）
- ・2010 年 7 月 28 日～8 月 11 日〔本郷 94〕分生研・農学部総合研究棟地点外構調査（担当 原）
- ・2010 年 11 月 27 日～12 月 5 日〔本郷 97〕基幹整備（流域⑧排水 B 区）工事地点（担当 原）
- ・2010 年 12 月 9 日～2011 年 1 月 26 日〔本郷 101〕医学部附属病院ドナルド・マクドナルド・ハウス地点（担当 追川）
- ・2011 年 1 月 18～26 日〔本郷 99〕法学部 3 号館増築 2 期地点（担当 大成）
- ・2011 年 1 月 4 日～継続中〔本郷 100〕工学部 3 号館地点（担当 堀内）

〈試掘〉

- ・2010 年 4 月 9 日〔本郷 98〕原子動力実験棟地点（担当 原）
- ・2010 年 5 月 10～13 日〔本郷 99〕法学部 3 号館増改築 1 期地点（担当 堀内）
- ・2010 年 10 月 25～29 日〔本郷 101〕医学部附属病院ドナルド・マクドナルド・ハウス地点（担当 追川）
- ・2011 年 3 月 14～18 日〔本郷 103〕春日門横教育研究棟地点（担当 大成）

〈立会〉

- ・2010 年 6 月 17・21 日〔本郷 114〕下水道本管改修地点
- ・2010 年 7 月 30 日～8 月 11 日〔本郷 104〕防犯用ネットワークカメラ賃貸借設置地点（担当 原）
- ・2010 年 8 月 31 日～9 月 11 日〔本郷 105〕弥生地区屋外ガス配管改修地点（担当 原）
- ・2010 年 12 月 2・13 日〔本郷 102〕本郷通り囲障改修地点（担当 追川）
- ・2010 年 12 月 27 日〔本郷 99〕法学部 3 号館増改築 2 期地点（担当 追川）
- ・2011 年 2 月 7・9・15・16・18・21・22 日〔本郷 106〕薬学ゲート前舗装改修地点（担当 原）

第2部 2010年度調査室事業概要

白山地区においては、事前調査1件、立会1件を行った。〔白山6〕理学系研究科附属植物園 下水・電源ケーブル埋設地点では、江戸時代（小石川御薬園・白山御殿）、縄文時代（晩期）に関する遺構・遺物が確認された。

〈事前〉

- ・2010年9月6～15日 〔白山6〕理学系研究科附属植物園 下水・電源ケーブル埋設溝地点（担当 成瀬）

〈立会〉

- ・2011年1月17日 〔白山7〕理学系研究科附属植物園 旧小石川養生所井戸柵改修地点（担当 成瀬）

第1節 本郷構内の事前調査

1. 本郷 94 分生研・農学部総合研究棟地点 (HNS09)

所在地 東京都文京区弥生1-1-1 (文京区 No.28 弥生町遺跡群、文京区 No.47 本郷台遺跡群内)
調査期間 2010年1月25日～3月31日、7月28日～8月11日
調査面積 1730.8㎡
調査担当 原 祐一

1. 調査の経緯と経過

東京大学は弥生地区分生研・農学部総合研究棟の新営を計画した。2009年9月1・2日試掘調査を行った結果、現地表面から1.2mの深さで、江戸時代の遺構と農学部から浅野地区へ続くと考えられる埋没谷を確認したため、2009年1月25日～2010年3月31日に本調査、7月28日～8月11日に外構工事に伴う調査を行った(1図)。本調査の結果、調査地点では6面の生活面と219基の遺構を、外構工事B区では41基の遺構が確認された(2、3図)。A区では遺構は確認できなかった。以下本調査区の概要を面ごとに記す。



1図 調査区の位置

A面

A面は明治時代から現在までの遺構面で、遺構軸は本邸通りに直行・平行する軸である。千葉県佐倉の堀田正倫の東京の邸宅に関連する建物基礎（礎石・レンガ基礎）、農学部の実験施設を検出した。堀田邸の本邸は言問通り側にあり、現在この建物は世田谷区豪徳寺に移築されている。また、農学部と住宅地の地境に裏門が残されている。

B・C面

武田先端知ビルでは、射的場の埋め立て土確保のための削平が確認されているが、当地点では削平と土を運搬するための舗装道路を検出した。道SR2の路面には土を運搬した一輪車の轍が（幅3cm（1寸））全面に残っており轍は射場方面へ向かっている。調査地点の中央東西に段差ができており、南側の標高は約16.5m、北側の標高は16m、0.5mの標高差がある。現段階では射的場の埋め立てに関連すると推定しているが、『明治16年陸軍参謀本部測量原図』ではD面を検出した駒込邸を東西に区画する切り通し状の道（SR1）が埋め立てられていることから、駒込邸以降・射的場造成以前もしくは造成時の削平の可能性もあることから今後検討を行いたい。表土から小銃の弾丸1点が出土している。射的場からの被弾した弾丸と考えられる。

D面

文政9（1826）年『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』が反映された遺構群である。遺構軸は『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』に描かれている「大名小路通」に直行・平行する軸の遺構の他、藩邸を東西に区画する道であるSR1（農学部総合研究棟01 HNS01でも検出）は邸内を北西から南東に縦断する埋没谷に沿って造成されている。SR1の軸はD面より古いE面・F面と同じでSR1造成以前の遺構は埋没谷を基に作られたと考えられる。表御殿の位置は光圀の代から斉昭の代まで浅野地区を含む東側の区域、長屋や役所の建物は弥生地区を含む西側の区域に継続しておかれている。埋没谷に沿って両区域を区画する地境があり、この地境を継承する形でSR1が造成されたと考えられる。また、現在の農学部2号館前から東西にのびSR1に接続する「大名小路通り」の検出が予想されたが、道は検出されなかった。

E面

文政9（1826）年以前の遺構群である。建物跡、地下室、貯水槽、採土坑を検出した。遺構軸は2で埋没谷と直交する。

F面

方形周溝墓、溝状遺構、土坑、小穴を検出した。1号方形周溝墓（SD201・202・217）は溝がそれぞれ独立、確認された範囲で墓の規模は12m四方で北側の周溝は調査区外に存在すると考えられる。SD202の坑底標高15.899m、深さ約0.12m、SD217の坑底標高14.884m、深さ0.813m、SD201の坑底は埋没谷方向へ向かって傾斜している。B・C面で確認された削平によって検出面は平坦であるが、旧地形は傾斜した地形であったことが分かる。掘削深度ははっきりしないが、SD202とSD217坑底の標高差から少なくとも0.8m以上削平されたと考えられ埋葬施設はこの際削平された。浅野地区と弥生地区で方形周溝墓5基を検出した。調査地点は埋没谷の始まる位置で、向ヶ岡弥生町の方形周溝墓は浅野地区へ向かってのびる埋没谷の始まりから武田先端知ビルまで分布していたことが確認できたことから、SR1で破壊された部分を除き埋没谷周辺には方形周溝墓が遺存している可能性がある。

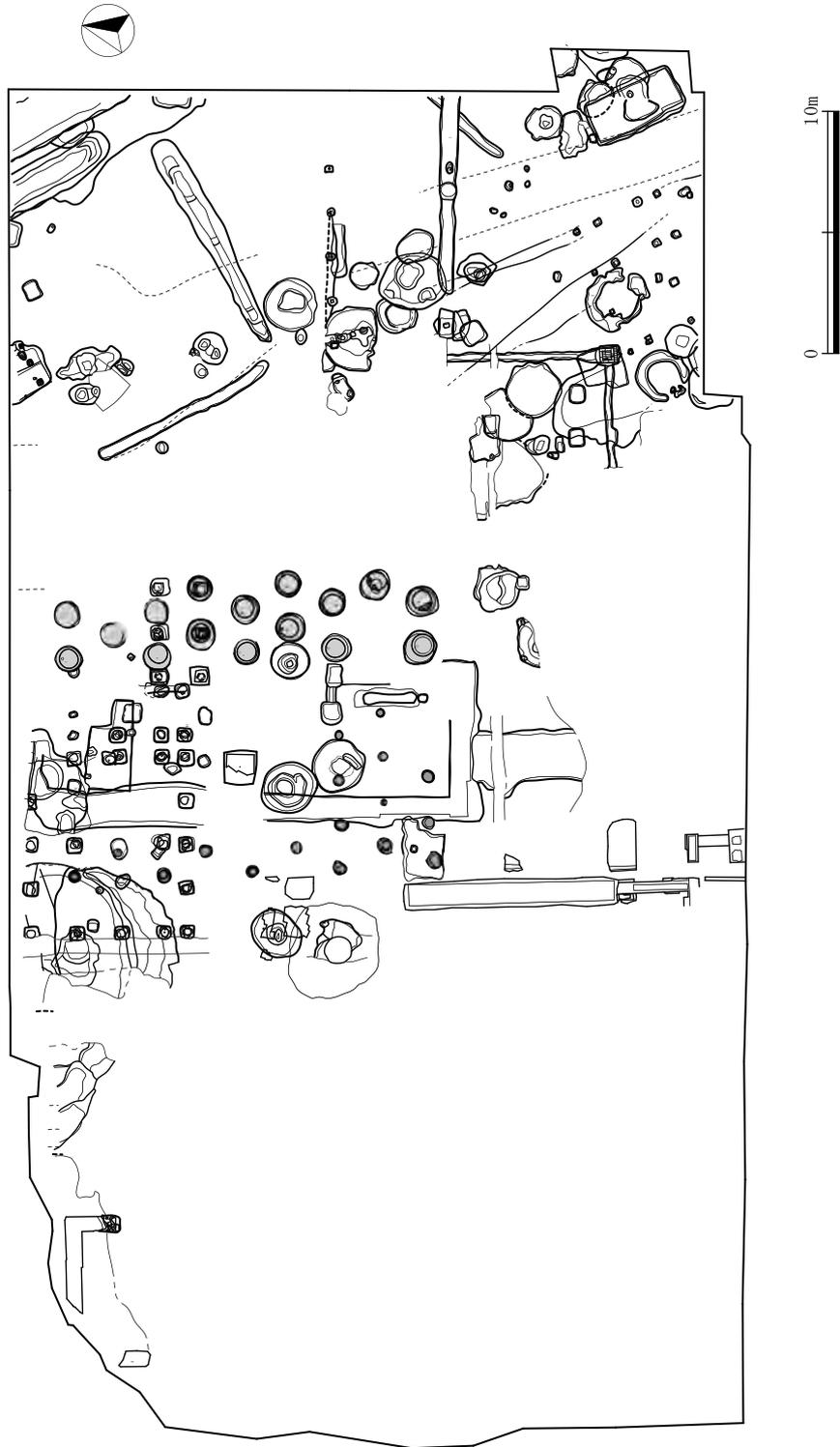
1. 分生研・農学部総合研究棟地点 (HNS09)

SD197 は 1 号方形周溝墓を切る溝状遺構で拳大の椀形滓が出土した。鉄滓はこの他 SK210、SX207 で出土した。

2. まとめ

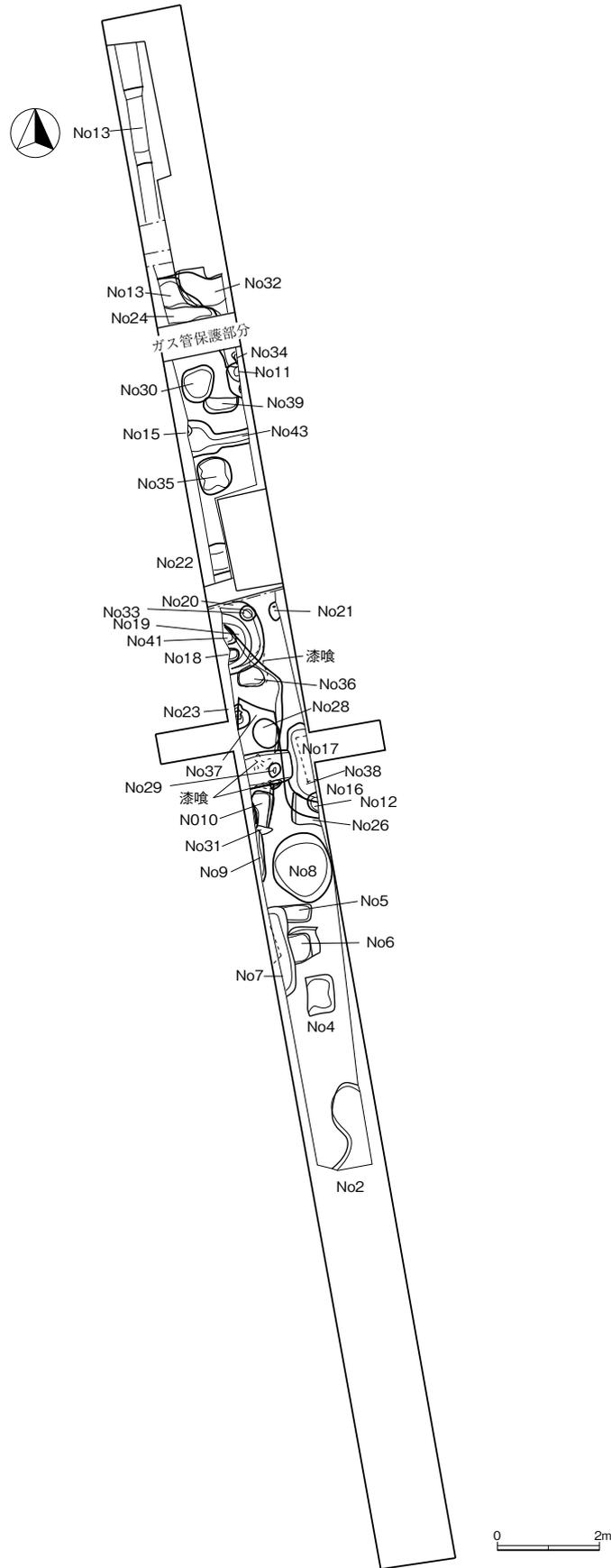
今回の調査では埋没谷に分布する方形周溝墓を検出した。東側の台地上に環濠集落、西側の埋没谷に方形周溝墓が分布する景観がより明確になった。また、浅野地区工学部原子動力棟改築に伴う埋蔵文化財試掘調査で弥生二丁目遺跡の東側の台地の突端が明治 5 (1972) 年までに削平されたことが明らかになっており、遺跡の景観と集落範囲について再検討の必要がある。

調査地点全域が明治時代に削平されており、射的場の埋め立てのための土搬出路を検出し造成の範囲が弥生地区まで及んでいたことが明らかになった。この造成によって明治時代以前の遺跡は破壊されたものの、水戸藩駒込邸の土地利用状況の一端が明らかになってきた。今後、他の遺跡と合わせて検討を行いたい。



2 図 全体図

1. 分生研・農学部総合研究棟地点 (HNS09)



3 図 外構 B区全体図

2. 本郷97 基幹整備（流域⑧排水）B区地点（HKS09）

所在地 東京都文京区本郷7-3-1（文京区No.47 本郷台遺跡群内）

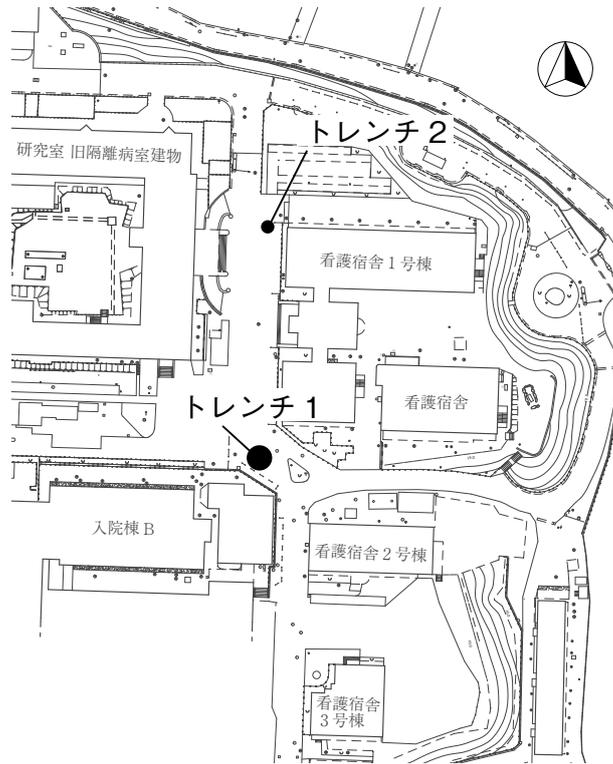
調査期間 2010年11月29日～12月6日

調査面積 67.6㎡

調査担当 原 祐一

1. 調査の経緯と経過

試掘調査を行った結果、江戸時代の遺跡の存在が確認されたことから事前調査を行った。



1図 調査位置図

2. 調査の結果

トレンチ1（2、3、6、7図）

総遺構数26基で古墳時代の住居跡2軒、土坑、江戸時代の地下室、土坑、小穴を検出した。検出状況から生活面をA面（江戸時代）、B-1・2面（古墳時代以前）とした。遺構検出面は遺構の検出状況から本来の生活面より低く、全面が削平されていた。この削平は看護師宿舎の発掘調査で確認されている明治時代以降の削平で、本調査によって削平が調査地点周辺まで広がっていたことが確認できた。江戸時代の遺物は、陶磁器類、動物遺体、古墳時代以前の遺物は土器片が出土している。

2. 基幹整備（流域⑧排水）B区地点（HKS09）

トレンチ2（4、5図）

総遺構数4基で江戸時代の井戸、地下室、土坑、性格不明遺構を検出した。検出状況から生活面をA面（江戸時代）とした。トレンチ2でも生活面の削平を確認することができた。



2図 トレンチ1 S14土器出土状況



3図 トレンチ1 S14床面



4図 トレンチ2 SE1



5図 トレンチ2 SU3



6図 トレンチ1 作業風景



7図 トレンチ1 遠景

3. 本郷 101 医学部附属病院ドナルド・マクドナルド・ハウス (HMH10)

所在地 東京都文京区本郷7-3-1 (文京区 No.47 本郷台遺跡群内)

調査期間 2010年12月9日～2011年1月26日

調査面積 30㎡

調査担当 追川 吉生

1. 調査の経緯と経過

東京大学医学部附属病院は本郷キャンパス (文京区本郷7丁目) 内にドナルド・マクドナルド・ハウスを建設することを予定した。本郷キャンパスは、全域が文京区遺跡番号47「本郷台遺跡群」として登録されている。また建設予定地では、南側の看護師宿舎で旧石器時代から江戸時代までの遺跡が調査されている。本施設建設予定地においても、当該時期の遺跡が残っている可能性が高いため、2010年10月25日から29日にかけて、本学埋蔵文化財調査室が試掘調査を実施した。その結果、建設予定地の大部分は近代の攪乱によって著しく破壊されているものの、東側の南北約5m×東西約6mの範囲については攪乱の影響を受けていないことが確認された。そこで2010年12月9日から2011年1月26日の期間で事前調査を実施した。

(1) 江戸時代 (1 図)

SD12

南北方向に伸びる溝。長さ4.7mだが、北側は調査区外に続き、南側は攪乱によって壊されているため本来の全長は不明である。遺構の軸は、南北軸に対して東に約2°傾いている。幅0.4m、深さ0.1m (3 図)。

SD13

東西方向に伸びる溝。長さ2.7mだが、東側は攪乱で壊され、西側は調査区外に続いているため本来の全長は不明。SD12と直交する (本遺構の方が新しい)。幅0.6m、深さ0.1m (3 図)。

SF17

南北0.6m、東西0.5m、深さ0.15mの平面が楕円形を呈する土坑。遺構の東側に焼土が集中し、その上に灰色の粘土が堆積する。これは本来、灰だった可能性が高い。遺構の周囲には炭化物の分布がみられる。炉址と考えられる。遺物は出土しない (4 図)。

SK20

直径1.37mの平面が隅丸方形を呈する土坑。深さ0.7mで段を有し、南北0.7m、東西1.0mの方形となる。深さ1.2m。かわらけが出土する。

(2) 古墳時代 (2 図)

SI21

竪穴住居址。南側を攪乱で壊されているが、方形を呈する。現状で南北2.4m、東西2.6m。壁は北東コーナーでゆるやかにたちあがり、最大で約0.4m。東側は攪乱と削平によって一部しか確認できない。床面は全体的に硬化が認められる。ピットが南よりで2基検出されたが、いずれも10cm未満の浅い掘り込みで、本遺構に伴うものであるかは検討を要する。土器片が354点 (古墳時代前期)

出土する (5 図)。

SI22

竪穴住居址。北側は調査区外へ続いているため本来の規模は不明。現状は南北 1.45m、東西 2.45m の方形を呈する。壁は急な立ち上がりを見せ、深さは約 0.3m。床面は全体的に柔らかく平坦である。土器片が 241 点 (古墳時代前期) 出土する。

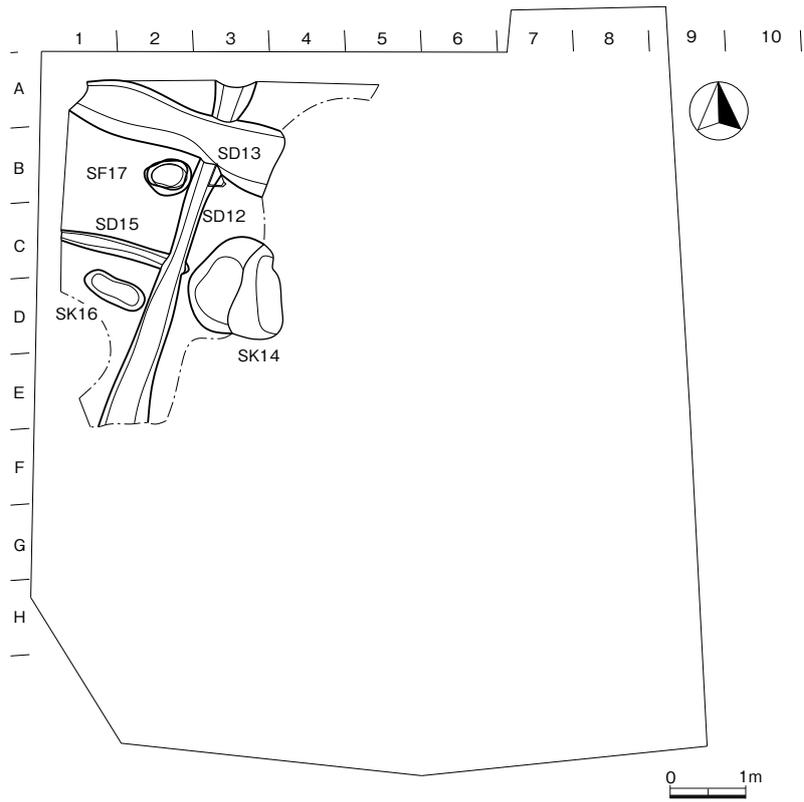
(3) 旧石器時代

立川ローム層Ⅶ層で石器・剥片・礫が 15 点出土した (6、7 図)。またⅩ層中で炭化物が集中する範囲が認められた (8、9 図)。

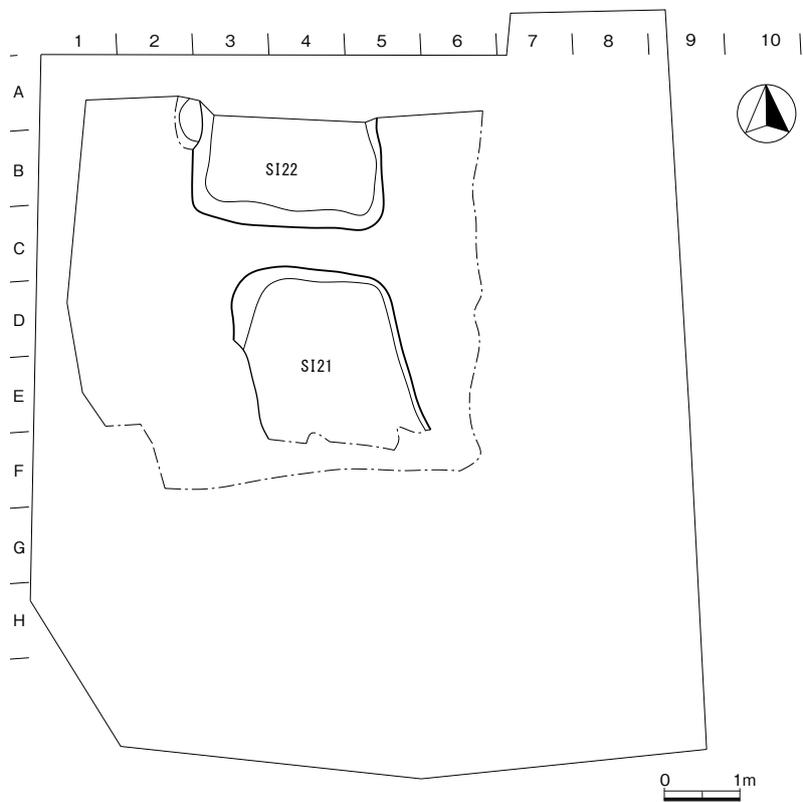
2. 調査結果

調査地点は本郷台の北東隅にあたり、北側と東側は低地へと急激に下がる地形に位置している。こうした立地状況から、関東ローム層の堆積も北東側へ向かって傾斜していると予想したが、調査で確認した堆積状況は水平だった。本来はもっと北側まで台地が続いており、後述の様に住居址も北側へと続くことから、藩邸の造成に伴って切り崩されたことが想定できる。本調査地点の南側では、看護師宿舎の建設に伴う発掘調査がこれまで 3 期実施されている (看護師宿舎地点Ⅰ～Ⅲ)。いずれの地点でも古墳時代前期の住居址が検出されている。特に本調査地点の南側に隣接する看護師宿舎地点Ⅰ期の調査では、該期の住居址が 6 基検出されている。病院地区では古墳時代前期の住居址を主体としながら、中期以降の住居址をあわせて 20 基ほど検出しており、古墳時代の集落が長期間にわたって営まれていたことが明らかになっている。SI22 が調査区北側に続くことから、古墳時代の集落の範囲が従来考えられていたよりも北側まで広がっていたことが予想される。

江戸時代の本地点は富山藩邸にあたる。しかし検出された遺構はわずかであり、藩邸北東隅の空地だったことがうかがえる。



1図 3面全体図



2図 SI21・SI22全体図

3. 医学部附属病院ドナルド・マクドナルドハウス地点 (HMH10)



3 図 SD12・SD13



4 図 SF17



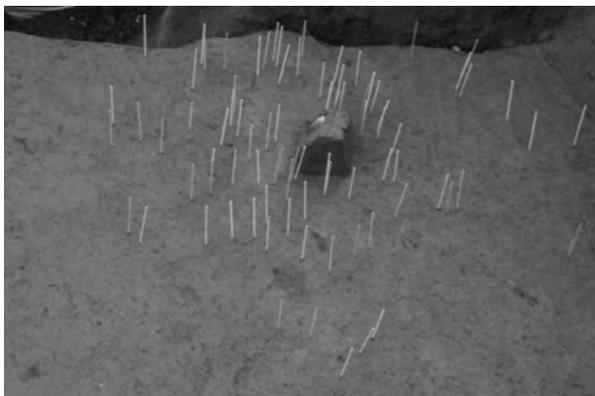
5 図 SI21

石器	剥片・碎片	礫
1	8	6

6 図 出土石器・礫組成表



7 図 石斧出土状況



8 図 炭化物集中部



9 図 土層堆積状況 (北から)

4. 本郷99 法学部3号館増築地点1期 (HLS10-1)

所在地 東京都文京区本郷7-3-1 (文京区 No.47 本郷台遺跡群内)

調査期間 2010年7月20日～2010年8月23日

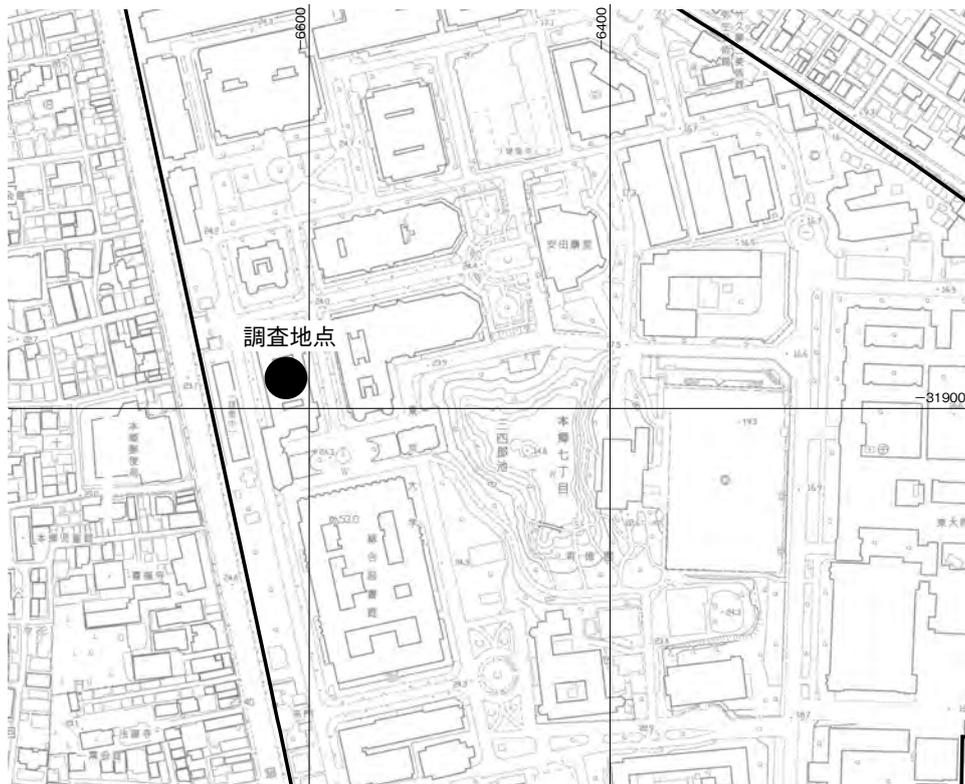
調査面積 55㎡

調査担当 追川 吉生

1. 調査の経緯と経過

東京大学は本郷キャンパス (文京区本郷7丁目) 内に所在する、法学部3号館の中庭部分に増築を予定した。建設予定地は、文京区が遺跡番号47「本郷台遺跡群」として登録した周知の遺跡にあたる。また、建設予定地の南側にある法学部4号館の建設に際しては、江戸時代の遺跡が発掘されている (東京大学遺跡調査室1990)。

そこで2010年5月10日～13日にかけて、本学埋蔵文化財調査室が試掘調査 (合計約9㎡) を実施し、遺跡の存在を確認した。試掘調査の成果を受けて、2010年7月20日から8月23日までの期間で事前調査を行った。調査面積は55㎡である (1図)。



1図 調査区の位置

2. 調査の結果

遺跡からは3枚の生活面から25基の遺構が検出された。そのうち最上位の1面には、レンガ片が伴っているので、それより下位の2枚の生活面が江戸時代になる。最も下の3面はローム層直上である。各遺構が帰属する面については、今後の整理作業を経て確定したい。ここでは検出された主な遺構を報告する。



2図 SL7



3図 SU9

(1) 1・2面

SL7 (2図)

南北85cm、東西は東側が調査区外に続いているため不明だが、現状で85cmの方形を呈する遺構で、深さ65cm。四隅（南東隅は攪乱で破壊）に直径30～40cm、深さ30cmのピットを伴い、覆土に黄灰色粘土を含んだ便所遺構である。

SU9 (3図)

北側が調査区外に続いており、西側を別遺構で切られている地下室。現状で南北85cm、東西235cm、深さ50cm。西側の遺構は安全上、調査を実施しなかった。東側の方形部分はおそらく別遺構だが、1つの遺構として調査した。この部分と、調査を実施しなかった西側の遺構との関係については不明である。壁面と床面に工具の痕跡が著しい。

(2) 2・3面

SB10 (4、5図)

長軸60cm、短軸45cm、厚さ29cmの礎石。礎石の長軸は東西軸とほぼ一致する。礎石の東側直下に一辺30cm、厚さ30～40cmの礫が2つある他は、根石を伴わない。掘り方は平面の形状が南北85cm、東西120cmの長方形を呈しており、深さ50cm。ここより2.5m東側にSK16がある。これは礎石を伴わず、掘り方の深さ45cmの土坑で、SB10と関係しない。あるいは礎石を壊して、SK16がつくられた可能性もあるが、不明である。西側についても攪乱のため、SB10に伴う礎石の有無については不明である。

SK11 (6図)

南北2.9m、東西2.0m、深さ0.25mの土坑。北側は調査区外に続いている。南側は攪乱によって壊

されている。覆土には直径5～10cmの礫が多量に含まれており、極めてしまりが強い。

SD12 (6 図)

南北2.9m、東西0.9m、深さ0.4mの溝。SK11の西側を壊しており、同様に北側・南側の状況は不明。

SE25 (7 図)

平面形が南北55cm(北側は調査区外)、東西150cmの方形を呈している。60cmほど掘り下げたところに段を有しており、それ以下は円形となる。調査範囲がせまく、遺構確認面から150cm掘削したところで調査を中止したが、遺構はそれよりも1m以上続いているようである。遺構の形状から井戸と判断したが、遺物は出土していない。



4 図 SB10



5 図 SB10・SK16



6 図 SK11・SD12



7 図 SE25

3. 調査のまとめ

調査区が狭小のため、完掘のできた遺構はごく少数にとどまった。本調査地点の南側では、法学部4号館地点が既に調査されている(東京大学遺跡調査室1990)。本調査地点と法学部4号館地点との関係は10図のようになる。現段階では、両地点にまたがる溝やピット列などは見いだせない。

ところで本地点を含むキャンパス一帯は加賀藩の大名屋敷だった。加賀藩本郷邸を描いた絵図はいくつか伝世するが、そのうち『武弐本郷第図』(1688年)によると、本地点や法学部4号館地点は長屋として利用されていたことがうかがえる(8図)。東西にのびる長屋の北側には、井戸を示す丸印がそれぞれ2～3基記されている。そのうち最も南側の長屋に付属する井戸が、法学部4号館地点で検出されたB5-1号土坑とG6-1・4号土坑に比定されている(10図)。

4. 法学部3号館増築地点1期 (HLS10-1)

そのうち G6-1・4号土坑は確認面の直径160cmの井戸 (G6-4) に、南北260cm、東西330cm、深さ74cmの土坑 (G6-1) が伴うものである (7図)。SE25も東西150cm (南北は不明) の土坑を伴っており、規模や構造 (G6-4号土坑は二重構造) に若干の相違はあるものの、SE25の検出状況を考えると、同様の井戸であった可能性が高い。

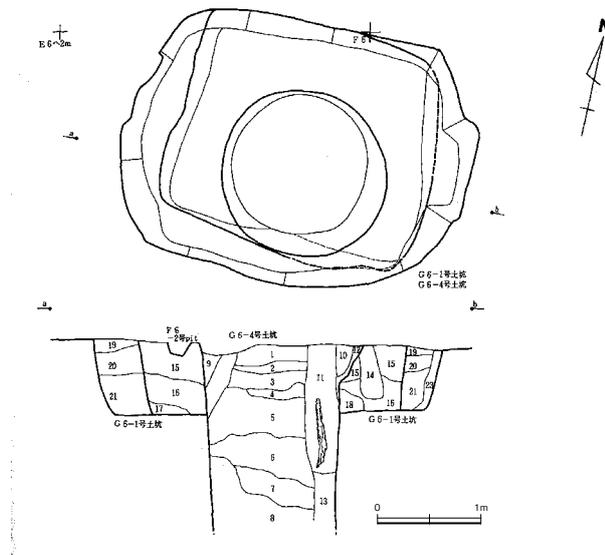
このように本地点は調査面積こそ狭小であるが、検出遺構は井戸をはじめ、地下室、便所、礎石など多様であり、法学部4号館地点や他の隣接する調査地との関係を考察する中で、本郷邸の詰人空間の一端を明らかにすることが期待される。今後行う整理作業では、こうした点に留意しながら進めていく必要がある。

参考文献

東京大学遺跡調査室 1990 『法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』



8図 『武芻本郷第図』(前田育徳会尊経閣文庫所蔵)



7図 G61・4号土坑

第2部 2010年度調査室事業概要



10 図 法学部 3・4号館地点の位置関係

5. 本郷99 法学部3号館増築地点2期 (HLS10-2)

所在地 東京都文京区本郷7-3-1 (文京区 No.47 本郷台遺跡群内)

調査期間 2011年1月18日～1月26日

調査面積 268㎡

調査担当 大成 可乃

1. 調査の経緯と経過

当調査は東京大学本郷構内正門東側に位置する法学部3号館増築工事に伴うもので、2010年7月20日から8月23日まで事前調査が行われた法学部3号館増築I期地点(以下、HLS10-1)の南側に位置する地点である(1図)。HLS10-1は中庭として利用されていたこともあり、江戸時代に帰属すると考えられる2枚の生活面、井戸、地下室、便所、溝などの遺構が遺存していた。

しかし当地点は北側が書庫、南側が電気室として利用されており、これらの基礎による攪乱が大きいことが予想された。そこでまず既存建物解体作業終了後の2010年12月27日に立会調査を実施した。その結果、調査区南側の東西約10m、南北約3mの範囲に地下室や土坑などの遺構が予想以上に良好に遺存していることが確認された。この結果を受けて文京区と東京大学が協議した結果、2011年1月18日から26日まで268㎡の事前調査を実施した

2. 調査の結果(1～6図)

調査区内に平面直角座標系(日本測地系)第IX系を基準とした杭を5m毎に設定したが、その杭はHLS10-1との関連性に考慮し、HLS10-1のグリッドを南側へ延長する形で設定した。すなわち西から東へJ～L、北から南へ3～8の数字を組み合わせたものを各杭の名称とし、北西隅の杭を基準杭とした。

重機による表土掘削を立会調査が実施された南側から実施したところ、法学部3号館床面から-2～-3m前後でローム面(地山)上に遺存する遺構を検出した。なお立会調査でも指摘されていたように、既存建物基礎と解体工事による攪乱によりローム上面は大きく削平され、すでにローム層の第IIブラックバンドまで確認される状態となっており、江戸時代に帰属する生活面は検出されず、遺構確認はすべてローム面で実施した。また立会調査範囲より北側については、現地表面より4m以上削平、攪乱されていることが明らかになったため、調査の安全を確保できないと判断し、発掘調査は行わなかった。

検出遺構総数は9基、大半は地下室や大形土坑の坑底部と考えられる遺構である(2図)。遺物は遺物収納箱の総数で10箱出土したが、その大半はSU32とSU39の2遺構から出土したものである。

地下室(4図)

SU32、33、39、40の4基が地下室と考えられる。断面形をみると33が方形である以外、すべてフラスコ形を呈すものである。しかも32、39などは遺存している切り込み面を考慮すると、かなり深く、規模も大きなものであったと想定される。この4基には切り合い関係があるが、いずれの地下室からも18世紀前半頃に廃棄されたと考えられる遺物が出土しており、比較的短期間のうちに構築、廃棄

が繰り返されたことが想定される。

土坑

SK31、34、35、37、39の5基が確認された。SK35を除き、いずれも平面形が方形ないし長方形を呈すものである。確認面から坑底までの深さはバラつきがあるが、いずれも壁面は垂直で、坑底とともに比較的平坦にされている。SK35(5、6図)は調査区南東隅で検出され、大半が調査区域外へ拡がるため平面形状は不明であるが、確認された坑底は北側が深さ0.4m、南側が深さ1mで、北から南に傾斜し、坑底や壁面は工具痕が顕著であった。埋土は黒色土の単一層でほぼ一度に埋まっている様子が確認され、遺物は本瓦の破片が1点出土したのみであり、性格不明の遺構である。

3. 調査のまとめ

調査区の北側2/3以上が既存建物基礎と解体工事による削平とで大きく攪乱され、その南側も現地表から平均2m近く削平され、遺構確認もローム(地山)面での確認にとどまり、HLS10-1のような江戸時代の生活面を確認することはできなかったが、地下室4基、土坑5基を調査することができた。

これらの遺構の大半には切り合い関係があったが、各遺構から出土した遺物の年代をみると18世紀前半代に収まるものであり、この空間が18世紀前半代には地下室や土坑などの構築、廃棄を頻繁に繰り返していたことが推測される。

本地点南側に隣接する法学部4号館地点(以下、4号館地点)は、元禄元年作成とされる絵図面『武州本郷第図』との照合から、17世紀末から18世紀前半には東西方向の長屋が南北に並ぶ詰人空間に該当すること報告がされている。本地点も4号館地点の成果や同絵図との照合から、同地点で確認された長屋のすぐ北側に隣接する長屋の南側庭部分に該当することが想定される。4号館地点においてこの長屋群に帰属すると考えられる遺構は、いずれも真北方向に主軸をもつ遺構であることが指摘されているが、今回検出された遺構も大半がほぼ真北方向に主軸をもつものである。

遺構の主軸、遺構出土の遺物の年代観などを考慮すると、今回検出された遺構が絵図に記された長屋群に帰属する遺構である可能性が高い。

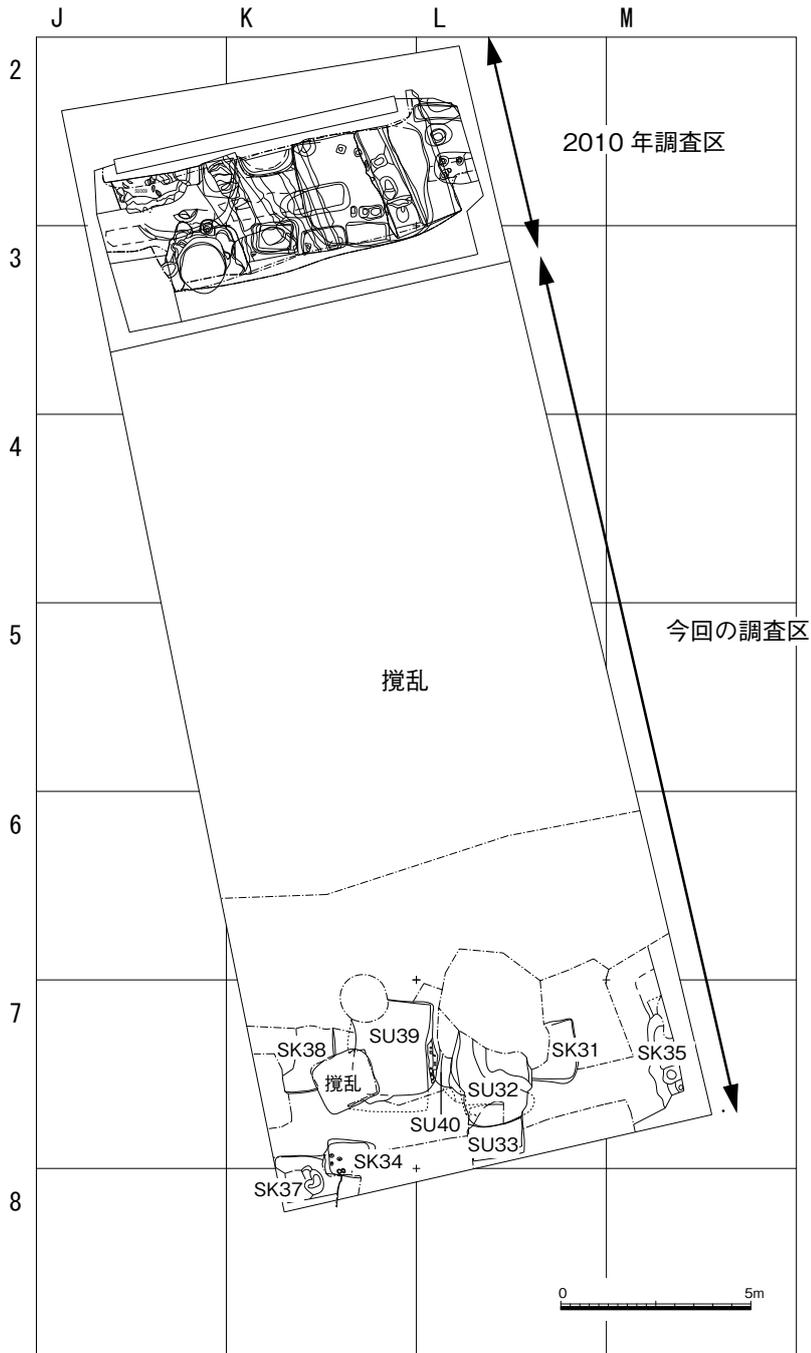
【引用・参考文献】

東京大学遺跡調査室 1990『法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』

5. 法学部3号館増築地点2期 (HLS10-2)



1図 調査位置図



2図 全体図



3図 全景



4図 左からSK31、SU32、SU40、SU39

5. 法学部3号館増築地点2期 (HLS10-2)



5 図 SK35 東西セクション



6 図 SK35

第2節 本郷構内の試掘調査

1. 本郷98 原子動力実験棟地点

所在地 東京都文京区弥生2-11-16 (文京区No.28 弥生町遺跡群、文京区No.47 本郷台遺跡群内)
 調査期間 2010年4月9日
 調査面積 16.0m²
 調査担当 原 祐一

調査の経緯と概要

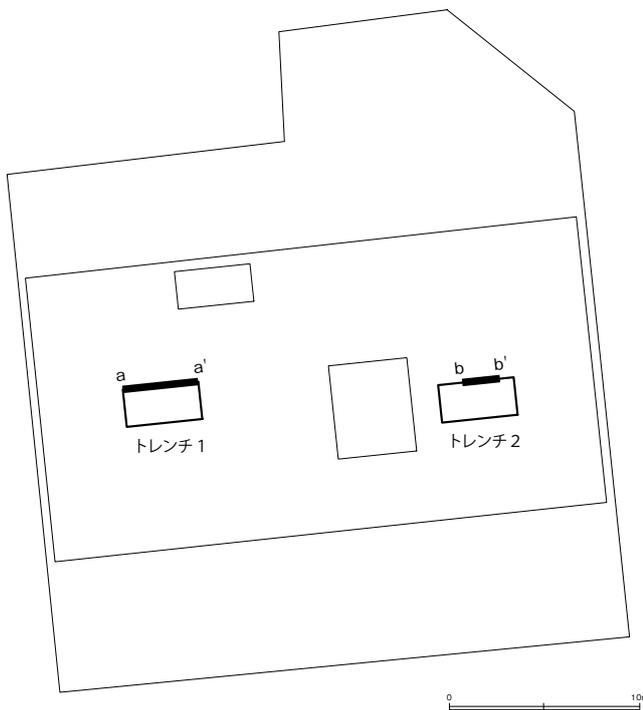
東京大学は、浅野地区工学部原子動力実験棟の改築を計画、埋蔵文化財調査室に対して改築予定地の遺跡存否について問い合わせがあった。隣接する工学部新3号館建替退避用建物建設地点(2009年度調査)では、遺跡が確認されていることから当地点でも遺跡の存在が予想されること、改築工事は床の撤去工事だけでなく地下構造物の撤去を伴うため試掘調査を行うことになった(1図)。調査は原祐一の指導のもと大成エンジニアリング株式会社が行った。原子動力実験棟内の2箇所(4×2m)のトレンチを設定、重機による掘削後、各トレンチ写真撮影と土層断面図を作成した(2～4図)。

調査結果

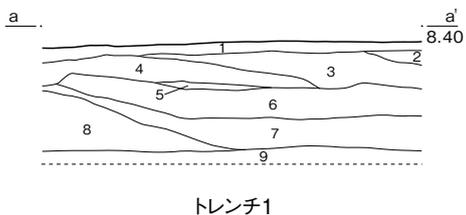
調査の結果、遺構は検出されなかったが、当地点においても工学部新3号館建替退避用建物建設地点(2009年度調査)で確認された台地の削平が確認された。遺構は検出しなかったが当地点で行われた台地の削平と自然堆積層の堆積が観察できたため、事前調査の必要は無いと判断した。



1図 調査区位置図



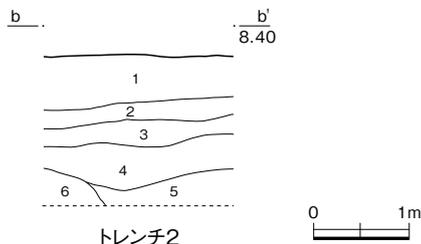
2 図 トレンチ配置図



トレンチ1

- 1 砂主体、礫含む 原子動力実験棟床面整地層
- 2 褐(10YR) ローム土主体、締りあり、粘性あり、盛土(年代不明)
- 3 暗褐(10YR) 黒ボク土主体、φ2~4cm礫含む、締りあり、粘性あり、盛土(年代不明)
- 4 灰黄(2.5Y)砂主体、φ2~4cm灰白(2.5Y)粘土ブロック含む。締りあり、粘性やや強い
- 5 暗灰黄(2.5Y)砂主体、φ1~3cm礫少量含む。締りあり、粘性やや強い
- 6 浅黄(2.5Y)砂主体、黄灰(2.5Y)粘土との互層堆積。締りあり、粘性強い
- 7 黄灰(2.5Y)砂主体、礫多量含む。締りあり、粘性強い
- 8 灰(5Y)砂主体、礫多量含む。締りあり、粘性強い
- 9 礫主体、灰(5Y)砂含む 有力

3 図 トレンチ1 土層堆積状況



トレンチ2

- 1 砂と礫 原子動力実験棟床面整地層
- 2 暗褐(10YR) 黒ボク土80%、明黄褐(10YR)ローム土φ5~10cm20%、締りあり、粘性あり、盛土(年代不明)
- 3 オリーブ黒(5Y) 黒ボク土90%、黄褐(10YR)ローム土φ5~10cm10%、締りあり、粘性強い
- 4 暗褐(10YR) 黒ボク土90%、黄褐(10YR)ローム土10%、締りあり、粘性強い
- 5 灰黄褐(10YR)ローム土φ1~5cm80%、黄褐(10YR)ローム土10%、褐(10YR)黒ボク土10%、褐色ローム土10%含む。締りやや強く、粘性強い
- 6 黒(10YR)泥炭質土(有機物)締りややあり、粘性強い

4 図 トレンチ2 土層堆積状況

2. 本郷99 法学部3号館増築地点1期

所在地 東京都文京区本郷7-3-1(文京区No.47本郷台遺跡群内)

調査期間 2010年5月10日～13日

調査面積 約9㎡

調査担当 堀内 秀樹

調査の経緯と概要

東京大学は、文京区本郷7丁目に所在する本郷キャンパスに法学部3号館の中庭部分の増築を予定している。建設予定地点は、文京区遺跡番号47「本郷台遺跡群」として登録されており、工事を行うにあたって埋蔵文化財の遺存状況を確認する必要があった。試掘調査は、増築予定範囲と現状において調査が可能である範囲などを勘案し埋蔵文化財の有無、遺存状況を確認した。

調査は、中庭上面を覆っていたコンクリートとその栗石層約60cmをコンクリートドリルで除去した後、人力掘削によって埋蔵文化財の確認調査を行った。トレンチは1図のように約2×2mを建物方向と同主軸に2本設定し、東側をトレンチ1、西側をトレンチ2と命名した(1図)。

トレンチ1(2図) トレンチ1は、北側を法学部3号館建築時(設計は大正13年)に埋設したタンクによって、攪乱されていた。その他の部分は、比較的良好に江戸時代の盛土、生活面が遺存していた。遺構と推定された落ち込みは、法学部3号館建築時のコンクリートとレンガを取り除いた標高23m付近から少なくとも2基確認され、中央から南側にかけての落ち込みからは、17世紀末の陶磁器類が比較的多く出土した。この遺構は、北側(2図左点線部分北側)に段を有するように落ち込んでおり、壁や坑底に凹凸を有する廃棄土坑様の遺構であろうと推定された。また、トレンチ南東角からこれに切られる落ち込みが確認された。トレンチ南西角は、上から切り込まれている攪乱や遺構が存在しなかった。ここでの土層の堆積状況は、約20cm程度の厚さで江戸時代の盛土層が2枚、遺構確認面下約40～50cm付近からソフトロームが検出された。

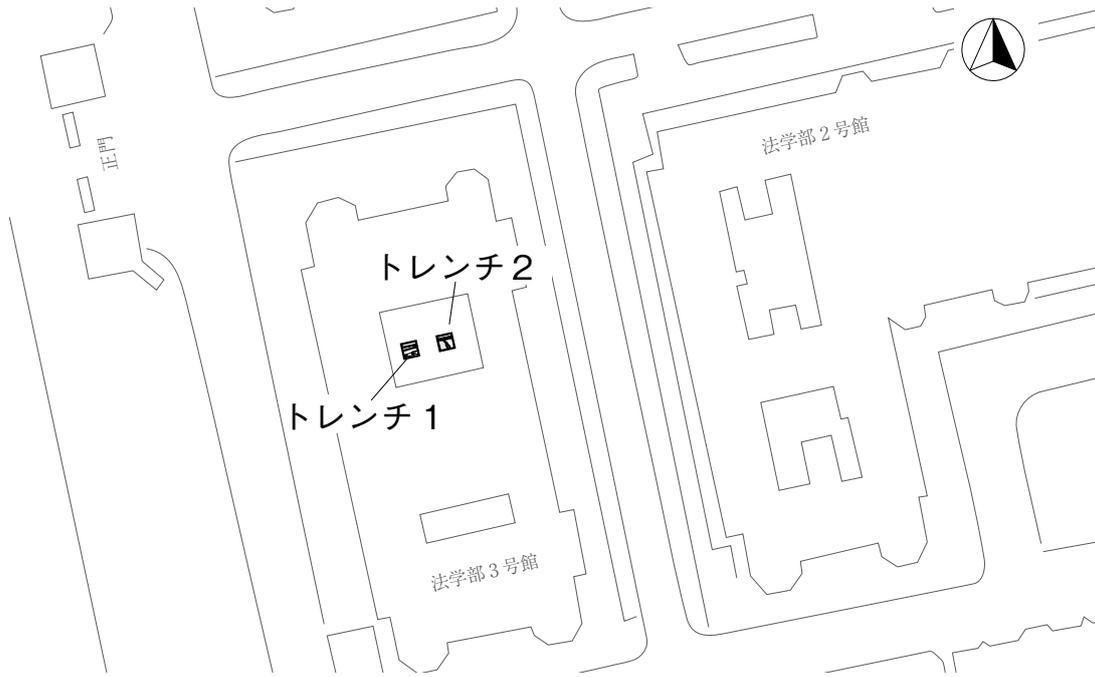
トレンチ2(2・3図) トレンチ2は、法学部3号館建築時(設計は大正13年)に埋設したタンクによってトレンチ北側が壊されていた。その他の部分は、比較的良好に江戸時代の盛土、生活面が遺存していた状況は、トレンチ1と近似している。

コンクリートとレンガを取り除いた下層は、江戸時代の盛土層と思われる暗茶褐色土層が確認され、この盛土層下には硬化面がトレンチ全体に広がっていた(2図右)。硬化面は、西側ではロームの上層に暗褐色土、東側では遺構を埋めた後に砂利を多く含む暗褐色土を用いてタタキ締められていた。東側硬化面下にタンクの掘方の断面で確認された遺構は、深さの確認を行ったが、硬化面下約60cmに至るも坑底は検出できなかった。

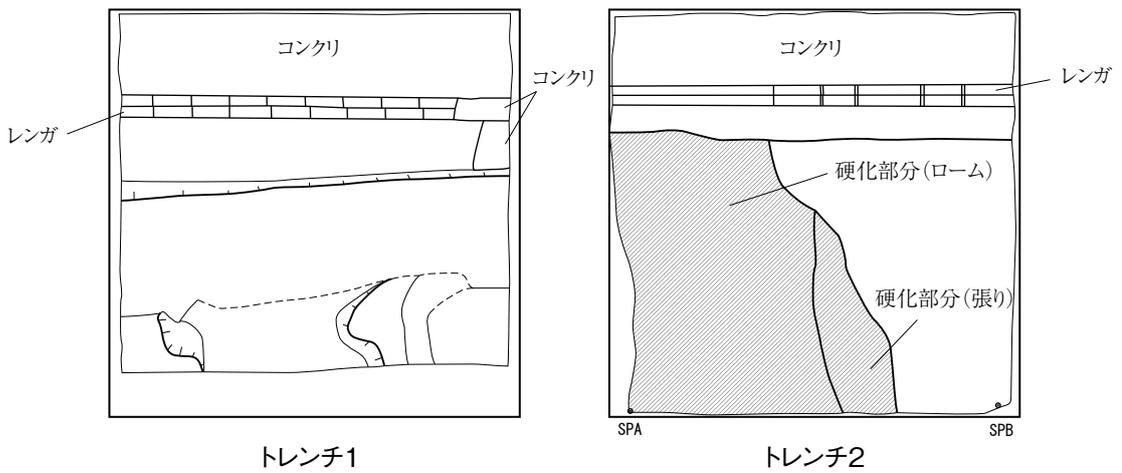
調査結果

法学部3号館増築に伴う試掘調査では、調査が行える範囲は少なかったものの、江戸時代加賀藩邸に伴うと思われる生活面と遺構が良好な状態で遺存していることが確認された。

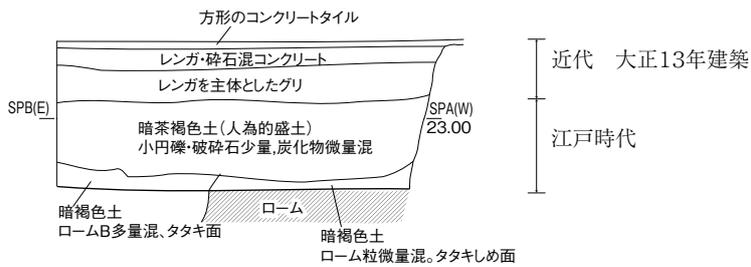
本郷構内の試掘調査



1 図 トレンチ配置図



2 図 平面図



3 図 トレンチ 2 土層堆積状況

3. 本郷 101 医学部附属病院ドナルド・マクドナルド・ハウス地点

所在地 東京都文京区本郷7-3-1(文京区No.47本郷台遺跡群内)

調査期間 2010年10月25日～29日

調査面積 33㎡

調査担当 追川 吉生

調査の経緯と概要

東京大学は、文京区本郷7丁目に所在する医学部附属病院(本郷キャンパス内)にドナルド・マクドナルド・ハウスの建設を予定している。建設予定地点は本郷台遺跡群(文京区遺跡番号47)として登録されており、これまでも予定地に隣接する看護師宿舎地点(I～Ⅲ期)、立体駐車場地点などで旧石器時代から江戸時代にかけての遺跡の調査が行われている。そのため当該施設の建設工事を行うにあたって埋蔵文化財の遺存状況を確認する必要がある。

試掘調査は本学埋蔵文化財調査室によって2010年10月25日～29日にかけて、室員の追川吉生が調査予定地約370㎡中、合計約33㎡を対象に行った。その概要を報告する。

試掘調査は予定建物の位置、および旧東第一病棟(1994年取り壊し)の位置を勘案し、4箇所の試掘トレンチを設定した上で実施した(1図)。

第1トレンチ 調査区の北東隅に、南北2.5m・東西6.0mの範囲で設定した。攪乱を受けており、レンガを含む土が堆積している。現地表面から8.0mほど掘り下げて砂礫層を検出した。

第2トレンチ 調査区の北西隅に、南北1.5m・東西7.0mの範囲で設定した。トレンチ西端から2mまでは、第1トレンチ同様の攪乱が認められるが、そこから東側では攪乱が浅くなっており、現地表面から約4.2mで立川ローム層を確認した。トレンチ西端から3.5mから攪乱は更に浅くなり、現地表面から2.0mで立川ロームとなる。

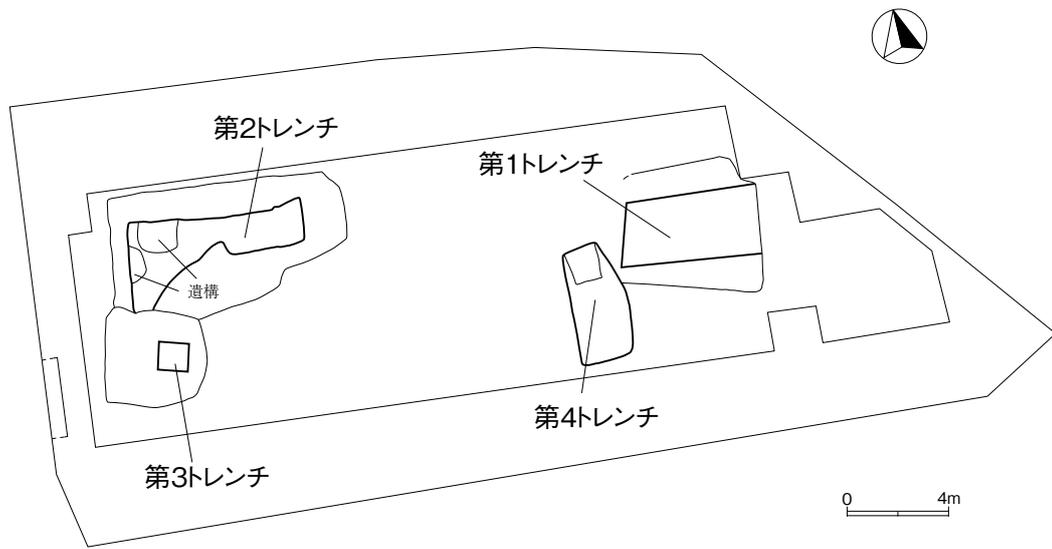
第2トレンチの東側～2.5mの範囲に、現地表面から約1.5mの深さで江戸時代の地下室・土坑を確認した。遺構検出面はローム層よりも上位にあり、少なくともこの面とローム面の2面に江戸時代の遺構が残されていることが予想される(2図)。

第3トレンチ 調査区の南西、旧東第一病棟の地下通路部にあたる場所に、1.2m四方の範囲で設定した。現地表面から約4.0mの深さまでは地下通路に伴う攪乱の影響を受けているが、それ以下には立川ローム層が残されていることを確認した。

第4トレンチ 調査区南西から約20mの位置に、南北4.5m、東西2.0mの範囲で設定した。堆積状況は第1トレンチと同様の状況を呈しており、深さ4.0mまで掘削したところで調査を終了した(3図)。

調査結果

以上の試掘の結果、本調査区では広範囲にわたって極めて深い攪乱が認められることがうかがえた。しかし第2トレンチ周辺には、少なくとも江戸時代の生活面が2面あることが確認された。また本調査区の南側にあたる看護師宿舎(Ⅲ期)では、古墳時代の竪穴住居跡が検出されているほか、立川ロームⅦ層で石器群が出土している。このことを勘案するに、本調査区においても第2トレンチ周辺では江戸時代以前の遺構・遺物が遺存している可能性が予想される。第2トレンチから第3トレンチ周辺については、事前調査を実施する必要があると考えられる。



1 図 トレンチ配置図



2 図 第2トレンチ



3 図 第4トレンチ

4. 本郷 103 春日門横教育研究棟地点

所在地 東京都文京区本郷7-3-1(文京区 No.47 本郷台遺跡群内)

調査期間 2011年3月13日～18日

調査面積 43.8㎡

調査担当 大成 可乃

調査の経過と概要

東京大学では春日門北側に教育研究棟の新営を計画している。当該地は周知の遺跡に該当(文京区 No.47 本郷台遺跡群)するため、建築に先立ち埋蔵文化財の遺存状況を確認する必要があった。東京大学施設部から照会を受けた埋蔵文化財調査室では、上記日程で埋蔵文化財の遺存状況を確認するための試掘調査を実施した。

建設予定範囲には既存建物(情報学環・暫定アネックス)が存在するため、試掘調査は建設予定範囲に近接する懐徳館庭園内で実施し、試掘坑(トレンチ)は東西1.5m幅で、南北に伸びる埋設管を避け、情報学環・暫定アネックス建物の西側に、南北方向に3箇所設定した(1図)。

地形は北から南へ傾斜しており、北側に設定したトレンチ3では現地表-0.5mまでは近現代の表土・攪乱であり、-1.0～1.5mで関東ローム層(地山)が確認されるが、南側のトレンチ2では現地表-0.7mまでは近現代の表土・攪乱であり、-1.3～1.8mで地山が確認された。

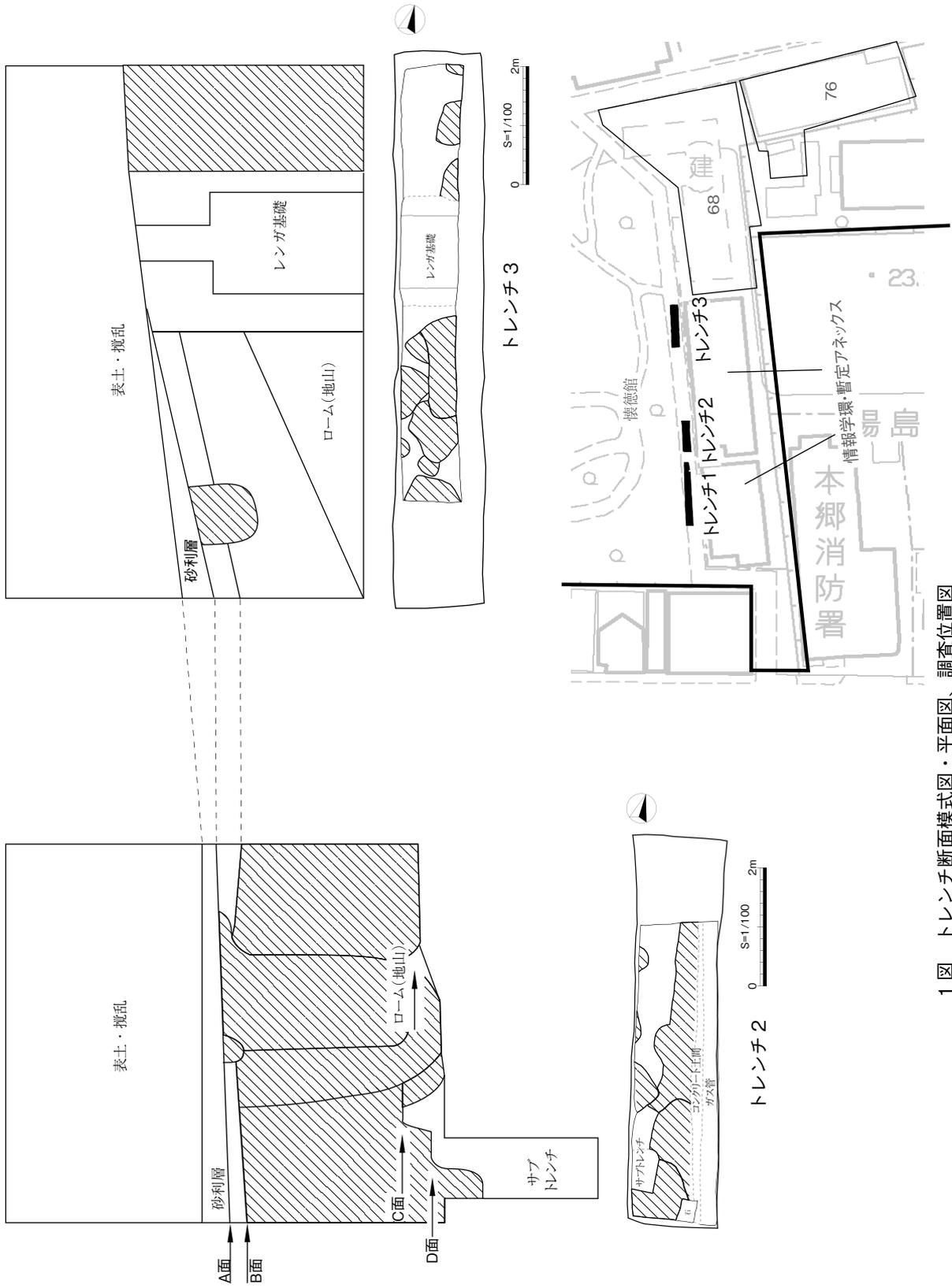
発掘調査の対象となる面は全体では3面(A、B面、地山)あることが確認されたが、トレンチ2のように局所的に5面(A～D面、地山)ある場所も確認された。なお全トレンチで表土・攪乱層直下で確認された玉石を多く含む整地層(1図・砂利層)からは遺物が出土せず、帰属時期が判断できなかったが、トレンチ2内の東壁において同レベルにコンクリート土間が確認されており、この土間に伴う整地層と推測された。またトレンチ3ではこの整地層がレンガ基礎をパックする形で確認されており、試掘調査段階では、この玉石を多く含む層からなる整地面は近現代に帰属する面と判断した。

全体的に遺構(図・斜線部分)密度は比較的高く、各トレンチ内で地山を確認できた範囲は少ない。しかも大形の遺構が多数遺存している状況が確認され、中には現地表-2.8mでもその坑底を確認できない遺構も存在する。ただし北側のトレンチ3は、他のトレンチと比較すると遺構規模がやや小さく、密度も低い。

トレンチ3箇所から出土した遺物総量は遺物収納箱約1箱分であったが、それらの大半は18世紀後半に廃棄されたと考えられるものである。

調査の結果

文献史料などによると江戸時代の調査地点は、明暦の大火以前は同心屋敷、大火以後は加賀藩邸に該当し、絵図面との対比から藩邸南端に位置する家臣の居住空間であり、長屋などが建ち並んでいた場所である事が推定される。本地点北側に近接するインキュベーション施設地点(現・産学連携プラザ、[本郷68]略称INC)、その東側に隣接するベンチャープラザ地点(現・アントレプレナープラザ、[本郷76]略称HVP06)などでは、それを裏付ける礎石建物遺構、雨落ち溝、地下室、便所、土坑などが検出されている。今回の試掘で検出された遺構の大半もその規模や形状、出土遺物の年代観などから長屋に伴う地下室や土坑などである可能性が高い。なお今回の出土遺物に17世紀初頭の遺物が一部含まれており、INCやHVP06地点でも確認され、指摘されている同心屋敷に関係する可能性のある遺構や遺物が検出されることも予想される。



1 図 トレンチ断面模式図・平面図、調査位置図

第3節 本郷構内の立会調査

1. 本郷99 法学部3号館増築地点2期

所在地 東京都文京区本郷7-3-1(文京区No.47本郷台遺跡群内)

調査期間 2009年12月27日

調査担当 追川 吉生

調査結果

東京大学は本郷キャンパス(文京区本郷7丁目)内に所在する、法学部3号館の中庭部分に増築を予定した。建設予定地は、遺跡番号47「本郷台遺跡群」として周知の遺跡に登録されている。また、建設予定地の南側にある法学部4号館の建設に際しては、江戸時代の遺跡が発掘されている(東京大学遺跡調査室1990)。

増築対象となる中庭部分の状況は、北側は庭のままだが、中央部には書庫、南側には電気室が設けられていた。そのため中央と南側に関してはこれらの基礎により、大きく壊されていることが予想された。

そこで北側の庭の部分(55㎡)については2010年7月20日から8月23日の日程で事前調査を実施(1期)し、中央部と南側に関しては解体作業終了後に立会調査を実施することにした(2期)。

東西約10m、南北約3mの範囲を掘削した。この範囲で地下室4基、土坑など3基を検出した(1図)。これは当初の予想よりも遺跡が良好に遺存していることをうかがわせるものである。

掘削範囲よりも南側でもローム層の堆積が認められる。上記の結果は、本予定地の工事着工前に、事前調査を実施することが適切であると判断し、立会調査でのこれ以上の掘削は中止した。

また調査区中央部の旧書庫の地下に関しては、建物の基礎がローム層全体を破壊している可能性が高いが、南側に関しては遺跡の遺存状況は概ね良好であることを確認した。



1図 遺構検出状況

2. 本郷 102 本郷通り囲障改修地点

所在地 東京都文京区本郷7-3-1 (文京区 No.47 本郷台遺跡群内)

調査期間 2010年12月2日、13日

調査担当 追川 吉生

調査結果

改修工事では本郷通りに沿って南北方向に並ぶ柱の部分が掘削される。そのうち1図にあげたA地点とB地点の2地点において立会調査を実施した。

A地点

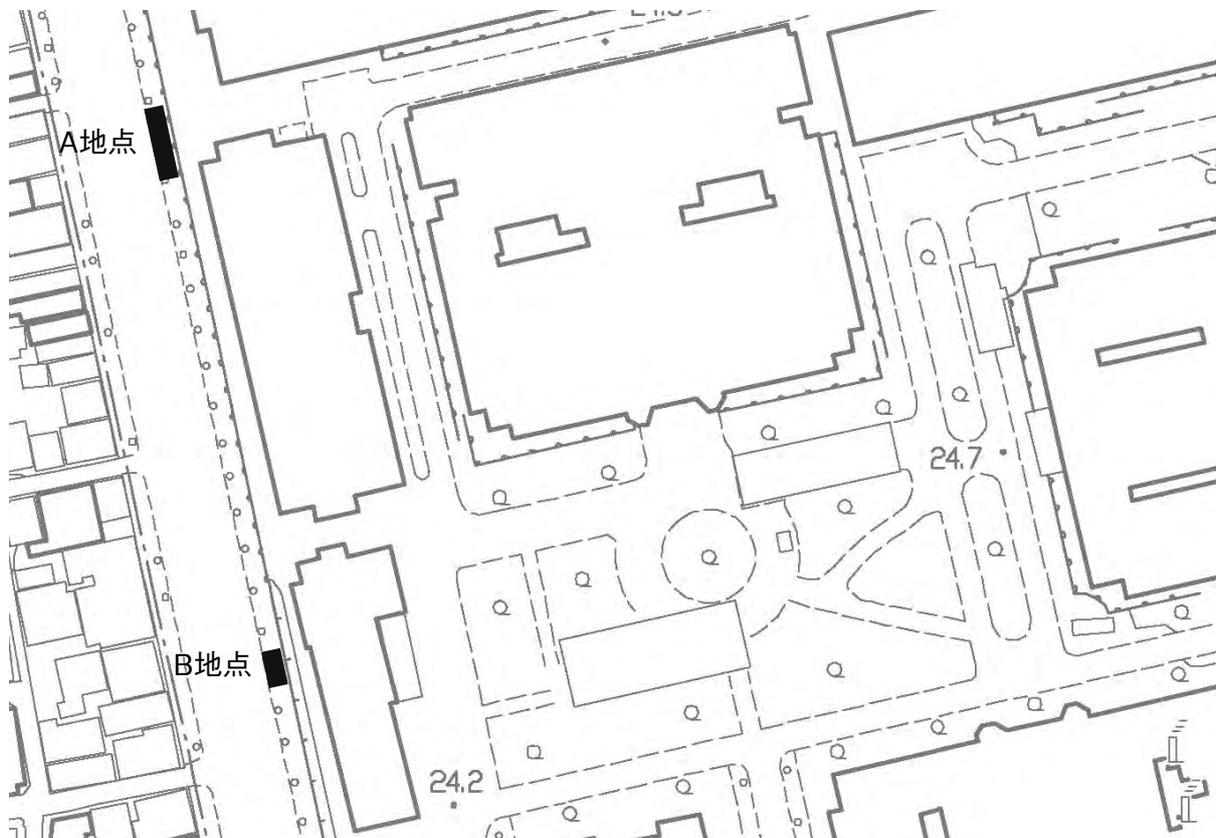
12月2日に実施。掘削深度は約25cm。レンガ、コンクリートブロックなどが含まれており、遺跡包含層まで達していない。

B地点

12月13日に実施。掘削深度は約30cm。レンガ、コンクリートブロックなどが含まれており、遺跡包含層まで達していない。

掘削作業は南側の工事箇所ほど掘削深度が深くなる計画だった。しかし上記のとおり、B地点周辺の掘削深度でも30cm程度であり、この工事によって遺跡包含層に達する掘削が行われることはない。また2地点の調査いずれにおいても、遺構および遺物は認められなかった。

以上のことから、本工事に伴って埋蔵文化財の事前調査の必要はないと判断した。



1図 調査地点位置図

3. 本郷 104 防犯ネットワークカメラ賃貸借地点

所在地 東京都文京区本郷7-3-1、文京区弥生1-1-1（文京区No.47本郷台遺跡群内）

調査期間 2010年7月30日～8月11日

調査担当 原 祐一

調査結果

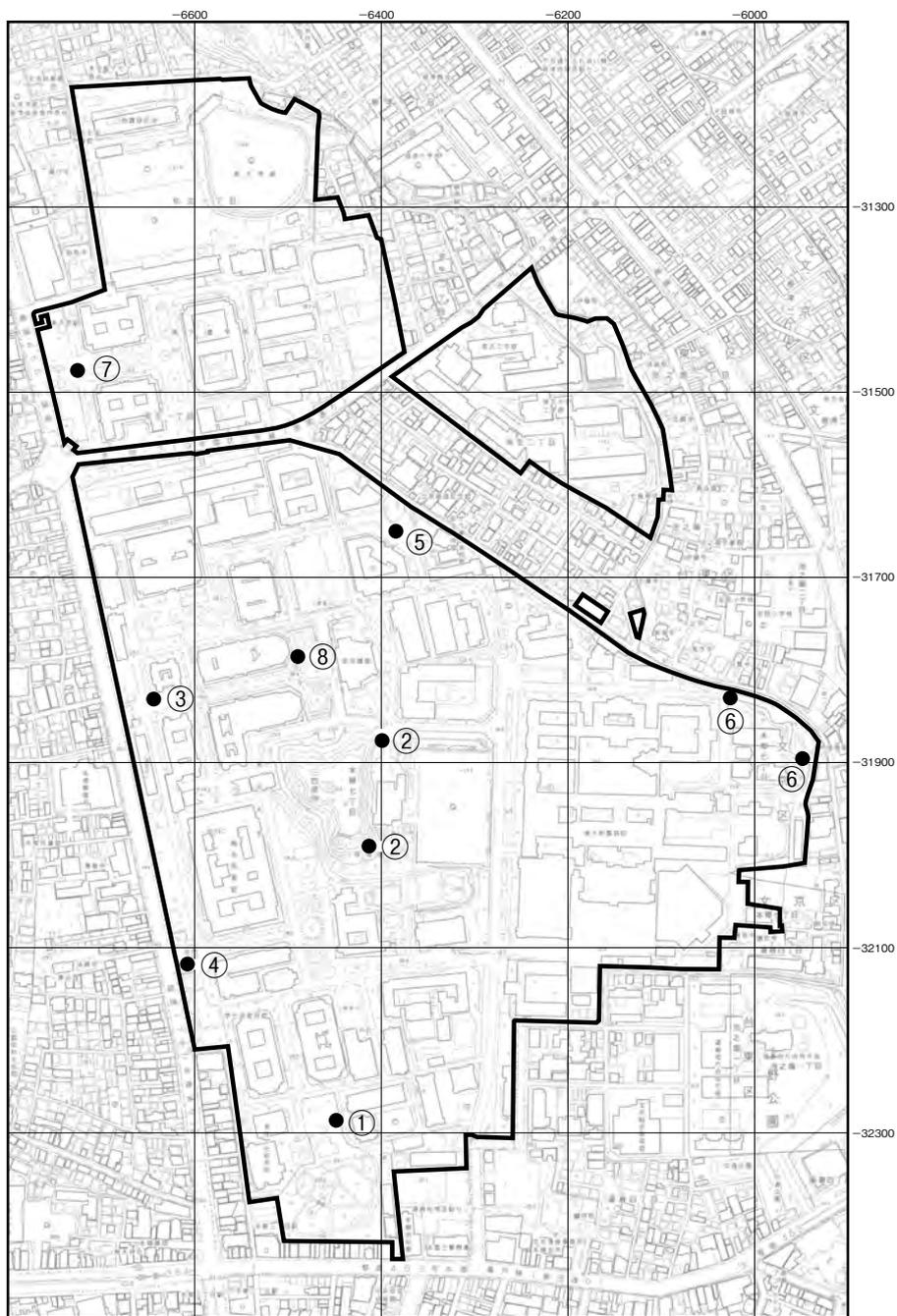
東京大学は、東京大学本郷構内と弥生構内で防犯用ネットワークカメラ賃貸借の工事を計画、工事予定地が文化財保護法第93条第1項の規定に基づく周知の埋蔵文化財包蔵地（本郷台遺跡群（区No.47））に該当することから、東京大学は工事着手に先立ち、文京区教育委員会に対し工事予定地の埋蔵文化財の照会を行った。文京区埋蔵文化財取扱要綱に基づき3条3項の遺跡の有無を確認するため「対象地の総面積の概ね5%」の試掘調査が必要であるが、今回の工事予定地は狭小で通常の試掘調査が実施できないため、文京区教育委員会と東京大学施設部、東京大学埋蔵文化財調査室で協議を行い3条4項（1）より試掘調査に代えて工事中の立会を行うことになった（1図）。

山上会館1から山上会館前に至るケーブル埋設部分では腐食土の堆積が確認された。ケーブル埋設の山上会館入口から山上会館2に至る部分は築山である。築山は『江戸御屋敷上屋敷絵図』（1840～1845年 金沢市立玉川図書館近世史料館）、陸軍参謀本部測量原図、東京大学の建築図によれば、加賀藩育徳園の築山が山上会議所と山上会館建設に伴い削平され形状が変化、現在に至っている。ケーブル埋設は築山の稜線で行われ腐食土の堆積を確認した。

築山には三四郎池と山上会館をつなぐ切通しがある（1図）。切り通しは長さ9.8m、幅3.95m、稜線から道までの高さ2.22mである。この切通しの山上会館側には昭和61（1986）年、ホトトギス会五十周年と山上会館竣工を記念して建立された山口青邨の句碑、平成17（2005）年に建立された有馬朗人の句碑が建立されている。ケーブル埋設はこの切り通しを縦断する。切り通しの断面ではローム土を主体とする盛土が露出しケーブル埋設部分でも確認された。この部分は絵図、地図から江戸時代の築山の一部である可能性が高い。他地点の調査結果は下記に示す。

地区	番号	立会地点名	江戸時代	遺跡	遺物	検出遺構
本郷	①	懐徳館ボール設置	加賀藩邸	×	×	
		懐徳館ケーブル埋設	明治時代前田侯爵邸	×	×	
	②	山上会館1ボール設置	加賀藩邸 育徳園	×	×	
		山上会館2ボール設置		○	×	盛土
		山上会館ケーブル埋設		○	×	築山
	③	列品館ボール設置	加賀藩邸	×	×	
		列品館ケーブル埋設		×	×	
	④	赤門ボール設置	本郷六丁目町屋・火除地	×	×	
		赤門ケーブル埋設		×	×	
	⑤	弥生門ボール設置	加賀藩邸・水戸藩邸	×	×	
		弥生門ケーブル埋設		×	×	
	⑥	看護職員宿舎1ボール設置	富山藩邸	×	×	1928・1929年以降の土木工事
		看護職員宿舎2ボール設置		×	×	
		看護職員宿舎ケーブル埋設		×	×	
⑧	安田講堂ボール設置	加賀藩邸	×	×		
	安田講堂ケーブル埋設		×	×		
弥生	⑦	農学部正門ボール設置	武家地・町屋	×	×	
		農学部正門ケーブル埋設		×	×	

本郷構内の立会調査



1 図 調査地点位置図

4. 本郷 105 弥生地区屋外ガス配管改修地点

所在地 東京都文京区弥生1-1-1 (文京区 No.47 本郷台遺跡群内)

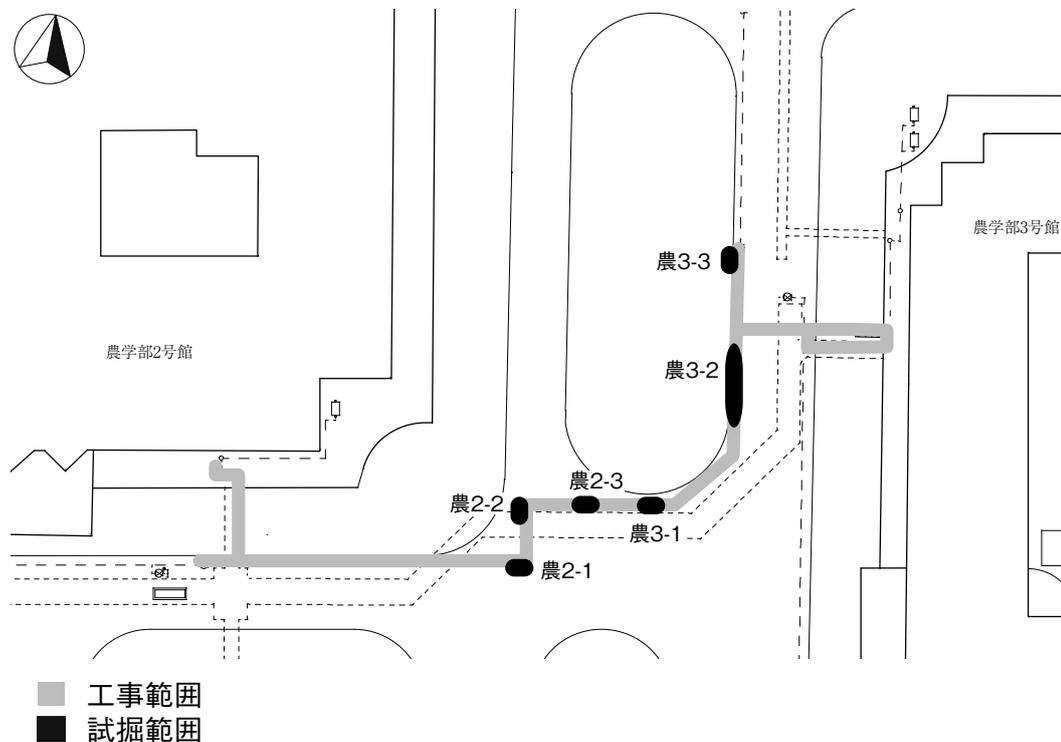
調査期間 2010年8月31日～9月11日

調査担当 原 祐一

調査結果

東京大学は、東京大学弥生構内で東京大学弥生地区 ガス管改修工事を計画、工事予定地が文化財保護法第93条第1項の規定に基づく周知の埋蔵文化財包蔵地 本郷台遺跡群 (区 No.47) に該当することから、東京大学は工事着手に先立ち、文京区教育委員会に対し工事予定地の埋蔵文化財の照会を行った。建設予定地の大部分に共同溝が埋設されており、工事予定部分では遺跡が破壊されている可能性が高いものの、2008年に行った「東京大学弥生地区屋外ガス配管改修工事に伴う埋蔵文化財存否確認調査」では、農学部1号館北で第一高等学校の基礎、正門裏側で埋没谷、第一高等学校の舗装を検出した。今回の工事予定地では共同溝が埋設されていない部分があり水戸藩駒込邸の遺構の検出が予想されること、東京大学史の観点から第一高等学校校舎の検出が予想されることから、文京区教育委員会と東京大学施設部、東京大学埋蔵文化財調査室で協議を行った結果立会調査を行うことになった (1図)。立会調査を2010年8月30日より開始、9月11日終了した。

調査地点は共同溝などの工事によって、ほとんどの部分が攪乱され江戸時代、明治時代の遺跡は破壊されていたが第一高等学校の遺構を検出した。農2-2の東で基礎と枡、農2-3で砂利を用いた版築を検出した。これは第一高等学校の「電燈機械室」と考えられる。農3-1、農3-2の間では漆喰を用いた基礎を検出した。これは「化学室」南側部分と考えられる。農2-3、農3-1、農3-2の間で確認した版築は破壊せざるを得なかったが (未掘削部分に残る)、農2-2の東で基礎と枡は一部破壊したが、ガス管埋設方法を変更し現地に残した。



1図 調査地点位置図

5. 本郷 106 薬学ゲート前舗装改修地点

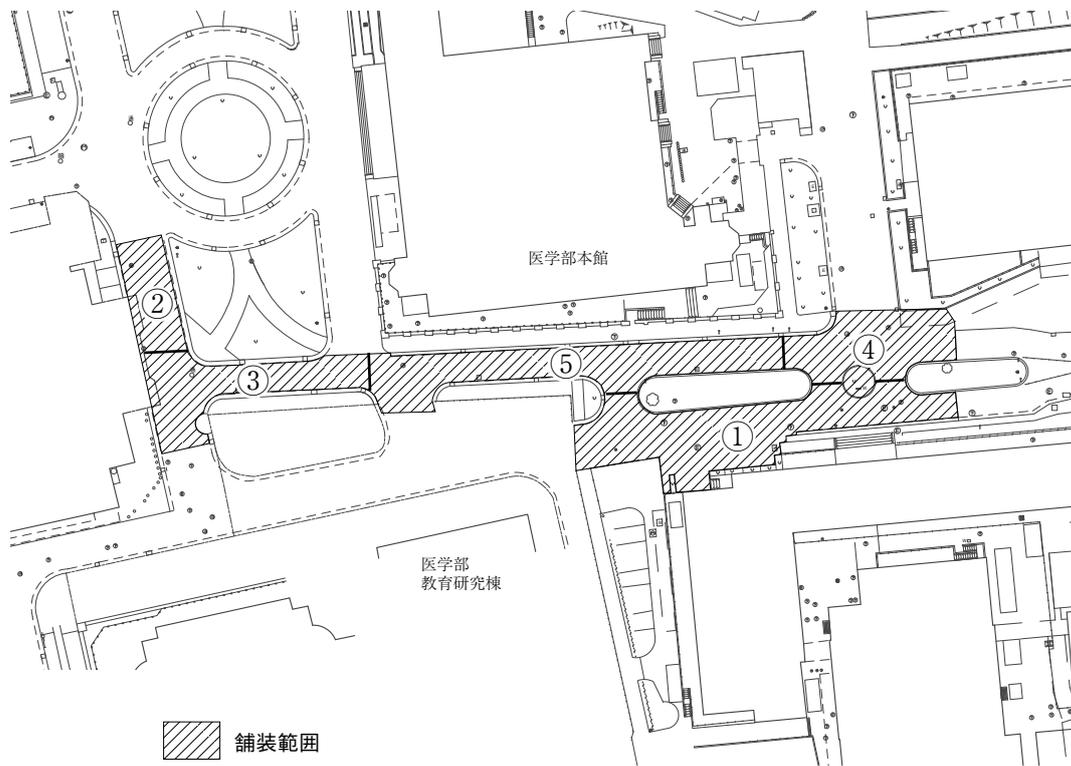
所在地 東京都文京区本郷7-3-1 (文京区 No.47 本郷台遺跡群内)

調査期間 2011年2月7、9、15、16、18、21、22日

調査担当 原 祐一

調査結果

東京大学は薬学ゲート通りの舗装改修工事を計画した。立会調査は東京大学(本郷)薬学ゲート通り舗装改修工事の工程に合わせて①～⑤地点で行った。各地点は舗装工事のため約0.5m掘削、工事中に遺跡の有無を確認した(1図)。②～⑤地点では、アスファルト道路と碎石層の下層はレンガを大量に含む埋土によって埋立てられていた。掘削予定深度内で自然堆積層(関東ローム層)、盛土、遺構は確認できなかった。



1図 調査地点位置図

6. 本郷 114 下水本管改修地点

所在地 東京都文京区本郷7-3-1 (文京区 No.47 本郷台遺跡群内)

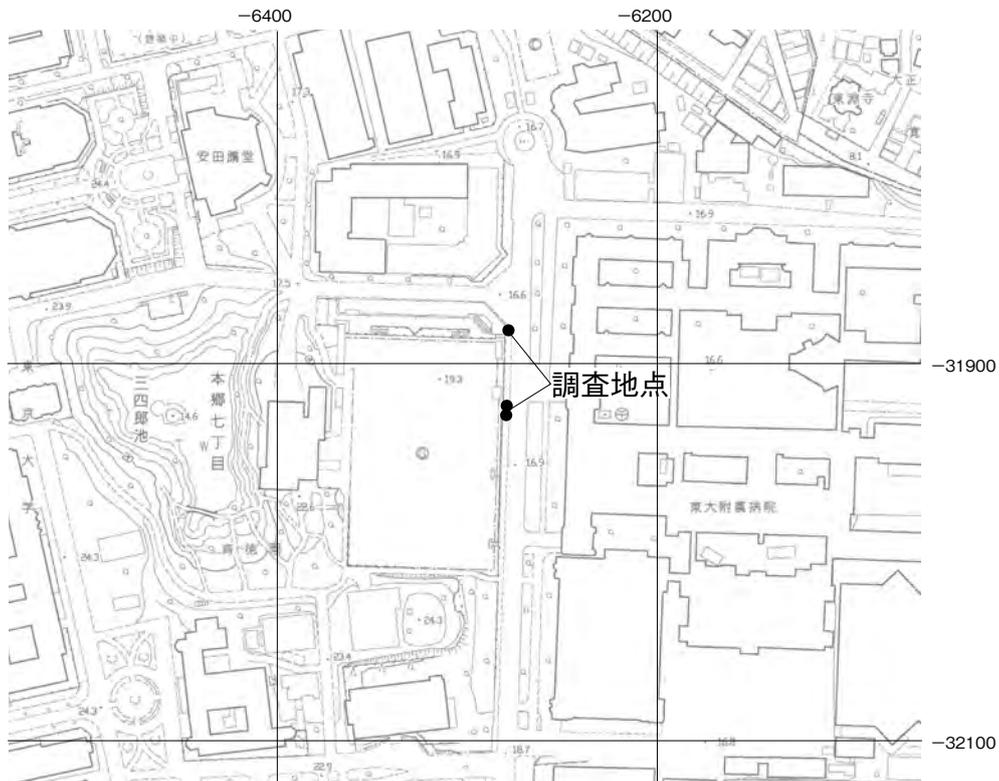
調査期間 2010年6月17、21日

調査担当 原 祐一

調査結果

立会調査はグラウンド東側歩道下水本管改修に伴うもので、東京大学からこの地点の遺跡存否の問い合わせがあった。工事予定地は御殿下記念館地点が隣接していることから、立会調査の必要があると回答した (1 図)。

工事範囲は道路に一部かかっている。歩道側は上層から、歩道のタイル (0.1m)、砂 (0.1m)、砂利 (0.3m)、黒ボク土とローム土混在、レンガ片を含む (0.7m) の順で堆積。車道側は上層から、アスファルト (0.3m)、砂利 (0.5m)、砂 (0.4m) の順で堆積。工事予定範囲には土管と共同溝が埋設されており、遺跡を確認することはできなかつたため、事前調査の必要はないと回答した。



1 図 調査地点位置図

第4節 白山構内の事前調査

1. 理学系研究科附属植物園本園・下水・電源ケーブル埋設枳・埋設溝地点 (KBG10)

所在地 東京都文京区白山3-7-1 (文京区No.81 小石川御薬園跡内)

調査期間 2010年9月6日～15日

調査面積 102㎡

調査担当 成瀬 晃司

1. 調査の経緯と経過

東京大学理学系研究科附属植物園 (通称、小石川植物園) では、東京都から売店の排水設備に対する行政指導を受け、その改善策として本館に隣接する既存下水枳への下水管新設を計画した。同時に老朽化した電源ケーブルも本館裏手の既設電源用マンホールまで新設することとなった。

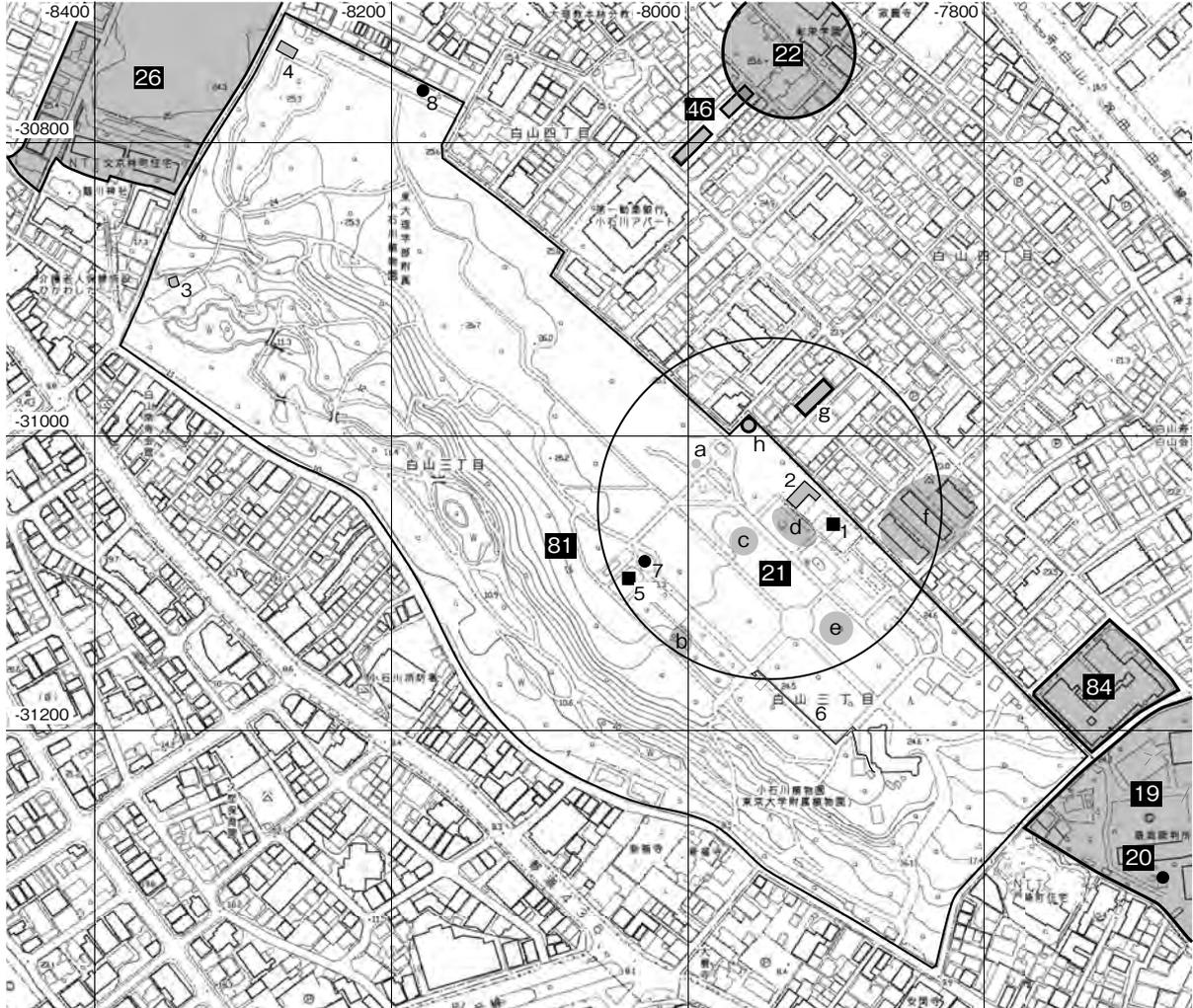
植物園は、園内中央部が「文京区遺跡No.21 小石川植物園内貝塚・原町遺跡」、および園内全域が「文京区遺跡No.81 小石川御薬園跡」として登録されており、縄文時代及び江戸時代の遺構・遺物の存在が予想された (1 図)。さらには「旧跡小石川植物園」として東京都の旧跡指定を受けていることから、東京都文化財保護条例第36条による現状変更許可手続きを踏まえた上で、事前調査を実施することとなった。

調査対象は、3箇所の新設マンホールと、既設マンホールに接続する配管埋設溝全域である。調査の便宜上、マンホール部は西から、HH1、HH2、HH3、配管埋設溝部は、HH1-HH2間を1トレンチ、HH2-HH3間を2トレンチ、HH3以東を3トレンチとした。さらに2トレンチは、総延長約80mを測ることから、旧地形、遺構分布の状況からa～d区に細分した (2 図)。

調査は、重機によって表土・耕作土の掘削を行い遺構面を確認し、それ以下は人力による掘削に変更して進めた。ただし遺構面が工事による掘削深度より深い範囲は、その面での遺構確認に止めている。逆に、遺構面もしくはローム層上面が工事深度より浅いレベルで確認された範囲は、検出された遺構の調査を実施した。遺構調査は小形遺構に対しては、原則完掘を前提に行い、地下室、溝などの大形遺構に対しては、その坑底レベルが工事深度を超えた場合、現状保存を優先し、最低限の遺構形態を記録したところで調査を終了した。

2. 調査の概要

本地点から北西約100mには、旧小石川養生所の井戸が現存している。2007年、その南西側の一角に、医学部設立150周年事業の一環として小石川養生所建物の部分復元建物の建設が計画された。それを受けて埋蔵文化財調査室が試掘調査を行ったところ、表土・耕作土下は直接ハードローム層に達し、その深度はわずか20～30cm程度であることが確認された (東京大学埋蔵文化財調査室 2011)。予想以上に浅い結果が得られたが、台地上に立地することと、18世紀以降、主に植物栽培のための耕作地であったため、盛土造成を伴う開発と無縁であったことが要因と考えられる。



1図 白山地区調査地点位置図 (1/5000)

6:本調査地点

1:理学系研究科附属植物園研究温室(1期)地点、2:理学系研究科附属植物園研究温室(2期)地点、3:総合研究博物館小石川分館地点
 4:農学生命科学研究科附属小石川樹木園根圏観察温室地点、5:医学部創設150周年記念(小石川養生所復元)建物地点、7:旧小石川
 養生所井戸柵改修地点8:農学系研究科小石川樹木園万年堀改修地点

(網掛け範囲は本調査、■は試掘調査、●は立会を示す)

周辺の遺跡(白抜き数字は、文京区遺跡登録番号)

19:戸崎町遺跡、20:御殿町古墳、21:小石川植物園内貝塚・原町遺跡(a~f:貝類等散布地点、g:第I地点、h:第II地点)、22:原町貝塚、26:林
 町遺跡、46:白山四丁目遺跡、81:小石川御薬園跡、84:白山御殿跡

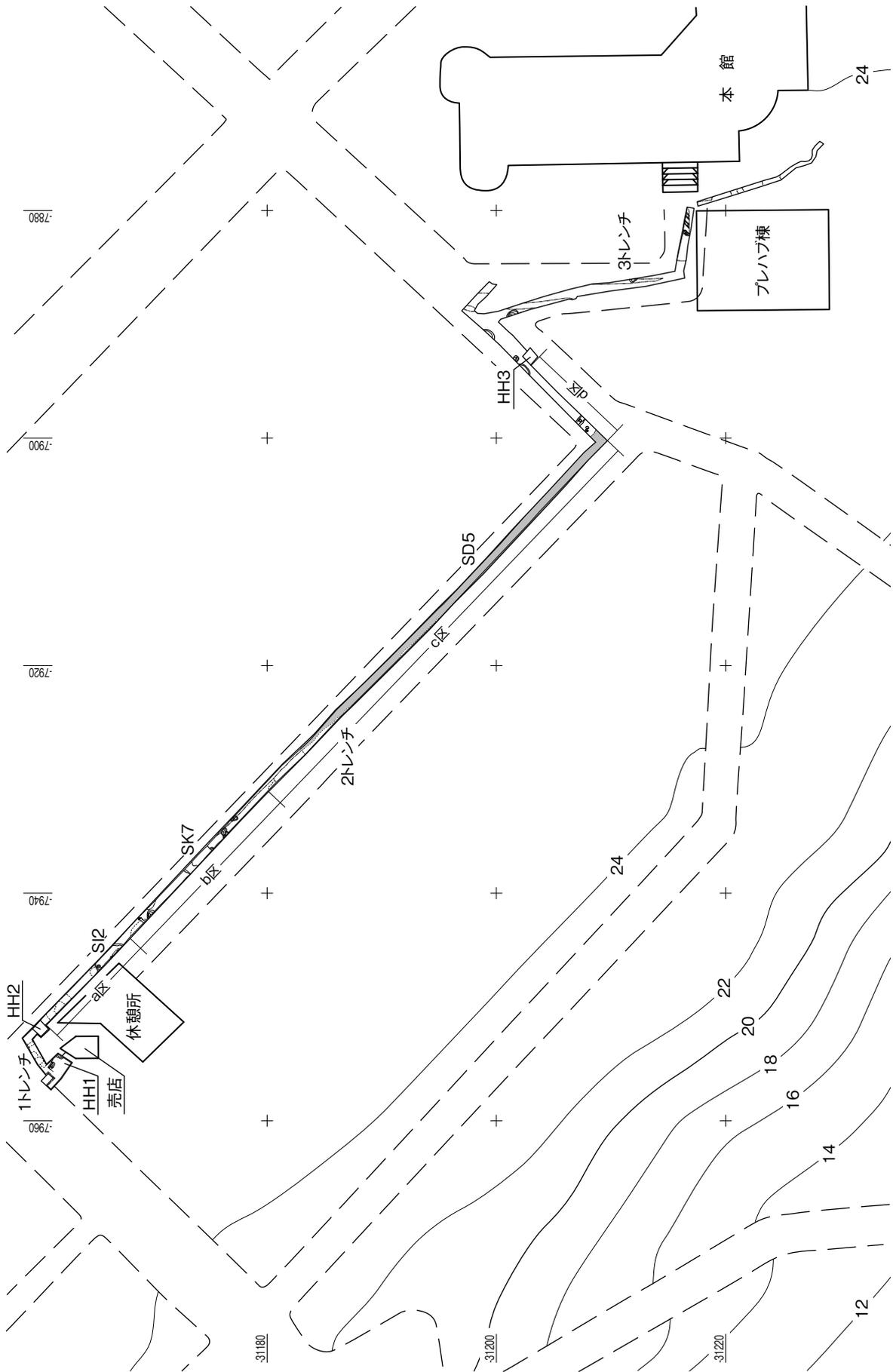
(ゴシックは、白山地区に関する遺跡)

この結果から、近接する本地点においても、表土下 20cm 前後でローム層が検出されることが予想されたため、表土と耕作土の違いを念頭に慎重に調査を進めた。以下、先述した各設定区に従って調査概要を述べる。

(1) HH1

1 辺 180cm の柵で、隣接する水飲み場からの排水を受けるために一部張り出し部を持つ。工事深度は GL-140cm が計画されている。GL-約 40 ~ 50cm で暗茶褐色土を呈する沖積層面に達し、江

白山構内の事前調査



2 図 調査地点全体図 (1/500)

戸時代と推定されるピットを1基検出した(3図)。沖積層は厚さ60～70cmで、色調は暗茶褐色から黒褐色へ変化し、ローム漸移層へと続く(13図)。沖積層には縄文晩期を中心とした土器片が多量に含まれ、1辺約3cm以上の破片を対象に原位置を計測して取り上げたところ、約650点を数える結果となった(11図)。特に漸移層直上付近では大形の破片が目立つようになり、磨製石斧、土製紡錘車も出土した(12図)。

(2) 1 トレンチ

掘削幅50cm、深さ60cm、長さ約320cmを測る(3図、7図)。HH1同様、耕作土下には沖積層が堆積していたが、遺構確認面がGL-60cmに達していたことから、確認された遺構の平面プランを記録し、調査を終了する。

(3) HH2

1辺100cm、深さ80cmを測る(3図)。HH1同様、耕作土下45～50cmにて沖積層を確認する。遺構は認められなかったため、引き続き沖積層の調査に移る。HH1と同様に、1辺約3cm以上の破片を対象に原位置を計測して取り上げたところ、工事深度のGL-80cmまでに、約50点の縄文土器片が出土した(14図)。しかし、工事深度レベルでは、まだ沖積層中で、ロームには達していない。

(4) 2 トレンチ

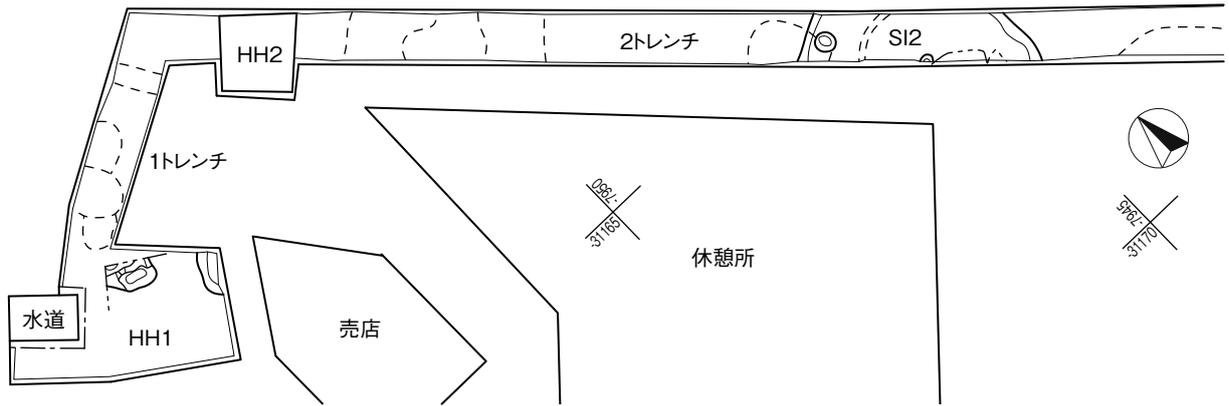
掘削幅約50cm、長さ約80mを測る。前節で述べたように、旧地形と遺構分布状況からa～dの4区に細分した(2図)。a区は、HH2からSI2の東側まで、b区は、SD5の西側まで、c区はトレンチ東端まで、d区は2トレンチが北東方向へ屈曲部分のHH3までとした。

a区とb区の境界付近で、沖積層の堆積は認められなくなり、遺構確認面が漸移層からソフトローム層に変化する。さらにb区とc区の境界付近で、遺構確認面はハードローム層となり(即ち、耕作土直下がハードローム層)、その様相はd区、3トレンチへと続く。以下、各区の様相を述べる。

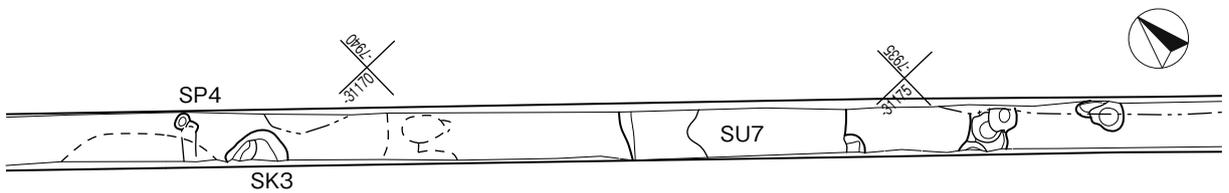
a区 先述したようにb区との境界付近で沖積層が認められなくなり、GL-約60cmでソフトローム層を確認する。SI2の東壁面がロームで立ち上がり、西壁面が沖積層で立ち上がっていることからこの付近から1トレンチ方向に向かって埋没谷が存在していることが明らかになった。HH1から南西方向に進む園路周辺の等高線も園路に向かってやや食い込んでいることもその名残と推定される。現況ではほとんど面影を失っているが、遺跡が立地する白山台地から南西方向の小石川谷に向かってこのような小支谷による埋没谷が多く存在することが予想される。そしてHH1、HH2で認められたように台地縁辺の支谷を利用して遺物が廃棄された可能性が考えられる。

SI2は、不整形を呈する竪穴式住居と推定されるが、トレンチ内での調査に止めたことで、深さ以外の規模は不明である(3図)。北西壁際に壁柱穴と推定されるピットを1基確認した(16図)。炉は確認されなかったが、遺構中央部に貼床と考えられる硬化面が検出された。遺物は、1辺約3cm以上の破片を対象に原位置を計測して取り上げたところ、安行Ⅲc式と考えられる土器片を中心に約250点出土した(17、18図)。

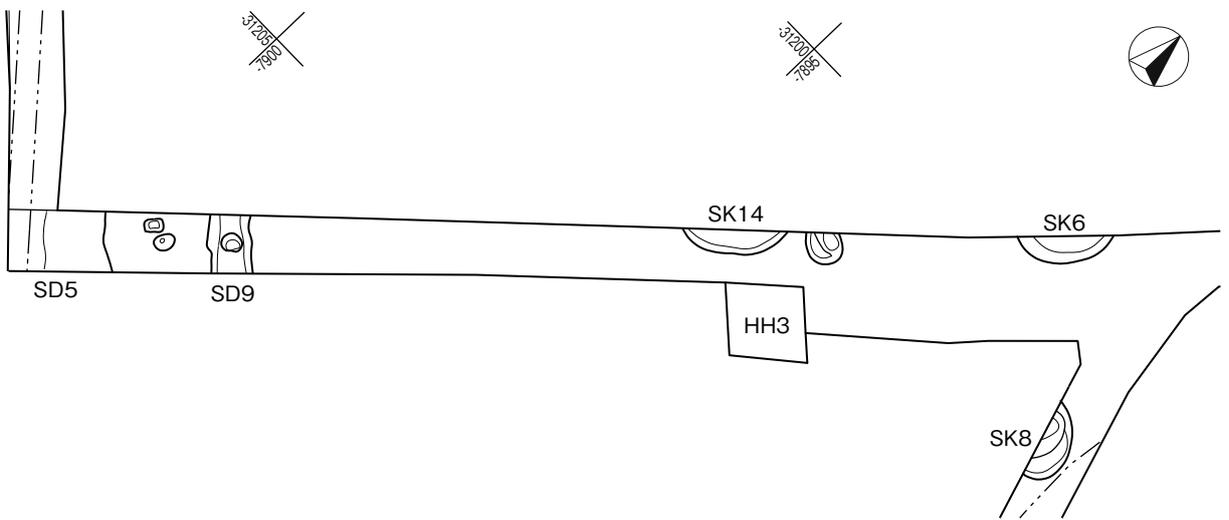
b区 耕作土直下、GL-30～50cmでローム層が検出されたため、ローム面で確認された遺構の調査を行う(4、8図)。検出された遺構は、ピット5基、土坑2基、地下室1基である。いずれも覆土の状態及び出土遺物から近世の遺構と考えられる。そのうちSU7は地下室と考えられる遺構で、トレンチ内で幅約3mを測る。形態を把握するために確認面下約2mまで掘り下げたが、床面を検出す



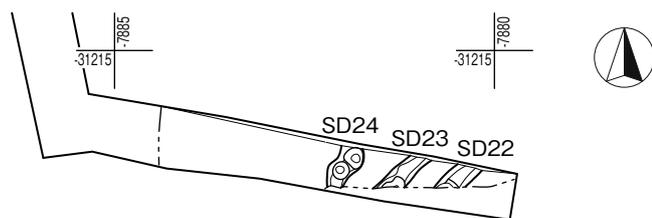
3 図 HH1・1トレンチ・HH2・2トレンチ a区遺構配置図 (1/100)



4 図 2トレンチ b区遺構配置図 (1/100)



5 図 2トレンチ d区・HH3・3トレンチ北側遺構配置図 (1/100)



6 図 3トレンチ中央付近遺構配置図 (1/100)

ることはできなかった(4、19図)。南東側の壁面はほぼ垂直に立ち上がっているが、北西側の壁面では、確認面下約130cmに奥行き約50cmを測るテラスを有する。テラス下の壁面は内傾して下がっていくが、調査中断レベルで壁際の覆土に空洞が認められたことより、この下でさらにオーバーハンクしている可能性がある。SK4は、不整形円形を呈する土坑で、盤状の緑泥片岩片、人頭大破碎礫を坑底に据え、その周囲に玉石、瓦片が充填されていた。断定はできないが、礎石の可能性が考えられる。SP4は直径20cm程度の小ピットで縄文晩期と考えられる小壺が横位で埋設されていた。

c区 園路に隣接する桜林から伸びた根攪乱が随所に認められるが、おおよそ耕作土直下、GL-40～50cmでハードローム層が検出されている。ただし2図に示したようにその大半はSD5の覆土である。SD5は、c区北西辺で北西側の、d区南西辺で北東側の立ち上がりを検出し、幅約4mの溝と考えられる。溝の形状を確認するために、d区部分でトレンチ方向に沿ってサブトレンチを設定し調査したところ、壁は緩やかに立ち上がり、確認面下約45cmで溝底が確認された(5図)。溝底には水についた形跡が認められなかったことから、地境溝と推定される。19世紀代の遺物が数点出土している。

d区 GL-20～40cmでハードローム層が検出されたため、検出された遺構の調査を行う(5、9図)。検出された遺構は、ピット4基、土坑2基、溝状遺構1基である。SD9はSD5と平行に伸びる溝と考えられる。SK14は植栽痕と考えられる。いずれも覆土の状態より近世以降の遺構である。

(5) HH3

1辺100cm、工事深度GL-80cmの設計であるが、GL-30cmでハードローム層が検出された(5、15図)。遺構は認められなかった。

(6) 3 トレンチ

北側ではGL-20～30cmで、本館通用口前のクランク部から南側ではGL-約10cmでハードローム層が検出されたため、検出された遺構の調査を行う(5、6図)。検出された遺構はピット3基、土坑3基、畝状遺構3条である。SK6、SK8はいずれも植栽痕と考えられる土坑である(5図)。SD22～24は畝と考えられる遺構である(6、20図)。覆土の状態より近世以降の遺構と考えられる。

3. 成果と課題

今回の調査は、マンホールの埋設坑とそれを結ぶ埋設配管溝が対象で、総面積は100㎡を越えたが、実際には狭小な範囲での調査であった。それにも関わらず多くの成果が得られたことは、白山構内が江戸時代には下屋敷、空御殿、薬園、近代以降も植物園として利用されてきたことで、開発による影響を強く受けなかった歴史的環境によるところが大きい。そのため江戸時代の遺構をはじめ、それ以前の遺構、遺物も比較的良好な状態で遺存している可能性を把握することができた。

縄文時代の遺跡(貝塚)としては、すでにエドワード・S・モースによって紹介されており(モース著 近藤・佐原訳1977)、現在までに園内中央北域にて中期から晩期の貝塚の存在が指摘されている(文京区役所1967)。本格的な調査は和島誠一を中心とする東洋大学によって行われ、中期後半の竪穴式住居2軒が検出されている(文京区役所1967)。また1996年には文京区によって東京消防庁防火水槽建設に伴う調査が行われ、加曽利EⅢ式の深鉢を伴う埋甕が検出されている(文京区遺跡調査会1996)。このように構内北側、すなわち立地する白山台地の傾斜変換点から数10m離れた台地

中央付近を中心に、縄文中期遺跡の拡がりを認識することができる。それに対し傾斜変換点に近い今回の調査では、縄文中期に属する遺物はわずかで、安行式を中心とする遺構、遺物が集中して確認された。SI2 から HH1 にかけて検出された埋没谷は、現状ではほぼ認識することが困難で、旧地形を知る手掛かりとして位置付けることができる。またそこを利用して多量の遺物廃棄行為が行われていたことと、同時期の竪穴式住居と推定される SI2 が検出されたことは、今回の大きな成果といえよう。出土遺物は現在、洗浄、注記作業を行っており、編年、組成など今後の分析で明らかにしていきたいと考える。

江戸時代以降の遺構では、境界溝、植栽痕、畝状遺構、地下室などが検出された。「以降」としたのは、調査区域が近代植物園以降も畑地などとして利用されていたため、その可能性が含まれるからである。遺構の性格上供伴遺物も少なく、現段階では個々の遺構年代を特定することはかなり困難と思われるが、縄文同様、遺物の洗浄・注記後の観察を併せて考えていきたい。

【参考文献】

- エドワード S モース著 近藤義郎・佐原 真訳 1977『大森貝塚』
東京大学埋蔵文化財調査室 2004「農学生命科学研究科附属小石川樹木園根圏観察地点発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4
東京大学埋蔵文化財調査室 2011「医学部設立 150 周年記念（小石川養生所復元）建物地点試掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』7
東京都教育委員会 1885『都心部の遺跡－貝塚・古墳・江戸－』
文京区遺跡調査会 1996『原町遺跡第Ⅱ地点－防火水槽建設に伴う発掘調査報告書－』
文京区役所 1977『文京区史』巻一



7図 1 トレンチ遺構検出状況



8図 2 トレンチb区近景



9図 2 トレンチd区・3 トレンチ北部近景



10図 3 トレンチ近景



11図 HH1 埋没谷遺物出土状況



12図 HH1 磨製石斧・土製紡錘車出土状況



13図 HH1 土層堆積状況



14 図 HH2 遺物出土状況



15 図 HH3 全景



16 図 SI2



17 図 SI2 遺物出土状況



18 図 SI2 出土土器



19 図 SU7



20 図 SD22・SD23・SD24

第5節 白山構内の立会調査

1. 白山7 理学系研究科附属植物園本園

・旧小石川養生所井戸柵改修地点

所在地 東京都文京区白山3-7-1 (文京区No.81 小石川御薬園跡内)

調査期間 2010年1月17日

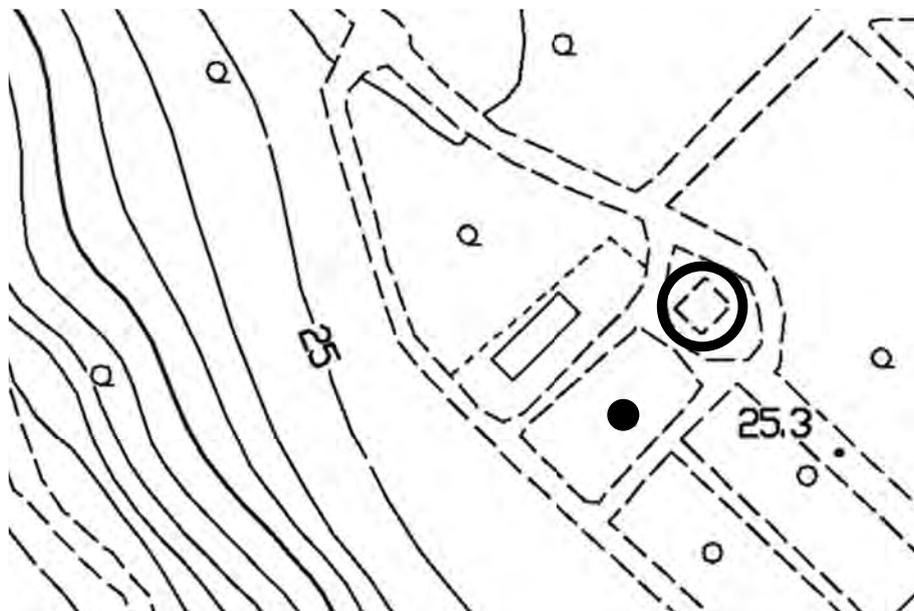
調査担当 成瀬 晃司

調査結果

理学系研究科附属植物園では、園内に現存する旧小石川養生所井戸の木製保護柵の地中部分が、シロアリ被害によって腐朽し、倒壊する危険性があることから、樹脂製擬木への改修を計画した。本園全域は東京都の旧跡指定を受けていることから、現状変更届の手続きを踏まえた上、文京区教育委員会との協議の結果、施工範囲が狭小で、埋蔵文化財に与える影響は極めて少ないことが予想されるとの判断に基づき、現状の確認と施工状況の立合の形を取った。

現況の木製柵の支柱を抜き取り、撤去した結果、抜かれた支柱の地中埋設部はシロアリによる被害がかなり進行していたが、その下端部はいずれも平坦に加工されていることが確認された。また平成19年に医学部創設150年記念建物新営に伴う試掘調査を行った井戸南側では、GL-20～30cmでローム層が検出されたが、深さ50cmを測る支柱抜き取り孔の壁面にはローム層が認められず、きめ細かい暗褐色土の堆積が認められた。これらの状況より、現況の木製柵支柱は、いわゆる掘立柱構造であることが明らかになった。そして柱周囲に土を埋め戻した後、表層に厚さ数cmを測るモルタルを流し固定している。

今回の改修工事は抜き取った木柱の空洞部を利用して、同径の樹脂製擬木を埋設する仕様であることから、新たな掘削範囲はほとんど無く、それも現況の掘方内に収まることから、埋蔵文化財への影響は皆無と判断される。



1 図 調査地点位置図

埋蔵文化財調査室の改組と現状について

埋蔵文化財調査室長
大貫静夫

東京大学埋蔵文化財調査室は東京大学構内遺跡を調査する組織として1983年に発足した臨時遺跡調査室にそのルーツがある。89年、埋蔵文化財の調査が当分の間は続くことを前提に全学委員会である埋蔵文化財調査運営委員会が発足した。それに伴い、翌90年に委員会の下の埋蔵文化財調査室として再編され、研究費、給与関係および共済関係などの事務および人事は人文社会系が担当し、運営費、短期雇用職員などに係わる事務は施設・資産系が担当することで最近まで運営されてきた。

その後、08年に当時の埋蔵文化財運営委員長であった西尾理事より、全学的に位置づけが曖昧なセンターなどの見直しが議論されており、埋蔵文化財調査室の在り方についても早急に見直したいとの意向が示され、調査室員との面談が行われ、全学の関係教員を集めたWGが招集された。その結果、09年4月より埋蔵文化財調査室は本部キャンパス計画室に属することになった。所属教職員は役員会管理ポストとなり、人事は総長室総括委員会がその人事を行い、すべての事務は施設・資産系が担当することとなった。さらに、全学委員会の見直しに伴い埋蔵文化財運営委員会も2010年3月を以て廃止された。

この改組された埋蔵文化財調査室を今後どのように運営していくかについて、担当理事である前田理事により新たに全学の関係教員を集めたWGが10年度に招集された。その答申に従い、調査研究、運営支援のための全学的な組織である諮問委員会（委員長佐藤宏之教授）が11年4月より設置されることになった。

この改組の間に、専任の教員として長らく調査室の運営に当たってきた寺島准教授が09年3月を以て退職し、11年4月より堀内前助教が専任の准教授となっている。また、長らく室長を務められた今村前教授が10年3月を以て東大を退職したことに伴い、10年4月より私、大貫が室長の職を引き継いでいる。

第Ⅱ章 調査資料の整理・研究および公開・活用

第1節 調査資料の整理

1. 刊行物

『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書10 東京大学本郷構内の遺跡 教育学部総合研究棟地点・インテリジェント・モデリング・ラボラトリー地点』、『東京大学構内遺跡調査研究年報7 2007・2008年度』を刊行する。『東京大学構内遺跡調査研究年報7』には、農学部生命科学総合研究棟地点（NSK01）、駒場図書館地点（KL）の2地点の本報告を所収した。

2. 整理事業概要

インテリジェント・モデリング・ラボラトリー地点、教育学部総合研究棟地点、農学部生命科学総合研究棟地点、駒場図書館地点は、報告書刊行に向け、遺構及び遺物図版作成、遺物観察表作成、CD-ROM用写真撮影など全ての整理・分析及び文章作成・編集作業を完了し、本年度に報告を刊行した。

総合研究博物館地点、農学生命科学研究科附属小石川樹木園根圏観察温室地点は、遺物図版作成が完了、出土遺物に関する基礎整理を完了し、『東京大学構内遺跡調査研究年報8』に掲載する準備を整えた。

医学部附属病院看護師宿舎Ⅰ期地点、医学部附属病院MRI-CT棟地点、医学部附属病院看護師宿舎ゴミ置き場地点、医学部附属病院看護師宿舎Ⅱ期地点は、江戸時代出土遺物に関する基礎整理を完了した。

医科学研究所附属病院診療棟・総合研究棟地点は、出土遺物写真撮影、デジタルトレースを完了し、写真合成作業を行う。

経済学研究科棟地点は、金属製品クリーニングを行い、出土遺物実測作業を完了した。

医学部附属病院第2中央診療棟地点は、出土礫分析、金属クリーニングを完了し、出土遺物接合・分類作業を行う。

医学部教育研究棟地点、医学部附属病院入院棟A地点は、遺構図版作成基礎整理を行う。

また一般労務謝金を運用し、人形・玩具類新分類の再検討、既報告主要遺構出土陶磁器・土器再整理、動物遺体の分類・分析を3名の方に依頼し行っている。

3. 外部委託

(1) 基礎整理

情報学環・福武ホール地点出土遺物のジェットマーカーによる機械注記作業を第一合成（株）に委託し、完了した。

理学系研究科附属植物園下水・電源ケーブル埋設地点出土遺物の洗浄作業およびジェットマーカーによる機械注記作業を第一合成（株）に委託し、完了した。

伊藤国際学術研究センター地点出土遺物の洗浄作業を第一合成（株）に委託し、完了した。

(2) 分析

入院棟 A 地点の土壌分析をパリノ・サーヴェイ（株）に依頼し、完了した

第 2 節 調査成果の公開・活用

1. 広報活動

(1) 遺跡見学会

2011 年 3 月 18・19 日 工学部 3 号館地点遺跡見学会（担当 堀内）

(2) ホームページ

発掘調査速報、遺跡見学会案内、調査室所蔵遺物学外展示などを掲載した。

2. 教育活動への支援

(1) 非常勤講師

文学部より、堀内秀樹、成瀬晃司が非常勤講師の委嘱を受け、野外考古学（1）（夏学期、木曜日 4・5 限）を担当した。

(2) 実習

2010 年 6 月 12 日～12 月 24 日（内 20 日間） 早稲田大学考古学調査士養成プログラムの実習生受入。

3. 資料の提供・貸し出し

貸出先	目的	貸出・掲載内容	貸出・掲載資料
東京国立博物館	貸出	平成館考古展示室における資料展示	御殿下記念館地点 391 号出土「色絵花卉文大皿片」ほか 計 65 点
国立歴史民俗博物館	貸出	総合展示「都市の時代」資料展示	御殿下記念館地点 678 号出土「染付大皿海浜文」ほか 計 28 点
江戸東京博物館	貸出	常設展「武士の暮らし・町の暮らし」資料展示	医学部附属病院中央診療棟地点 Z35-5 出土「座り猿」理学部 7 号館地点 SK1 出土「焼塩壺」ほか 計 107 点
飯能市郷土館	貸出	常設展 資料展示	医科学研究所附属病院診療棟・総合研究棟地点 SX207 出土「秋草文鍋蓋」ほか 計 2 点
学校法人香川栄養学園	貸出	特別展示「播る－すり鉢」資料展示	農学部家畜病院地点 SK09 出土「播鉢」ほか陶器 計 5 点
法政大学出版	出版物	平野恵『温室』(もの与人間の文化史シリーズ) 写真掲載 (発行年月 2010.10)	追分国際学生舎地点 SU43「完掘」「植木鉢」、同地点 SK24「剪定バサミ」写真 計 3 点
根津美術館	貸出/ 出版物	70 周年記念特別展「南宋の青磁」資料展示、図録掲載 (会期 2010.10.9-11.14)	医学部附属病院看護師宿舎 I 期地点 SK299 出土「青磁袴腰形香炉片」ほか 計 16 点
武蔵野文化財修復研究所	貸出/ 出版物	企画展「芸工展」資料展示、資料掲載 (会期 2010.10.9-10.17)	武田先端知ビル地点 1 号方形周溝墓出土「弥生式土器」写真
広島城	出版物	企画展「金箔瓦の系譜」写真パネル展示 (会期 2010.11.13-12.12)	医学部教育研究棟地点 SK961 出土「金箔押梅鉢文軒丸瓦」「金箔押鯉瓦」計 2 点
平凡社	出版物	『太陽の地図帳シリーズ 江戸城と大名屋敷で歩く東京』写真掲載 (発行年月 2011.2)	御殿下記念館地点「調査地点」計 1 点
思文閣出版	出版物	岡佳子『近世京焼の研究』写真掲載 (発行年月 2011.4)	医学部附属病院入院棟 A 地点 D2 層出土「軟質施釉陶器」、同地点 SK3 出土「京焼」ほか 計 6 点
吉川弘文館	出版物	『江戸の大名屋敷』写真掲載 (発行年月 2011.4)	医学部教育研究棟地点 SX555「能舞台」ほか 計 5 点
デアゴスティーニ ジャパン	出版物	『週刊江戸』56 号 写真掲載 (発行年月 2011.2)	医学部附属病院中央診療棟地点 F34-11 出土「焼塩壺」計 1 点
愛知県陶磁資料館	貸出/ 出版物	企画展「阿蘭陀焼」資料展示、図録掲載 (会期 2011.2.5-3.27)	工学部 14 号館地点 SK297 出土「鉢」ほか 計 13 点
メディアバスターズ	マ ス ゲイ	TV 東京「超歴史ロマン戦国&幕末ミステリー 完全決着スペシャル」報告書映像放映 (放映日 2010.12.29)	山上会館・御殿下記念館地点報告書一部
新人物往来社	出版物	月刊『歴史読本』「徳川幕府誕生」2011 年 3 月号 写真掲載	経済学研究科棟地点 SK107「完掘」計 1 点
吉川弘文館	出版物	『江戸時代の名産品と商標』写真掲載 (発行年月 2011.2)	工学部 14 号館地点 SK2 出土「亀乗童子」ほか同地点“亀”の刻印製品計 5 点、同地点“江戸一”の銘を有する小杯 2 点
高島裕之	出版物	『専修大学人文科学研究所年報』写真掲載	医学部附属病院入院棟 A 地点 C2 層出土「雪輪・牡丹文」製品写真 計 12 点
(株)フジテレビジョン	マ ス ゲイ	フジテレビ「情報プレゼンター とくダネ!」放映 (放映日 2011.1.17)	工学部 1 号館地点 SK1 出土「温石」
山田琴子	他	研究のため	医学部附属第 2 中央診療棟地点 SX96 出土磁器片 ほか 3 点
大手前学園	出版物	e ラーニング授業のコンテンツ 写真転載	御殿下記念館地点「調査地点」計 1 点
福原りお	他	修士論文の調査研究	医学部附属病院外来診療棟地点 SK18 出土「恵比寿像」ほか 計 63 点
淡交社	出版物	淡交別冊『仁清・乾山』2011 年 8 月号写真掲載	医学部附属病院中央診療棟地点出土「仁清銘碗」計 1 点

第3節 室員研究・活動報告

成瀬 晃司

【論文・資料報告】

「加賀藩・大聖寺藩本郷邸出土の鍋島」関和夫編『改訂版 初期鍋島』pp.434-456、創樹社美術出版
「加賀藩本郷邸東域の開発－傾斜地にみる大名屋敷の造成－」江戸遺跡研究会編『江戸の大名屋敷』
pp.128-158、吉川弘文館

「小坏に描かれた商標」江戸遺跡研究会編『江戸時代の名産品と商標』pp.200-222、吉川弘文館

【研究発表】

2010年12月12日

「文京区 東京大学構内 本郷六丁目町屋跡遺跡」（『東京都遺跡調査・研究発表会』36 発表要旨）
pp.16-17 所収）

2011年1月29日

「本郷六丁目町屋跡の調査」（『江戸遺跡研究会会報』No.126、pp.56-74、所収）

堀内 秀樹

【論文・資料報告】

「都市江戸の成立と出土遺物の江戸の様相」『中世はどう変わったか』pp.73-100、高志書院

「近世の薬種需要と唐薬貿易－中国製唐薬瓶の分析から－」『南海を巡る考古学』pp.227-251、同成社
『千葉県勝浦市興津海浜遺跡調査報告書』興津海浜遺跡調査会（執筆分担：「第6章第2節 磁器」、「第
6章第3節 貿易陶磁器」pp.23-35）

近世都市江戸における貿易陶磁器の消費－需要とその背景－」『海の道と考古学 インドシナ半島か
ら日本へ』pp.248-265、高志書院

「考古学からみた物質文化交流と江戸遺跡出土遺物－出土陶磁器を中心に－」『田野考古』第13巻第1.2
期合刊 台湾中央研究院 pp.71-119

「大名藩邸で使用された陶磁器と御殿の生活」『江戸の大名屋敷』吉川弘文館 pp.181-206

『苗敷山総合学術調査報告書 苗敷山の総合研究』苗敷山総合学術調査研究会・葦崎市教育委員会（執
筆分担：「第三編 研究編 第十一章 苗敷山総合学術調査出土近世陶磁器の様相とその歴史的評価」
pp.275-281）

「都市江戸と貿易陶磁器」『国際文化研究紀要』Vol.14 昭和女子大学国際文化研究所 pp.189-190

「都市江戸における消費行為と情報－出土資料と対比して－」『江戸時代の名産品と商標』吉川弘文館
pp.245-254

【研究発表】

2010年9月26日

「都市江戸における貿易陶磁器需要の一例－江戸幕末の植木屋出土の貿易陶磁器－」（『第31回貿易陶
磁研究集会』）

2011年2月9日

「江戸における鍋島の出土様相とその背景」（『第1回近世陶磁研究会幕藩体制下で例年献上された陶
磁器』近世陶磁研究会 pp.70-115 所収）

【講演・講座】

2011年2月27日

「遺跡出土のプリントウエア」(『愛知県陶磁資料館冬期講座 プリントウエアの世界』愛知県陶磁資料館)

原 祐一

【論文・資料報告】

「保存修復の現場から 徳川齋昭建立「向岡記」碑の保存修復と東京大学浅野地区の史跡整備」『NPO JCP NEWS』第21号 特定非営利活動法人NPO JCP

『向ヶ岡弥生町の研究』学位論文

【研究発表】

2010年6月13日

「P082 東京大学追分国際宿舎(組屋敷跡)から出土した剪定鋏の保存処理と展示」(『一般社団法人文化財保存修復学会第32回大会 発表要旨』pp.238-239 所収 石原道知、堀内秀樹と共同発表)

2010年7月2・3日

「P-19 東京大学病棟地点から出土した漆椀の材質分析」(『第23回タンデム加速器及びその周辺技術の研究会報告集』pp.180-183 所収 小泉延好、中野忠一郎、松崎浩之と共同発表)

2010年11月19日

「漆の材質分析」(『第27回PIXEシンポジウム要旨集』p.18 所収 小泉延好、中野忠一郎、松崎浩之と共同発表)

2010年12月1日

「向ヶ岡弥生町に建設された警視庁射的場と西南戦争 建設の経緯と変遷、弾丸のPIXE分析」(『第380回日本銃砲史学会』12月例会)

【講演・講座】

2010年5月16日

『向ヶ岡弥生町の研究 弥生式土器の発見地』(杉並郷土史会例会)

2010年7月21日

「「向ヶ岡」と「忍ヶ岡」、水戸藩駒込邸と向ヶ岡弥生町－発掘調査から明らかになった水戸藩駒込邸－」(『和樂塾』小学館企画)

大成 可乃

【論文・資料報告】

「2009年の歴史学界－回顧と展望」『史学雑誌』第119編第5号、pp.31-35、史学会

「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(2)」『東京大学構内遺跡研究年報』7、pp.223-314

追川 吉生

【論文・資料報告】

「東京大学駒場構内の遺跡 駒場図書館地点発掘調査報告」『東京大学構内遺跡調査研究年報』7

【講演・講座】

2010年5月16日

「近世都市・江戸を支えた環境」（考古学入門講座『都市と環境の考古学』葛飾区郷土と天文の博物館）

第4節 埋蔵文化財調査室要項

東京大学埋蔵文化財運営委員会は、全学委員会の見直しに伴い、以下の通り廃止され、埋蔵文化財調査室は、キャンパス計画室下部組織に改組された。

東京大学における全学委員会の見直しに伴う関係規則の整理等に関する規則（平成22年3月25日東大規則第133号）（抜粋）

（略）

（東京大学埋蔵文化財運営委員会規則の廃止）

第17条 東京大学埋蔵文化財運営委員会規則（平成元年7月11日制定）

埋蔵文化財調査室規則

平成元年7月11日

評議会可決

（設置）

第1条 キャンパス計画室の下に埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）を置く。

（業務）

第2条 調査室は、東京大学構内の施設整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査（以下「遺跡調査」という。）に関し、次の各号に掲げる事項を処理する。

- (1) 遺跡調査に対する総括的指導助言
- (2) 文化庁等に提出する報告書の作成、監修及び指導
- (3) 遺物等の保管及び管理
- (4) 遺跡調査の方法に関する調査研究
- (5) 前各号に定めるもののほか、研究報告書の作成等遺跡調査に関し必要と認められる事項

（室長）

第3条 調査室に室長を置く。

2 室長は、東京大学専任の教授又は准教授のうちから総長が委嘱する。

3 室長は、調査室の業務を総括する。

（室員）

第4条 調査室に室員若干名を置く。

2 室員は、室長の指示に従い、調査室の業務に従事する。

（庶務）

第5条 調査室の庶務は、本部施設企画課において処理する。

附 則

この規則は、平成8年5月21日から施行し、改正後の埋蔵文化財調査室規則の規定は、平成8年5月11日から適用する。

附 則

この規則は、平成22年4月1日から施行する。

東京大学埋蔵文化財調査室組織表

室長（人文社会系研究科教授）	大貫静夫（2010年4月～）
室員（キャンパス計画室助教）	成頼晃司
〃	堀内秀樹
室員（キャンパス計画室助手）	原 祐一
〃	大成可乃
〃	追川吉生
事務補佐員	青山正昭
〃	今井雅子
〃	大貫浩子
〃	加藤理香
〃	香取祐一
〃	小林照子
〃	杉浦あかね（2010年4月～）
〃	田中美奈子（～2011年3月）
〃	渡辺法彦（2010年4月～）

第3部 東京大学構内遺跡発掘調査報告

工学部基幹整備共同溝地点

駒場情報教育棟地点

農学部生命科学研究科附属小石川樹木園根圏観察温室地点

東京大学本郷構内の遺跡

工学部基幹整備共同溝地点

例 言

1. 本報告は、東京大学本郷キャンパス基幹整備の一環として共同溝埋設に伴う埋蔵文化財発掘報告である。
2. 本地点の略称は「KK」とする。
3. 調査地点は東京都文京区本郷7丁目3番1号東京大学本郷構内に所在している。
4. 発掘調査は原祐一が担当した。
5. 本報告の編集は原祐一、香取祐一、小林照子が行った。
6. 執筆分担は以下の通りである。
 - 第I章・第II章第1節 原祐一
 - 第II章第2節 大貫浩子
 - 第III章 原祐一 香取祐一
7. 遺物の実測は坂野貞子 今井雅子が行い、加藤理香によってデジタル化を行った。
8. 遺物写真撮影は青山正昭が行った。
9. 本調査の資料は東京大学埋蔵文化財調査室の責任において、工学部工学系研究科柿岡教育研究施設にて保管、活用を図る。
10. 発掘調査及び報告書作成にあたり下記の諸氏、機関より御協力・御教示を賜った。記して感謝する次第である。(敬称略、五十音順)
 - 東京大学工学部、東京大学広報部、東京大学施設部

発掘調査・整理作業参加者

青山正昭、今井雅子、大貫浩子、加藤理香、香取祐一、小林照子、坂野貞子、渡邊法彦（埋蔵文化財調査室）、加藤建設株式会社、松井建設株式会社

凡 例

1. 調査地点名は建設区画を用い KKA、KKB、KKC とした。
2. 実測縮尺は個別に示す。
3. 図版掲載遺物は残存率 80% 以上（完形）を中心に掲載した。
4. 遺物実測図に付けられる記号は以下のことを表している。
 - ・▲ は高台、見込みなどの釉際を表しており、磁器と釉際の描写が不可能な陶器に用いている。
 - ・中心線上下端の破線は、推定口径及び底径を表している。
 - ・┆┆┆ は、口唇部の口銹を表している。
 - ・— — は断面を表している。
 - ・播鉢の┆→ は体部播目範囲を表している。
 - ・口唇部の┆→ は敲打痕を表している。
 - ・本文中で記載した陶磁器・土器分類は『東京大学構内遺跡調査研究年報 2 別冊東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類 (1)』に、遺構一括資料の段階設定は、堀内秀樹「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1 に基づいている。

○胎質

J (磁器) T (陶器) D (土器)

○生産地

A - 輸入陶磁器

A1 景德鎮窯系

A2 漳州窯系

A3 德化窯系

A4 龍泉窯系

A5 宜興窯系

A6 朝鮮

A7 ベトナム

A8 ヨーロッパ

B - 肥前系

C - 瀬戸・美濃系

D - 京都・信楽系

E - 備前系

F - 志戸呂系

G - 常滑系

H - 萩系

I - 萬古系

J - 大堀・相馬系

K - 丹波系

L - 堺系

M - 益子・笠間系

N - 九谷系

O - 壺屋系

P - 淡路系

Z - 不明

○器種

1. 碗

2. 皿

3. 大皿

4. 爛徳利

5. 鉢

6. 坏

7. 猪口

8. 仏飯器

9. 香炉・火入れ

10. 瓶

11. 御神酒徳利

12. 油壺

13. 蓋物

14. 筆立て

15. 壺・甕

16. 急須

17. 爛鍋

18. 合子

19. 水滴

20. 蓮華

21. 植木鉢

22. 花生

23. 片口鉢

24. 灰落し

25. 鬢水入れ

26. 茶入れ

27. 水注

28. 漚瓶

29. 播鉢

30. 餌入

31. 火鉢

32. 柄杓

33. 鍋

34. 土瓶

35. 戸車

36. ちろり

37. 薬研

38. 手焙り

39. おろし皿

40. 油受け皿

41. 油徳利

42. 行平鍋

43. 十能

44. ひょうそく

45. 瓦燈

46. カンテラ

47. ほうろく

48. 七輪

49. 涼炉

50. 五徳

51. 塩壺

52. 燭台

53. 蒸し器

54. 懐炉

00. 蓋

東京大学本郷構内の遺跡
工学部基幹整備共同溝地点掘調査報告

目 次

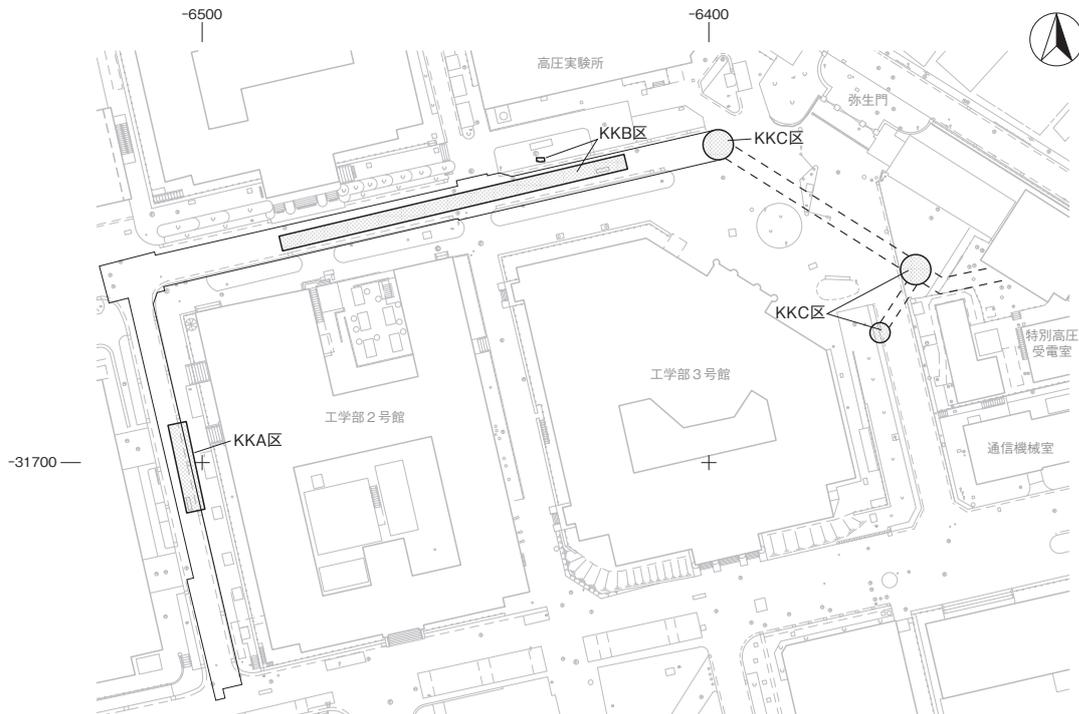
例 言	
凡 例	
目 次	
第Ⅰ章 調査の経緯と経過	155
第Ⅱ章 遺構と遺物	
第1節 検出された遺構	156
第2節 出土した遺物	160
第Ⅲ章 成果と課題	
江戸時代から明治初期の工学部共同溝地点周辺の地形	162
参考文献	
報告書抄録	

第 I 章 調査の経緯と経過

東京大学では、工学部基幹整備共同溝が計画されていた。本地点には加賀藩、水戸藩に関連する遺跡の存在が予想されることから、建築工事と同時並行で遺跡の存否調査及び発掘調査を行った。調査期間は、KKA 区 2000 年 7 月 3～6 日、10～12 日。KKB 区 同年 10 月 11～14 日 KKC 区 12 月 10 日、2001 年 2 月 21～28 日である（1 図）。

調査を行った工学部共同溝地点は工学部 2 号館と 6 号館の間、2・3 号館と 4・13 号館の間の道路に位置する。江戸時代の本地点は、加賀藩「江戸御屋敷絵図（金沢市立玉川図書館所蔵清水文庫 特 18.6-27-1）、陸軍参謀本部測量図（明治 16 年測量）、帝國大学平面図（明治 19 年）、理学部 7 号館地点で行われた加賀藩八筋長屋の発掘調査成果、医学部附属病院受変電設備棟Ⅱ期地点の発掘調査成果から総合的に判断すると KKA 区は加賀藩邸、KKB 区、KKC 区は加賀藩邸と水戸藩邸の地境に該当すると思われる。

遺跡は近代遺構の建築工事によって、ほとんどの部分が攪乱を受けていたため、地境跡や建物跡等の土地利用状況を明確に示す遺構は確認できなかったが、KKB 区で谷跡、KKC 区で江戸期から明治時代に埋められたと考えられる谷跡を確認した。これらは本地点の旧地形の改変を示す造成として注目される。



1 図 調査地点の位置

第Ⅱ章 遺構と遺物

第1節 検出された遺構

(1) KKA 区

SK1 (遺構Ⅱ-1 図)

SK1は土坑である。残存部における規模は南北240cm、東西軸30cm、確認面からの深さ60cmを測る。

SK2 (遺構Ⅱ-1 図)

SK2は土坑である。残存部における規模は南北210cm、東西軸30cm、確認面からの深さ30cmを測る。

SK3 (遺構Ⅱ-1 図)

SK3は土坑である。残存部における規模は南北75cm、東西30cm、確認面からの深さ40cmを測る。

SK4 (遺構Ⅱ-1 図)

SK4は土坑である。残存部における規模は南北180cm、東西50cm、確認面からの深さ30cmを測る。江戸時代の陶磁器片が出土した。

(2) KKB 区

SG5 (遺構Ⅱ-3 図)

SG5は石垣である。西側で3段、東側で2段の間知石が積まれている。東側の土管は石垣が積まれた後に埋設されたものである。

谷跡 (遺構Ⅱ-2 図)

調査区のほとんどが明治時代以降の土木工事より攪乱されていた。東西24m、深さ3mに及ぶ谷跡を確認、自然堆積と考えられる黒色土が推積していた。陸軍参謀本部測量図には、東へ下る傾斜面が認められる。この傾斜部の標高と谷跡確認面の標高はほぼ合致することから明治16年には谷は埋まっていたと考えられる。

(3) KKC 区

KKC区の調査は、現地表面から地下7.5mの深さで行なわれた推進工事と同時に行なった。

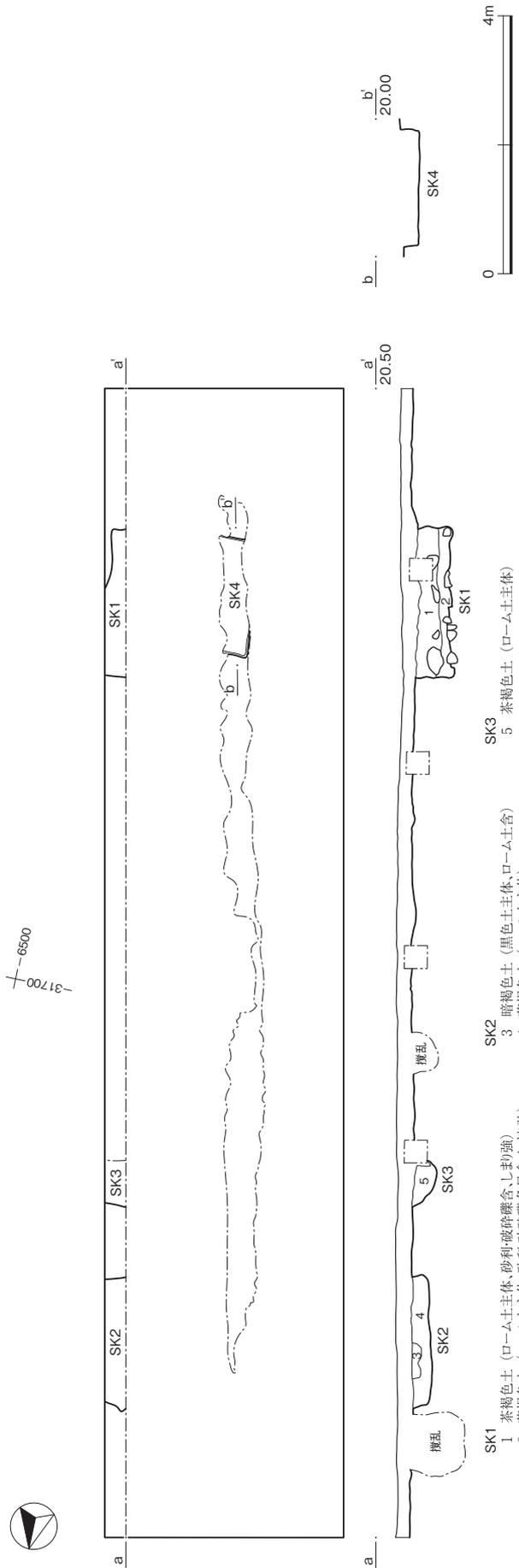
谷跡 (遺構Ⅱ-5 図)

谷跡は確認された範囲で幅24m、最深部の標高は7mである。一部に自然堆積層と考えられる黒色土、灰色土の堆積を確認した。自然堆積層上層は江戸時代の陶磁器類が出土したことから江戸時代の盛土と考えられる。調査の制約から盛土上の生活面を確認できなかった。出土遺物は17世紀後半頃に生産

された遺物が1点認められるが、18世紀中頃生産された遺物が中心である。瀬戸美濃系磁器、近代以降に生産された遺物は認められない。

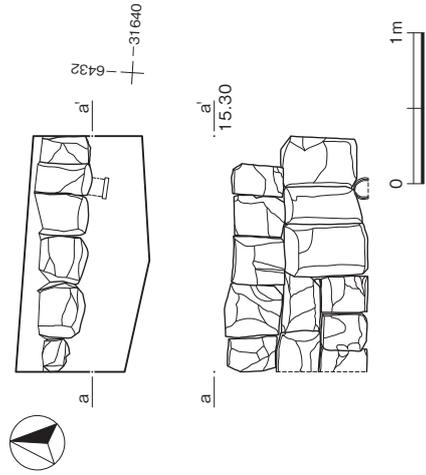
SE8（遺構Ⅱ-4図、遺物Ⅱ-8図）

SE8は井戸である。直径110cm、確認面からの深さ700cm以上を測る。深さ500cmで井戸枠を確認した。覆土は黒灰色土で水分を多く含む。出土遺物は18世紀中頃から19世紀に生産された遺物である。



II-1 図 KKA 区 平面図・土層断面図

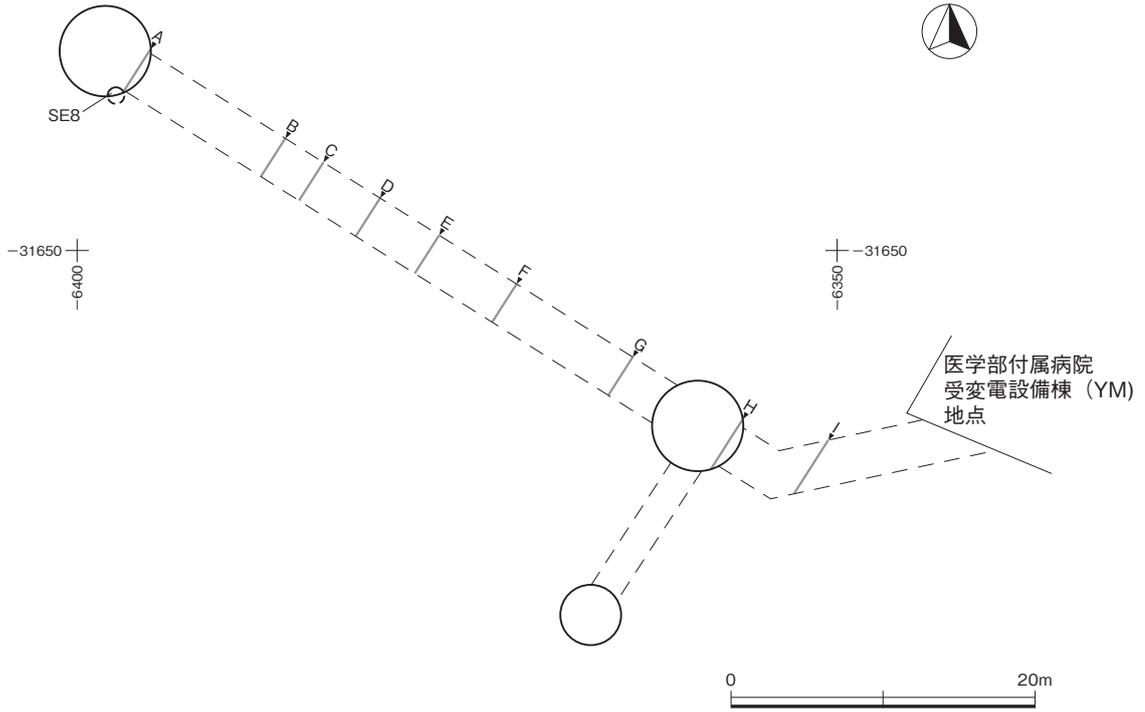
- SK1 茶褐色土 (ローム土主体、砂利・破碎礫含、L1弱)
- SK2 暗褐色土 (黒色土主体、ローム土含)
- SK3 茶褐色土 (ローム土主体)
- SK4 茶褐色土 (ローム土主体)
- SK5 茶褐色土 (ローム土主体)



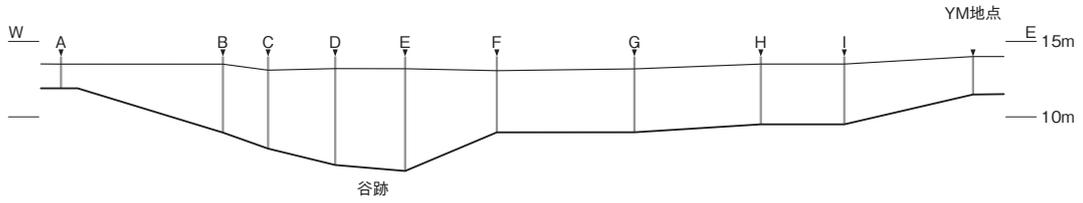
II-2 図 KKB 区 土層模式図

II-3 図 KKB 区 SG5

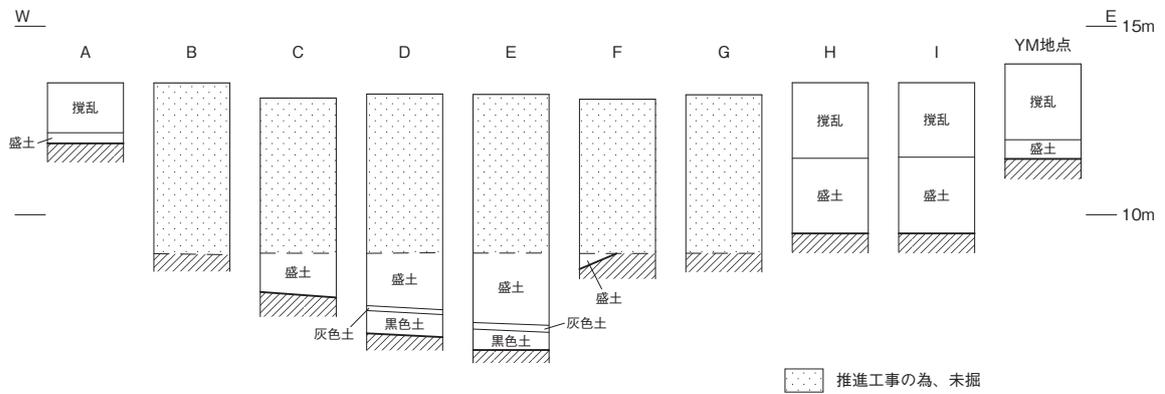
工学部基幹整備共同溝地点



II-4 図 KKC 区 平面図



II-5 図 KKC 区 谷跡推定断面図



II-6 図 KKC 区 土層柱状図

第2節 出土した遺物

(1) 陶磁器類

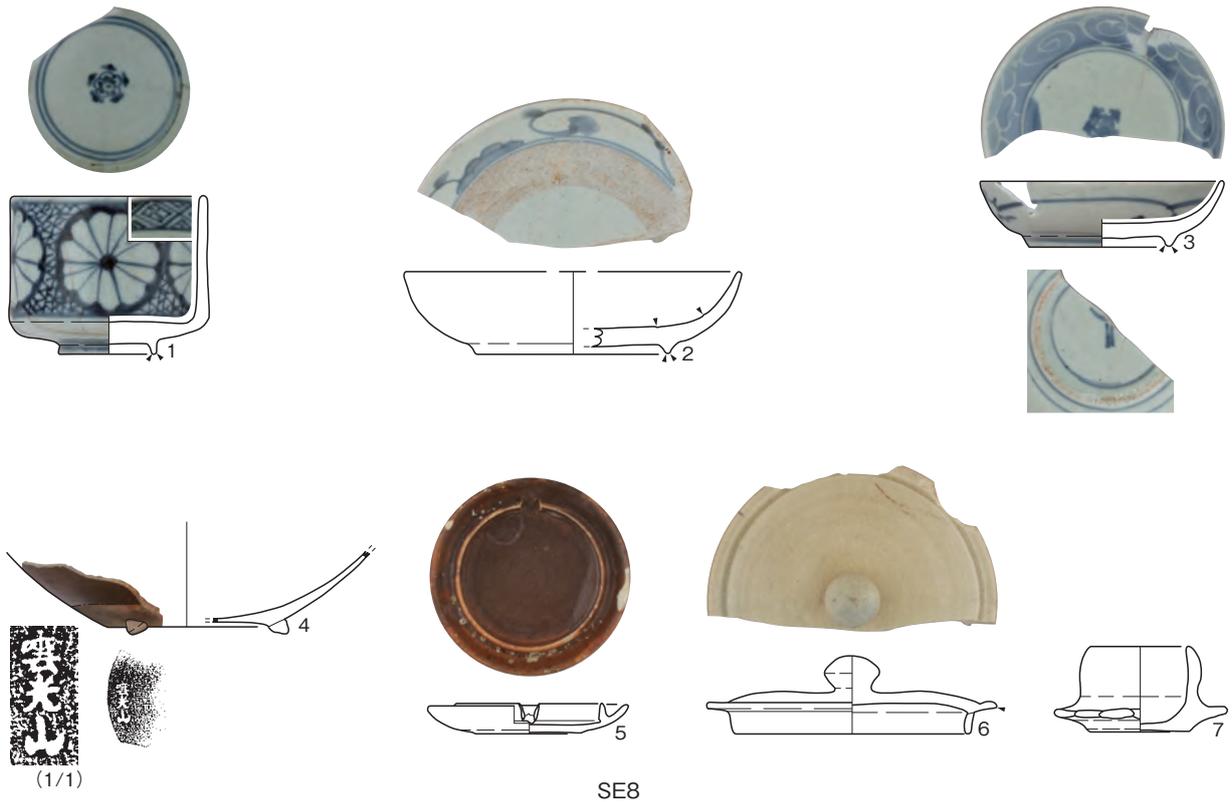
本地点からはコンテナ1箱の遺物（磁器・陶器・土器・その他）が出土している。磁器・陶器・土器の分類基準は「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）」（東京大学埋蔵文化財調査室1999）を参照している。遺跡における分類は数量分析により様々な文化・時代の様相を浮かび上がらせる手段である。そのためにはある一定以上の数量（推定個体数100個体以上）を必要とする。本地点においては、推定個体数100個体以上の遺物量を有する遺構がなかったため、大まかな年代観を出し検証した。

SE8（遺構Ⅱ-4図、遺物Ⅱ-8図）

1～3は肥前系染付磁器である。1は筒形碗でJB-1-1に分類される。見込み手描き五弁花。内面口縁部に四方襷文を持つ。体部はわずかに内傾している。2、3は皿である。2は見込み蛇ノ目釉剥ぎで高台径が大きい。梅花繫ぎ文。JB-2-mに分類される。3は絵付けや作りが粗雑な皿で、JB-2-gに分類される。墨弾き。見込み、コンニャク印判五弁花。高台内銘あり。4～6は陶器である。4は鉄釉土瓶でTZ-34-1に分類される。底部に「雲光山」の刻印。5は瀬戸・美濃系陶器の油受け皿でTC-40-cに分類される。6は蓋でTZ-00に分類される。おそらく銹絵染付土瓶の蓋であろう。7は土器で釜形土製品。DZ-5-cに分類される。口の窄まった茶釜形と口縁部がやや内湾気味に立ち上がる2種類に分けられる。7は後者である。胎土は橙色。江戸在地系と思われる。18世紀後葉に比定される遺物群である。

盛土層（遺構Ⅱ-6図、遺物Ⅱ-8図）

1は肥前系染付磁器蓋。広東碗（JB-1-m）の蓋。JB-00-bに分類される。内・外面共に笹文様。2～5は瀬戸・美濃系陶器である。2は朝顔形の花生けでTC-22-bに分類される。体部上半灰釉。体部下半錆釉。3、4は底部釉拭き取りの二合半灰釉徳利でTC-10-aに分類される。4は線書きのようになっている釘書きあり。「久〇」。5は五合灰釉徳利でTC-10-dに分類される。6は土器である。透明釉。脚無しの油受け皿。DZ-40-bに分類される。広東碗（JB-1-m）。透明釉で脚無しの油受け皿（DZ-40-b）。これらと、徳利（TC-10）では、時期がややずれるかもしれない。18世紀中葉から後葉に掛けての遺物群である。



SE8



KKC 区盛土層

II-8 図 SE8、KKC 区盛り土層出土遺物

第Ⅲ章 成果と課題

江戸時代から明治初期の工学部共同溝地点周辺の地形

原 祐一, 香取 祐一

はじめに

工学部共同溝地点は、加賀藩「江戸御屋敷絵図」(金沢市立玉川図書館所蔵清水文庫 持 18.6-27-1)「参謀本部陸軍部測量局五千分一東京北部」(明治16年測量)、帝国大学平面図(明治19年)と理学部7号館地点で行なわれた加賀藩八筋長屋の発掘調査成果、医学部附属病院受変電設備棟地点の発掘調査成果から総合的に判断すると、KKA区は加賀藩邸、KKB区、KKC区が加賀藩邸と水戸藩邸の地境に該当する。加賀藩邸に関しては絵図をはじめとする文書が多く残されているが、調査区のほとんどを占める水戸藩邸に関しては、現在のところ藩邸内の状況を示す絵図等の史料は見出せない(2000年当時)。そのため、発掘調査の成果は水戸藩邸内の土地利用状況を知る上で重要である。本文では、「参謀本部陸軍部測量局五千分一東京北部」の等高線を現況図に重ね、発掘調査の成果から、江戸時代未の調査周辺地の旧地形を検討した。

1. 明治16年の地形と現在の地形(Ⅲ-1)

明治16年と現在の地形の検討に使用する地図は、

- a. 参謀本部陸軍部測量局五千分一東京北部 明治16年測量
- b. 明治19年帝国大学平面図(東京大学施設部蔵) Ⅲ-2^(註1)
- c. 東京都都市計画局1993 1:2500 東京都地形図「上野公園」

である。江戸期から現在まで加賀藩邸、大聖寺藩邸、富山藩邸の痕跡を示す部分A～Dを軸に地図の重ね合わせを行なった。

- A. 加賀藩邸内の心字池(三四郎池)を取り囲む育徳園と馬場を取り囲むライン。
- B. 加賀藩長屋、現在の龍岡門近くの長屋部分のライン。現在も石垣が残る。
- C. 大聖寺藩邸の南側のライン
- D. 陸軍参謀本部図、帝国大学平面図ともに描かれている帝国大学医学教室、旧富山藩御殿^(註2)

今回使用した3種の地図は、製作目的、測量方法が異なるため完全な一致は望めないが、ABCラインに関しては比較的よく一致した。Dの医学教室も陸軍参謀本部図、帝国大学平面図で比較的よく一致する。そこでA～Dを基準に陸軍参謀本部図を東京都地形図に重ね、現在の地形と明治16(1883)年の地形を比較した。陸軍参謀本部図の等高線は2m単位のため詳細な検討はできないが、文学部、法学部、経済学部、医学部、病院地区は、ほぼ平坦な地形であることは明治16(1883)年と変わらない。

調査を行なった工学部付近では三四郎池から弥生門に向かう谷の他、数本の谷が認められる。また、帝国大学平面図でも谷状の地形が描かれている。現在、明治16(1883)年に見られる谷は埋め立てられ、弥生門に向かう傾斜として痕跡を残している。

2. 工学部共同溝地点の谷跡と明治 16 年の地形

第Ⅱ章に示した KKC 区第 6、7 図は医学部附属病院受変電設備棟Ⅱ期地点を含めた土層模式図と谷跡の断面を推定したものである。KKC 区谷跡は確認された範囲で幅 24m、最深部の標高は 7m であった。一部に自然堆積層と考えられる黒色土、灰色土の堆積を確認し、その上層で谷を埋めた盛土を確認した。共同溝地点の東に位置する医学部附属病院受変電設備棟地点の幕末の生活面の標高は約 12m、A セクション部の最上面の標高は約 13m である。明治 16 (1883) 年の等高線によれば、弥生門周辺の標高は 12m である (Ⅲ-1)。しかし、検出した谷底との標高差は 5m で、この段階で谷は埋められていたと考えられる。盛土から出土した陶磁器類は、陶磁器編年によれば 18 世紀中頃から 19 世紀の陶磁器である。盛土の年代は明確ではないが、近代以降に生産されたレンガ等の遺物が認められない。KKC 谷跡の底の標高は 7m、明治 16 (1883) 年の標高は 14m ~ 16m で谷跡が埋め立てられている。明治 16 (1883) 年の測量図が作成されるまでの間に、土地の有効利用を目的に谷が埋められたと考えられる。

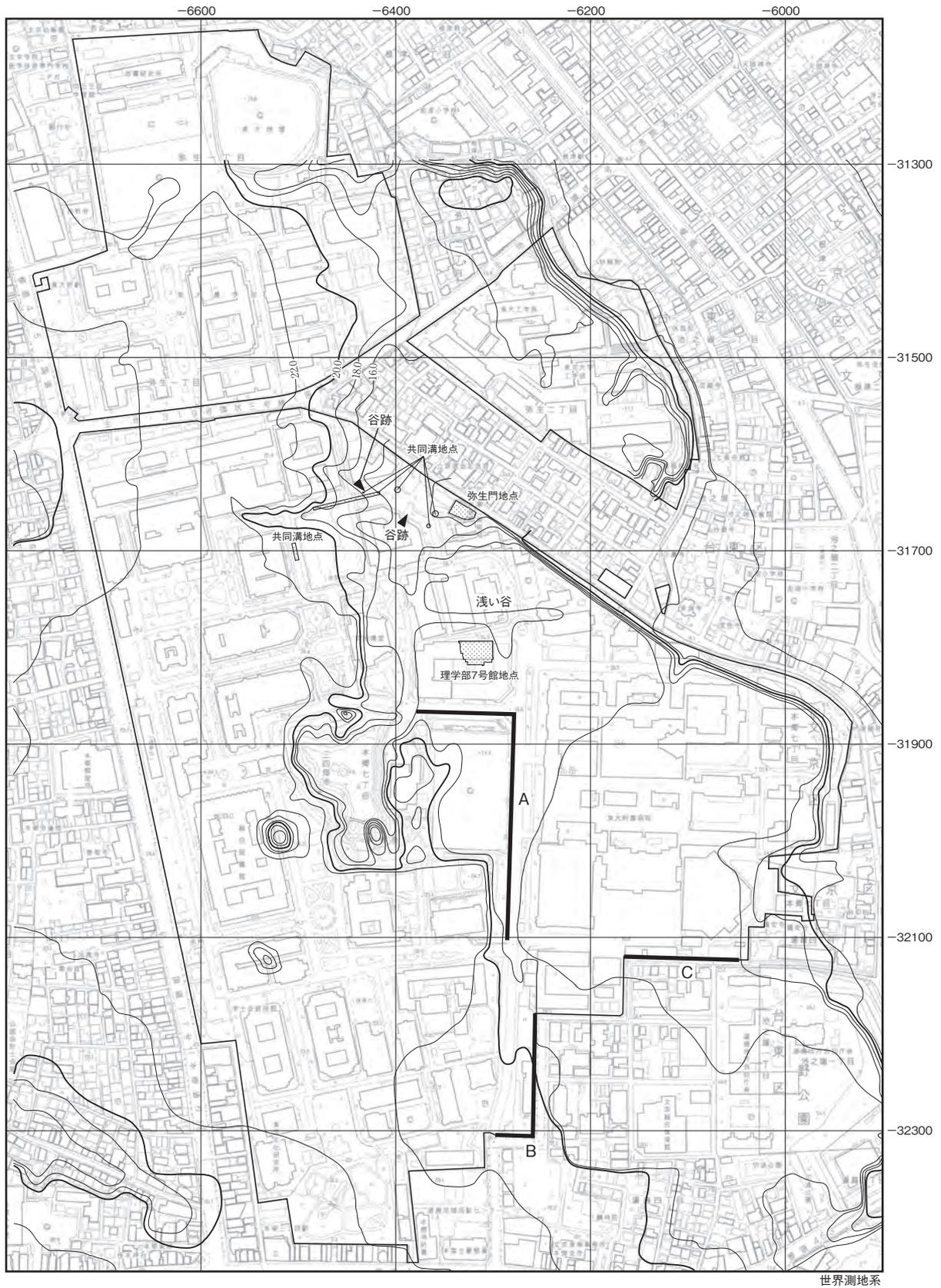
まとめ

発掘調査の結果と陸軍参謀本部測量図、帝国大学平面図の検討から、江戸時代から明治時代の地形の変遷を検討することができた。発掘調査の結果と陸軍参謀本部測量図の検討は、江戸末から明治時代に行なわれた開発の状況を検討する上で有効である。今回の検討に、関東ローム層の堆積から推定される旧地形のデータを合わせることにより、江戸時代とそれ以前の開発について検討が可能であると考えている。今後、新たなデータの蓄積をはかり、これまでの調査で得られた膨大な調査データを再検討し、文献史学の側の成果を加え、本郷台地で行なわれた江戸時代の開発について検討を行なっていきたい。

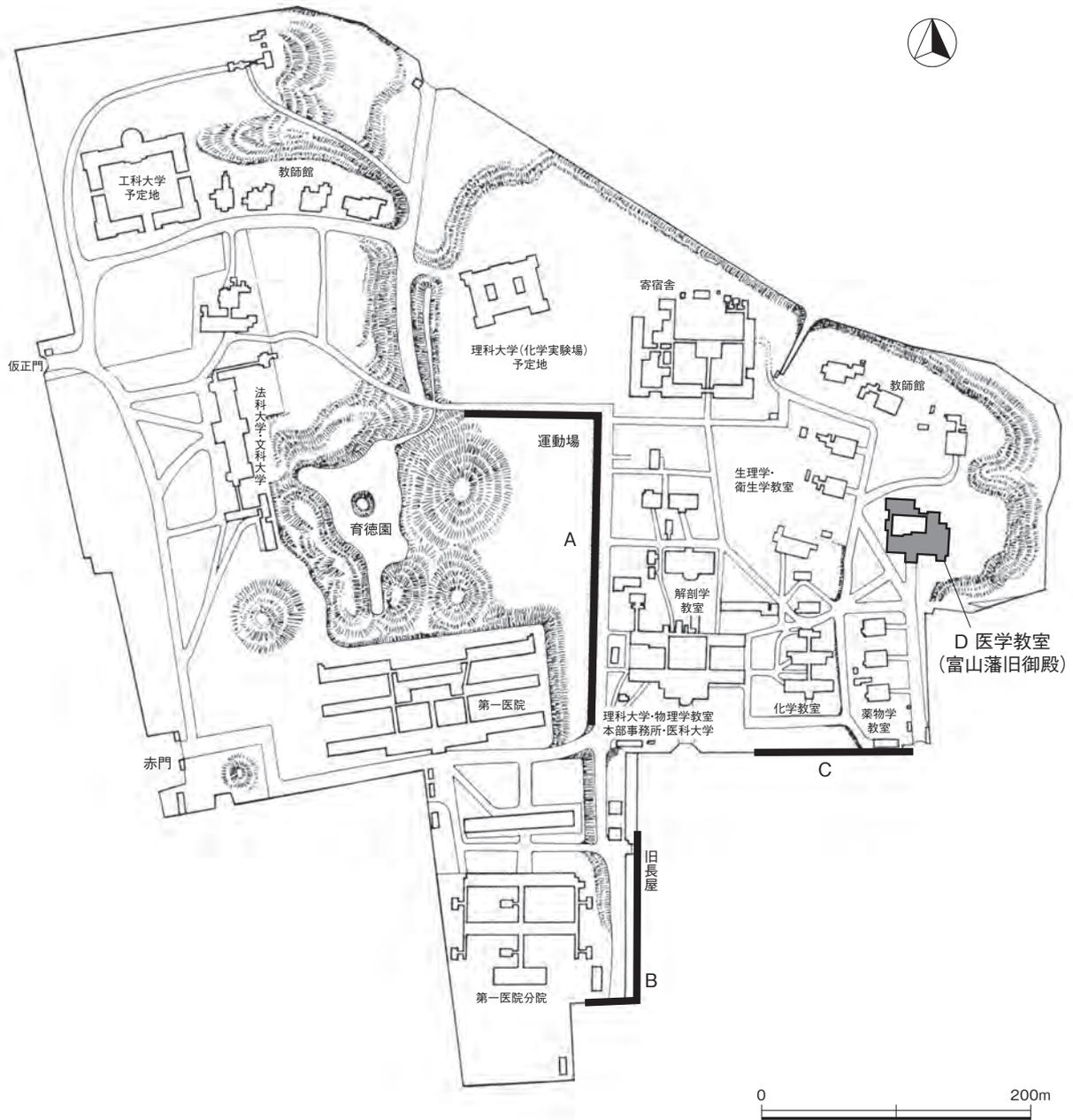
【註】

1. 帝国大学平面図は藤井啓介 1988「東京大学の誕生」挿図 2 全体転置図『本郷キャンパスの百年』東京大学総合研究資料館 (P.54) を使用した
2. 宮崎勝美 1992「御殿下のルーツを採る」『東京大学資料室ニュース』pp.3-5 富山藩御殿は医学教室として使用され、明治 26・27 年帝国大学略図では三四郎池畔の山上に移築されている。

第3部 東京大学構内遺跡発掘調査報告書



Ⅲ-1図 明治16（1883）年の地形と現在の東京大学



Ⅲ-2 図 明治 19 (1886) 年の東京大学構内 『明治 19 年帝国大学平面図』 東京大学施設部蔵

報告書抄録

ふりがな	とうきょうだいがくこうないいせきちやうさけんきゆうねんぽう							
書名	東京大学構内遺跡調査研究年報							
副書名								
巻次	8							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	原 祐一 (編)、香取 祐一							
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室	所在地	〒 153-8904 東京都目黒区駒場 4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 03-5452-5103					
発行機関	東京大学埋蔵文化財調査室	所在地	〒 153-8904 東京都目黒区駒場 4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 03-5452-5103					
発行年月日	平成 24 年 5 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とうきょうだいがくほんこうこうない 東京大学本郷構内 いせき の遺跡 (本郷台遺跡群) こうがくおきやうどうこうちてん 工学部共同溝地点	とうきょうと 東京都 がんきやうく 文京区 ほんこう ちやうめ 本郷7丁目 ほん こう 3 番 1 号	13105	59	35° 42' 51"	139° 45' 41"	平成 12 年 7 月 3 日～ 7 月 12 日, 10 月 11 日～ 10 月 14 日, 平成 13 年 2 月 21 日～ 2 月 28 日	900㎡	工学部基 幹整備共 同溝埋設 に伴う事 前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
本郷構内の遺跡 工学部共同溝地点	武家屋敷 (加賀藩・ 水戸藩)、 埋没谷	近世	土坑、井戸、石垣	陶器、磁器、土器				

東京大学駒場構内の遺跡

駒場情報教育棟地点発掘調査報告書

例 言

1. 本書は、東京大学大学院総合文化研究科・教養学部の情報教育棟新営に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本地点の略称は「FGE」とする。
3. 本地点は、東京都目黒区駒場3丁目8番地1号、東京大学駒場Iキャンパス内に所在している。
4. 本地点は『東京都遺跡地図』では範囲不明の縄文中期・晩期の埋蔵文化財包蔵地（目黒区 No.1・東大遺跡）として登録されている。しかし1998年に刊行した大学院数理学研究棟地点同様、上記東大遺跡を包括する遺跡名として東京大学駒場構内遺跡を使用する。
5. 本地点の調査面積は940㎡である。
6. 調査期間は下記の通りである。
試掘調査 :1993年5月（詳細不明）
本調査 :1993年8月10日～10月20日
7. 発掘調査は東京大学埋蔵文化財調査室が行い、武藤康弘が担当した。
8. 本書の編集は追川吉生が行った。
9. 調査時の写真は武藤康弘が、遺物写真は青山正昭が撮影した。
10. 遺物の実測・浄書は主に（株）盤古堂が行い、小林照子がデジタル化を行った。
11. 図版の作成とデジタル化は渡邊法彦が行った。
12. 本書に添付したCD-ROMには、遺物写真（jpg形式）、電子報告書（pdf形式）を収録している。
13. 発掘調査に伴う図面・写真・出土遺物は東京大学埋蔵文化財調査室が、本学駒場リサーチキャンパス（東京都目黒区駒場4-6-1）および同工学系研究科附属柿岡教育研究施設（茨城県石岡市柿岡414）内にて、保管・運用している。
14. 発掘調査および報告書作成にあたり、下記の諸氏、期間より御協力・御教示を賜った。記して謝意を表す。（敬称略）
武田浩司 小池聡 野口淳 加藤建設（株）（株）盤古堂 目黒区教育委員会 総合文化研究科・教養学部 人文社会系研究科考古学研究室 本部施設・資産系
15. 発掘調査・整理作業参加者
青山正昭、香取祐一、小林照子、渡邊法彦、加藤建設株式会社

凡 例

1. 遺物の実測図は原則として石器は原寸、土器は1/3で掲載している。その他の尺度のものは、各図版にスケールを表示している。
2. グリッドは10m 間隔に設定し、東から西へ数字を、南から北へアルファベットを付した。
3. 遺構の略号は以下に示す。
SP: ピット
SX: その他（集石遺構を含む）
4. 本書に使用した地形図は以下のものがある。
国土地理院発行 1/25,000 地形図『東京西南部』
(財) 日本地図センター発行 『第一軍管地方二万分一迅速測図原図』

東京大学本郷構内の遺跡
駒場情報教育棟地点掘調査報告

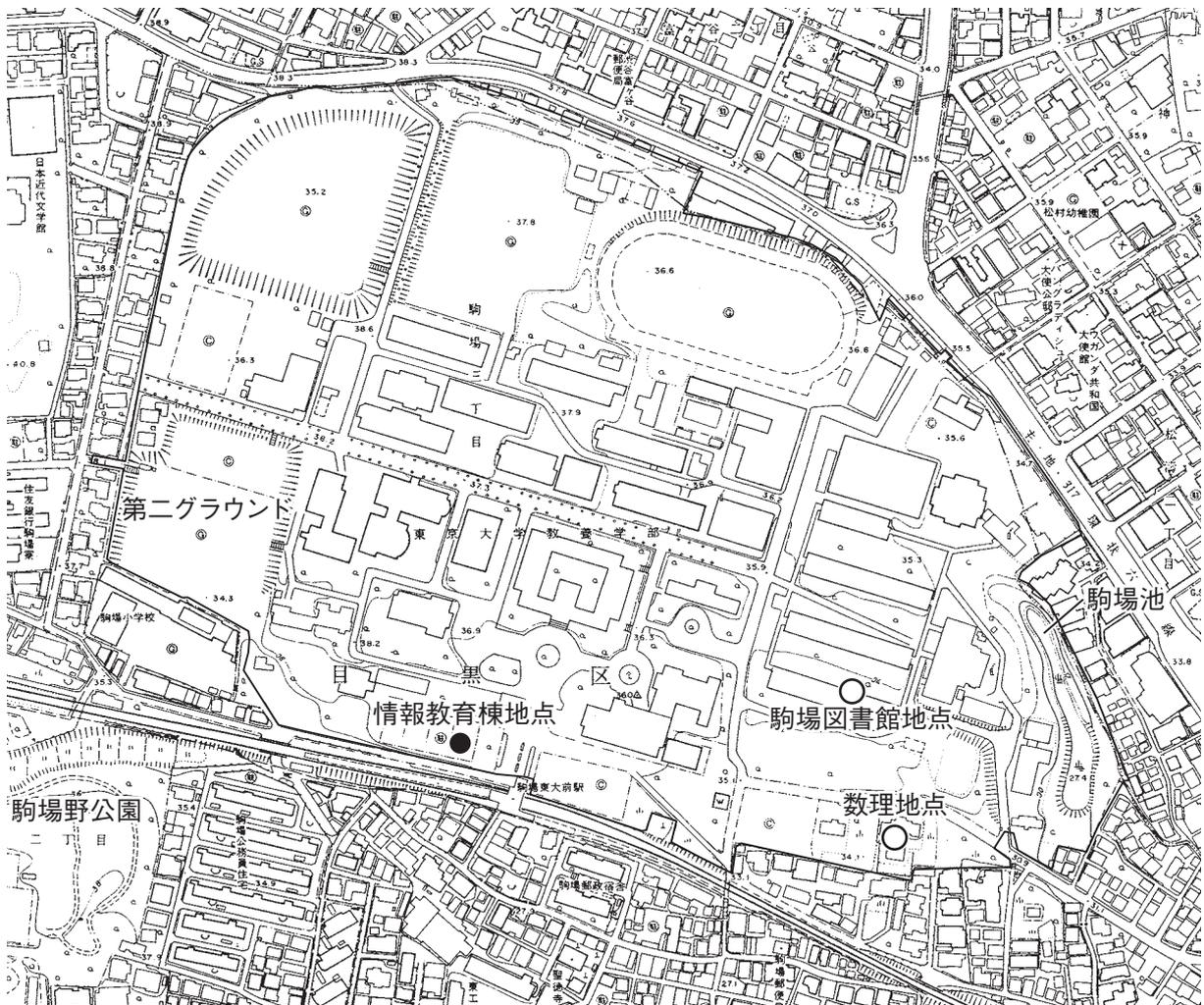
目 次

例 言	
凡 例	
目 次	
第 I 章 調査の概要	
1 調査に至る経過	173
2 調査の方法と経過	174
第 II 章 遺跡の立地と周辺の遺跡	
1 歴史的環境	175
2 地理的環境	175
3 周辺の遺跡	176
第 III 章 調査の成果	
1 縄文時代	181
2 旧石器時代	185
第 IV 章 調査のまとめ	203
参考文献	
報告書抄録	

第 I 章 調査の概要

1. 調査に至る経過

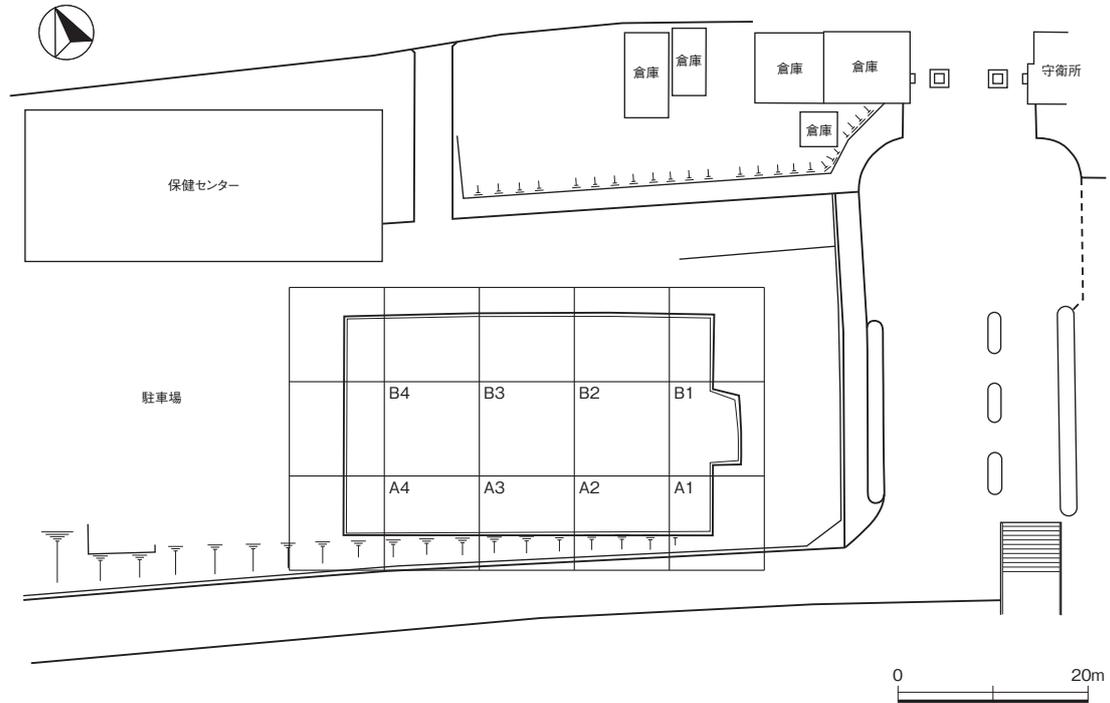
東京大学埋蔵文化財調査室では、平成 5（1993）年に東京大学教養学部（当時。以下、教養学部）から駒場 I キャンパス内の情報教育棟建設予定地内における遺跡の存否確認の依頼を受けた。そのため同年 5 月に試掘調査を実施したところ、縄文時代の土器と集石遺構を確認した。そこで目黒区教育委員会と調査室で協議し、8 月 10 日～10 月 20 日かけて本調査を実施した。調査面積は 940m²である（I-1 図）。



I-1 図 駒場キャンパスと調査地点

2. 調査の方法と経過

調査区全体を覆う10m四方のグリッドを設定した。そして調査区東南隅のグリッドの北西杭を規準とし、南から北にAから始まるアルファベット、東から西へ1から始まる数字を組み合わせた杭によってグリッド名とした（I-2図）。



I-2図 調査区設定

第Ⅱ章 遺跡の立地と周辺の遺跡

1. 歴史的環境

東京大学駒場第一キャンパスのある目黒区駒場周辺は、江戸時代には駒場野と呼ばれた将軍家の御鷹場であった。もともと上目黒村・中目黒村・下目黒村の入会地であった駒場野は、徳川吉宗の将軍就任にともなって再開した鷹狩りの鷹場となり、御用屋敷や御菜園が設けられた。

明治時代になると、1874年（明治7）に農務省農事修学場とその農場がこの地に開設された。農事修学場は現在の駒場公園にあり、農場は現在の駒場第一キャンパスから第二キャンパスまでを含む広大なものだった。

農務省農事修学場は1877年（明治10）に農学校と改称されるなど、数度の改称を経た後の1890年（明治23）に、農科大学として帝国大学に編入された。しかし1926年（大正15）に、本郷キャンパスに隣接する前田侯爵邸の敷地と農科大学の中央部とが交換されることで、広大な農地は東西に二分された。さらに東側の農地が1935年（昭和10）に、本郷にあった第一高等学校と交換された。

1949年（昭和24）に新制大学として東京大学教養学部が設置されると、第一高等学校はそれに組み込まれるような形で翌年に廃止され、施設は東京大学教養学部へと引き継がれ、現在の駒場キャンパスにいたる。

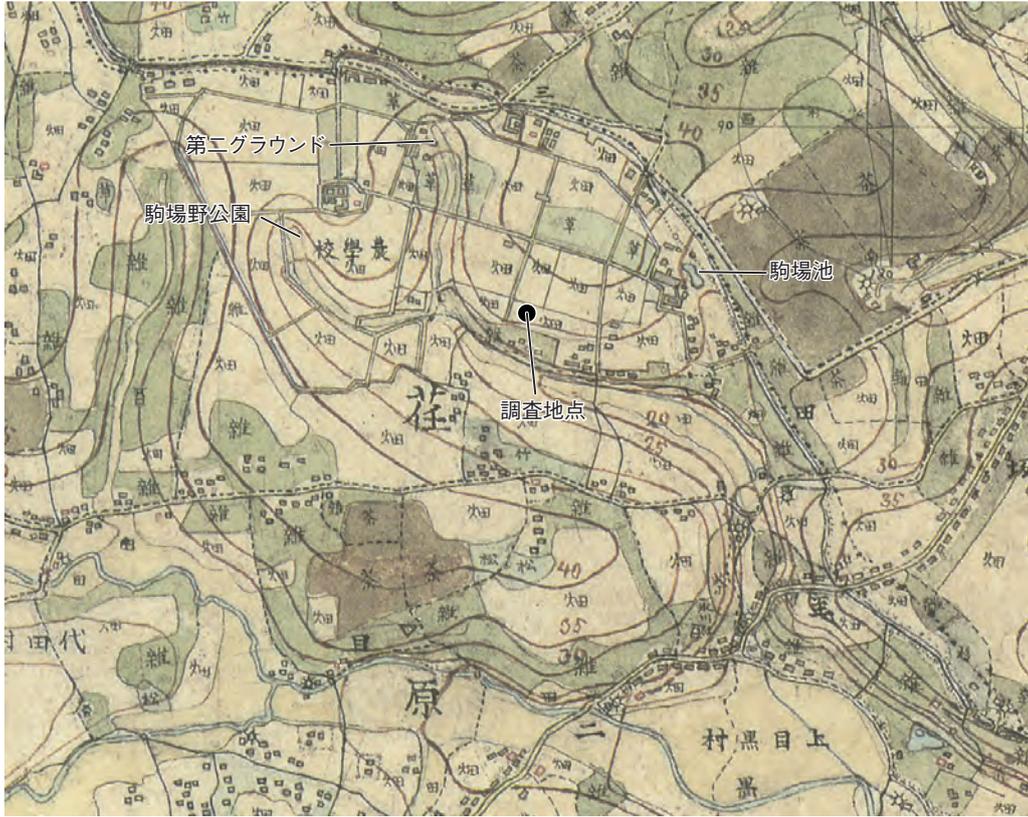
2. 地理的環境

東京大学駒場第一キャンパスが所在する目黒区は、武蔵野台地の東端に位置している。武蔵野台地の東側は、いくつかの段丘面にわけられる（貝塚1979）。目黒区は淀橋台（区の北東部）・目黒台・荏原台（区の南西部）の各段丘面からなっており、駒場キャンパスは淀橋台上に位置している。淀橋台は神田川と目黒川の谷に挟まれた台地で、キャンパス内には目黒川支流の谷頭が存在する。

キャンパス内には東西2ヶ所の谷があり、それによってキャンパス内の地形を起伏に富んだものにしてしている。東側の谷は駒場池（一二郎池という愛称・Ⅱ-2図）として残っているが、西側の谷は第2グラウンドやテニスコート一帯に、谷頭の地形を残すのみである。大学に残る明治26年の農科大学略図でこれら2ヶ所の谷の周辺を確認すると、東側の駒場池は養魚場として、西側の谷は水田として利用されていたことがうかがえる。

明治13年に測量された迅速図を（Ⅱ-2図）みてみると、西側の谷は南側に開析し、流路が始まっていることが確認される。これが目黒川の支流の一つ、空川である。空川は駒場野公園内の谷からのびる流路と合流したのち、南東方向へと向きを変えて、遠江橋付近（現松見坂交差点付近）で、駒場池を源流とする小河川と合流し、最終的には目黒川と合流する。目黒川は世田谷区の上北沢周辺を源流とする北沢川と、同じく北烏山を源流とする烏山川とが、三宿付近で合流した河川で、この空川をはじめ、蛇崩川などいくつかの支流を合わせながら、品川区内で東京湾に注ぐ。

なお農科大学の敷地に含まれていた現在の駒場野公園付近でも、前述の流路一帯は水田として利用されていたことが農科大学略図からうかがえる。現在この水田の一部（ケルネル田圃）が筑波大学附属駒場高校の生徒たちに受け継がれているのは、農科大学の農業教員養成所を基礎とした東京教育大学農学部の跡地であることにちなむ。



II-2図 周辺の旧地形

今回報告する情報教育棟地点は、空川の谷頭である第2グラウンドの南東約100mに位置しており、空川の形成する開析谷に面した台地突端部にあたる。南側は駒場東大前駅の東西改札口を結ぶ坂道（東から西へと傾斜）だが、調査区の土層堆積状況には傾斜は認められない。

3. 周辺の遺跡

駒場第一キャンパスでは戦前の旧制第一高等学校移転に伴う工事で既に、縄文時代中期の土器が出土しており（目黒区教育委員会 1953）、埋蔵文化財調査室が発掘調査を実施するようになった1992年にはすでに、東大遺跡として東京都遺跡地図に記載されていた（縄文時代中期・晩期の包蔵地）。しかし発掘調査が本格化したのは、隣接する保健センターで試掘調査が実施された1992年からである。次いで翌年の5月に本地点と、数理科学研究棟地点で試掘調査と事前調査が行われた（東京大学埋蔵文化財調査室 1999）。以来、2010年度までにキャンパス内では22地点の調査が行われている（東京大学構内遺跡調査一覧 表2）。1996（平成8）年の『東京都遺跡地図』では本キャンパスの一部が縄文時代中期、晩期の周知の埋蔵文化財包蔵地（目黒区N0.1・東大遺跡）としてのみ登録されていたが、現在ではキャンパス全体が周知の遺跡（東京大学駒場構内）として登録されている。

キャンパス内の遺跡は、旧石器時代から近代まで時代は幅広いが、中心となるのは旧石器時代と縄文時代である。そこで目黒川沿いの当該時期の遺跡について概観したい（II-3図）。

旧石器時代

目黒区内で確認される旧石器時代の遺跡は多くない。駒場キャンパスから南側に800mほどの距離にある大橋遺跡（II-3図の5、以下同）は目黒川左岸の台地縁辺部に立地する。大橋遺跡では立川ロー

ムⅣ層～Ⅸ層において、石器ブロックと礫群が検出されている。

中目黒遺跡（15）は谷戸前川（目黒川支流）左岸の遺跡である。B地点では台地から谷戸前川へと向かう緩斜面で、Ⅳ層とⅤ・Ⅵ層から9ヶ所の遺物集中地点（礫群を含む）が確認されている。出土石器には、ナイフ形石器、尖頭器などがある。B地点の北西側に隣接するC地点では、Ⅶ～Ⅸ層で2ヶ所の石器集中部が認められ、石器19点、礫1点が出土している。斜面の下側のしたA地点からは、ナイフ形石器、搔器などの石器を含む石器集中部が3ヶ所、礫群が8ヶ所検出されている。

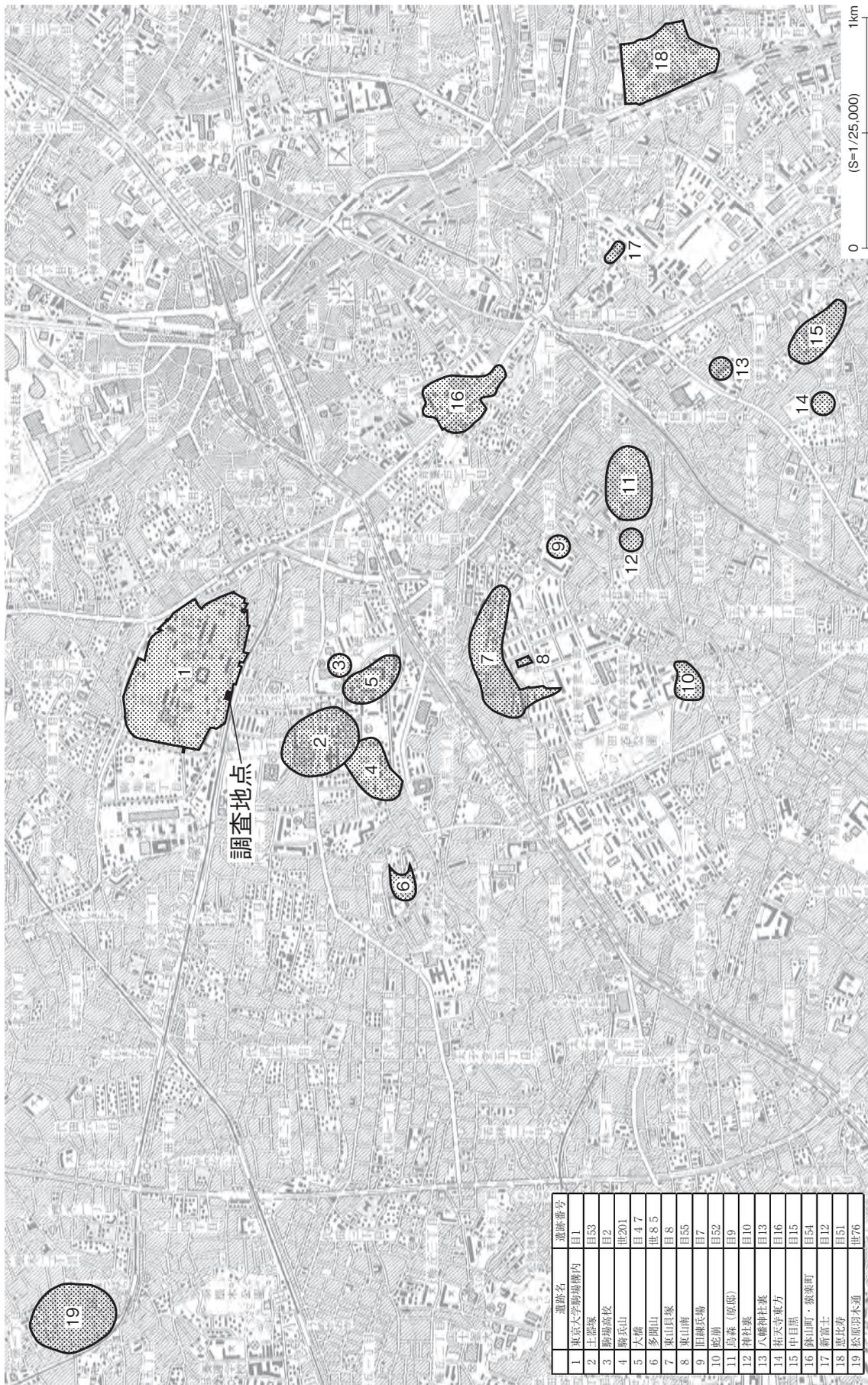
恵比寿遺跡（18）は目黒川左岸の段丘上にあり、調査ではⅤ層からナイフ形石器と角錐状石器が出土している。また近世の畝跡遺構に伴う資料であるが、細石刃核も認められる。

縄文時代

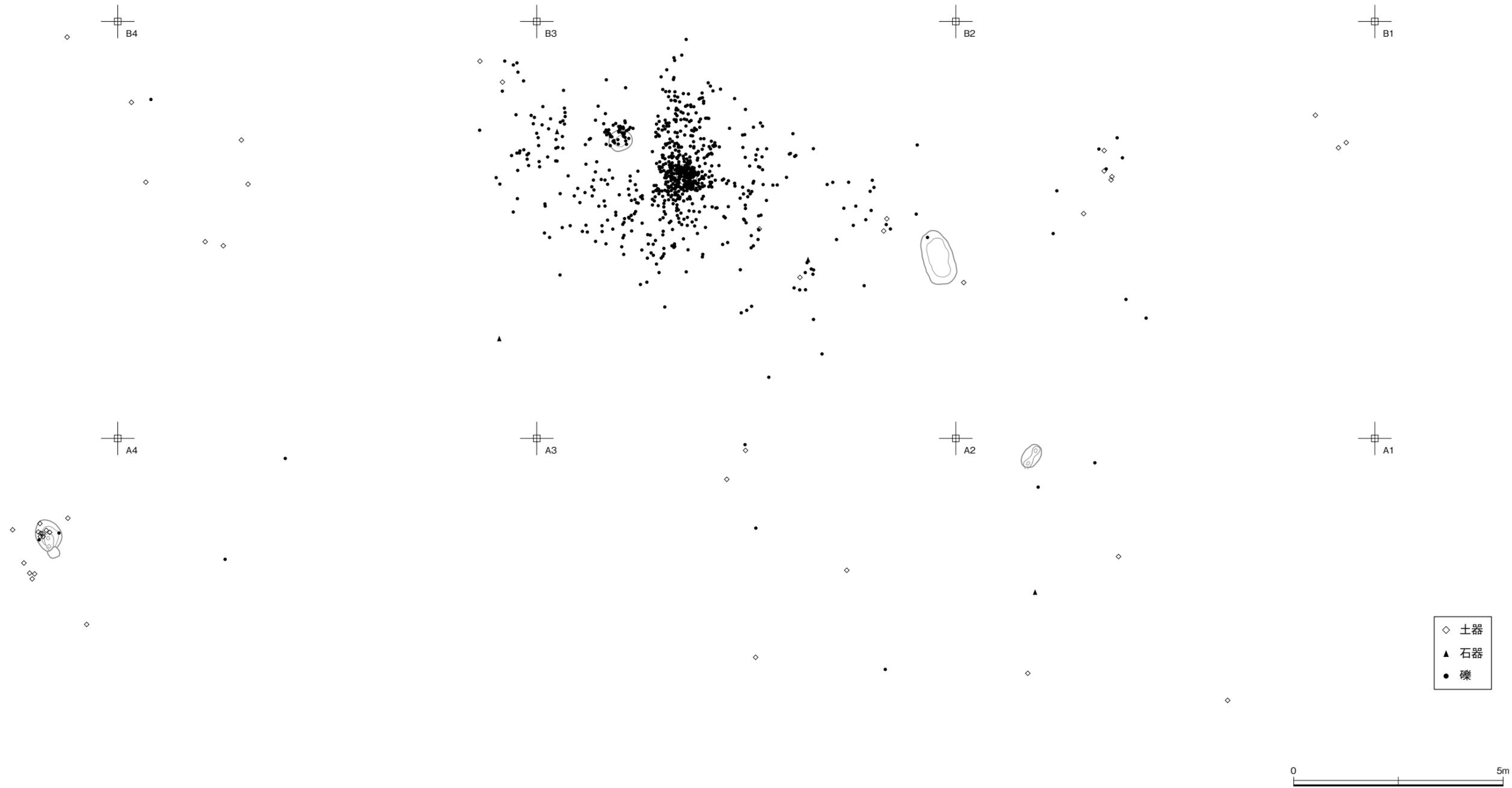
区内では縄文時代早期～前期にかけての遺跡は、旧石器時代と同様に、それほど多くない。本地点東側に隣接する情報教育棟地点で早期の集石遺構が検出されている（未報告）ほか、駒場高校グラウンド（3）や鉢山町猿楽町遺跡（渋谷区・16）などで該期の土器が出土している。集落遺跡としては中目黒遺跡B地点があげられる。ここでは早期撚糸文土器を伴う住居址が3基、土坑1基が検出されている。

区内の縄文時代の遺跡数（包蔵地を含む）は中期が最も多い。中でも大橋遺跡では、東西100m、南北120mの範囲に約100基の住居址が検出されている。また恵比寿遺跡では3基の住居址が検出されている（そのうちの1基に中期の深鉢が出土している）。

縄文時代後期～晩期になると遺跡数は再び減少する。その中で目黒川右岸の東山貝塚（8）は、明治時代に坪井正五郎らによって調査されて以降、数度の発掘調査が実施されている学史的にも重要な遺跡である。遺跡からは住居址のほか、土坑墓（後期・晩期）や集石（後期）なども検出されている。またX地点では、低湿地部が調査されており、赤漆が施された木製の櫛の一部や、直径約1.2mの半円形をなす木杭列などの木製品も出土している。



II-3 図 周辺の遺跡



Ⅲ-1図 調査区全体図(縄文時代)

第三章 調査の成果

1. 縄文時代

A2グリッド、B3グリッド、A5グリッドから計5基のピット（Ⅲ-1・2図）、B3グリッドで1基の集石遺構（SX6）を検出した（Ⅲ-1・4図）。しかし本地点の調査では、立川ローム層までの掘削（Ⅲ-18図）を除いて土層堆積状況や、標高に関する記録と、遺物の出土地点に関する記録がとられていないため（SX6を除く）、遺構、遺物ともに詳細な検討が不可能な状態だった。

上記の理由により、各ピットと遺物の共伴関係についても不明である。

(1) 遺構と遺物

SP1（Ⅲ-2・3図）

A5グリッド東端で検出。長軸 1.1m、短軸 0.6m、深さ不明。遺物は出土しない。

SP2（Ⅲ-2・3図）

B3グリッドで検出。長軸 0.6m、短軸 0.5m の円形を呈する。深さ不明。土器が1点出土（Ⅲ-1・5図1、1表）。土器は深鉢形土器の胴部片で、外面・内面ともに暗褐色を呈する。外面は風化が著しいものの、ナデの痕跡が認められる。内面はナデが施される。時期は不明。

SP3（Ⅲ-2・3図）

B3グリッド、SP2の約2m南側で検出。長軸 0.6m、短軸 0.5m の円形を呈する。深さ不明。遺物は出土しない。

SP4（Ⅲ-2・3図）

B2グリッドとB3グリッドの境界付近で検出。長軸 1.4m、短軸 0.7m の長方形を呈する。深さ不明。遺物は出土しない。

SP5（Ⅲ-2・3図）

A2グリッド北端で検出。長軸 0.6m、短軸 0.4m の楕円形を呈する。深さ不明。遺物は出土しない。

SX6（Ⅲ-1図）

B3グリッド。南北約7m、東西約10mの範囲に焼礫が集中する集石遺構（Ⅲ-1図）。前述の通り、堆積状況については不詳であるが、遺物の標高値を基に作成した垂直分布図をⅢ-1図下に示す。そのためこの集石遺構が掘り込みを伴うものであるか、あるいは覆土に焼土・炭化物が含まれていたかといった点は不明である。SX6の遺物分布範囲には、上記のSP2・SP3が重なるが、同様の理由で両者の関係についても不明である。

SX6からは750点の礫のほかに、土器5点、石器類が2点出土した。遺物の分布状況については附録CD-ROMに分布図（SX6遺物分布図1～9）を収録した。

土器はいずれも細片で詳細不明。石器は出土した2点を図示した（Ⅲ-5図2・3、Ⅲ-2表）。2（資料No.27・以下同）はホルンフェルスの石核。3（No.173）は砂岩製の打製石斧。上部と刃部を破損している。両側縁は連続した剥離によって整形されている（Ⅲ-2表）。礫は694点に被熱が認められる。石材は3/4が砂岩であり、残りがチャートである（以下、礫の観察表はCD-ROMに収録）。

図版No.	資料No.	器種	特徴 (①色調②焼成③胎質)	文様・調整	備考
1	1	時期不明 深鉢形土器	①外・内:暗褐色 ②良好 やや軟質 ③粗 砂粒多含	外:ナデ? 内:ナデ	胴部片

Ⅲ-1表 SP2 出土土器観察表

図版No.	資料No.	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材
2	173	打製石斧	5.30	4.65	1.47	120.0	Sa
3	27	石核	4.75	5.93	3.50	108.0	Ho

Ⅲ-2表 SX6 出土石器観察表

(1) 遺構外出土遺物

A2 グリッド

土器3点、石器1点、礫2点が出土した(Ⅲ-6図・9図、Ⅲ-3・4表)。1(No.2)は深鉢形土器の胴部片。外面は淡茶褐色、内面は淡暗褐色を呈する。長石・角閃石粒子をわずかに含む。外面に撚糸文を縦方向に施文。内面は明寮ではないが、ナデの痕跡か。早期。2(No.3)は深鉢形土器の胴部片。外面は淡褐色、内面は淡褐色を呈する。2本一組の沈線によって楕円形に区画された文様帯内に、単節縄文が充填される。内面は縦方向のナデが施される。中期。3は深鉢形土器の胴部片。外面・内面ともに淡茶褐色を呈する。胎土に雲母・長石・石英を少量含む。焼成は良好。3本一組の垂下沈線により文様帯を区画。内面にナデの痕跡が認められる。後期。4(No.7)は凝灰岩製の縦長剥片。

図版No.	資料No.	器種	特徴 (①色調②焼成③胎質)	文様・調整	備考
1	2	縄文早期 深鉢形土器	①外:淡茶褐色 内:淡暗褐色 ②良好 やや硬質 ③緻密 砂粒少含 微粒の 長石・角閃石含	外:縦位撚糸文 内:ナデ?	胴部片
2	3	縄文中期 深鉢形土器	①外:淡褐色 内:淡褐色 ②良好 硬質 ③細 砂粒少含	外:胴部文様帯は2本一 組沈線で楕円区画 区画内は単節縄文充填 内:ナデ	胴部片
3	4	縄文後期 深鉢形土器	①外:淡茶褐色 内:淡茶褐色 ②良好 やや軟質 ③細 微砂粒中量 雲母・ 長石・石英少量	外:胴部文様帯は3本一 組垂下沈線で縦位区画 内:ナデ	胴部片

Ⅲ-3表 A2 グリッド出土土器観察表

図版No.	資料No.	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材
4	7	剥片	2.72	1.50	0.48	1.9	Tu

Ⅲ-4表 A2 グリッド出土石器観察表

A3 グリッド

土器4点(Ⅲ-5表)、礫3点が出土した(Ⅲ-7図・10図、Ⅲ-5表)。1(No.1)は深鉢形土器の胴部片。外面は淡褐色から淡暗褐色、内面は淡暗褐色を呈している。雲母を少量含む胎土で、焼成は良好。内外面ともにミガキが施される。後期。2(No.2)は深鉢形土器の口縁部片。外面・内面ともに暗褐色を呈する。雲母を少量含む胎土で、焼成は良好。1と同一個体の可能性あり。文様帯は部分的にしか残されていないが、3本以上の平行沈線が認められる。3(No.6)は深鉢形土器の口唇部。外面は赤褐色、内面は橙色を呈する。雲母少量含む胎土。文様帯は平行沈線によって区画され、内部を単節縄文によって充填される。出土地点不明の土器片1点と接合する。後期。礫はいずれも焼けている。

図版No.	資料No.	器種	特徴(①色調②焼成③胎質)	文様・調整	備考
1	1	縄文後期 深鉢形土器	①外:淡褐色～淡暗褐色 内:淡暗褐色 ②良好 硬質 ③緻密 砂粒少含 雲母少含	外:縦ミガキ 内:縦ミガキ	胴部片
2	2	縄文後期 深鉢形土器	①外:暗褐色 内:暗褐色 ②良好 硬質 ③緻密 砂粒少含 雲母少含	外:口縁部文様帯は3本以上 横行沈線で区画 ケズリ のちミガキ 内:縦ミガキ	口縁部片 1と同一個体
3	6	縄文後期 深鉢形土器	①外:赤褐色 内:橙色 ②やや堅 ③細 砂粒少含 雲母少含	外:口縁部文様帯は横行沈線 で区画 区画内は単節縄文 充填 ケズリのちミガキ 内:横ミガキ	口縁部片 位置不明 1点接合

Ⅲ-5表 A3 グリッド出土土器観察表

A4 グリッド

礫2点が出土した(Ⅲ-8図)。いずれも焼けている。

A5 グリッド(Ⅲ-8図・11図、Ⅲ-6表)

土器17点、礫2点が出土した。土器は破片で、同一の個体(深鉢形土器)の可能性が高い(Ⅲ-6表)。胎土は大きめの長石、石英、雲母を少量含み、焼成は良好で硬質。そのうち4点を図示する。1(No.3)は口縁部片で、口唇部直下に平行沈線がみられる。内外面ともに淡褐色を呈する。ケズリの後、口唇部にミガキを施す。内面は横方向のミガキが施される。2はNo.4とNo.19の接合資料で、口縁部。1と同様、口唇部直下に平行沈線がみられる。内外面ともに淡褐色を呈する。ケズリの後、口唇部にミガキを施す。内面は横方向のミガキが施される。3(No.8)は胴部片。文様帯の区画をなす直線状の垂下沈線が認められる。内面は横方向のミガキが施される。4(No.9)は胴部片。外面・内面ともに淡褐色を呈する。文様帯を区画する1条の沈線が認められる。内面は横方向のミガキが施される。

B1 グリッド

土器1点が出土した(Ⅲ-12図・14図、Ⅲ-7表)。1(No.1)は深鉢形土器の胴部片。外面・内面とも暗茶褐色を呈する。胎土は緻密で雲母を少量含む。焼成は良好。8本を単位とした条線が縦方向に施される。

B2 グリッド

土器4点が出土した(Ⅲ-12図・15図、Ⅲ-8表)。1(No.3)は深鉢形土器の胴部片。外面赤褐色、

第3部 東京大学構内遺跡発掘調査報告

図版No.	資料No.	器種	特徴 (①色調②焼成③胎質)	文様・調整	備考
1	3	縄文後期 深鉢形土器	①外・内:淡褐色 ②良好 硬質 ③緻密 中砂粒中量 大長石・石英 小雲母少量	外:口唇直下横行沈線 ケズリのち口唇端ミガキ 内:横ミガキ	口縁部片 4 ・8・9・14 と同一個体
2	4	縄文後期 深鉢形土器	①外・内:淡褐色 ②良好 硬質 ③緻密 中砂粒中量 大長石・石英 小雲母少量	外:口唇直下横行沈線 ケズリのち口唇端ミガキ 内:横ミガキ	口縁部片 19 と接合 3・ 8・9・14と 同一個体
3	8	縄文後期 深鉢形土器	①外:淡黒褐色 内:淡茶褐色 ②良好 硬質 ③緻密 中砂粒中量 大長石・ 石英 小雲母少量	外:口唇直下横行沈線 直線垂下沈線文様帯区画 ケズリのち口唇端ミガキ 内:横ミガキ	胴部片 3・ 4・9・14と 同一個体
4	9	縄文後期 深鉢形土器	①外:淡褐色 内:淡茶褐色 ②良好 硬質 ③緻密 中砂粒中量 大長石・ 石英 小雲母少量	外:口唇直下横行沈線 直線又はU字状垂下 沈線文様帯区画 ケズリのち口唇端ミガキ 内:横ミガキ	胴部片 3・ 4・8・14と 同一個体
5	19	縄文後期 深鉢形土器	①外:暗褐色 内:淡褐色 ②良好 硬質 ③緻密 中砂粒中量 大長石・ 石英 小雲母少量	外:口唇直下横行沈線 U字状垂下沈線文様帯 区画 ケズリのち口唇 端ミガキ 内:横ミガキ	口縁部片 4 と接合 3・ 4・8・9と 同一個体

Ⅲ-6表 A5 グリッド

図版No.	資料No.	器種	特徴 (①色調②焼成③胎質)	文様・調整	備考
1	1	縄文前期 深鉢形土器	①外・内:暗茶褐色 ②良好 やや硬質 ③緻密 雲母少含	外:ケズリ、8本 単位の条線を縦位 内:斜めミガキ	

Ⅲ-7表 B1 グリッド

内面橙色を呈する。胎土に雲母を少量含む。焼成は良好。文様は不明瞭だが、斜め方向に半裁竹管文による施文の痕跡が認められる。前期。2 (No.8) は深鉢形土器の胴部片。外面・内面ともに暗褐色を呈する。胎土に長石を少量含む。外面・内面にナデが施される。時期不明。3 はNo.6 とNo.14 の接合資料。深鉢形土器の底部。外面は淡褐色、内面は暗褐色を呈する。胎土に雲母粒子少量含む。外面に斜め方向のナデ、内面にナデが施される。底部に網代圧痕が認められ、その上からナデが施される。後期。

B4 グリッド

土器8点、剥片1点、礫16点が出土した (Ⅲ-13 図・16 図、Ⅲ-9・10 表)。1 (No.7) は深鉢形土器の底部片。外面は茶褐色、内面は暗褐色を呈する。焼成は良好。底面に網代圧痕が認められる。後期。2 (No.29) は深鉢形土器の胴部片。外面は淡褐色、内面は暗褐色を呈する。焼成は良好。外面に横方向のナデと指押さえの痕跡が、内面に横方向のナデの痕跡が認められる。後期。3 (No.8) は黒耀石製の縦長剥片。側縁部に使用による微細な剥離が認められる。

B5 グリッド

土器1点が出土した (Ⅲ-13 図・17 図、Ⅲ-11 表)。1 (No.1) は深鉢形土器の口縁部片。外面・内面

駒場情報教育棟地点

ともに暗褐色を呈する。文様帯は沈線によって区画され、単節縄文が充填される。内面にミガキの痕跡が認められる。後期。

図版No.	資料No.	器種	特徴 (①色調②焼成③胎質)	文様・調整	備考
1	3	縄文前期 深鉢形土器	①外:赤褐色 内:橙色 ②良好 やや硬質 ③粗 雲母少含	外:半截竹管文?斜行 ナデ? 内:横ナデ?	胴部片
2	8	縄文早期 深鉢形土器	①外・内:暗褐色 ②良好 やや硬質 ③緻密 長石少量	外:無文 ナデ 内:指頭オサエ ナデ	胴部片
3	6	縄文後期 深鉢形土器	①外:淡褐色 内:暗褐色 ②良好 やや軟質 ③粗 雲母少含	外:斜めナデ 内:ナデ	底部片 14と接合
3	14	縄文後期 深鉢形土器	①外:淡褐色 内:暗褐色 ②良好 やや軟質 ③粗 雲母少含	外:斜めナデ 外底面:網代痕・ナデ 内:ナデ	底部片 6と接合

Ⅲ-8表 B2 グリッド

図版No.	資料No.	器種	特徴 (①色調②焼成③胎質)	文様・調整	備考
1	7	縄文後期 深鉢形土器	①外:茶褐色 内:暗褐色 ②良好 やや硬質 ③緻密	外:ナデ 外底面:網代痕 内:ナデ	底部片
2	29	縄文後期 深鉢形土器	①外:淡褐色 内:暗褐色 ②良好 硬質 ③緻密	外:横ナデ 指頭オサエ 内:斜めナデ	胴部片

Ⅲ-9表 B4 グリッド出土土器観察表

図版No.	資料No.	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材
1	8	剥片	2.18	1.53	0.40	1.0	Ob

Ⅲ-10表 B4 グリッド出土石器観察表

図版No.	資料No.	器種	特徴 (①色調②焼成③胎質)	文様・調整	備考
1	1	縄文後期 深鉢形土器	①外・内:暗褐色 ②良好 やや軟質 ③緻密 長石少含	外:口縁部文様帯は沈線で 区画 区画内は単節縄文 充填 内:横ミガキ	口縁部片

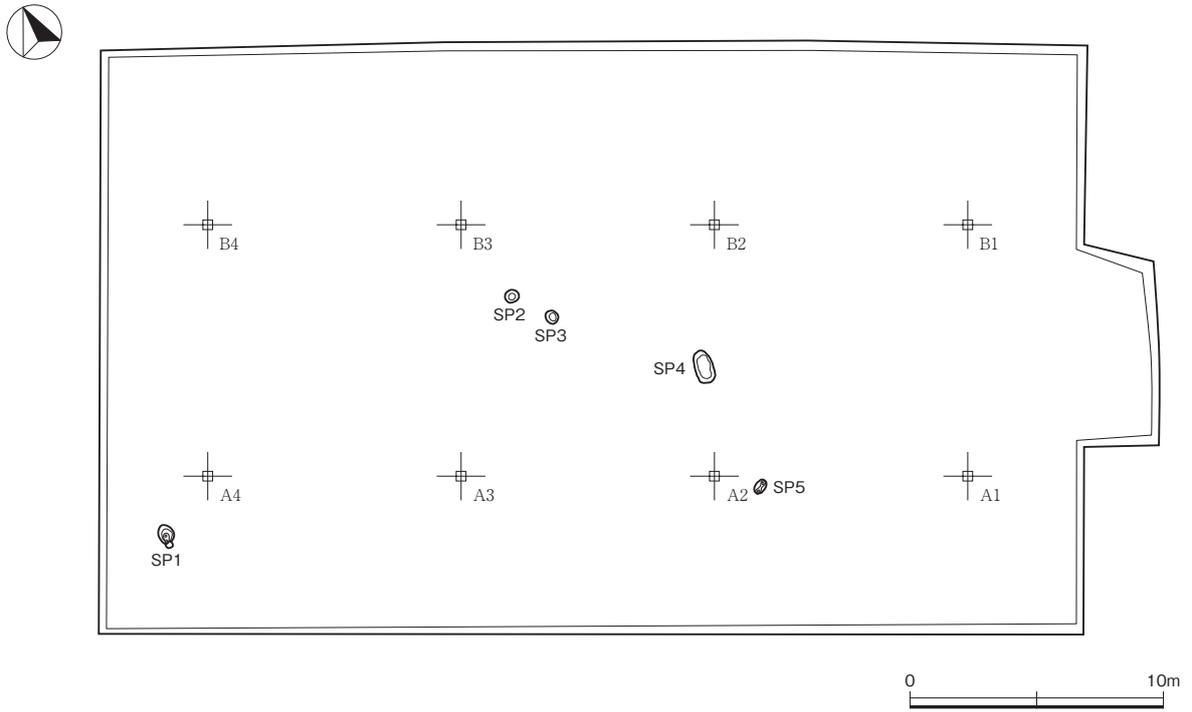
Ⅲ-11表 B5 グリッド

2. 旧石器時代

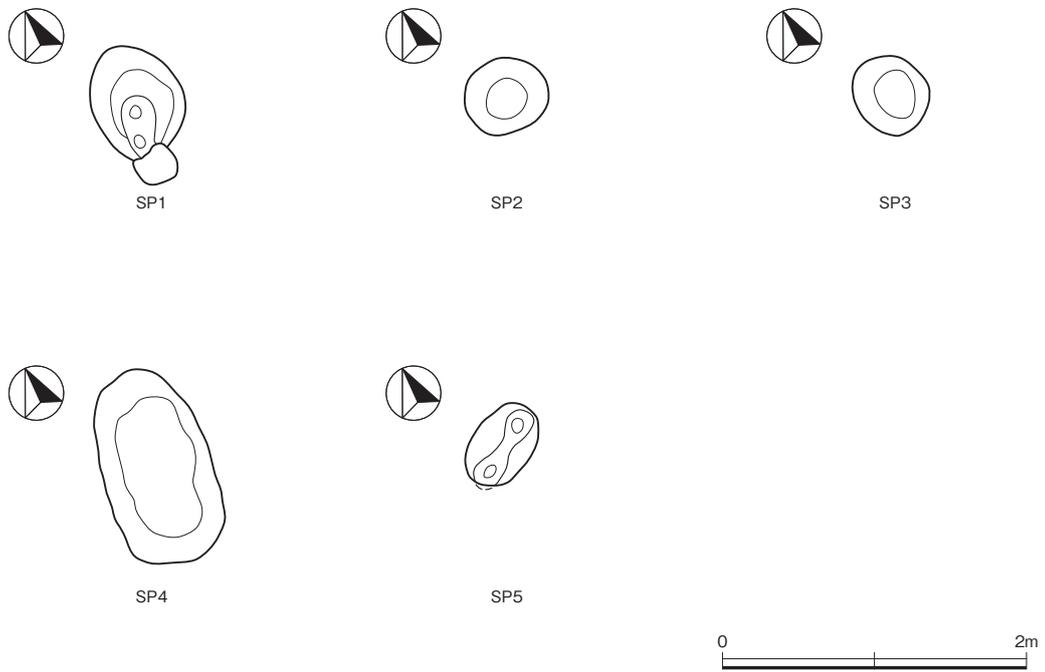
A2グリッド、B14グリッド、C2グリッドにおいて旧石器時代を対象として、それぞれローム層中の調査を実施した(Ⅲ-18図)。A2グリッドは南北4m東西4mの範囲を立川ロームⅣ層まで、他

のグリッドに関しては2m四方の範囲でX層まで掘削した(Ⅲ-19図)。第2章で触れているように、本地点の周辺には旧石器時代の遺跡が存在しているが、本地点では遺物の出土はみられなかった。

土層の堆積状況については、各層が立川ロームの標準土層に比定されているのみで、観察記録が存在しないため詳細は不明である。しかしⅢ-19図に掲載した各断面図をみる限り、土層は水平に堆積しており、本地点が台地上の平坦地に立地していることがうかがえる。



Ⅲ-2図 ピット平面分布図



Ⅲ-3図 ピット平面図



B3

B2



▲ 8

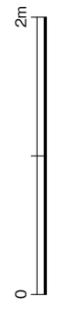
A3

A2

36.00



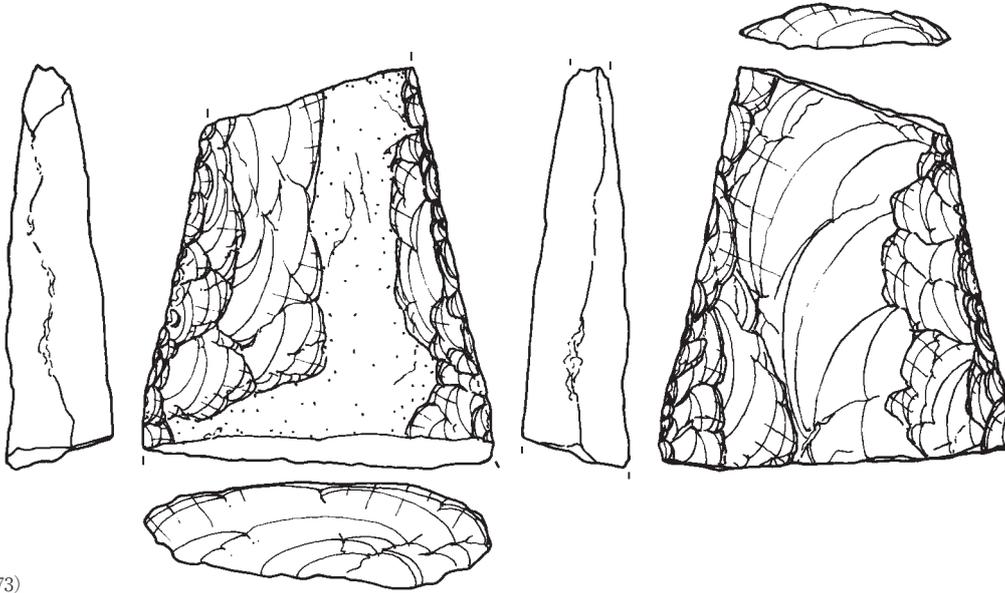
◇	土器
▲	石器
●	礫



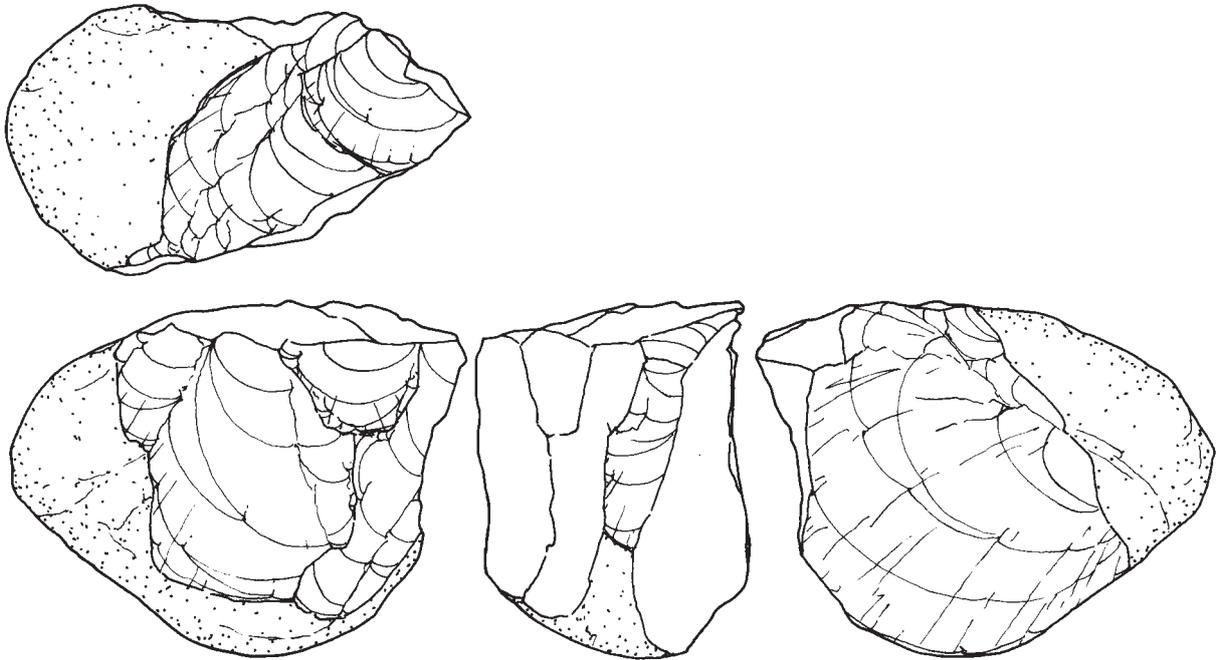
III-4图 SX6遺物平面分布图·垂直分布图



1 (1)



2 (173)



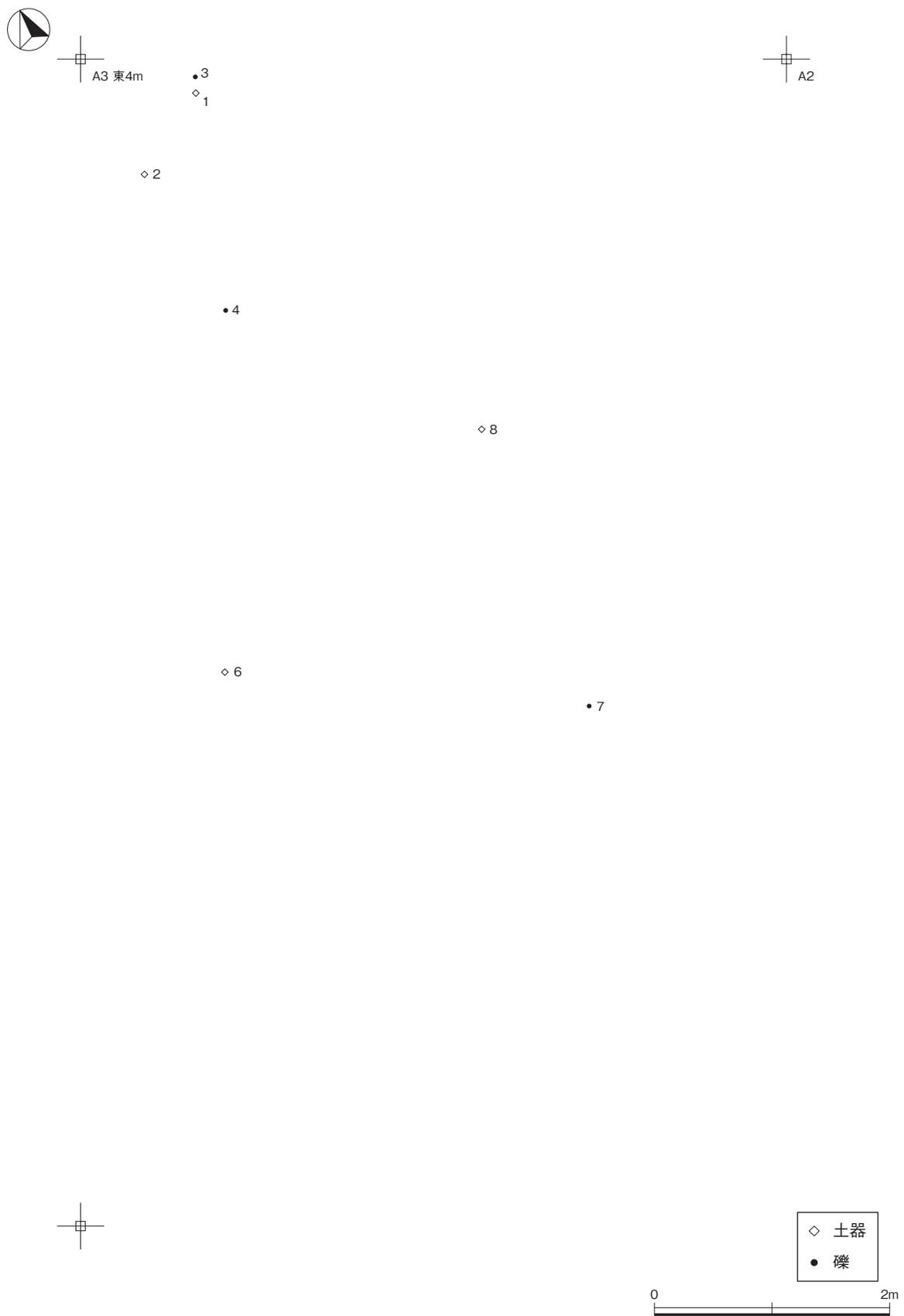
3 (27)

Ⅲ-5 図 SP2・SX6 出土遺物



Ⅲ-6 図 A2 グリッド遺物平面分布図

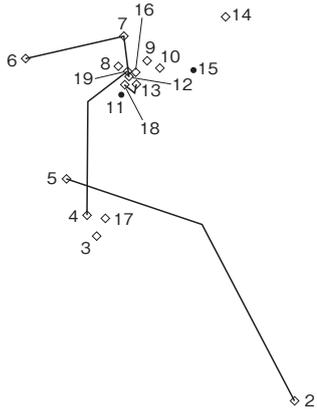
駒場情報教育棟地点



Ⅲ-7 図 A3 グリッド遺物平面分布図



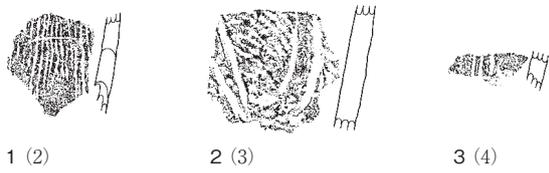
•2



•3



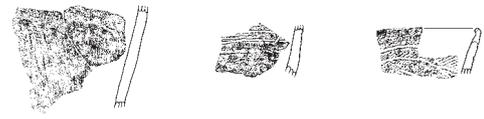
Ⅲ-8 図 A4・A5 グリッド遺物平面図



1 (2)

2 (3)

3 (4)

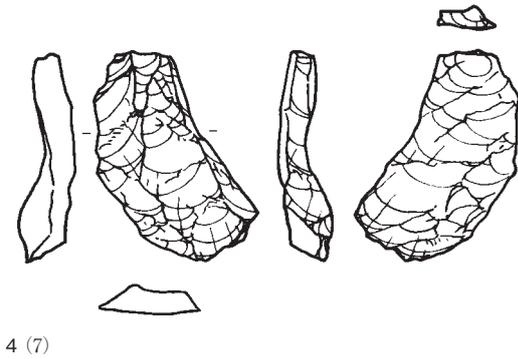


1 (1)

2 (2)

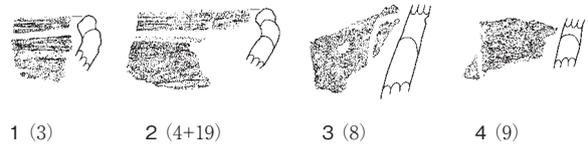
3 (6)

Ⅲ-10図 A3グリッド出土遺物



4 (7)

Ⅲ-9図 A2グリッド出土遺物



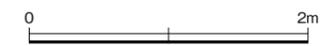
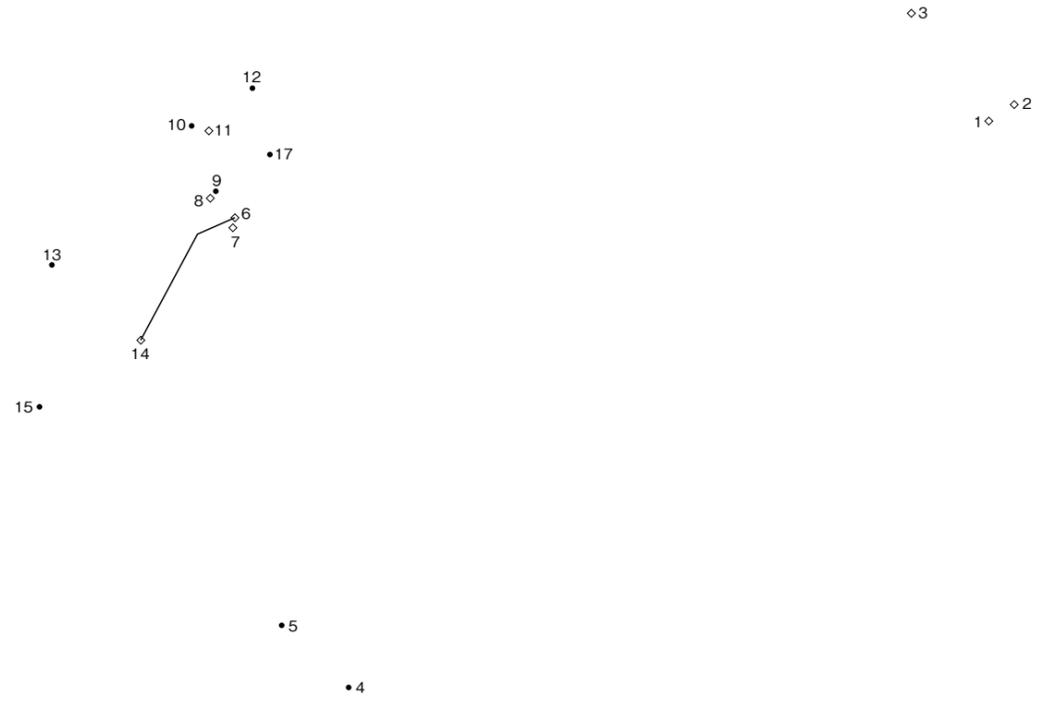
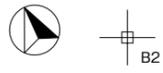
1 (3)

2 (4+19)

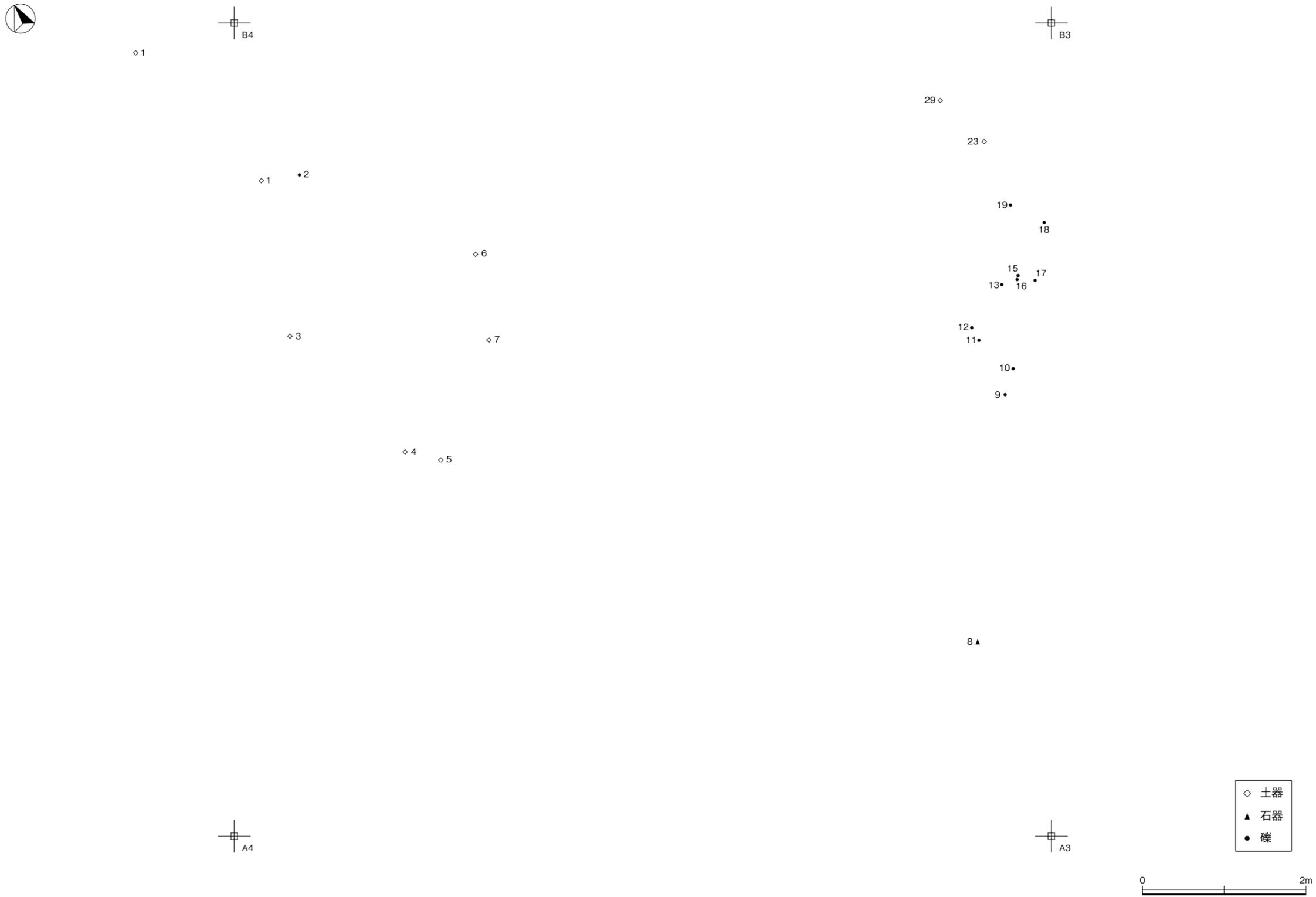
3 (8)

4 (9)

Ⅲ-11図 A5グリッド出土遺物



Ⅲ-12図 B1・B2グリッド遺物平面分布図



III-13図 B3・B4・B5グリッド遺物平面分布図



1 (1)

Ⅲ-14図 B1グリッド出土遺物



1 (3)



2 (8)



3 (6+14)

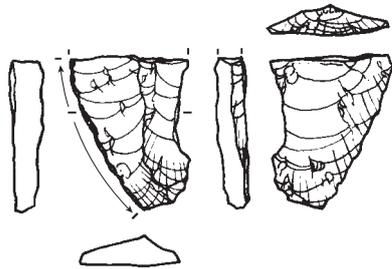
Ⅲ-15図 B2グリッド出土遺物



1 (7)



2 (29)



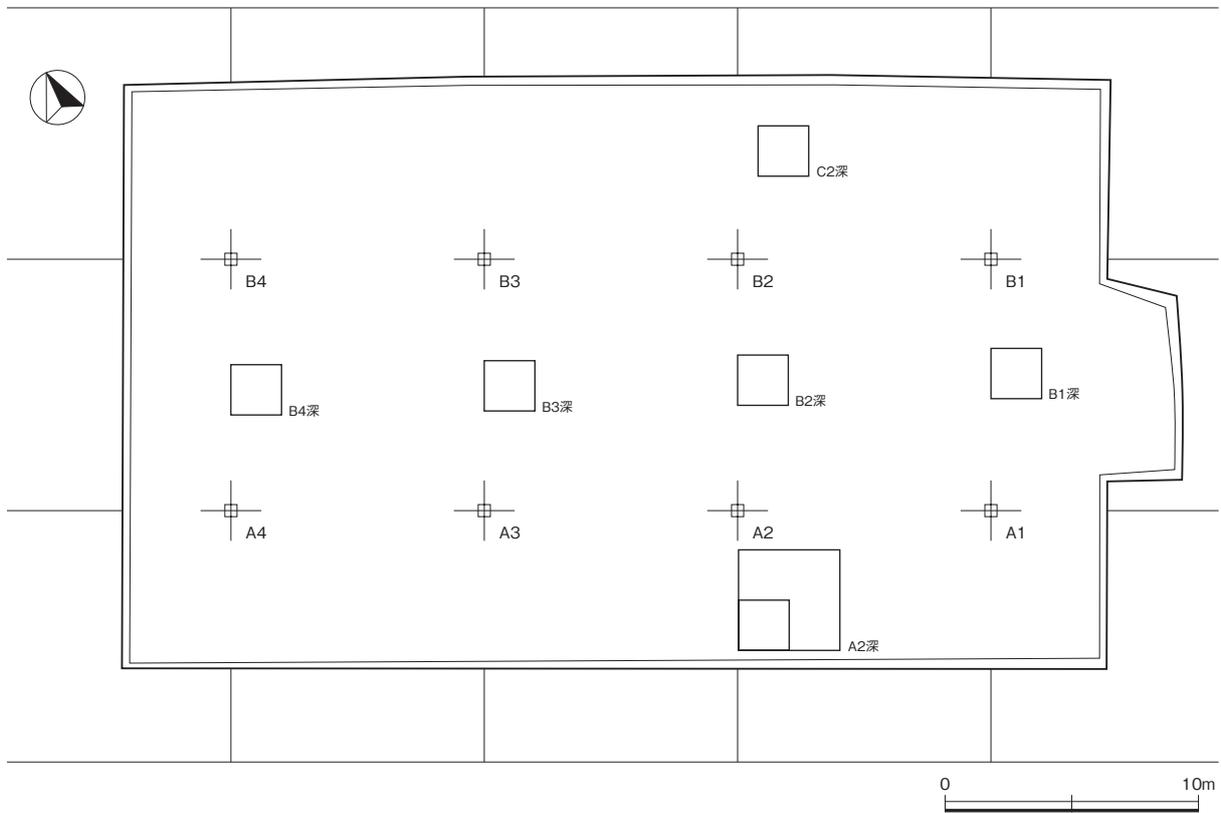
3 (8)

Ⅲ-16図 B4グリッド出土遺物

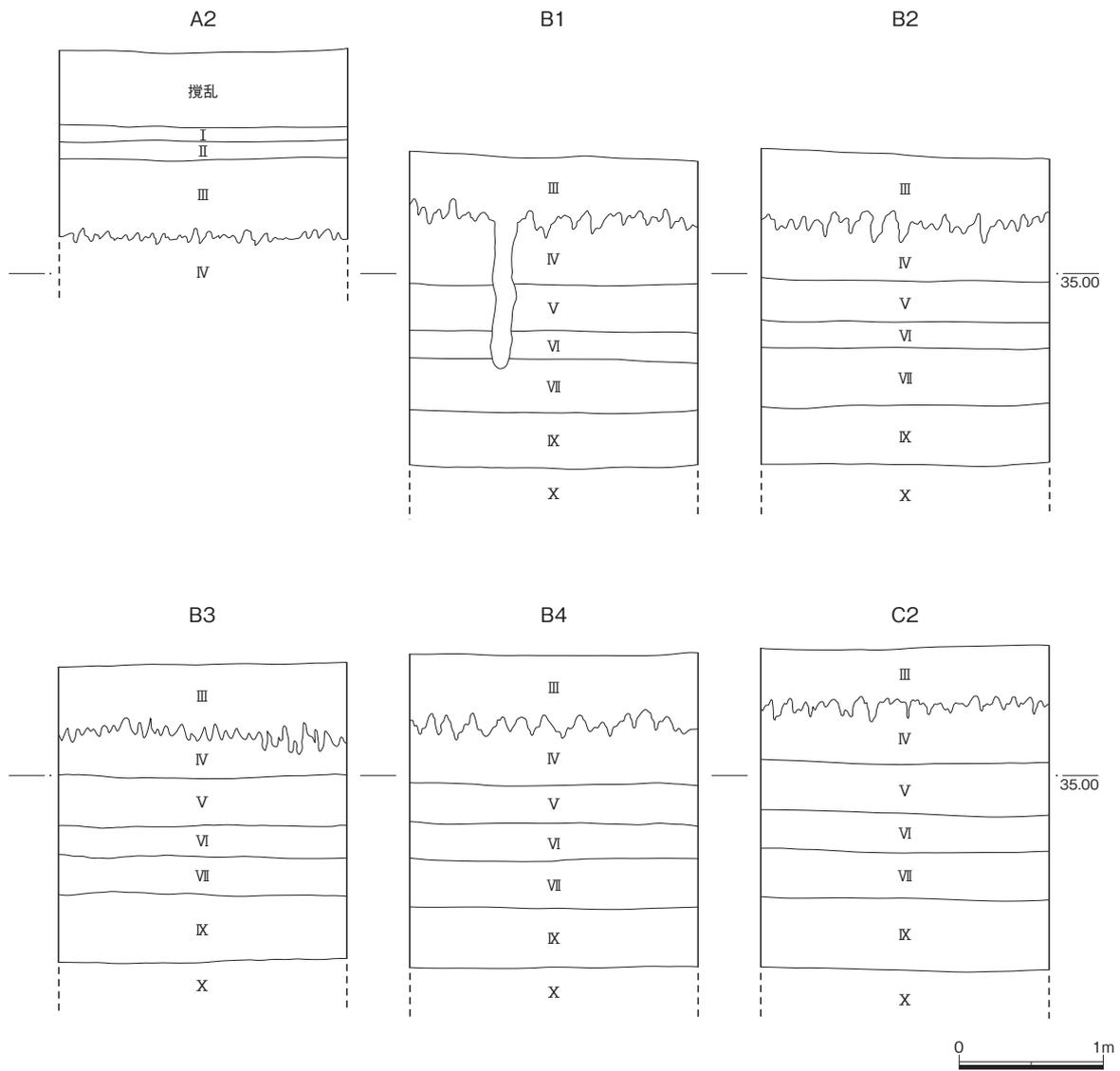


1 (1)

Ⅲ-17図 B5グリッド出土遺物



Ⅲ-18図 調査区全体図(旧石器時代)



Ⅲ-19図 土層体積状況

第IV章 調査のまとめ

前章で報告したように本地点で検出された遺構は少なく、ピット5基、集石遺構1基の計6基である。遺物も土器片69点、石器・剥片4点、礫785点（そのうち750点はSX6に伴う）と少量である。こうした遺構・遺物の少なさに加えて、遺構の位置関係や堆積状況、遺物の出土位置に関する記録が不十分なため、本地点の評価は難しい。そこで出土土器の時期を、キャンパス内の他の地点と比べて

時期	点数
早期	3
前期	3
中期	1
後期	29

IV-1表

みることに限ってみていくことにしたい。

土器片の半数以上を占めるのは出土位置の不明な資料である。これらは包含層中からの出土と思われるが、遺物台帳や註記をみても詳細は不明だった。それらを除いた土器のうちで、時期毎の点数を示したのがIV-1表である。これをみる限り、後期の土器が多い。もちろん、これらの

土器についても標高値が不明という問題はあるが、傾向として後期の遺跡の存在は指摘できよう。本地点の100m東に位置する数理学研究科Ⅱ期棟地点（以下、数理地点）では、住居址1基、炉穴13基などが検出されている。住居址は早期で、炉穴も出土土器から時期が判明するものは早期である（堀内ほか1999）。また59点出土している土器は、早期の撚糸文系土器と条痕文系土器からなり、中期と後期の土器はそれぞれ1点が出土するのみだった。戦前の土器が出土した地点については詳らかでないが、本地点の調査によって、後期の遺跡も存在する可能性が高まった。現段階では本地点と、数理地点をはじめとする駒場構内遺跡各地点との関係は不明であるが、今後の本遺跡の調査に重要な知見を加えたものと思われる。

【引用・参考文献】

貝塚爽平 1979 『東京の自然史（増補第二版）』

目黒区教育委員会（編） 1953 『目黒区誌』

東京都立大学学術研究会（編） 1961 『目黒区史』

堀内秀樹・佐藤律子（編） 1999 『東京大学本駒場構内遺跡 大学院数理学研究科Ⅱ期棟地点発掘調査報告』

武藤康弘 1997 「教育学部情報教育棟新営に伴う埋蔵文化財発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』

報告書抄録

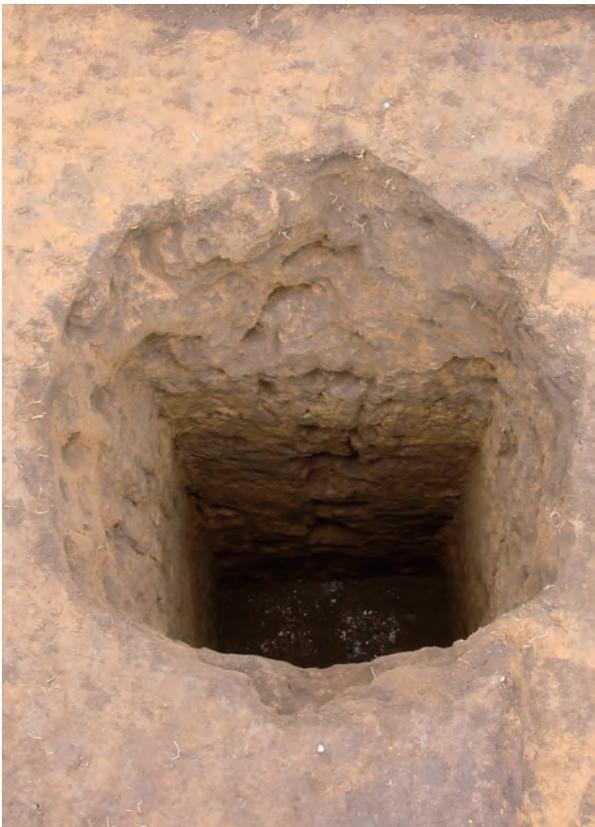
ふりがな	とうきょうだいがくこうないいせきちやうさげんきやうねんぼう							
書名	東京大学構内遺跡調査研究年報							
副書名								
巻次	8							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	追川吉生（編）							
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室	所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場 4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 03-5452-5103					
発行機関	東京大学埋蔵文化財調査室	所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場 4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 03-5452-5103					
発行年月日	平成 24 年 5 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〃〃	東経 〃〃	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とうきやうだいがくこまばこうない 東京大学駒場構内 の遺跡 こまばじやうほうきやういくとう 駒場情報教育棟 ちてん 地点	とうきやうと 東京都 めぐろく 目黒区 こまば ちやうめ 駒場3丁目 8番1号	13110	1	35° 39' 32"	139° 41' 3"	平成5年 8月10日～ 10月20日	940㎡	東京大学駒 場情報教育 棟新営に伴 う事前調査
所収地点名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
東京大学駒場構内 の遺跡 駒場情報教育棟地 点		縄文	ピット 集石遺構	土器 石器				

東京大学白山構内の遺跡

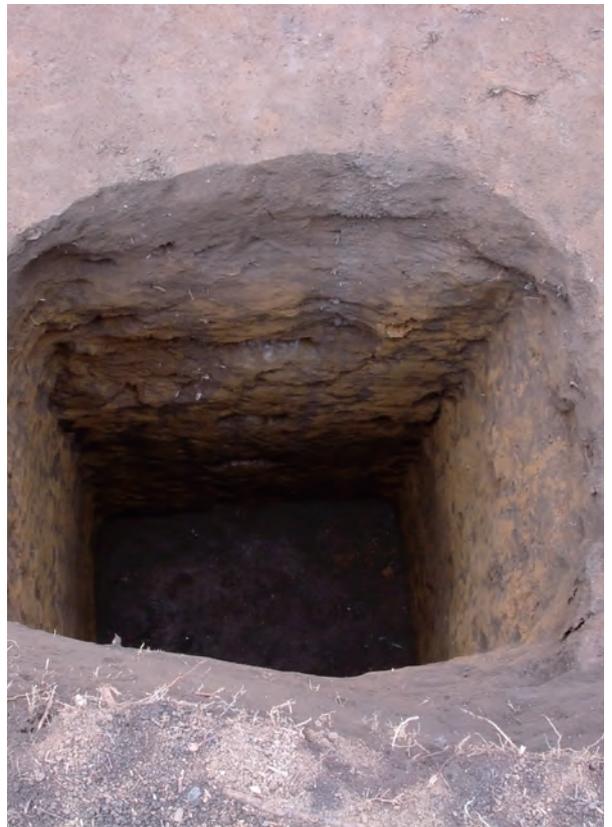
農学生命科学研究科
附属小石川樹木園
根圏観察温室地点発掘調査報告



SU1



SU3 豎坑



SU7 豎坑

例 言

1. 本報告は、東京大学農学生命科学研究科附属小石川樹木園根圏観察温室新営に伴う埋蔵文化財発掘報告である。
2. 本地点の略称は「KNK」とする。
3. 調査地点は、東京都文京区白山3丁目7番1号、東京大学農学生命科学研究科附属小石川樹木園内に所在している。
4. 調査面積は91㎡である。
5. 調査地点は文京区No.81「小石川御薬園跡」内に位置している。
6. 発掘調査は東京大学埋蔵文化財調査室が行い、調査は成瀬晃司が担当した。
7. 調査期間は2002年9月24日～10月7日である。
8. 本報告の編集は成瀬が行った。
9. 執筆分担は以下の通りである。
第I章、第II章、第III章第1節、第IV章 成瀬晃司
第III章第2、3節 大貫浩子
10. 遺構写真は成瀬が、遺物写真は青山正昭が撮影した（CD-ROM所収）。
11. 遺物実測は坂野貞子・今井雅子が行い、加藤理香によってデジタル化を行った。
12. 発掘調査に伴う図面、写真、出土文化財は東京大学埋蔵文化財調査室が駒場リサーチキャンパス（東京都目黒区駒場4-6-1）、東京大学工学系研究科柿岡教育研究施設（茨城県石岡市八郷町柿岡414）内にて保管、運用している。
13. 発掘調査及び報告書作成にあたり下記の諸氏・機関より御協力・御教示を賜った。記して敬意を表する。（敬称略、五十音順）
池田悦夫 加藤元信 古泉 弘 渋谷葉子 宮崎勝美 加藤建設株式会社 東京大学施設部 東京大学農学生命科学研究科

発掘調査・整理作業参加者

青山正昭 今井雅子 大貫浩子 加藤理香 坂野貞子 杉浦あかね（埋蔵文化財調査室）
加藤建設株式会社

凡 例

1. 遺構実測図の縮尺は、1/40 である。
2. 遺物実測図は基本的に 1/3 であるが、それ以外は個別に示す。
3. 遺物実測図に付けられる記号は以下のことを表している。
 - ・ ▲ は高台、見込みなどの釉際を表しており、磁器と釉際の描写が不可能な陶器に用いている。
 - ・ 中心線上下端の破線は、推定口径及び底径を表している。
 - ・ |—| は、口唇部の口銹を表している。
 - ・ — — は断面を表している。
 - ・ 播鉢の┆→は体部播目範囲を表している。
 - ・ 口唇部の┆→は敲打痕を表している。
 - ・ 本文中で記載した陶磁器・土器分類は『東京大学構内遺跡調査研究年報2 別冊東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(1)』に、遺構一括資料の段階設定は、堀内秀樹「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1に基づいている。
4. 遺構番号は1から通し番号を付した。また冠詞に付けた略号は以下の通りである。
SD：溝 SK：土坑 SP：ピット SU 地下室 SX：不定形遺構
5. 遺構断面図に記載された標高は、東京湾平均海面（T.P.）を基準とし、基標番号「小（21）」大塚三丁目32 窪町東公園内（T.P.9.4294m）から、小数点第四位を四捨五入して算出した。なお「小（21）」の値は、平成14年7月東京都土木技術研究所刊行の『水準基標測量成果表』に基づいている。

○胎質

J (磁器) T (陶器) D (土器)

○生産地

A - 輸入陶磁器	E - 備前系
A1 景德鎮窯系	F - 志戸呂系
A2 漳州窯系	G - 常滑系
A3 徳化窯系	H - 萩系
A4 龍泉窯系	I - 萬古系
A5 宜興窯系	J - 大堀・相馬系
A6 朝鮮	K - 丹波系
A7 ベトナム	L - 堺系
A8 ヨーロッパ	M - 益子・笠間系
B - 肥前系	N - 九谷系
C - 瀬戸・美濃系	O - 壺屋系
D - 京都・信楽系	P - 淡路系
	Z - 不明

○器種

1. 碗	2. 皿	3. 大皿	4. 爛徳利	5. 鉢
6. 坏	7. 猪口	8. 仏飯器	9. 香炉・火入れ	10. 瓶
11. 御神酒徳利	12. 油壺	13. 蓋物	14. 筆立て	15. 壺・甕
16. 急須	17. 燗鍋	18. 合子	19. 水滴	20. 蓮華
21. 植木鉢	22. 花生	23. 片口鉢	24. 灰落し	25. 鬢水入れ
26. 茶入れ	27. 水注	28. 澁瓶	29. 搦鉢	30. 餌入
31. 火鉢	32. 柄杓	33. 鍋	34. 土瓶	35. 戸車
36. ちろり	37. 薬研	38. 手焙り	39. おろし皿	40. 油受け皿
41. 油徳利	42. 行平鍋	43. 十能	44. ひょうそく	45. 瓦燈
46. カンテラ	47. ほうろく	48. 七輪	49. 涼炉	50. 五徳
51. 塩壺	52. 燭台	53. 蒸し器	54. 懐炉	00. 蓋

○胎質

J:磁器(磁質) T:陶器(陶質) D:土器(土師質)

○産地

A:輸入陶磁 B:肥前系 C:瀬戸・美濃系 D:京都・信楽系 E:備前系 Q:江戸在地系 Z:不明

○器種

1000 人形

1100 ひと形

1101 天神	1102 恵比寿	1103 大黒	1104 福祿寿・寿老人	1105 布袋
1106 不動明王	1107 地藏菩薩	1108 狸々	1109 西行	1110 袴人形
1111 力士	1112 朝鮮通信使	1113 蹴鞠人形	1114 坊主人形	1115 虚無僧
1116 狛師	1117 猿曳き	1118 福助	1119 笛吹き	1120 若衆
1121 姉様	1122 太夫・花魁	1123 お多福	1124 三味線弾き	1125 裸婦
1126 おぼこ・禿	1127 唐子	1128 ぶら人形	1129 這子	1130 狛抱き童子
1131 亀乗り童子	1132 狛乗り童子	1133 面持ち童子	1134 金太郎	1135 桃持ち童子
1136 獅子舞	1137 鯛抱き童子			

1200 動物形

1201 狛犬	1202 獅子	1203 猿	1204 犬	1205 馬
1206 狐	1207 牛	1208 猫	1209 兎	1210 鼠
1211 狸	1212 虎	1213 象	1214 鳩	1215 鶏
1216 鶯鶯	1217 木菟	1218 亀	1219 蛙	1220 鯉
1221 鯛・鯛車	1222 金魚	1223 蟬		

1300 その他(1100・1200以外)

1301 達磨	1302 首人形	1303 獅子頭	1304 面	1305 陽物
---------	----------	----------	--------	---------

2000 器物

2001 碗	2002 皿	2003 鉢	2004 銚子	2005 瓶
2006 壺	2007 片口鉢	2008 急須	2009 土瓶	2010 鍋
2011 釜・茶釜	2012 搦鉢	2013 蓋	2014 七厘・焜炉	2015 石臼
2016 竈	2017 器台	2018 硯	2019 水滴	2020 銭貨
2021 五銚鈴	2022 袖でんぼ	2023 香炉・風炉		

3000 建造物

3001 祠	3002 塔	3003 城郭	3004 橋	3005 塀・袖垣・石段
3006 民家・庵	3007 灯籠	3008 鳥居	3009 御輿	3010 舟
3011 庭園・背景	3012 仕切り盤			

4000 遊具

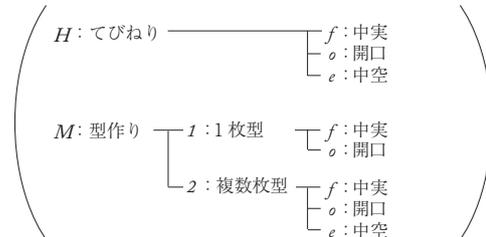
4001 土鈴	4002 独楽	4003 笛	4004 碁石状製品	4005 面模
4006 泥面子・芥子面	4007 土王	4008 円盤状製品	4009 車輪状製品	

9000 不明

○技法

H:てびねり
M:型作り
W:ろくろ
B:板作り
A:加撃

*1000:人形



東京大学白山構内の遺跡
農学生命科学研究科附属小石川樹木園根圏観察温室地点発掘調査報告

目 次

例 言
凡 例
目 次

第Ⅰ章 調査の経過と概要	
第1節 調査に至る経緯	215
第2節 調査の方法と経過	215
第3節 遺跡の位置と環境	215
第Ⅱ章 縄文時代の遺物	220
第Ⅲ章 江戸時代の遺構と遺物	223
第1節 検出された遺構	223
第2節 出土した遺物	228
第3節 出土陶磁器・土器について－瓦質植木鉢を中心として－	246
第Ⅳ章 成果と課題	250

参考文献
報告書抄録

第 I 章 調査の経緯と概要

第 1 節 調査に至る経緯

東京大学農学生命科学研究科では、東京大学白山構内小石川樹木園内に根圏観察温室の新営を計画した。構内は、文京区 No.21「小石川植物園内貝塚・原町遺跡」、文京区 No.81「小石川御薬園跡」として遺跡登録されているため、施設部から照会を受けた調査室は、遺跡の遺存状態を確認するために平成 14 年 9 月 2 日に試掘調査を実施した。その結果、表土より約 60cm 下でソフトローム層に達することが確認された。ソフトローム表面からは江戸期に帰属すると推定される遺構、遺物が検出されたため、文京区教育委員会、施設部、農学生命科学研究科で協議をした結果、本調査を実施する運びとなった。

第 2 節 調査の方法と経過

(1) 調査の方法

本調査は、調査対象面積が狭いことから特にグリッド設定は行わず、平面直角座標系に基づく座標基準杭を構内に設置し、光波測距機・電子平板によって遺構、遺物測量を行った。

(2) 調査の経過

本調査は建設予定地 91m²を対象に 2002 年 9 月 24 日より 10 月 7 日にかけて行った。本地点は試掘調査時点では、ソフトローム上には自然堆積層及び江戸時代の整地層ともに認められなかったが、重機による表土掘削の結果、調査区西側で部分的に自然堆積層のいわゆる淡色黒ボク土が確認された。また遺構確認作業中淡色黒ボク土中から縄文土器片が出土したため、江戸時代の遺構調査終了後に本層位を掘削して縄文時代の調査を行った。調査地点は植物園、樹木園として活用されたことによって、攪乱もほとんどなく、遺構は比較的良好な状態で遺存していた。

第 3 節 遺跡の位置と環境

本地点を含む白山構内は、東京都文京区白山 3-7-1 にあり、白山台地の台頂部から南側の小石川谷までに位置する。本構内には通称小石川植物園の名で知られる理学系研究科附属植物園を中心に、構内北西部の台地上に本地点が位置する農学生命科学研究科附属小石川樹木園、南西部の低地付近に総合研究博物館小石川分館の 3 研究施設がある。

本構内が位置する白山台地は、本郷台地が小石川谷の支谷である指ヶ谷谷で浸食されて分かれた台地で、両支谷によって挟まれた舌状台地を形成している。指ヶ谷谷に面する北斜面は緩斜面であるのに対し、小石川谷に面する南斜面は急崖を呈し、崖下には多くの湧水地が認められる。台頂部付近の標高は約 25m、谷部での標高は約 10m である。調査地点は白山台地上に位置している (I-1 図)。

白山構内の遺跡に関する歴史的環境と周辺の遺跡については、理学系研究科附属植物園研究温室地点発掘調査報告において述べているので（東京大学埋蔵文化財調査室 2006）、詳細はそちらを参照されたいが、以下に本地点周辺の変遷を概観する。

白山構内は縄文時代中期から晩期にかけての「小石川植物園内貝塚」として知られている（東京都教育委員会 1985）。その歴史は古く明治12年頃に遡る。昭和25年には和島誠一指導のもと東洋大学による発掘調査が実施され、縄文時代中期の竪穴式住居が2軒検出された。本貝塚は現在までに園内外で5箇所確認されており、その分布状況から馬蹄形状をなしていたとも推定されている。

江戸時代の本調査地点は、「御府内場末往還其他沿革図書」によると17世紀代は百姓地に該当する。元禄11年の白山御殿拡張後の様相は、現在の路地との対比からそれに隣接し逆L字形の地割りを呈



I-1 図 白山地区調査地点位置図 (1/5000)

4:本調査地点

- 1:理学系研究科附属植物園研究温室(1期)地点、2:理学系研究科附属植物園研究温室(2期)地点、3:総合研究博物館小石川分館地点
- 5:医学部創設150周年記念(小石川養生所復元)建物地点、6:下水・電源ケーブル埋設柵・埋設溝地点、7:旧小石川養生所井戸柵改修地点
- 8:農学系研究科小石川樹木園万年堀改修地点

(網掛け範囲は本調査、■は試掘調査、●は立会を示す)

周辺の遺跡(白抜き数字は、文京区遺跡登録番号)

- 19:戸崎町遺跡、20:御殿町古墳、21:小石川植物園内貝塚・原町遺跡(a~f:貝類等散布地点、g:第I地点、h:第II地点)、22:原町貝塚、26:林町遺跡、46:白山四丁目遺跡、81:小石川御薬園跡、84:白山御殿跡

(ゴシックは、白山地区に関する遺跡)

する肥田與左衛門屋敷地の南東部に該当することがわかる。その後、南側の白山御殿は正徳4（1714）年に廃止され、本地点の隣接域は大名屋敷地に、さらに享保6（1721）年以降は小石川御薬園へと変遷するが、本地点該当域は、幕末まで変化はみられない（I-2、3図）。

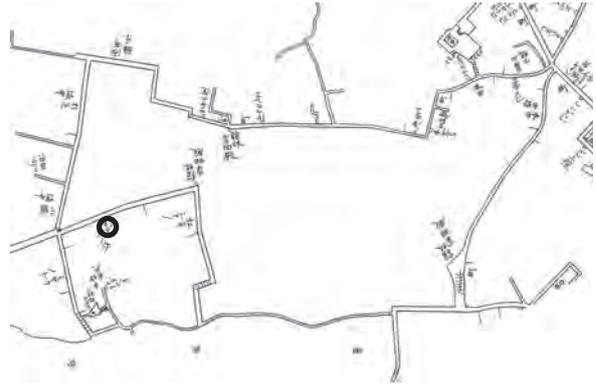
明治元年、御薬園北側の屋敷地は小石川原町となり、明治14年測量の2万分1フランス式彩色地図「東京府牛込区及近傍市街村落」では桑畑と表記されている。南側の小石川薬園は東京府の管轄になり大病院附属御薬園となる。その後明治2年に大学校の管轄となり、医学校薬園と称したが、明治4年には大学東校薬園と呼ばれた。明治6年には太政官博覧会事務局に属するなどの変遷を経て、明治8年文部省所管教育博物館附属・小石川植物園となる。明治10年に東京大学の創立によって大学附置施設となった。明治19年の帝國大学令公布とともに、帝國大学植物園と改称された。これ以後現在まで植物園の正式名称として小石川の地名が付くことはなかった。その後、東京大学所属国有財産不動産（土地）沿革誌によると、明治36年に本地点北側を含む小石川原町の一部は、用地交換によって囲い込まれ、現在の白山構内の形が形成された。

また、昭和10年駒場にあった農学部の本郷移転に関連して、本地点を含む植物園北西端の一部が、同学部遺伝学実験用及び林業実験苗圃用として農学部に移管され、現在の農学生命科学研究科附属小石川樹木園に至っている。

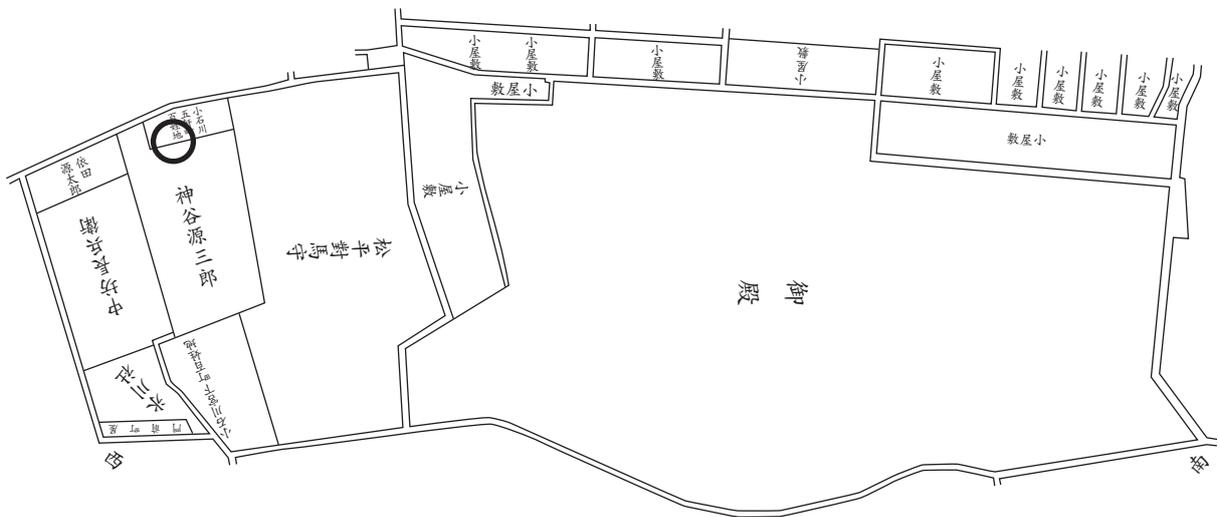
第3部 東京大学構内遺跡発掘調査報告



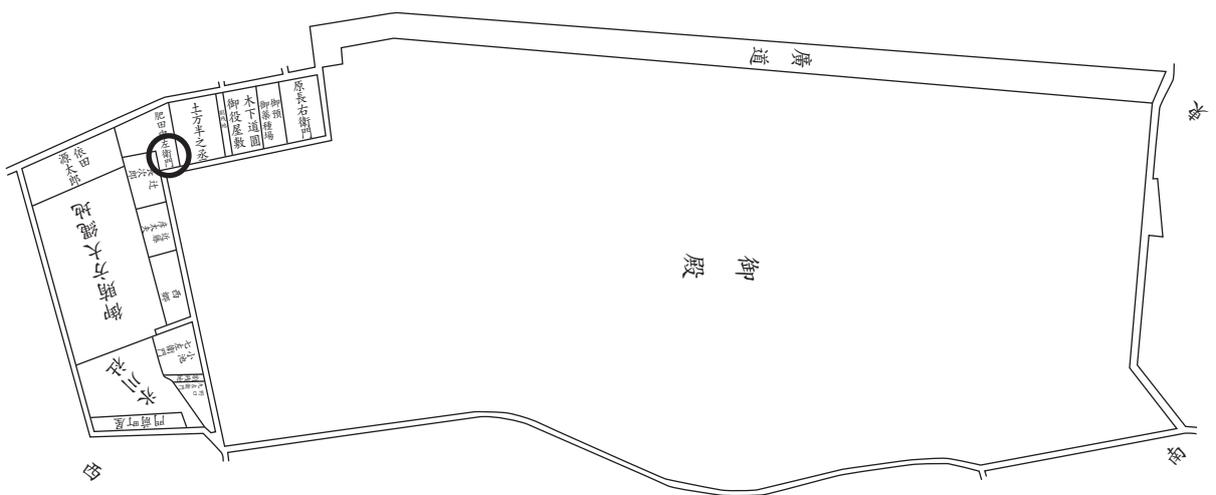
(1) 正保元(1644)年ころ
 (『正保年間江戸絵図』より作成)



(2) 寛文9(1669)年ころ
 (『寛文江戸図』より作成)

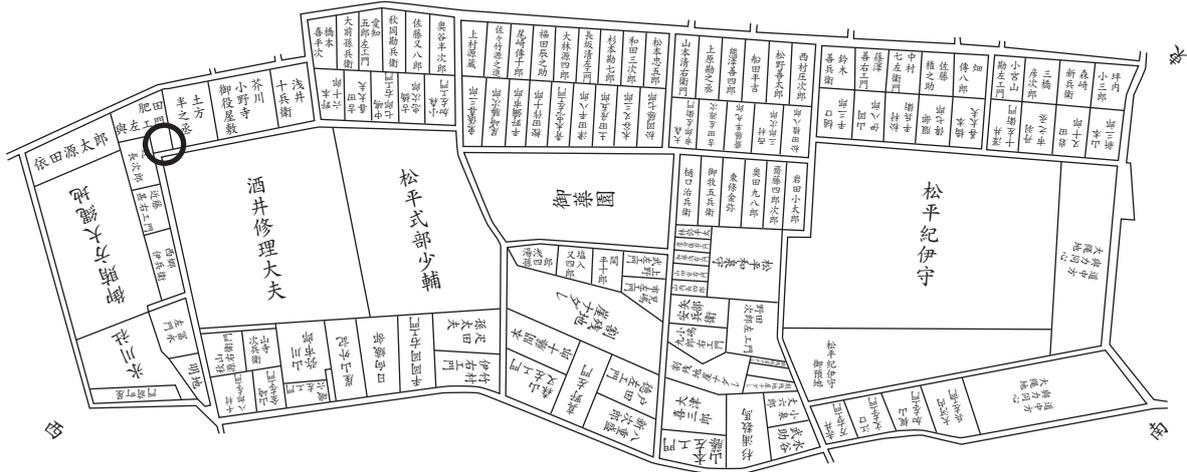


(3) 天和年間(1681~84)
 (『御府内場末往還其他沿革図書』より作成)

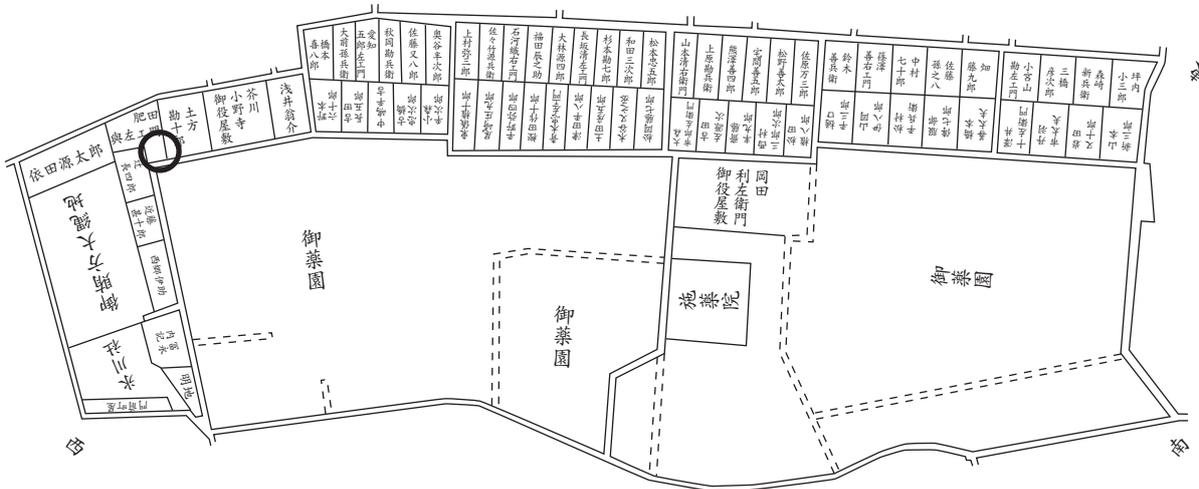


(4) 元禄11(1698)年
 (『御府内場末往還其他沿革図書』より作成)

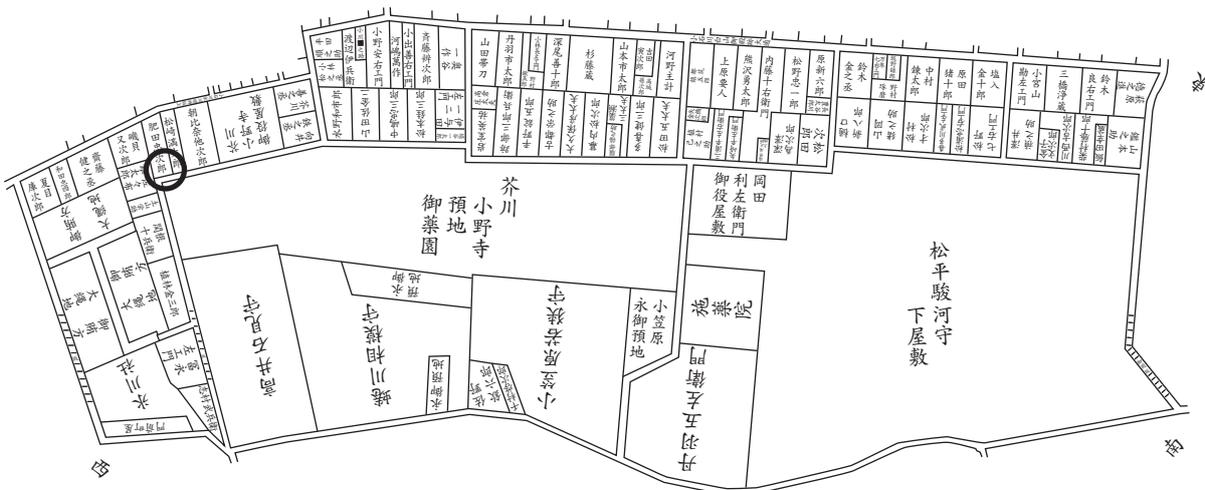
I-2 図 調査地点の変遷 (1) (○が調査地点)



(1) 正徳4~6(1714~16)年
 (『御府内場末往還其他沿革図書』より作成)



(2) 享保7(1722)年
 (『御府内場末往還其他沿革図書』より作成)



(3) 安政2(1855)年
 (『御府内場末往還其他沿革図書』より作成)

I-3 図 調査地点の変遷 (2) (○が調査地点)

第Ⅱ章 縄文時代の遺物

包含層より18点の縄文土器が出土した。

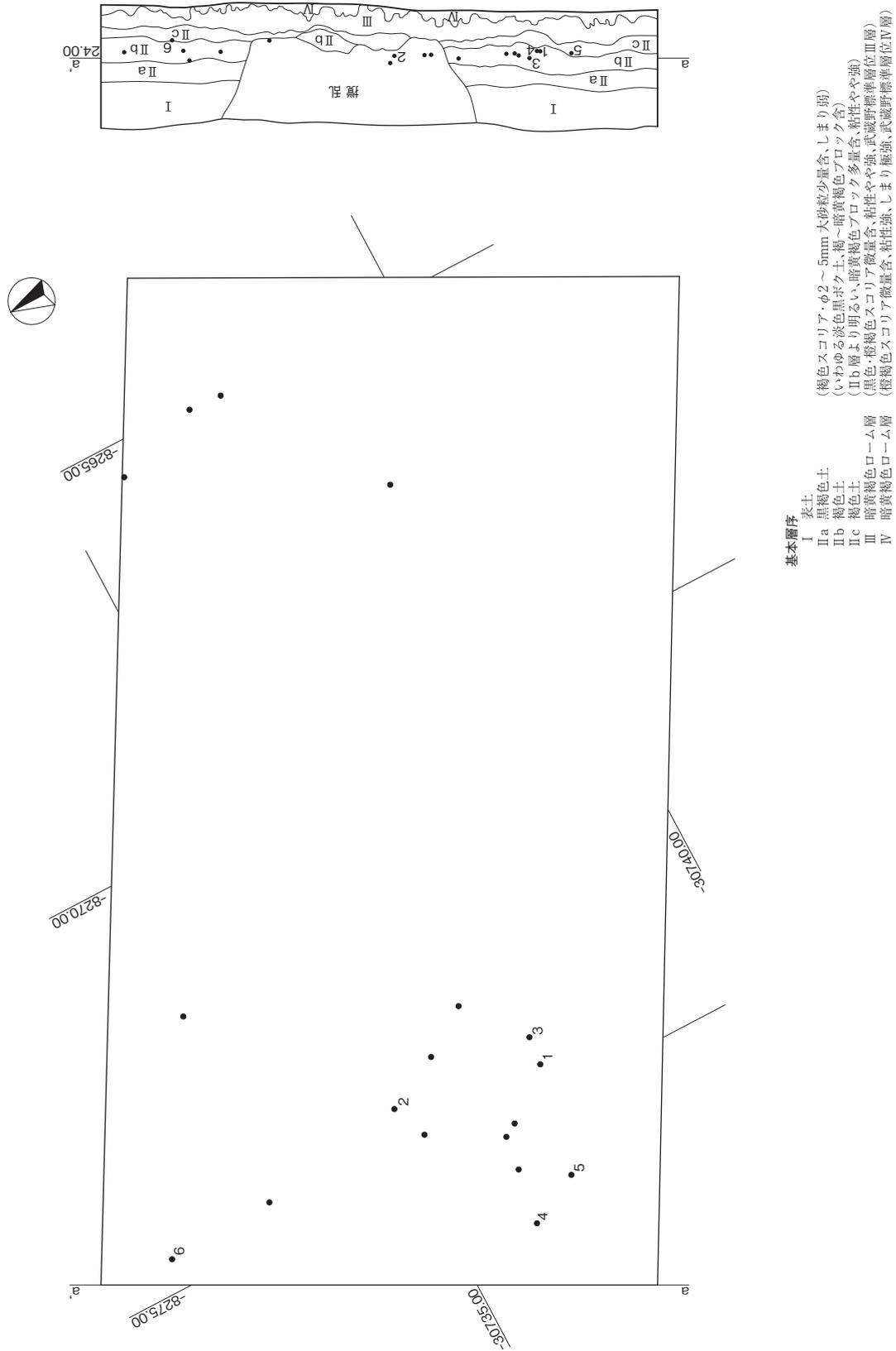
本地点における基本層序は、Ⅰ層：表土・耕作土、Ⅱ層：沖積層、Ⅲ層以下：洪積層に大別され、Ⅲ層とした武蔵野標準層位Ⅲ層いわゆるソフトローム層表面までの深度は約120cmを測る。またⅡ層はa～cの3層に細分され、そのうち中間のⅡb層は、褐色～暗黄褐色ブロックを斑状に含む、いわゆる淡色黒ボク土と呼ばれる層序で、多摩丘陵Ⅱy層との対応が想定される層位である。出土した縄文土器は、ほぼこのⅡb層中に包含される（Ⅱ-1図）。

掲載した土器片は全て深鉢形土器と考えられる（Ⅱ-2図）。1は胴部片で、胎土は表裏面共に茶褐色を呈し、砂粒と繊維を含む。表面全面に無節縄文が施されている。2は胴部片で、胎土は表面褐色、裏面暗褐色を呈し、繊維を含む。文様は半截竹管の背を利用した沈線文が施されている。3は胴部片で、胎土は表面茶褐色、裏面暗褐色を呈し、繊維を含む。文様は棒状工具による沈線文が縦方向に施されている。前期前半、黒浜式に比定される。4は口縁部片で、胎土は表面茶褐色、裏面褐色を呈し、繊維、白色粒を含む。5は胴部片で、胎土は暗茶褐色を呈す。表面には単節縄文が施され、内面は丁寧に磨かれている。6は胴部片で、その形状から下半部と考えられる。胎土は茶褐色を呈し、白色粒子を含む。文様は単節縄文が施され、裏面は丁寧に磨かれている。中期後半加曾利EⅠ～Ⅱ式に比定される。

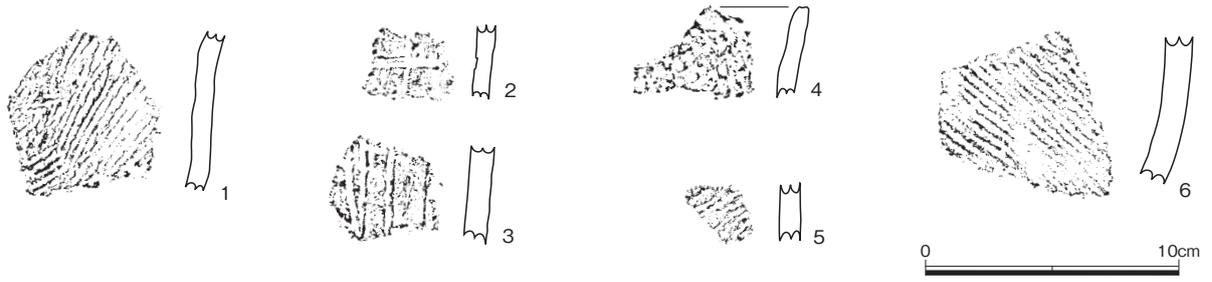
淡色黒ボク土は、本郷キャンパス内の調査でも多くの調査地点で確認されているが、御殿下記念館地点では本層直上より堀之内Ⅱ式の深鉢、医学附属病院看護師宿舎Ⅰ期地点では本層直下より検出された炉穴から絡条帯圧痕文を有する早期末葉の土器片の出土事例などから、本層位が前期初頭から後期初頭にかけて形成されたことが確認されており、本地点での出土状況との矛盾はない。

また、小石川植物園内では、本報告冒頭でも述べたように、すでにエドワード・S・モースによって貝塚の存在が報告され、最も早く考古学的に認識された遺跡の一つ「小石川植物園内貝塚」として周知されてきた。しかし、本格的な調査事例は少なく、和島誠一率いる東洋大学による調査では中期後半勝坂式の堅穴式住居、文京区による調査（Ⅰ-1図h）では加曾利EⅢ式の埋甕が検出された程度に過ぎない。両調査地は、ともに植物園の北寄り、すなわち台地尾根中央付近に位置している点で共通する。また、昨年、本調査室が実施した売店下水管、電気配線埋設工事に伴う事前調査は、南側の小石川谷への傾斜変換点付近に位置し、谷に向けて開く埋没谷とそれに近接して住居址が1軒検出された。埋没谷内の自然堆積層及び住居址覆土ともに安行Ⅲc～d式を中心とする土器片が1000点以上出土した。断片的な状況ではあるが、台地南側の傾斜変換点付近に晩期の、台地中央部に前期から中期にかけての遺跡が分布している可能性が指摘できよう。

理学系研究科附属植物園研究温室地点の調査時にも、全て江戸時代の遺構の覆土出土ではあるが、中期後半から晩期前半にかけての土器がコンテナ1箱とまとまった量が出土している。



II-1 図 縄文土器出土状況 (1/80)



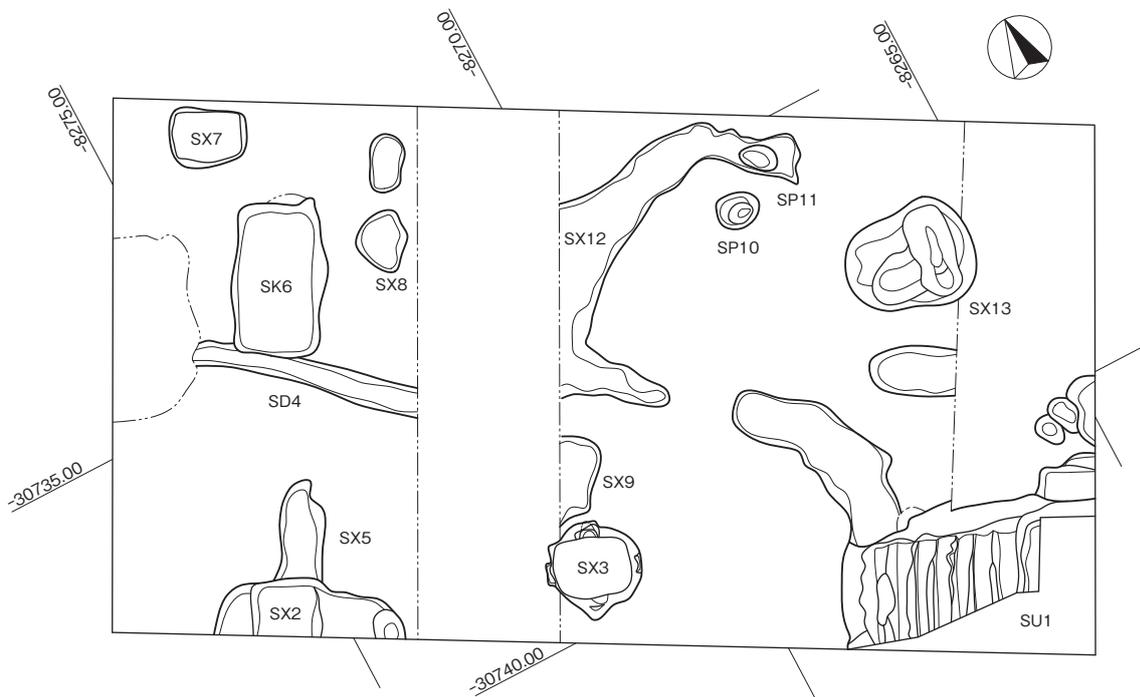
II-2 図 包含層出土縄文土器

第Ⅲ章 江戸時代の遺構と遺物

第1節 検出された遺構

検出遺構の概要

本調査では、江戸時代に帰属する地下室1基、地下坑2基、溝状遺構1基、土坑2基、ピット2基、性格不明不整形遺構8基の合計14基の遺構が検出された（Ⅲ-1図）。その分布密度から特に積極的に土地利用が行われたエリアではないと位置付けられる。以下に、個別事実記載を行う。



Ⅲ-1図 調査区全体図 (S=1/100)

SU1 (遺構Ⅲ-2図、遺物Ⅲ-7～13図)

階段付きの地下室である。室部は調査区外にあり、階段部のみが調査対象となった。主軸方位は西側の網干坂（すなわち屋敷間口）に対して直交方向に構築されている。また室部に向かって階段部右壁は安全管理上の理由から調査区範囲壁面に法を設けたことによって階段下部に従って調査範囲が縮小している。階段部は7段のステップを有し、ステップ幅は最大100cm、奥行きは平均25cmを測る。ステップ先端は使用のためか、スプーンで浅く抉ったような状態になっている。ステップ際、壁面共に補強施設は認められなかった。側壁はステップ際では丁寧に整形されているが、上部はやや逆ハの字状に開き、根の影響もあるが、凹凸が著しい。調査範囲際で室部床面をわずかに確認した。確認面からの深さは280cmを測る。床面から壁面へは丸味を帯びて移行している。

覆土は13層に分けられるが、ローム粗粒、ロームブロックを含む1・2層、遺物を多量に含有する3層、ローム粒を多量に含む4～13層に大別される。特に室部寄りの床面から堆積する9～13層にはロー

ムブロックが多量に含まれ、天井部の崩落土の可能性が高い。また3層は先述したように遺物を多量に包含するが、遺物群の中心的年代観が東大編年Ⅷc期に位置付けられることから、幕末の屋敷引き払いに由来する可能性が高い。さらに日常生活品と考えられる陶磁器類に加え、多量の瓦質植木鉢が出土しており、屋敷内で花卉栽培が行われていたことを窺わせる資料である。

SU3 (遺構Ⅲ-3図、遺物Ⅲ-13・14図)

いわゆる地下坑の竪坑部である。主軸方位は間口に対してほぼ直交する。開口部の平面形は不整形を呈し、逆ハの字状に縮小し、約50cm下で長方形に変化する。長方形部の規模は、長辺100cm、短辺80cmを測る。長辺中央には対になる幅20cm、高さ15cmを測る平面半月状の足掛けがほぼ40cm間隔で穿たれている。逆ハの字状部分にも足掛けが存在することから、形態変化は本来の姿を顕していると考えられる。また確認面下20～30cmに足掛けと直交する方形の掘込が対で認められる。覆土はロームブロックを少量含む暗褐色土を主体とし、一気に埋め戻されたことが窺われる。確認面から約300cm掘り下げたが、横坑には至らなかった。出土遺物は少ないが、18世紀前半を下限とする。確認面下約280cmより貝殻、かわらけがまとまって出土した。

SD4 (Ⅲ-4図)

調査区西側、間口寄りで検出された溝状遺構である。やや蛇行して伸び、最大幅40cm、確認面からの深さ15cmを測る。SK6を切っている。西端は攪乱を受け、東端は試掘坑内で収束しているため全容、性格ともに不明である。

SK6 (遺構Ⅲ-4図、遺物Ⅲ-15～17図)

調査区西寄りで検出された土坑である。平面形は隅丸長方形を呈し、長辺200cm、短辺110cm、確認面からの深さ40cmを測る。主軸方位は間口に対して平行である。壁面、床面共に比較的平坦に整形されている。覆土は4層に分層され、1・2層から東大編年Ⅴa期を下限とする遺物がまとまって出土した。このなかには多量の鉄釘が含まれていたが、覆土中に散乱している状態で出土したことより、本遺構に伴うものではない。

SU7 (遺構Ⅲ-5図、遺物Ⅲ-17図)

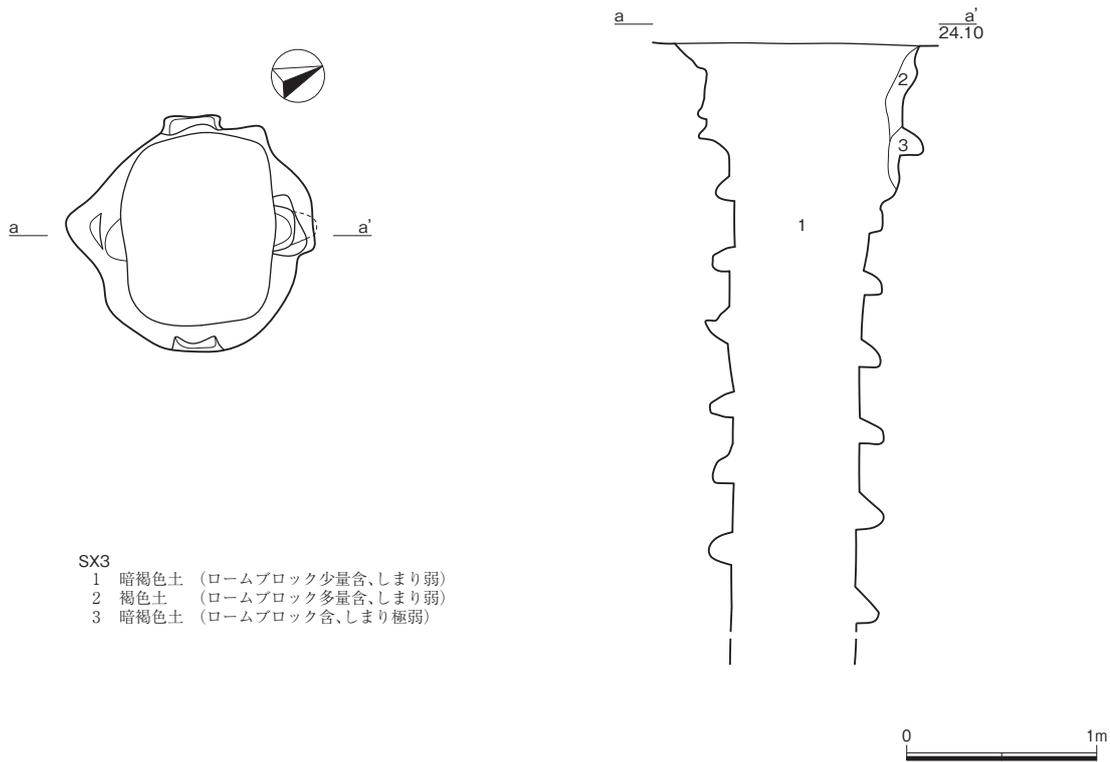
いわゆる地下坑の竪坑部である。調査区北西部に位置する。平面形は長方形を呈し、長辺100cm、短辺80cmを測る。主軸方位は間口に対して直交する。長辺中央には対になる足掛けが約50cm間隔で各々垂直方向に穿たれている。壁面はほぼ平滑に整形されている。覆土の状態から、ほぼ一気に埋め戻されたといえる。確認面下約230cmまで掘り下げたが、横坑は確認されなかった。

SX13 (遺構Ⅲ-6図)

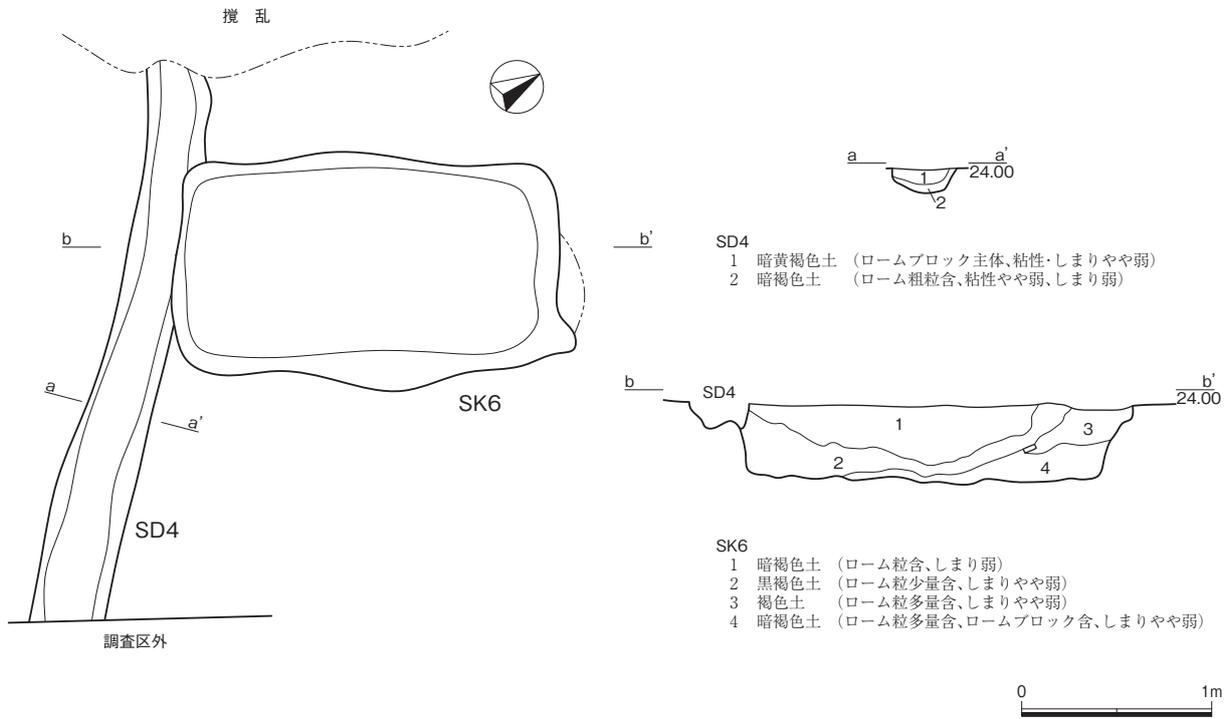
調査区東側で検出された遺構である。平面形は不整形を呈し、長軸180cm、短軸最大140cm、確認面からの深さ60cmを測る。覆土には多量のロームブロックを含み、植栽痕、倒木痕の可能性はある。



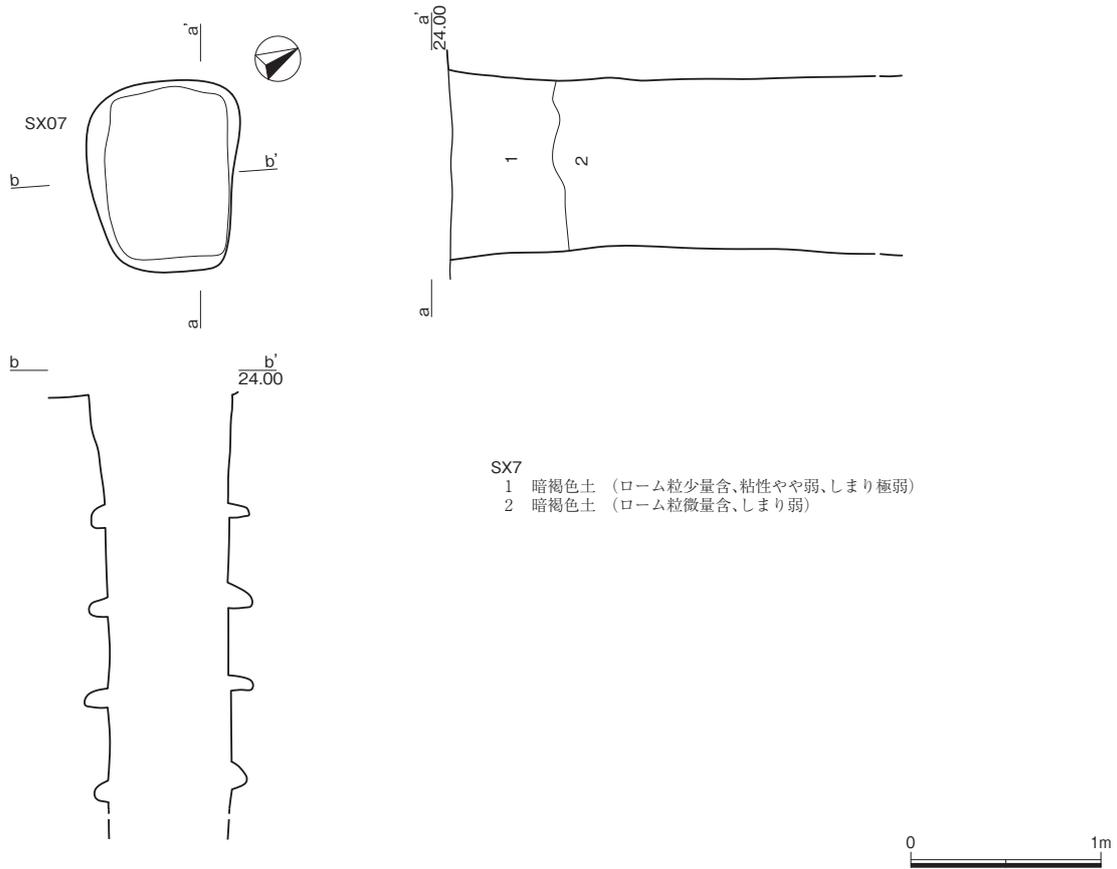
III-2 図 SU1



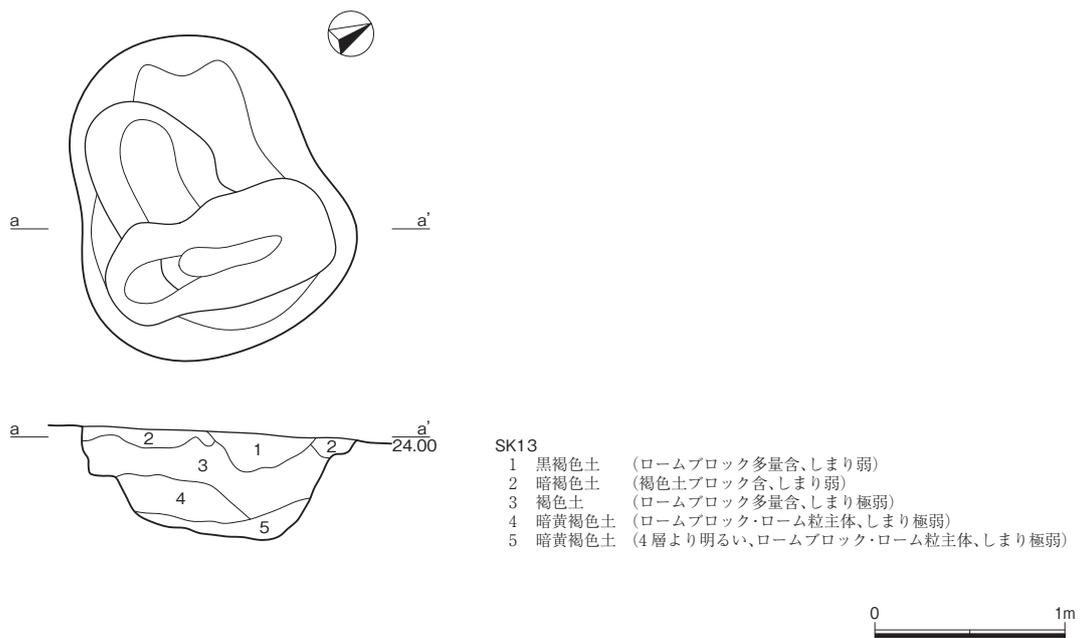
III-3 図 SU3



III-4 図 SD4・SK6



Ⅲ-5 図 SU7



Ⅲ-6 図 SX13

第2節 出土した遺物

出土遺物の概要

本地点からはコンテナ総数23箱の遺物（磁器・陶器・土器・その他）が出土している。磁器・陶器・土器の分類基準は「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）」（東京大学埋蔵文化財調査室1999）を参照している。人形・玩具は本年報研究紀要8に掲載した新分類コードを使用した。遺跡における分類は数量分析により様々な文化・時代の様相を浮かび上がらせる手段である。そのためにはある一定以上の数量（便宜的に推定個体数100個体以上）を必要とする。本地点においては、推定個体数100個体以上の遺物量を有する遺構はSU1の1遺構のみであった。その他の遺構は数量分析できなかったため、大まかな年代観を出し検証した。

本地点は小石川御薬園に隣接する旗本屋敷地である。SU1は屋敷地中程に構築された地下室である。

SU1（遺構Ⅲ-2図、遺物Ⅲ-7～13図）

地下室の階段部に廃棄された遺物である。上層出土遺物と下層出土遺物が接合しており、一括廃棄と考えて良いであろう。本地点ではこの遺構の遺物のみ数量分析を行っている。瓦質の粗製植木鉢が約50個体出土した。器高の高い蘭鉢から器高の低いもの、その他加飾された磁器、陶器、土器までいろいろな種類の植木鉢が出土している。個人的な植木の栽培と考えるよりももう少し規模の大きな植木屋のようなものが想定される。陽刻型皿（JC-2-e）、瓦質植木鉢（DZ-21-b）が出土しており東大編年Ⅷc期に相当する。

1～19は磁器である。1、5、8、11、13～17は肥前系。その他は瀬戸・美濃系である。1～5は染付碗である。1はJB-1-eに分類される。外面唐草文。口縁部内側に四方襷文を持つ。見込み松竹梅文。薄手半球碗より器高が高い。東大編年Ⅷb期頃から認められる器形で薄手半球碗から変化したものか。薄手半球碗より口径が小さく、口縁部内側に四方襷文を持つものが多い。2～4は端反形碗でJC-1-dに分類される。2は大振り。外面、口縁部に文様。見込みに「富貴長春」、底部に銘あり。3、4は小振り。外面、見込み、口縁部内側に文様。5は腰が張り、体部が直立する小振りの碗。湯呑碗。JB-1-oに分類される。幅広高台。豊付に砂粒が付着している。6、7は極めて薄手の坏で端反形。JC-6-dに分類される。色絵上絵付け。6は内外面とも茶と赤で花の絵が描かれている。7は口縁部内側金彩。いっちゃん、金彩、茶で花が描かれている。外面は無文。8～10は染付皿である。8は浅手の端反。口縁部輪花。墨弾き雲形文。志田窯指標。JB-2-pに分類される。高台内に3箇所ハリ支え痕あり。一枚絵の文様はかなり粗雑になっている。焼継あり。被熱している。9は蛇ノ目凹形高台の皿でJC-2-aに分類される。10は陽刻の型皿でJC-2-eに分類される。高台も方形。11は端反形の鉢で、JB-5に分類される。焼継あり。幅広高台。12は爛徳利でJC-4に分類される。恵比寿の文様が色絵で描かれている。13～16は水滴でJB-19に分類される。型作り。13は陽刻で鶴と波の文様が付けられている。14は陽刻で夫婦岩の文様が付けられている。底面四隅に脚。底面ではなく側面の内の一面が無釉。15は水鳥で背中と口に孔が穿たれている。16は底部を後から貼り付けている。底面に布目。17は蓮華でJB-20に分類される。18は植木鉢でJC-21に分類される。底部のみ、脚部欠損。おそらく3足。底部中央に穿孔あり。鳥の貼付文あり。19は端反形碗の蓋。JC-00-bに分類される。2の蓋。

20～38は陶器である。20は折枝梅花文碗でTC-1-zに分類される。21はピラ掛け、渦巻き高台

の萩焼の碗で TH-1-b に分類される。1820 年代以降流行する小法量の碗。江戸で出土しているのはほとんどが小法量の碗である。長門市深川窯などで生産されている。22 は灰釉丸碗形の坏。TC-6 に分類される。底部無釉。内面に茶褐色の付着物あり。23 ~ 25 は皿である。23 は京・信楽系の輪高台皿で TD-2-c に分類される。幅広高台。鏽絵皿。見込みに「花都 なんぜんじ」。土産品か。同様の皿が千駄ヶ谷五丁目遺跡など数箇所から出土している。24 は 3 箇所ピン痕を持つ油皿。TD-2-b に分類される。内外面に灯心痕。25 は備前系の陽刻型皿。TE-2 に分類される。東大編年Ⅷ期以降に認められる。26 は湯釉、半菊状のシノギが施されている香炉で TC-9-d に分類される。27 は TC-10 に分類される。器形は柿釉が施された備前写しの徳利 (TC-10-g) に類似しているが、本品は灰釉が掛けられている。備前写しの徳利で柿釉以外の釉が掛けられているものは東大構内遺跡においてはほとんど見受けられていない。28 は瀬戸・美濃系陶器の赤津半胴甕で TC-15-a に分類される。柿釉で底部及び器面下端露胎平縁。底部二次穿孔。瓦質の植木鉢が出現する前には主にこの半胴甕が植木鉢として使われていた。水抜きのためか、高台が 2 箇所打ち欠かれている。29、30 は植木鉢。TC-21 に分類される。灰釉で鏝が付く。30 は器高の高い蘭鉢。31 ~ 33 は植木鉢。TZ-21 に分類される。31 は黒釉。底部中央に一次穿孔あり。三足。胎土が粗く白色粒子を多く含む。32、33 は灰釉。底部中央に一次穿孔あり。高台に 1 箇所、アーチ状の切れ込みがある。34 は土瓶で、TZ-34 に分類される。茶こし穴は 3 箇所。35 は柿釉鍋で TZ-33-a に分類される。紐状把手は形骸化して丸い貼り付けになっている。鍋形ではあるが、鍋として使われたのではなく、向付やままごとの道具として使われたものであろう。36 はミニチュアの碗で TD-2001-W に分類される。ロクロ成形、灰釉。

37 ~ 77 は土器である。37 は施釉植木鉢。DZ-21-c に分類される。黒釉が掛けられている。高台脇側面に刻印あり。底部中央に一次穿孔あり。高台に 1 箇所、アーチ状の切れ込みがある。38 は施釉行平鍋で DZ-42 に分類される。片口。把手部欠損。外面は黒色、内面は橙色。39、40 は皿である。底部糸切り左回転で DZ-2-b に分類される。41 は透明釉の皿で、DZ-2-h に分類される。油皿。灯心痕あり。42 は底部穿孔の皿で DZ-2-i に分類される。43 は釜形土製品。DZ-5-c に分類される。口の窄まった茶釜形と口縁部がやや内湾気味に立ち上がる 2 種類に分けられる。43 は後者である。44 ~ 50 は底部 1 次穿孔の瓦質植木鉢で DZ-21-b に分類される。器高より口径が大きい。粗製植木鉢。口縁部端反形で大形のものから小形のものまである。植えるものにより様々な大きさのものが作られていたようである。46 は 1 層と 3 層の遺物が接合している。51 は瓦質植木鉢で DZ-21-b に分類される。同じ分類記号になるが粗製の植木鉢に比べ丁寧な作りである。口縁部鏝形で表面が磨かれ、回転帯で文様が付けられている。器高より口径が小さいタイプである。底部穿孔、高台が付き 3 箇所のアーチ状の挟りがある。52 は土師質植木鉢で DZ-21-a に分類される。表面には墨で龍の絵が描かれている。底部欠損。53 は脚付きの油受け皿。透明釉。DZ-40-a に分類される。54 は長脚付きの油受け皿。透明釉。DZ-40-e に分類される。脚部欠損。55 は丸底のほうろく。DZ-47-a に分類される。56 ~ 77 は、人形・玩具である。59、69、74 以外は、橙色系で江戸在在系と思われる。56 ~ 58 は泥面子。DQ-4006-M に分類される。57 は梅鉢。58 は三つ巴文。59 は天神で DD-1101-M2e に分類される。胎土は淡黄色、京都のものと思われる。胴部右半欠損。器壁は薄く内面に指頭圧痕が認められ内外ともに雲母が多く残る。指に粘土が付かないようにするためか。台座と烏帽子は黒で、胴部は部分的に朱色が残る。60 は鳩笛で DQ-4003-M に分類される。胎土は橙色系で無釉である。左右を合わせる型合わせ成形で中空である。尾の先と胴部裏に穿孔。頭部は桃色、目は茶で塗られ、羽部には梅花が白で花芯は茶で描かれている。61 は恵比寿で DQ-1102-M2e に分類される。前後を合わせる型合わせ成形で中空である。62 は寿老人 (福祿寿) で DQ-1104-M1f。手に巻物を持っている。63 は恵比寿で DQ-1102-M1f に分類さ

れる。一枚型の型成形で裏面は平。64は頭に獅子頭を載せ、腰に太鼓を付けた角兵衛獅子か。DQ-1136-M2eに分類される。胎土は橙色で前後を合わせる型合わせ成形で中空である。65は太夫。DQ-1122-M2eに分類される。頭部欠損。前後を合わせる型合わせ成形で中空である。中に土玉が入っており、音がする。66は馬でDQ-1205-M2eに分類される。頭部欠損。胎土は橙色系で左右を合わせる型合わせ成形で中空である。台の部分に赤色が残る。67は犬でDQ-1204-M2eに分類される。胎土は橙色系で左右を合わせる型合わせ成形で中空である。口は貼り合わせた後で切り込みを入れている。中に土玉が入っているものもある。68は狐でDQ-1206-M2eに分類される。モチーフはその鉄砲玉を連想させる長細い形状から鉄砲狐と呼ばれるものである。胎土は橙色系。前後を合わせる型合わせ成形で内部は指頭幅の凹みがある。全面に白、耳は黄緑、目、口、胸部の宝珠が茶色。透明釉が掛けられている。69は面掲げ童子でDQ-1133-M2eに分類される。胎土は淡黄色である。型合わせ成形胴部前面欠損。内面に指頭圧痕が認められ雲母が多く残る。指に粘土が付かないようにするためか。背面には二重亀甲の中に亀の絵の刻印。70は灯籠でDQ-3007-Mに分類される。型作りで中実である。笠は別作り。箱庭具などに用いられる。71～77は器物。胎土は橙色系。71は鉢でDQ-2003-Wに分類される。ロクロ成形。内面は白色に塗られた後、青緑色、黄褐色で彩色されている。内外面施釉。72は行平鍋でDQ-2010-Wに分類される。ロクロ成形。把手部欠損。把手、片口部後付。片口部には棒状工具で穴が開けられている。内外面施釉。73は器台でDQ-2008-Wに分類される。ロクロ成形。白色、青緑色で彩色されている。内外面施釉。74～76は蓋。74の胎土は浅黄橙色で白色系である。白は呉粉。裏面にもう1枚円盤を貼りつけている。DD-2013-Mに分類される。75は左右を合わせる型押成形。DQ-2013-Mに分類される。裏に墨で受けの脇に放射線状に線。76は一枚型の型成形で裏面は平。DQ-2013-Mに分類される。77は前後を合わせる型成形。DQ-2020-Mに分類される。一分銀で両面銀彩。

78～91は金属製品。78～84は銅および銅合金と思われる製品である。78は煙管の雁首。脂返しの湾曲がほとんど無い、火皿は深くないが容量は比較的大きい。79は煙管の吸口。肩が付く。80は扇状の杵。木製品などに付けられていたものか。81は性格不明、製品の部分。葉状の板に断面方形の棒が付けられている。82は引き出しなどの前板部分と錠前金具。中央下の菊状の金具が上下して裏の金具が上に上がりはまるようになっている。木部には漆が掛けられている。83は火箸。先端部欠損。84は簪。地金の金属色は赤色。表面の色調は銀色。85～91は鉄製品である。85は刀子の刃身。先端部欠損。86は刀子の茎。87は金具。88～91は釘。88は頭部欠損。89～91は頭巻釘。遺存状態は極めて悪い。

92は石製品。温石。砂岩。短辺際中央に穿孔。熱で暖めるために、割れることが多く破片で出土することが多い。表面の2/3が赤変し、中央部で割れている。3寸×2寸の長方形である。温石は大、中、小とある程度規格化されており中型に属する。

93は骨角製品。棒状製品。簪か。

94はガラス製品。棒状製品。簪か。

SU3 (遺構Ⅲ-13～14図、遺物Ⅲ13・14図)

1～4は肥前系染付磁器である。1は高台径が小さい半球形の薄手碗。JB-1-fに分類される。2はJB-2-cに分類される。高台断面三角形で高台径が大きい、柿右衛門B窯などが指標。高台裏にはハリ支え痕が3箇所認められる。墨弾きで笹が描かれている。裏銘あり。「角福」。3は瓶でJB-10に分類される。油のような匂いが残る。底部二次穿孔。4は筒形の合子。JB-18-bに分類される。蓋との合わせ部分を打ち欠いて平にしている。

5は肥前系陶器である。白土象眼の三島手の鉢でTB-5-bに分類される。高台の外側が面取りされている。

6～10は土器である。6～9は皿である。底部糸切り痕が左回転でDZ-2-bに分類される。胎土は橙色を呈す。内面立ち上がり際に腰折れ状痕が認められ、江戸式かわらけと考えられる。10は塩壺の蓋で凹形無印でDZ-00-cに分類される。

11は軒丸瓦である。連珠の巡る巴紋の瓦当紋様を持つ。下半部が欠損しており、10個の連珠が残存している。内面布目の筒部が僅かに残る。

12は砥石。持ち砥。粘板岩。4面とも使用されている。

17世紀後葉から18世紀中葉にかけての資料であると推定される。

SK6（遺構Ⅲ-4図、遺物Ⅲ-15～17図）

1～4は肥前系磁器である。1、2は高台断面がシャープな「U」字状で高台高が低い碗でJB-1-eに分類される。1は色絵上絵付け。全面的に上絵は剥げ落ちてしまっている。2は白磁。3は丸碗形の染付坏でJB-6-aに分類される。底裏銘あり。4は染付鉢。JB-5-bに分類される。見込みコンニャク印判五弁花。底裏銘あり。

5～8は肥前系陶器である。5は刷毛目端反形碗でTB-1-hに分類される。内外面共に打刷毛目。6は外面主文様の京焼風陶器丸碗でTB-1-bに分類される。底部左隅に「清水」の刻印あり。7は見込み蛇ノ目釉剥ぎの青緑釉皿、内野山窯指標の皿でTB-2-aに分類される。内面青緑釉。外面透明釉。8は京焼風陶器の鉢でTB-5-jに分類される。高台内に「柴」の刻印あり。

9～15は土器である。9、10は底部糸切り左回転の皿でDZ-2-bに分類される。口縁部には灯心痕あり。胎土は橙色を呈す。11～13は塩壺。胎土は橙色を呈す。板作り成形。内面布目。11は外面に「難波浄因」の刻印あり。DZ-51-oに分類される。東大本郷構内遺跡にある加賀藩邸などでは出土例がない。12は外面に二重大柀内「泉州麻生」の刻印あり。DZ-51-iに分類される。13は外面に二重大柀内「泉州磨生」の刻印あり。DZ-51-jに分類される。東大本郷構内遺跡にある加賀藩邸などではほとんど出土例がない。14は凹形、無印、塩壺の蓋でDZ-00-cに分類される。胎土は橙色。内面布目。15はミニチュアの瓶でDD-2005-Wに分類される。胎土は淡黄色を呈す。頸部に緑で2本線。全体に透明釉。

16、17は瓦である。16は軒丸瓦。筒部を欠損している。16個の連珠の巡る巴紋の瓦当紋様を持つ。小振り、堀などに使われた瓦かもしれない。17は軒平瓦または軒棧瓦である。瓦当部中央から右端までを欠損する。中心飾りを欠損しているが、他の要素から軒平部の紋様は「江戸式」に分類される。唐草は二重線が用いられた丁寧な作りで、古手の様相を示す。

18～26は金属製品である。18～21は銅製品。18は銭。北宋銭。「治平元寶」。初鑄年は1064年。文字が潰れている。19は煙管の吸口である。20は魚々子地に唐草文を毛彫りしている飾金具。釘穴が2箇所残る。21は金具。22～26は鉄製品である。遺存状態はあまり良くなく、錆で比厚している。22～24は角釘の頭を一回折った頭巻釘。約二寸の小形のもの。25は頭部欠損。26は鋊。

27は硯。表面に光沢のある黒色が塗布されている。幅は二寸半。長さは13cm。残存。海部欠損。

肥前系陶器（TB-1-b、TB-2-a、TB-5-j）や塩壺（DZ-51-i、DZ-51-j）が出土していることから、17世紀末から18世紀初頭にかけての資料であると推定される。

SU7（遺構Ⅲ-4図、遺物Ⅲ-17図）

1、2は肥前系染付磁器である。1は器高が低く腰の張る皿でJB-2-oに分類される。見込み五弁花。

2は丸碗形の蓋物でJB-13-aに分類される。

3は瀬戸・美濃系陶器の赤津半胴甕でTC-15-aに分類される。柿釉。底部を二次穿孔し植木鉢として使われることも多い。

4、5は土器。胎土は橙色を呈す。4は底部糸切り左回転の皿で、DZ-2-bに分類される。内面立ち上がり際に腰折れ状痕がみられ、江戸式かわらけと考えられる。5は土師質植木鉢で、DZ-21-aに分類される。底部一次穿孔。

18世紀末から19世紀初頭にかけての資料であると推定される。

遺構外出土遺物（Ⅲ-17 図）

1は瀬戸・美濃系陶器で二合半灰釉徳利。つけ掛け。TC-10-cに分類される。釘書あり「内定」。

2は軟質施釉陶。鉄不足のため鉄釜の代用品として主に第二次大戦中に生産された。鍔の上面に統制番号「土 223」の刻印された釜。三重丸の中に刻印され三河地方の統制番号印か。外面の口縁から鍔にかけてと内面に透明釉が掛けられている。外面鍔下全面にススが付着している。この釜よりやや小振りで「土 10」の刻印の付された釜が伝世している。



Ⅲ-7 図 SU1 (1) 出土遺物



III-8 図 SU1 (2) 出土遺物



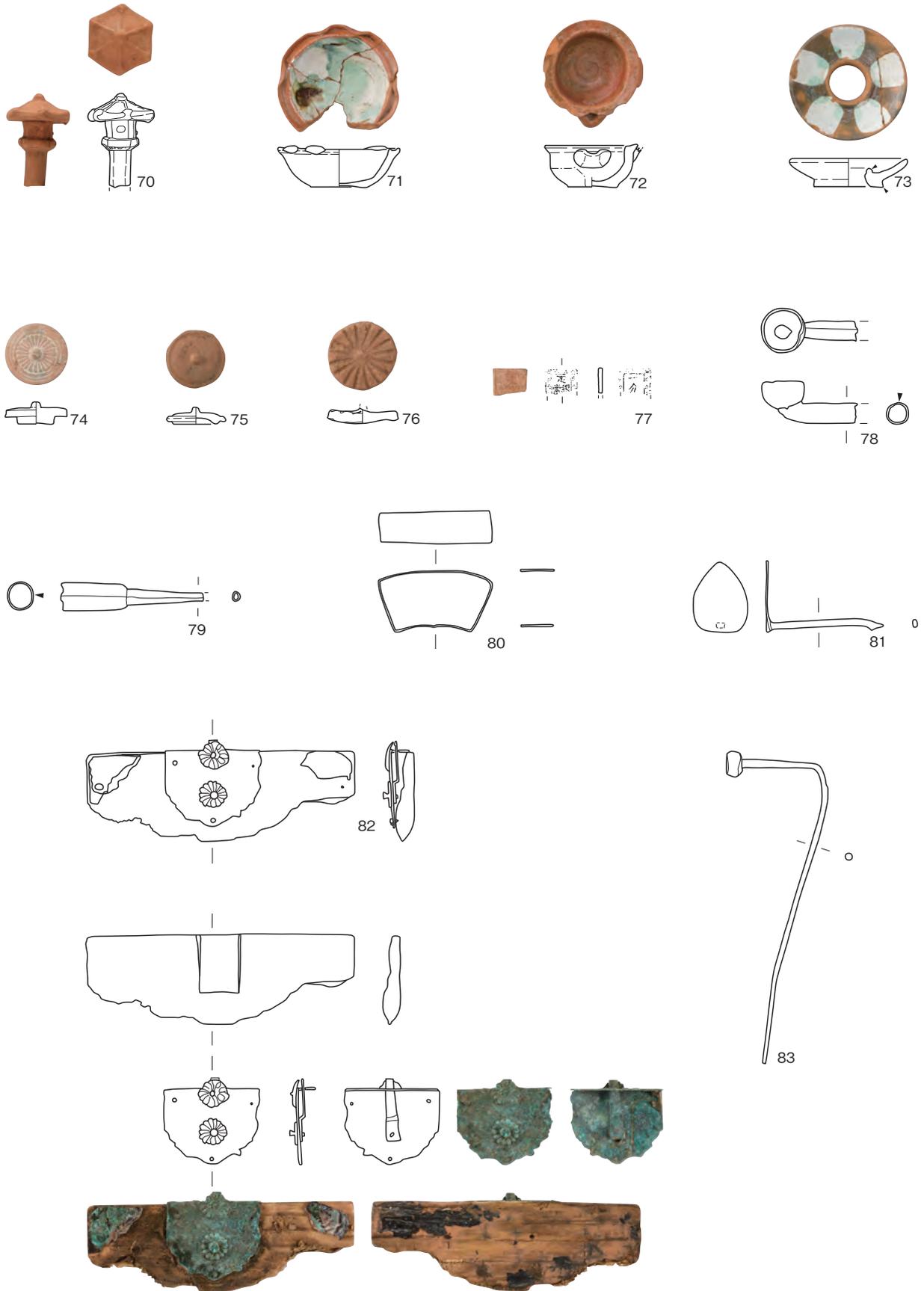
III-9 図 SU1 (3) 出土遺物



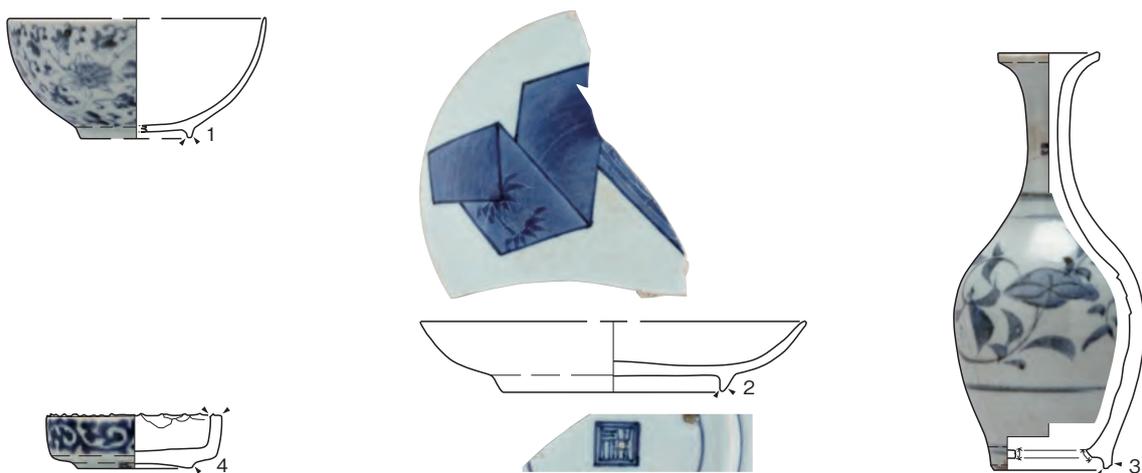
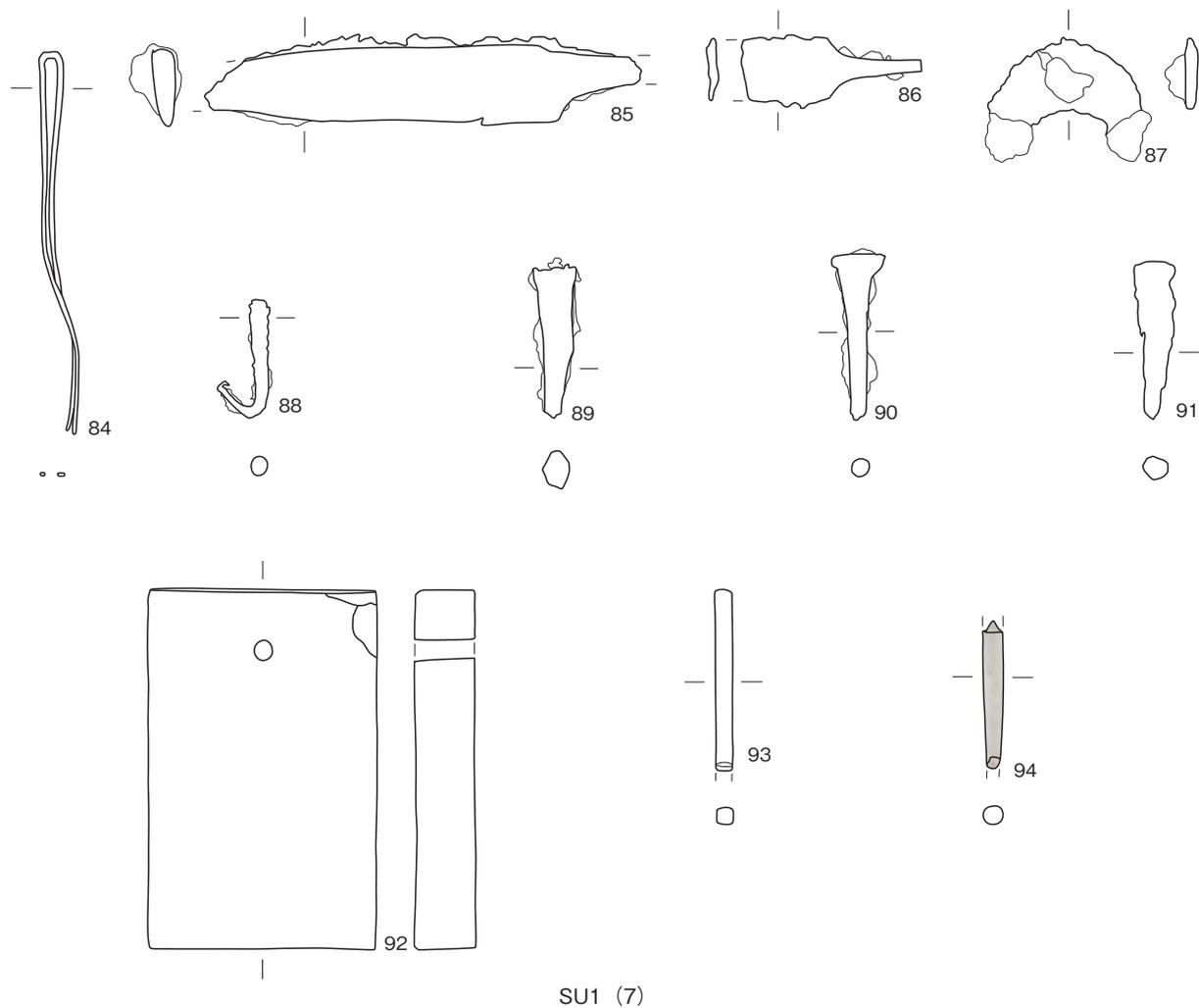
Ⅲ-10 図 SU1 (4) 出土遺物



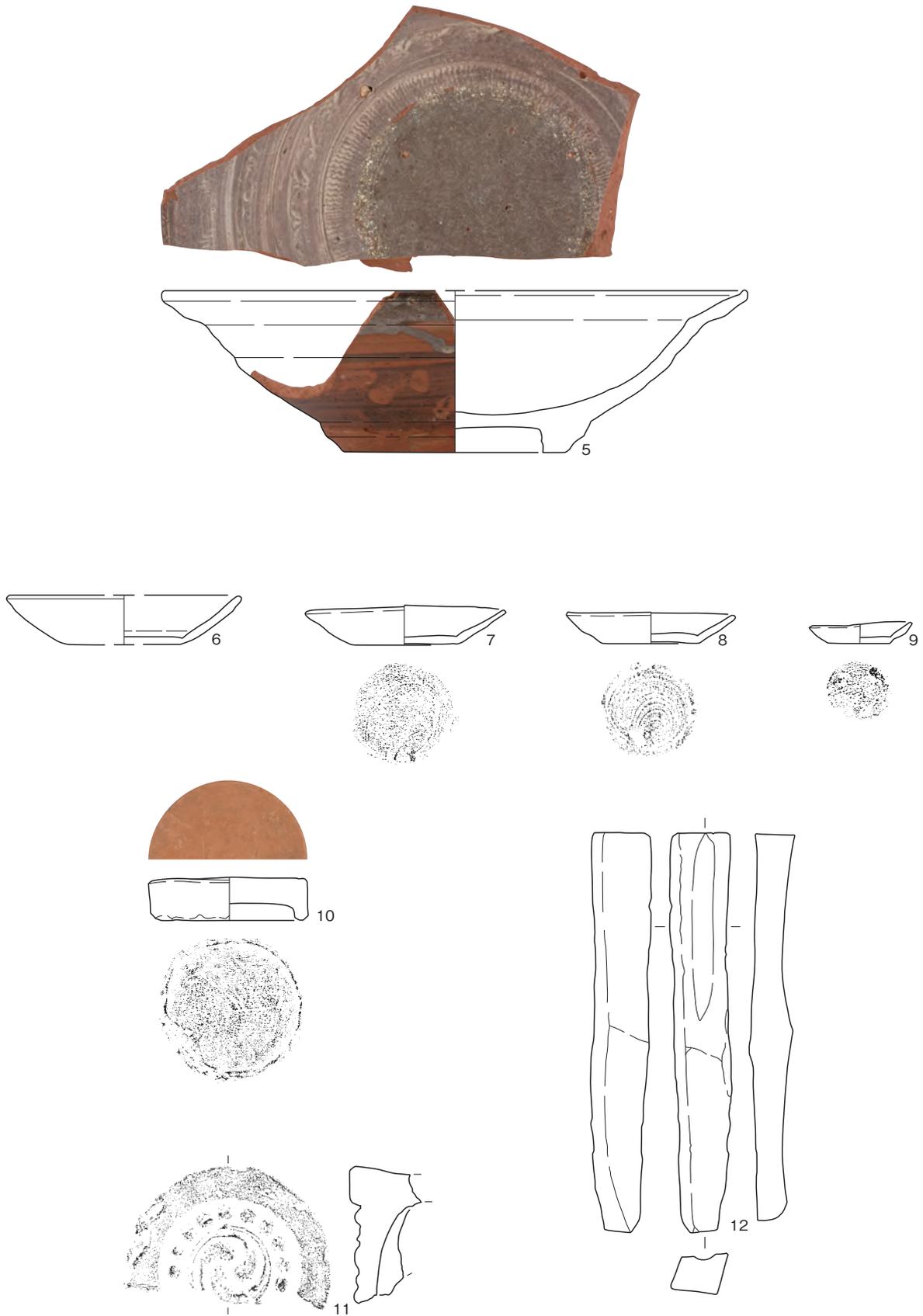
III-11 図 SU1 (5) 出土遺物



Ⅲ-12 図 SU1 (6) 出土遺物 (78 ~ 83 は 1/2)



Ⅲ-13 図 SU1 (7)、SU3 (1) 出土遺物 (SU1 (7) 84 ~ 94 は 1/2)



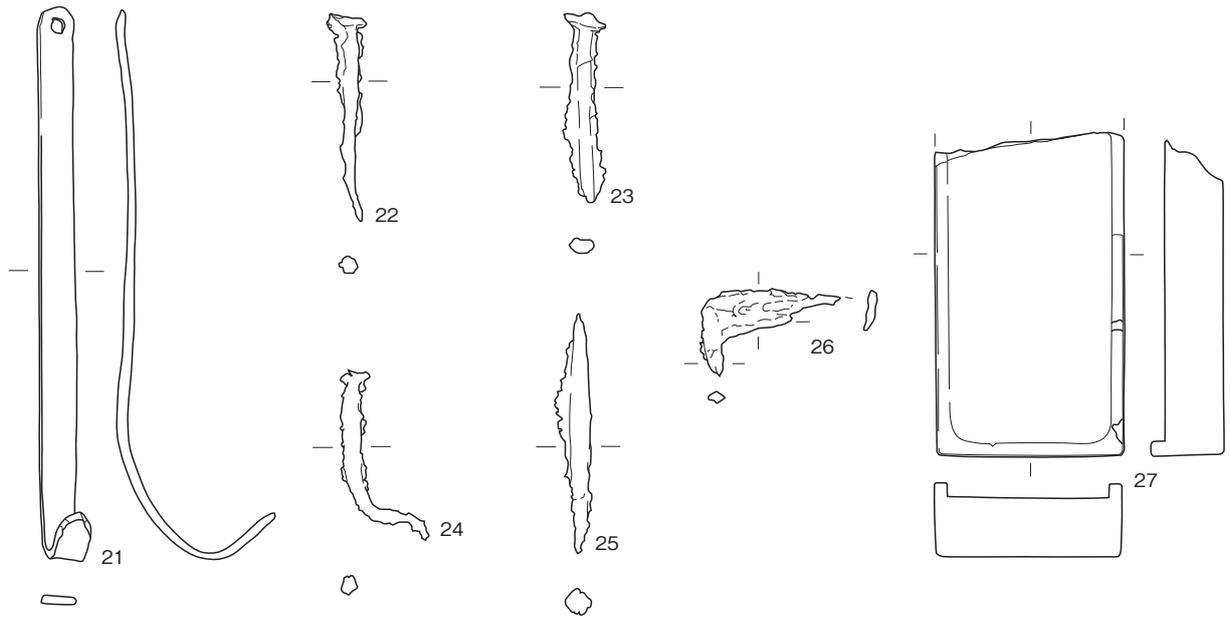
Ⅲ-14 図 SU3 (2) 出土遺物 (11は1/4)



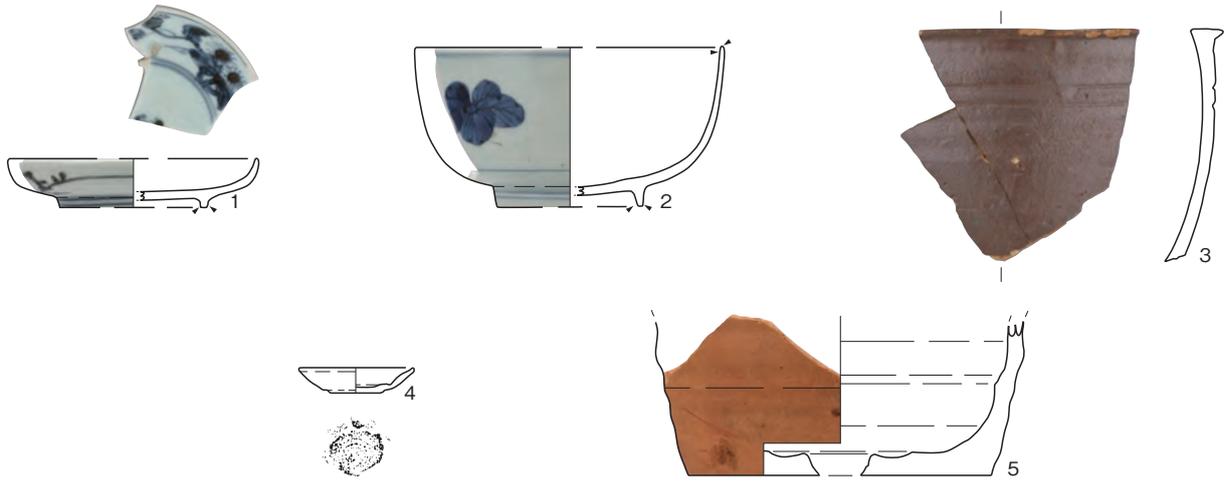
Ⅲ-15 図 SK6 (1) 出土遺物



Ⅲ-16 図 SK6 (2) 出土遺物 (16~17は1/4、18は1/1、19・20は1/2)



SK6 (3) (21 ~ 26 は 1/2)



SU7



遺構外

III-17 図 SK6 (3)、SU7、遺構外出土遺物

第3節 出土陶磁器・土器について－瓦質植木鉢を中心として－

はじめに

遺跡における分類は数量分析により様々な文化・時代の様相を浮かび上がらせる手段である。そのためにはある一定以上の数量（便宜的に推定個体数100個体以上）を必要とする。磁器・陶器・土器の分類基準は「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）」（東京大学埋蔵文化財調査室1999）によった。農学生命科学研究科附属小石川樹木園根圏観察温室地点（KNK）において、100個体以上の陶磁器・土器が出土したのはSU1のみであった。地下室の階段部に廃棄されていた遺物である。上層出土遺物と下層出土遺物が接合しており、一括廃棄と考えている。地下室内は未調査である。本地点は元禄11（1698）年から幕末まで旗本肥田家の拝領屋敷地である。

出土陶磁器・土器の全体総数は140個体。内、蓋2個体、人形・玩具類30個体が出土している。身と対になる蓋2個体を除いて陶磁器・土器の分析対象は138個体である。

陶磁器・土器を東大分類、東大編年に基づいて分析していきたい。

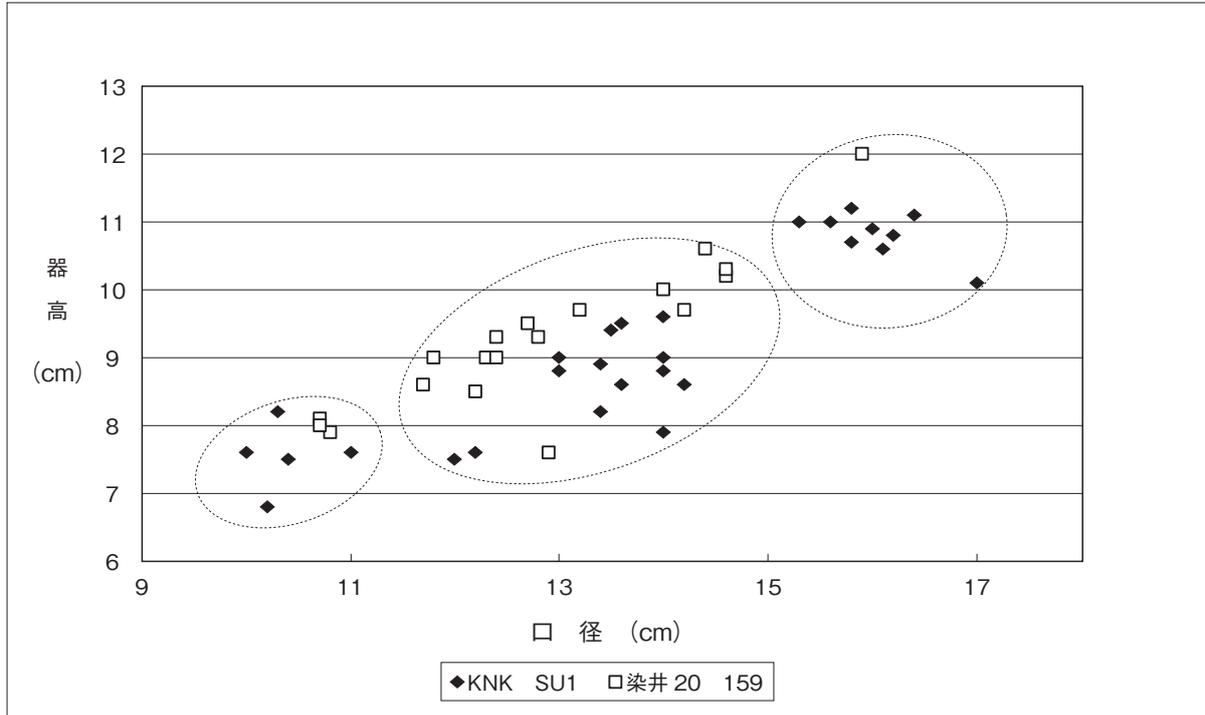
1. 出土遺物の年代について

人形・玩具類を除いて陶磁器、土器の分析を行った。対象は108個体である。胎質別では磁器20個体、陶器26個体、土器62個体を数える。比率で表すと19%：24%：62%となる。胎質別にみると磁器について、碗はJB-1-j、n、o、JC-1-d。皿はJB-2-p、JC-2-a、eで構成されている。碗は瀬戸・美濃系端反形碗（JC-1-d）が多く観られる。小振りで器高も低く、口縁部内側の帯文様圏線のみで、Ⅷc期以降の様相を示している。皿は瀬戸・美濃系陽刻型皿（JC-2-e）などがⅧ期以降の様相を示している。産地別では、肥前系が8個体、瀬戸・美濃系が12個体で2：3の比率で肥前系より瀬戸・美濃系が高くなっており、Ⅷ期以降の様相を示している。陶器について、碗はTC-1-q、a、z、TD-1-g、TH-1-bで構成されている。古い時期の遺物も含まれてはいるが、Ⅷ期以降の様相を示すものが多く、萩系ピラ掛け碗はⅧc期以降に比定されている。土器については、ほとんどが瓦質植木鉢（DZ-21-b）で構成されⅧc期以降に比定されている。胎質を通してⅨ期以降の遺物はみられない。以上のことから本遺構出土資料はⅧc期（1840～50年代）を中心とする遺物群であるといえよう。

2. 組成的特徴について

陶磁器は碗11個体、皿5個体、坏3個体などの食膳具、徳利7個体などと共に植木鉢7個体が出土している。土器は灯火具やほうろくと共に植木鉢52個体が出土した。まとめると食膳具を含む生活用具が49個体、植木鉢が59個体、人形・玩具類が30個体である。比率で現すと36%：42%：22%となり、植木鉢の比率が高いことがわかる。陶磁器では器高の高い灰釉蘭鉢や様々なバリエーションの植木鉢が出土しているが、土器では52個体中50個体とほとんどが粗製の瓦質植木鉢で大きな偏りを見せる。

Ⅷc期を中心とする一括廃棄資料で明治期の遺物を含まない。完形率が高く、被災していない。このような様相の一括廃棄要因として、幕末の引き払い時の廃棄が考えられるであろう。



Ⅲ-21 図 瓦質植木鉢法量分布図

3. 植木鉢について

全体の42%を占める植木鉢のうち87%が粗製の瓦質植木鉢である。この粗製の瓦質植木鉢を口径と器高を計測して分類した(Ⅲ-21図)。計測できたものが28個体であった。完形率が高く、半数以上の個体を計測することができた(復元値も含む)。口径と器高はおおよそ3:2の比率を示す。ある程度の規格に沿っており、大まかにグループ分けすることができた。口径では小が10cm以上11.5cm未満(Ⅲ-10図49、50)、中が11.5cm以上15cm未満(Ⅲ-10図47、48)、大が15cm以上17cm未満(Ⅲ-10図44、45)である。数量は小5個体、中14個体、大9個体である。かなりの個体差はあると思われるが、大まかな基準値はあったのであろう。基準の寸法としては口径が小3寸5分、中4寸5分、大5寸5分に対応すると考えられる。植物の種類や生育状況によって植木鉢の大小を使い分けていたのであろう。

植木鉢についての出土傾向をまとめると

- ・粗製の瓦質植木鉢の比率が高い。
- ・粗製の瓦質植木鉢は大中小の大きさに分類できる。
- ・陶磁器の植木鉢はバリエーションが多い。
- ・完形率が高い。
- ・被熱していない。
- ・半胴甕を利用した植木鉢が1個体しかない。
- ・瓦質鉢で無孔のものはない。

などが挙げられる。

4. 他遺跡との比較

他の武家屋敷地の幕末引き払い時の廃棄とされている遺構と比較してみたい。新宿区南山伏町遺跡

は本地点と同じ旗本屋敷地で、幕末期の屋敷引き払い時の廃棄とされている遺構は20遺構近くある(新宿区南山伏町遺跡調査団 1997)。個別の個数が記載されているもののみではあるが、総数からみた植木鉢と人形・玩具類の比率をみると、植木鉢が出土していると記載があった例が約半数で、総数との比率は多いところで約1割であった。やはり、多くても1割程度であり、観賞用として使われていたものであろう。人形・玩具類が出土していると記載があった例が約7割、総数との比率で多いところで約2割であった。本遺構の出土状況と比較してみると、本遺構の植木鉢の比率は約4割と大変高いことがわかる。また、人形・玩具類は引き払い時の多くの遺構で認められることがわかった。

新宿区南町遺跡は御徒組大縄地組屋敷地で幕末期の引き払い時の廃棄とされている遺構がいくつかある(新宿区南町遺跡調査団 1994)。近世後期には多数の地借人が居住していたという歴史的背景があるようである。74号遺構は全体329個体のうち植木鉢が37個体出土している。植木鉢には半胴甕が使われており、人形・玩具類も多い。49号遺構は全体297個体のうち陶器、土器の植木鉢が21個体出土しており、人形・玩具類も多い。いずれも全体数から見た植木鉢の数は1割ほどで観賞用として使われていたものであろう。また、人形・玩具類も多く、種類が多いのが引き払い時の特徴であるとされている。同時期の遺構で一方は半胴甕の植木鉢が多く出土し、もう一方が土器植木鉢が多数出土している。粗製の植木鉢には植木を入れてそのまま売ることが多い。植木の種類によって容器が使い分けられていたことを裏付けるものであろう。本遺構ではほとんどが粗製の瓦質植木鉢であり、特定の品種に用いられていたと考えられる。

次に、隣接地である染井や巣鴨の様子をみてみたい。江戸では18世紀以降に染井や巣鴨、駒込一帯が大園芸地帯になった。本地点のある小石川は大園芸地帯である巣鴨地域に隣接し、多くの植木屋が存在していた地域である。また、庶民の間にも園芸ブームは拡がり、菊細工(菊人形)なども盛んに作られた。この地域は菊細工作りが盛んで有名であった。染井遺跡のほぼ同時期の遺構では半胴甕・灰釉植木鉢が多く、巣鴨、駒込一丁目遺跡では土器植木鉢が多い。そこで、成田氏は主に栽培した品種の違いによるものとするならば、複数種類の植木鉢を使い分けて多様な鉢植えの生産を行っていた染井の植木屋に対し、巣鴨では土器植木鉢を使用して少ない品種の大量栽培に力を注いだと言い換えることもできるだろうとしている(成田 2010)。本地点は巣鴨・駒込地域に隣接しており巣鴨地域の様相に近い。

豊島区・染井遺跡天理教地区は植木屋の敷地内であることが分かっている地点である(としま遺跡調査会 2011)。159号遺構は土坑で遺物は31個体出土し、内22個体が粗製の瓦質植木鉢である。口径と器高の計測値の記載がある20個体を分析し、本遺構出土の粗製の瓦質植木鉢と比較してみた(Ⅲ-21図)。今回、大と分類した口径が15cm以上の植木鉢は1個体のみで中グループの領域に集中する。品種の少なさを裏付けるものか、または、意図的な廃棄が行われたことが考えられる。品種の少なさを裏付けるものだとすれば植木鉢に法量差のある本遺構の方が複数の品種を栽培していたことが考えられる。両角氏は、染井遺跡XX(天理教地区)の一括廃棄の状況から19世紀中頃の幕末から明治前半にかけて植木屋群が規模縮小もしくは廃業、あるいは転出したという推測も可能であろうとしている(両角 2011)。

武家地、植木屋に比定される遺跡をみてきたが、武家でありながら組屋敷内でつつじを商品として栽培していた同心達がいる。新宿区百人町三丁目遺跡では花壇の遺構が検出されている(新宿区遺跡調査会 1996)。大久保百人組屋敷地ではつつじの栽培が盛んで『江戸名所図絵』にも「大久保の躑躅」として紹介されている。下級武士である同心達が生活のために副業としてつつじの栽培をしていた。調査地点が耕作地、栽培地であったためか遺物はあまり出土していない。

5. 文献・絵画資料にみる植木屋

絵画資料としては、浮世絵に背景の一部として多く取り上げられている。植木鉢の描かれている浮世絵は役者絵や美人図などが多く、現実の世界よりは憧れの世界を映したものが多いとされている。今回、多く出土している粗製の瓦質植木鉢などはあまり多くは描かれてはいない。しかし、植木売りを題材としているものに素焼きの植木鉢と思われるものが描かれているのを確認できた。三代歌川豊国「俳優見立夏商人」では植木売りが台輪にのせた素焼きの植木鉢で朝顔を商う図があり、朝顔が粗製の鉢に入れられて売られていたことがわかる。また、同じ三代歌川豊国「四季花くらべの内 秋」には縁日に並ぶ園芸植物が描かれている。木台の上には1点1点が異なる陶磁器の鉢が並べられ、前の地面には素焼きの植木鉢に葉だけの苗のようなものが植えられてたくさん並べられている。その他の浮世絵にも素焼きの植木鉢に撫子や福寿草などが植えられて売られていた絵がある。朝顔は下町、菊細工は山の手など地域によって栽培する種類に違いがあった。

粗製の瓦質植木鉢が使われていたかは確認できないが、植木について書かれている文献史料に「菊細工番付一覧」や「江戸名所花暦」などがある。平野氏はこれらを分類分析している。菊細工は菊人形の前身のようなもので、見せ物として作られた。このことは近郊農村の副業から都市型植木屋へと転身したためとしている。「菊細工番付一覧」を分類し出品者を「巢鴨グループ（含む小石川）」「染井グループ」「団子坂グループ」に分け、時間軸とともに地域的に移行していることを読み取っている。文化（1814）11年には「巢鴨グループ」、天保15（1844）年・弘化2（1845）年の全盛期には「染井グループ」、嘉永年間（1848～1854）から明治10年代までは「団子坂グループ」がより多くの菊細工を出品している。団子坂だけが菊細工の名所として生き残った。この限定された地域の中だけでも様々な変遷が読み取れる。「江戸名所花暦」は江戸市中の花の名所案内記で多数刊行されている。その中には武家の記載もある。桜、藤、梅などの庭木としての樹木だけではなく桜草などの草花を栽培している武家がいたことがわかる。変異種を集め栽培などを行っていた。桜草で300品種以上、朝顔なども変異種を求め大金で売買されていた。これらの花暦に出てくる巢鴨地域の植木屋が扱っていた植物は菊、桜草、秋草、福寿草、万年青、松葉蘭など複数の種類が挙げられている（平野 2006）。

まとめ

本遺構出土遺物の組成は新宿区などにみられる旗本屋敷地や組屋敷地の特徴よりも、植木屋であり隣接地である巢鴨地域の様相に近い。全体の4割以上を植木鉢が占め、粗製の瓦質植木鉢の数が多いことなどから個人的な観賞用の植木栽培と考えるよりも少し規模の大きなものを考えても良いであろう。貸家などの副業をしていて店子として植木職人が居住していた可能性も否定はできないが、遺構などからもそのような状況を読み取れてはいない。

文献から武士でもかなり本格的に栽培を行い変異種の栽培に取り組んでいた愛好家もいること、また、「大久保の躑躅」のように武士による副業としての植木栽培が行われていた例もある。本地点は狭い範囲の調査で確定的なことは不明であるが、屋敷地内で活発な花卉栽培が行われ、使用された植木鉢を含む陶磁器・土器類が幕末期の引き払いによって一括廃棄された可能性が高いと考えられる。

（大貫 浩子）

第IV章 成果と課題

本地点の調査では、縄文時代前期前半から中期後半にかけての遺物包含層と、江戸時代の遺構、遺物が検出されたが、縄文時代に関する所見は、第2章で触れているので、本章では江戸時代を中心に本地点の景観と地下坑について若干の所見を述べてまとめにかえたい。

調査地点の性格と景観

SU1は階段付きの地下室で、出土遺物の年代的様相（東大編年Ⅷc期）より幕末の屋敷引き払いによる一括廃棄が想定される遺構である。詳細は第三章第3節に委ねるが、出土遺物の約半数を植木鉢が占め、屋敷内で花卉栽培行為が行われていたことを傍証する資料である。

SK6は長方形を呈する土坑で、17世紀末から18世紀前半に比定される遺物が廃棄されていた。出土遺物には半完形品が多く含まれることから1次廃棄と考えられ、芥溜と推定される。

SU3、SU7は、いわゆる地下坑の豎坑部である。出土遺物の年代観から、SU3は18世紀前半以前、SU7は18世紀中葉以前に廃絶されたことが推定される。

本地点から検出された遺構は、上記の4遺構を除くほとんどが、植栽痕と推定される坑底に根穴痕が認められる不定形遺構であり、しかも全体的に遺構の分布密度は低く、屋敷内の裏庭的空閑地であったと推定される。

さて、江戸時代の本地点は第I章第3節で述べたように、17世紀代は小石川伝通院領五軒町百姓地、白山御殿が拡張された元禄11（1698）年以降は、旗本肥田家の屋敷地の一角に比定される。肥田家の屋敷面積は400坪で、本地点と網干坂を挟んで隣接する林町遺跡にも及んでいたが、天保10（1839）年に切坪相対替によって林町遺跡側195坪が磯貝家の屋敷地となり、本地点を含む東側205坪が幕末まで肥田屋敷として存続した。肥田家は禄高250俵の旗本で、代々大番などを勤めていた家である。

切絵図にみる拝領者名表記は、一貫して北から記載されていることから、本屋敷地の表は北側の道に面していたと想定され、本地点は屋敷の裏部分に該当することが読み取れる。

本地点検出遺構は、この地域特有の地下坑の存在が特徴付けられるが、全体的に遺構の分布密度が低く、地下坑（2基）、階段付き地下室（1基）を除くと、屋外施設と考えられる芥溜や小規模な植栽痕が多く認められた反面、柱穴、礎石、井戸など住空間を構成する遺構は検出されなかった。この考古学的成果および絵図資料による調査地点位置比定から、低木を主体とする樹木が点在もしくは生け垣状に広がる空間に、地下坑、芥溜、地下室といった地下遺構が時折構築された屋敷奥の庭景観を復元することができる。低木で構成されたこの空間は、主屋から庭を望むとその向こうに広がる御薬園の広大な空間までも借景として取り入れることができ、一体となった景観を楽しむことができたといえよう。

地下坑について

白山構内では理学系研究科附属植物園研究温室地点（東京大学埋蔵文化財調査室2006）に続き、2例目（3基）となる。研究温室地点検出SU14からは18世紀末葉の遺物が出土しており、いずれも18世紀代に廃絶された点で共通する。地下坑に関しては、遠藤・加藤論文（遠藤・加藤2004）、大塚窪町遺跡報告書（加藤建設株式会社2005）で、その形態、構造、年代、分布的特徴から、本遺構



IV-1 図 白山周辺の地下坑検出事例分布図（網掛けは幕臣屋敷、★は調査地点）

の定義・特徴を分析している。年代的には18世紀代を中心に、空間的には本郷台のうち小石川の谷を挟む白山台、小石川台に集中し、江戸時代には幕臣屋敷地内に比定される点で共通する（IV-1図）。しかしその機能に至っては、農業関連施設説、粘土採掘坑説などの諸説が論じられているが、遺構構造上完掘することがほぼ不可能であることも合わせ、いずれも確証には至っていない。また各報告書において粘土採掘坑説や農業関連施設説を検証するために、竪坑および横坑坑底上に堆積した土壌（泥層）を採取し、鉍物分析、花粉分析、珪藻分析などの化学分析を試みてはいるが、機能を特定するに至る成果には結びついていない。

さて、本遺構の竪坑は平面形長方形を呈し、長辺80～100cm、短辺60～80cmを主体とし、ほぼ垂直に掘られ、壁面は丁寧に整形されている。また両長辺中央には足掛け用の穴が設置されていることを特徴とする。地下坑以外で、壁面に足掛け穴が認められる遺構は掘井戸、上水井戸竪坑、地下室などの大深度地下遺構に限られる。

足掛け穴を有する井戸はおおむね直径1m未満を測り、井戸側を持たない構造を基本とし、17世紀代に帰属する事例が多い。この足掛けは井戸内の清掃作業を行うためにも用いられた可能性もあるが、製作時の仮設昇降施設の可能性もある。真砂遺跡で検出された上水井戸では上水道暗渠部分の竪坑に足掛け穴が認められており、製作時の昇降施設であったことが窺われる（真砂遺跡調査会1987）。しかし、地下坑の構造は、真砂遺跡検出例の上水井戸とは明らかに異なり、木樋の設置も構

造的に不可能であり、上水道施設の可能性は極めて低い。

地下室では1壁面に地下坑の2倍幅程度を測る大形の足掛け穴を有す事例はあるが、地下坑・堅坑規模で両側面に設けられる事例はほぼ無く、昇降施設はハシゴ、階段が基本である。

地下室のうち、地下坑同様、坑底深度が地表面から4m以上を測り、堅坑と横穴で構成される遺構に地下式麹室がある。地下式麹室はその用途から坑内への出入りが頻繁に行われていたことが考えられ、堅坑坑底にはハシゴ受けと推定される2基の小穴が認められる事例もあり、作業者の出入りや麹棚の上げ下ろし作業にはハシゴを利用して昇降していたことが判る。地下式麹室が作業室内の保温・保湿のために部屋への入口部を通行ぎりぎりのサイズにし、それに対し堅坑は資材、製品の上げ降ろしを容易に行える規模を維持して製作されていることを考えた場合、地下坑の堅坑、横坑を保温・保湿の根拠として農業関連施設に結びつけることに難しさを感じる。

このように昇降施設を有する大深度地下遺構と比較した場合、地下坑に設置された足掛け穴は、製作時の昇降施設として設けられた可能性も視野に入れる必要がある。今後、本遺構の調査を行うにあたって足掛け穴底面の摩耗度、硬度、使用痕についても詳細な観察が行われることが望まれる。

【引用・参考文献】

- 朝倉治彦・柏川修一編 1992『守貞謄稿』第五卷、東京堂出版
- 朝日新聞社 1996『復元・江戸情報地図』
- 市古夏生・鈴木健一 1997『江戸切絵図集』ちくま学芸文庫
- 遠藤寛子・加藤元信 2004『小石川のあなぐら－都市と農村をむすぶもの－』
- 加藤建設株式会社埋蔵文化財調査部 2005『大塚窪町遺跡－文京区窪町小学校校舎改築に伴う発掘調査報告書－』
- 古泉 弘 1990『江戸の穴』柏書房
- 新宿区南町遺跡調査団 1994『東京都新宿区南町遺跡』
- 新宿区南山伏町遺跡調査団 1997『東京都新宿区南山伏町遺跡』
- 豊島区遺跡調査会 2011『染井 XX』
- テイケイトレード株式会社 2008『林町遺跡』
- 東京大学百年史編集委員会編 1987「理学部」『東京大学百年史 部局史二』
- 東京大学遺跡調査室 1990『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1990『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2006『理学系研究科附属植物園研究温室地点発掘調査報告』『東京大学構内遺跡調査研究年報』5
- 東京帝国大學理學部植物學教室 1940『東京帝国大學理學部植物學教室沿革：附理學部附属植物園沿革』
- 東京都教育委員会 1985『都心部の遺跡－貝塚・古墳・江戸－』
- 東京都教育庁社会教育部文化課 1989『江戸復元図』
- 東京都教育庁生涯学習部文化課 1993『東京の遺跡散歩』
- 永峰光一・坂詰秀一編 1981『江戸以前』
- 成田涼子 2010「『植木屋』出土の『植木鉢』－鉢物生産の器－」『都市江戸のやきもの』江戸遺跡研究会第23回大会
- 白山四丁目遺跡調査会 1981『白山四丁目遺跡』
- 平野 恵 2006『十九世紀日本の園芸文化 江戸と東京、植木屋の周辺』思文閣出版
- 文京区遺跡調査会 1995『原町遺跡－徳島県職員住宅建設に伴う発掘調査－』
- 文京区遺跡調査会 1996『原町遺跡第Ⅱ地点－防火水槽建設に伴う発掘調査報告書－』
- 文京区遺跡調査会 2000a『林町遺跡第Ⅱ地点－集合住宅建設に伴う発掘調査報告書－』
- 文京区遺跡調査会 2000b『指ヶ谷町遺跡－文部省施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－』
- 文京区遺跡調査会 2003a『白山御殿跡ほか－集合住宅建設に伴う発掘調査報告書－』
- 文京区遺跡調査会 2003b『一行院跡ほか－集合住宅建設に伴う発掘調査報告書－』
- 文京区教育委員会 1990『文京のあゆみ－その歴史と文化－』
- 文京区役所 1967『文京区史』巻2
- 真砂遺跡調査会 1987『真砂遺跡』
- 両角まり 2011「第Ⅳ章おわりに まとめ－今後に向けて－」『染井 XX』

報告書抄録

ふりがな	とうきょうだいがくこうないいせきちょうさけんきゅうねんぼう							
書名	東京大学構内遺跡調査研究年報							
副書名								
巻次	8							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	成瀬晃司（編）、大貫浩子							
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室	所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場 4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 03-5452-5103					
発行機関	東京大学埋蔵文化財調査室	所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場 4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 03-5452-5103					
発行年月日	平成 24 年 5 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とうきょうだいがくはくさんこうない 東京大学白山構内 の遺跡 (小石川御薬園跡) のうがくせいめいかかくけんきゅうか 農学生命科学研究科 ふぞくこいしかわじゅもくえん 附属小石川樹木園 こんけんかんまつおんしつちてん 根圏観察温室地点	とうきょうと 東京都 ぶんきょうく 文京区 はくさん ちょうめ 白山3丁目 7番1号	13105	81	35° 43' 22"	139° 44' 30"	平成 14 年 9 月 24 日～ 10 月 7 日	91㎡	農学生命 科学研究 科附属小 石川樹木 園根圏観 察温室新 営に伴う 事前調査
所収地点名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
東京大学白山構内 の遺跡 (小石川御薬園跡) 農学生命科学研究科 附属小石川樹木園 根圏観察温室地点	包蔵地 幕臣屋敷地	縄文 近世	地下室、地下坑、 廃棄遺構	陶器、磁器、土器		旗本屋敷地裏手の調査。 地下坑を 2 基検出。 瓦質植木鉢の多量廃棄		

第4部 東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要 8

東京大学構内遺跡出土人形・玩具の分類

東京大学構内遺跡出土人形・玩具の年代的推移について

東京大学構内遺跡出土人形・玩具の分類

安芸毬子 小林照子 堀内秀樹

はじめに

東京大学埋蔵文化財調査室では、学内発掘調査で出土した陶磁器・土器類について、①文化相の復元②社会・経済相の復元③年代相の復元を目的として出土遺物数が一定以上の遺構・層序などの一括性が想定できるサンプルユニットに対して数量提示と定量的分析を行ってきた。こうした出土遺物群の組み合わせ（Assemblage）には、遺跡の歴史的・地理的背景、居住者の社会的・経済的特性など種々の属性が反映されると考えるからである。

この定量的分析についての概要と東京大学構内遺跡における実際は「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）」（埋蔵文化財調査室 1999）においてふれているので反復を避けるが、作業として編年などに用いた定性的な分析段階であれば、分類→様相の把握（堀内 1997 など）、家財所有などの議論に用いた定量的分析であれば、分類→カウント→様相把握（成瀬 2000 など）といったプロセスを踏む必要がある。前述「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）」は上記目的—特に年代相の復元にも対応できるように構築した分類基準である。この定量的分析を踏まえて段階設定（堀内 1997）、器種の変遷（成瀬 1997）、小器種の年代推定（大成 2011）など基本的な出土遺物の年代相について提示を行い、高位な議論の基礎としてきた。1999年の最初の提示以降、研究の進展によって修正を加えながら継続使用してきた。このうち人形・玩具類は比較的古く出土頻度の高いものに限って、陶磁器と同じ分類基準で評価を行ってきたが、人形・玩具類は陶磁器全般より信仰、遊興など文化的、社会的側面にアクセスできる利点を有する反面、定量的分析が有効となるほど量が出土することは殆どない。また、少量の出土であっても衣食住の週間や風俗などに直接対比することなども可能である。こうした陶磁器とは異なる出土様相から、本類についてはより精緻な分類基準と、それに基づいた量的な把握が必要であると考え、本稿で独自の分類案を提示するものである。

（堀内秀樹）

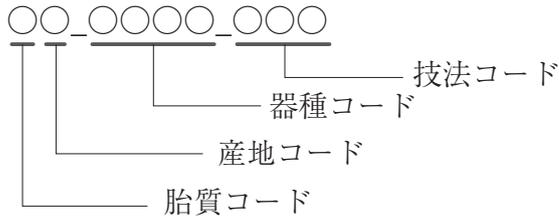
1. 分類の対象と表記

分類の対象は東大構内遺跡出土の人形・玩具類である。人形・玩具類は磁質、陶質、土師質、木質、石質、骨角質、ガラス質とさまざまな資料が存在するが、ここではやきものを対象に分類を行う。人形とは人・神仏・動物を模った小形の像、玩具とは人形以外のミニチュア・器物・建造物を模った小形の像および遊具・碁石・泥面子・笛、土鈴等とする。

分類項目は陶磁器分類にならい、胎質コード、産地コード、器種コードのほか、人形・玩具固有の技法コードを設定した。技法コードは成形技法で構成しており、器種＝人形（1000番台）は成形技法に加え、型の枚数と内部構造で構成している。施釉、彩色、刻印、墨書、穿孔、接合位置は観察表に記載する（1・2図）。

本文中で記載した遺構の段階設定は、「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」（堀内 1997）に基づいている。

表記



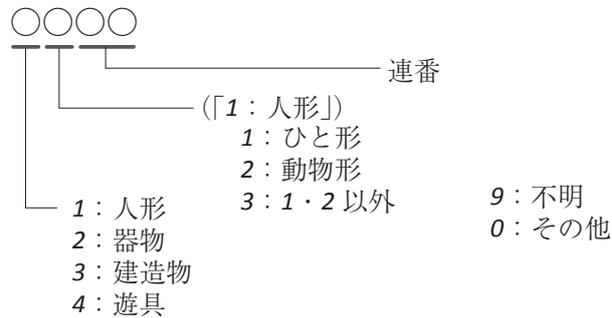
・胎質コード

- J : 磁器 (磁質)
- T : 陶器 (陶質)
- D : 土器 (土師質)
- R : 瓦 (瓦質)

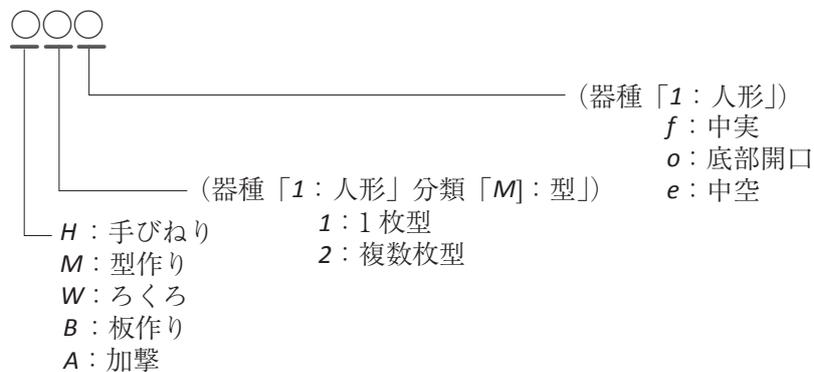
・産地コード

- A : 輸入陶磁
- B : 肥前系
- C : 瀬戸・美濃系
- D : 京都・信楽系
- E : 備前系
- Q : 江戸在地系
- Z : 不明

・器種コード (3 図)



・技法コード (4 図)



1 図 人形分類表記

全遺物共通項目				人形・玩具観察項目															
出土遺構 コード No.	図版No.	報告 書番 号	胎質 器種	人形・玩具 分類			内部 型数	法量		器種名	モチーフ	土色	土色コード	穿孔	接合 位置	施釉 彩色	刻印 墨書	被熱	備 考
				器種	成形技法	A(幅・ 口径)		B(奥 行・底 高)											
SU 01	III-9	36	T	人形・玩具	TD	2001	W	4.2	1.9	3.2	碗				灰釉				
SU 01	III-11	57	T	人形・玩具	DQ	4006	M	2.3		0.9	権鉢	7.5Y 6/6							
SU 01	III-11	58	T	人形・玩具	DQ	4006	M	2.4		0.9	泥面子 三ツ巴	7.5Y 6/6							
SU 01	III-11	59	T	人形・玩具	DD	1101	M	2	3.0	7.0	天神	淡黄		前後					
SU 01	III-11	60	T	人形・玩具	DQ	4003	M	-	6.3	5.5	鳩笛	7.5Y 6/6	2	上下					白、 茶、黒
SU 01	III-11	61	T	人形・玩具	DQ	1102	M	2.6	2.6	3.8	鯛乗恵 比寿	7.5YR 7/6		前後					
SU 01	III-11	62	T	人形・玩具	DQ	1104	M	1.9	-	2.6	寿老人	7.5YR							
SU 01	III-11	63	T	人形・玩具	DQ	1102	M	1.4	-	1.7	恵比寿	7.5YR							
SU 01	III-11	64	T	人形・玩具	DQ	1136	M	2.2	1.9	4.5	角兵衛 獅子	7.5YR 7/6		前後					
SU 01	III-11	65	T	人形・玩具	DQ	1122	M	5.9	3.4	-	大夫	5YR 6/6		前後					
SU 01	III-11	66	T	人形・玩具	DQ	1205	M	2.9	5.8	-	馬	5YR 6/6		左右					
SU 01	III-11	67	T	人形・玩具	DQ	1204	M	2.7	5.9	5.4	犬	5YR 6/6		左右					黒、赤、 白、 茶、赤
SU 01	III-11	68	T	人形・玩具	DQ	1206	M	-	-	5.4	狐	5YR 6/6		前後					
SU 01	III-11	69	T	人形・玩具	DD	1133	M	4.5	-	-	面持ち	2.5Y 8/3		前後		○			背面に二重亀甲の中に亀の絵 の刻印
SU 01	III-12	70	T	人形・玩具	DQ	3007	M	3.5	3.2	-	灯籠	5YR 6/6							
SU 01	III-12	71	T	人形・玩具	DQ	2003	W	6.4	2.2	3.0	鉢	5YR 6/6							
SU 01	III-12	72	T	人形・玩具	DQ	2010	W	4.9	2.6	2.2	鍋	5YR 6/6							
SU 01	III-12	73	T	人形・玩具	DQ	2008	W	6.0	3.6	1.5	器台	7.5YR							
SU 01	III-12	74	T	人形・玩具	DD	2013	M	2.1	-	1.2	蓋	浅黄緑 7.5YR							
SU 01	III-12	75	T	人形・玩具	DQ	2013	M	2.5	-	0.9	蓋	鈍い橙 7.5YR							○
SU 01	III-12	76	T	人形・玩具	DQ	2013	M	3.7	-	-	蓋	7.5YR							
SU 01	III-12	77	T	人形・玩具	DQ	2020	M	1.0	0.2	-	銭	7.5YR							
SK 06	III-16	15	T	人形・玩具	DD	2006	W	1.2	2.6	5.1	壺	淡黄	2.5Y 8/3						口縁部欠損、頸部に2条線

2 図 人形・玩具観察図

2. 胎質

胎質は磁器（磁質）：J、陶器（陶質）：T、土器（土師質）：D、瓦（瓦質）に分類した。

土師質とした資料の中には、軟質な胎土を有し無釉のもの、軟質な胎土を有し施釉されたものが存在する。『大辞林』によると土器とは「粘土を焼成して作った素焼きの容器」（三省堂1998）とある。『やきもの辞典』にも「素焼きをただけで、上釉が施されていないものの総称」（平凡社2000）とあり、釉薬をかけた陶器、磁器とは区別されている。各地の釉を施した資料の扱いをみると、京都公家町ではF区から出土した全体に黄釉が施された人形を「土製品」としているほか（（財）京都市埋蔵文化財研究所2004）、大阪城跡Xでは人形の胎質を「土師質で無釉のものを土師質、土師質で施釉のものを軟質施釉」（（財）大阪市文化財協会2009a）と分類しており、どちらも土師質として捉えている。江戸遺跡では一部“軟質陶器”とするところもあるが、大半が「施釉土器」としていることに對し、堀内氏は江戸遺跡の中で施釉土器という言葉が生まれた経緯から「陶器の系譜と理解するより日常生活品である土器の系譜で理解できる」としている（堀内2004）。大阪市の中央区島町では大量の素焼きのミニチュア皿と一緒に全く同型の施釉の資料が出土している例もあり（川村2012）、施釉は加飾の一つとしてとらえたい。

また、瓦質としたのは黒色または暗灰色を呈し非常に堅牢な焼成の資料である。表面が黒色もしくは灰褐色だが、内部は赤褐色を呈し焼成があまり資料に関しては、部分により色調が異なるものが多く、焦げや焼ムラのある製品との区別が困難なため土師質として扱っている。

3. 産地

江戸遺跡から出土する土師質の人形・玩具類は、橙色系と白色系の2種類に大別される。分布状況から橙色系は江戸在地、白色系は京都との認識が一般的であったが、生産遺跡の調査が行われていないなどの理由からこれまで産地不明の扱いとしてきた。しかし土師質の人形の生産地も、最近の調査で明らかになりつつある。2010年に行われた京都の法性寺跡の調査では伏見人形の窯跡が検出され、大量の伏見人形の型及び半製品が出土した（（財）京都市埋蔵文化財研究所2011）。出土した人形の型は、東大構内遺跡から出土した白色胎土の人形とほぼ同型と思われる資料が多く確認されている。大阪でも2008年に瓦屋町遺跡の調査が行われ、大量のミニチュア・人形の型、半製品、窯道具が出土しており、近辺に工房が存在した可能性は高いとされている（（財）大阪市文化財協会2009b）。江戸では瓦町等の地名の存在、浅草寺遺跡出土の在地産と推定される瓦の存在など、早くから窯業が行われていることが想定されている。隅田川沿岸でのやきもの生産として著名な今戸焼は、西鶴置土産の「土人形の細工する男をみれば・・・」を始めとし、川柳の「西行と五重塔をほしかため」、落語の「今戸の狐」等文献資料は多く存在している。今戸焼とならび文献にみられる江戸在地のやきものに入谷土器がある。2000年に行われた入谷遺跡の調査では18世紀第4四半期から19世紀第1四半期に比定される遺構から、桃褐色または黄褐色で褐色粒子を含む胎土を有する窯道具、半製品が大量に出土しており、入谷土器関連生産遺跡とされている。千駄ヶ谷五丁目遺跡で行われた胎土分析では橙色系胎土をもつ資料は江戸近郊で作られた可能性が高いとの結果もでている（千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会1997）。その他刻印からの製作者推定（中野高久1998、2011）、今戸焼職人からの聞き取り調査（江戸東京博物館1997）など種々の調査研究からも、江戸在地で人形・玩具が生産されていたことを否定することは難しい。生産遺構が確認されていない現段階での産地設定は早計であることは重々承知ではあるが、出土量、技法、器種の違いを明らかにするために、ここでは橙色、橙褐色、赤褐色の

胎土を有する一群を江戸在地系とし、産地コードを「Q：江戸在地系」と設定した。なお、白色、淡黄色、浅黄色の胎土を有する一群は京都系と思われるが、陶磁器分類と共通する産地コードを使用するため「D：京都・信楽系」としている。

一概に橙色系といっても、明るい橙色、鈍い橙色、褐色、赤褐色のものなど、単一ではない。京都系でも、白色、淡黄色、浅黄色など様々な色調がある上、ピンク系の赤色胎土を使用した製品もある。「江戸遺跡の報告では白色もしくは黄白色系の胎土が京都（伏見・深草）系、赤褐色系のものが在地系と記載されていることが多く、伏見・深草産の赤褐色胎土のものが混同されている例も多いと思われる」（能芝 2011）との指摘もある。特に人形出現初期の資料にはわかりにくいものが多く、単純に橙色系は江戸在地系と判断することは危険であることも意識しておきたい。

東大構内遺跡での産地別出土器種は以下の通りである。

JA（輸入陶磁）

IV a 期に比定された遺構で 1200 類（動物形）の瑠璃釉の鶴が確認されている。

JB（肥前系）

Ⅲb 期～Ⅸ期に比定される遺構で確認されている。人形と器物が出土している。人形は 1100 類（唐人）、1127（唐子）、1205（馬）、1216（鴛鴦）、1218（亀）、1215（鶏）また 1200（鳥）などがⅡ～Ⅳ a 期に比定された遺構で確認されている。1100 類（唐人）は灯心押さえと云われている、鉄釉掛分けのものでⅢ a 期で確認されている。他の遺跡では 1630 年～1640 年代で確認されている。1127 と 1205 は右右衛門様式の色絵のものでⅣ a 期の遺構で確認されている。器物では 2011（碗）、2002（皿）、2003（鉢）、2005（瓶）、2006（壺）、2013（蓋）がⅢ a 期～Ⅷ期に比定された遺構で確認されているが、特にⅣ a 期では染付け、白磁のものが多く確認されている。Ⅷ期では鎬、蓮弁文、桜花文を施した白磁碗が多く確認される。

JC（瀬戸美濃系）

大半がⅨ期の遺構で確認されている。人形では 1100（ひと形-学童・童子）が、器物では 2008（急須）や 2002（皿）が出土している。

TD（京都・信楽系）

1000（人形）と 2000（器物）が出土している。人形はⅣ a 期、Ⅴ a 期～Ⅷ c 期に比定された遺構で、1100（ひと形-人物）、1204（犬）、1202（獅子）が観察されている。主なものは銹絵染付け色絵、鉄釉と灰釉を施したものである。器物ではⅤ期～Ⅶ期、Ⅷ a 期～Ⅷ c 期に比定された遺構で 2001（碗）、2005（瓶）、2006（壺）、2009（土瓶）、2013（蓋）や 2000（香炉）等が確認されている。2001 類では口縁部が玉縁状の灰釉碗と白泥を流掛けしたものが最も多く、Ⅷ a 期～Ⅷ d 期で確認されている。2005 類は鉄釉や銅緑釉のものが確認されている。

TE（備前系）

Ⅳ a 期、Ⅳ b 期～Ⅴ期、Ⅶ期、Ⅷ a 期～Ⅷ c 期に比定された遺構で 2005（瓶）、2012（播鉢）が確認されている。2012 類ではⅣ a 期のものはⅦ期～Ⅷ b 期で確認されたものより口縁部径が小さく器高が高いものである。

DQ（江戸在地系）

Ⅲ b 期～Ⅸ期に比定される遺構で確認されている。1000 類（人形）、2000 類（器物）、3000 類（建造物）、4000 類（遊具）が出土している。

DD（京都系）

Ⅱ期～Ⅸ期に比定される遺構で確認されている。1000 類（人形）、2000 類（器物）、3000 類（建造物）、

4000類（遊具）が出土している。

4. 器種

一般的に人形・玩具の用途として、人形は信仰、愛玩、縁起、鑑賞、器物はままごと道具、建造物は盆景、箱庭道具が推定される。しかし蛙の人形を例にとると、置物として使われたと推定できる資料のほか、接合面が上下で中空・施釉、手足が水平についており、水に浮かべて遊んだと思われる浮き人形、小さく造作も荒く箱庭の背景の一部と解釈できるようなものなど、その用途は一律ではない。用途を推定するには形状、構造、法量に加え、絵画資料、民俗例などから総合的に判断する必要がある。また人形の持つ意味も複雑である。「人物像」でも天神像と脱衣の女性が行水する姿の行水人形では、人形の持つ意味も用途も全く異なる。上記の例を考慮し、ここでは形状から人形、器物、建造物、遊具の4種に分類した。

器種コードは4桁で表し、1000番台を人形、2000番台を器物、3000番台を建造物、4000番台を遊具とする。人形はさらに細分し、100番台をひと形、200番台は動物形、300番台をその他の人形とし、それぞれ出土例の多いものには個別の器種番号を付した。個別コードを持たない人物像は1100、動物像であれば1200とする。破片資料の場合、全体もしくは器種の特徴が伺えず、人形としか判別できないものは1000とした(3図)。

また人形の種類を表すには「モチーフ」という言葉がよく使われる。モチーフ(motif)とはフランス語で、広辞苑によると、“絵画・彫刻・小説などにおいて表現の動機となった中心思想”とある。狐の人形の中には両手を上に上げ拳遊びの狐を表すもの、台座に乗り尾が宝珠の形をした寺社の授与品の稲荷狐などさまざまな意匠がある。持ち物、衣装、ポーズは当時の風俗、地域、信仰をうつす重要な要素である。おなじ器種でも主題が異なるものは、器種名に加えその人形のテーマ、慣用名などをモチーフとして記す。

○器種

1000 人形

1100 ひと形

1101 天神	1102 恵比寿	1103 大黒	1104 福祿寿・寿老人	1105 布袋
1106 不動明王	1107 地藏菩薩	1108 狸々	1109 西行	1110 袴人形
1111 力士	1112 朝鮮通信使	1113 蹴鞠人形	1114 坊主人形	1115 虚無僧
1116 獵師	1117 猿曳き	1118 福助	1119 笛吹き	1120 若衆
1121 姉様	1122 太夫・花魁	1123 お多福	1124 三味線弾き	1125 裸婦
1126 おぼこ・禿	1127 唐子	1128 ぶら人形	1129 這子	1130 狎抱き童子
1131 亀乗り童子	1132 狎乗り童子	1133 面持ち童子	1134 金太郎	1135 桃持ち童子
1136 獅子舞	1137 鯛抱き童子			

1200 動物形

1201 狛犬	1202 獅子	1203 猿	1204 犬	1205 馬
1206 狐	1207 牛	1208 猫	1209 兎	1210 鼠
1211 狸	1212 虎	1213 象	1214 鳩	1215 鶏
1216 鴛鴦	1217 木菟	1218 亀	1219 蛙	1220 鯉
1221 鯛・鯛車	1222 金魚	1223 蟬		

1300 その他 (1100・1200以外)

1301 達磨	1302 首人形	1303 獅子頭	1304 面	1305 陽物
---------	----------	----------	--------	---------

2000 器物

2001 碗	2002 皿	2003 鉢	2004 銚子	2005 瓶
2006 壺	2007 片口鉢	2008 急須	2009 土瓶	2010 鍋
2011 釜・茶釜	2012 播鉢	2013 蓋	2014 七厘・焜炉	2015 石臼
2016 竈	2017 器台	2018 硯	2019 水滴	2020 銭貨
2021 五銚鈴	2022 袖でんぼ	2023 香炉・風炉		

3000 建造物

3001 祠	3002 塔	3003 城郭	3004 橋	3005 塀・袖垣・石段
3006 民家・庵	3007 灯籠	3008 鳥居	3009 御輿	3010 舟
3011 庭園・背景	3012 仕切り盤			

4000 遊具

4001 土鈴	4002 独楽	4003 笛	4004 基石状製品	4005 面模
4006 泥面子・芥子面	4007 土玉	4008 円盤状製品	4009 車輪状製品	

9000 不明

3 図 器種コード

1000 人形

1100 人形

1101 天神



衣冠束帯で冠（垂纓冠：すいえいかん）を被り笏をもち座る像で、胸に梅鉢紋の有無に関わらず本器種とした。また、衣冠束帯姿で堂内に座る像や狛犬を従えた像も本器種とした。

東大構内ではIVa期、VI期～VIII期の遺構で確認されているが、ピークはVIII期にみられる。IVa期の出土例は病棟SK3のもので同形が5点確認されている。像はDQ系のM2f型で無釉、硬質感があり、また後出するものと異なり、袂（たもと）が上方に跳ね上がっている（写：中央）。VI期～VII期ではDD系のM2f型で無釉の小形ものが確認されている（写：右2）。VIII期になるとM2e型で彩色、施釉されたDD系とDQ系のものがみられる。東大構内では出土していないがDD系のものに「亀」の刻印を有するものがある。尾張Ⅲの18C前葉～中葉の遺構からDD系特有の透明釉に緑釉を流し掛けしたM2e型の小形の像が出土している。人形の中で出土例の多い器種で、土製の他に銅製のものが新宿区圓應寺跡の18C中葉～後葉の79号墓で確認されている。

1102 恵比寿



風折烏帽子（かざおれえぼし）を被り、狩衣姿で左手に鯛をもち岩に腰掛けたものや立っている像、また鯛に跨っている像も本器種とした。

東大構内では17C後半、IVa期～V期、VII期、VIII期の遺構で確認されているが、VIII期が最も多い。17C後半の小石川SK27ではDQ系のM2f型で無釉のものが確認され、IVa期の病棟SK3では、DD系のM2f型でDD系特有の透明釉に緑釉を流しかけたものが確認されている（写：右）。VII期の工14SK330では、DD系、DQ系のM2f型で無釉の小形のものが出土している。VIII期の家畜SK02ではDQ系のM2f型とM2e型、M1f型の三タイプが確認されている。大黒とならび出土例の多い器種である。

1103 大黒



焙烙頭巾を被り右手に打出の小槌、左肩に福袋を担ぎ米俵の上に立つ像を本器種とした。

東大構内ではIVa期、17C末、VI期、VIIIa～VIIIc期で確認されているが、VIIIc期が最も多い。IVa期の病棟SK3では、DQ系のM2f型で無釉、器壁は薄く、硬質感のあるものが確認されている（写：右）。17C末の外來SU2ではDD系のM2f型で透明釉に緑釉を流しかけたものが確認されている（写：中央）。VIIIc期の工14SU2では、M2e型で彩色、施釉されたDQ系のものが確認されている。DD系のものはIVa期、17C末に確認されたのみである。恵比寿とならび出土例の多い器種である。

1104 福祿寿・寿老人



長頭、長い髭、道士の服装で経巻や杖などをもったものや鹿に乗った像を本器種とした。寿老人と福祿寿は同一神とした。

東大構内ではIVb～V期、VII期、VIIIc期で確認されているが、出土量は少ない。IVb～V期の病棟SK3310では、DD系のM2f型で透明釉に緑釉を流しかけたものが確認されている（写：右）。VII期の工14SK330では、M2e型が確認されている（写：中央）。DQ系は19C前葉の御殿50号からM2e型で無釉のものが出土したのみである。DQ系のものはDD系に比べ出土量は少ない。他の遺跡では、主に18C後半～19C中葉にかけて出土している。

1105 布袋



坊主頭に福耳、大きなお腹を出し、右手に軍配を持ち座る像と立像を本器種とした。

東大構内ではVIIIa～VIIIb期で確認されている。VIIIa～VIIIb期の工14SK101では、DQ系のM2e型で無釉のものが確認されている。19C前葉の外來SU11では、TD系でM2e型のものが確認されている。渋谷区千五の1730年代～1740年代の0419号遺構からはDD系のM2?タイプで彩色、無釉のものが出土している。

1106 不動明王



右手に三鈷剣、左手には羂索（けんじゃく＝縄）をもち背には迦楼羅炎（かろらえん）形の炎を背負っている像を本器種とした。

東大構内からの出土例はなく、図示したものは千代田区一橋の17C後半～18C初頭のⅢa層から出土したものである。不動明王と光背の火炎部は型成形で鉄釉を施している。M2f型で器壁が薄く硬質感あり、背面は無釉で銀粉の付着が見られるとある。

1107 地藏菩薩



僧侶の姿で装身具の瓔珞(ようらく=ネックレス)を付けたもの、右手に錫杖、左手に如意宝珠をもつ像、若しくは右手を印相(与願印)にしている像を本器種とした。

東大構内からの出土例はなく、図示したものは千代田区武蔵岡部藩の 17C 末～18C 初頭の 137 号から出土したものである。DQ 系の M2f 型で無釉のものである。渋谷区千五の 1680 年代の 0079 号からは DD 系の M2f 型で施釉(鉛釉)されたものが出土している。また、底部に「心成」と刻印のあるものが本郷追分の 18C 後半～19C 代の 23 号地下式坑と文京区日影町Ⅱの 18C 末～19C 初頭の 40 号地下室から出土している。いずれも DQ 系 M2f 型である。

1108 狸々



長い髪で着物と袴を着けて酒甕の脇に立っている像と酒甕の上の像を本器種とした。

東大構内ではⅣa 期の病棟 SK3 で確認されたのみで、DQ 系の M2f 型で無釉、硬質感のあるものである。Ⅲa 期の病棟 SP883 で確認されたものは、M2o 型で首部は別作り、器壁は厚く浮彫りは前面のみである。また、Ⅲb 期の病棟 SE326 からは、RZ 系で僧衣全面に布目のある特殊な作りのものが出土している(写:左)。DQ 系の多くは M2o 型であるが、18C 前葉の工 14SK245 から京都で多くみられる Hf 型のものが出土している。M2o 型はⅢa～Ⅴa 期、M2f 型、M2e 型はⅣa 期～Ⅴ期にかけ出土している。DD 系をみると、下限がⅤ期の病棟 SK3310 から Ho 型で透明釉を施し緑釉や鉄釉で装飾したものが、またⅧc 期の家畜 SU02 からは Ho 型で彩色、施釉したものが出土している(写:右二目下段)。本器種は人形の中で最も古い時期から出現し連続と続き出土し、出土例の多い器種である。

1109 西行



風呂敷包みを背負い笠を手にしたもの笠を被った僧形の像を本器種とした。

東大構内ではⅢa 期～Ⅷ期で確認されているが、Ⅳa 期～Ⅴa 期にかけ多く出土している。Ⅲa 期の病棟 SP883 で確認されたものは、M2o 型で首部は別作り、器壁は厚く浮彫りは前面のみである。また、Ⅲb 期の病棟 SE326 からは、RZ 系で僧衣全面に布目のある特殊な作りのものが出土している(写:左)。DQ 系の多くは M2o 型であるが、18C 前葉の工 14SK245 から京都で多くみられる Hf 型のものが出土している。M2o 型はⅢa～Ⅴa 期、M2f 型、M2e 型はⅣa 期～Ⅴ期にかけ出土している。DD 系をみると、下限がⅤ期の病棟 SK3310 から Ho 型で透明釉を施し緑釉や鉄釉で装飾したものが、またⅧc 期の家畜 SU02 からは Ho 型で彩色、施釉したものが出土している(写:右二目下段)。本器種は人形の中で最も古い時期から出現し連続と続き出土し、出土例の多い器種である。

1110 袴人形



袴を着け座る像を本器種とした。若衆鬻で面長のものと坊主頭で丸顔のものがある(写:右)。すべて DQ 系である。坊主頭は姉様と対になり袴雛とも呼称されている。

東大構内では、Ⅲb 期、Ⅳb 期～Ⅶ期で確認されている。確認されたものは M2f 型で袂(たもと)の広がり狭く、袴や袴等の整形は細部にわたり丁寧で、硬質感があるものである。Ⅲb 期の御殿 276 号から出土した台座に座る像が最も古い(写:左)。いずれも頭部が欠損しているため不明であるが、他の遺跡の資料から若衆鬻と思われる。東大構内の坊主頭の資料は、農 7SU14(年代不明)と 18C 代と比定された工 14SK51 から M2e 型のものが出土している。文京区真砂第 2 の 18C 前葉～中葉の 31 号から M2e 型の若衆鬻の像が出土している。坊主頭のもを他の遺跡でみると多くは、18C 中葉～19C 中葉にかけて出土している。

1111 力士



二人の力士が組み合っている像(組相撲)と化粧廻しを着けた像、大きなお腹で着物を着た像(着物力士)を本器種とした。

東大構内ではⅣa 期、Ⅵb～Ⅷc 期で確認されている。Ⅳa 期の病棟 SK3 から M2f 型の台付きの組相撲が出土している。二次的に被熱している為胎土は不明である。Ⅵb～Ⅶ期の工 14SU382 からは、DD 系の Hf 型で施釉した組相撲が、Ⅷc 期の家畜 SU2 からは DQ 系で同様のものが出土している。19C 前葉の御殿 49 号からは DD 系で M2e 型の刀を差した大きな着物力士が出土している(写:左)。DQ 系ではⅧa～Ⅷb 期の工 14SK101 から組相撲(写:右下)、同地点のⅧc 期の SU2 から全身を赤く塗った小さな力士が出土している(写:右上)。

1112 朝鮮通信使



陣笠(朝鮮用)を被り小脇に小太鼓を抱え叩いている像を本器種とした。

東大構内ではⅤa 期、18C 後半～19C 代で確認されているが、いずれも DQ 系の M2f 型で無釉である。同形のもが千代田区都立一橋の 17C 後半～18C 初頭のⅢ層から出土している。

1113 蹴鞠人形



立烏帽子に狩衣、蹴鞠用の鞠を掲げたものと、蹴り上げている像を本器種とした。

東大構内ではIVa期の病棟SK3で確認されているのみである。DQ系のM2f型で無釉の扁平感のある像である。渋谷区千五の1780～1802年に比定された0834号からDD系のM2f型で（鞠と杵は別作り）、透明釉と緑釉で装飾したものが出土している。

1114 坊主人形



坊主頭で法被（はっぴ）を着て、片足を投げ出して座る像を本器種とした。

東大構内ではIIIb期、Va期で確認されされている。精製度の高い胎土のDD系のもので特殊な作り方をした、He型タイプのものである。胴部は円柱状に丸め10mm程の穿孔を中央に穿ち、別作りの手や足、衣を貼付け、細かな部分は篋で調整している。首部は型作りで差込み方式である。頭部に墨、袖口には朱色の彩色痕が確認出来るものもある。IIIb期の病棟SK557（写：右）やVa期中診F33-3から出土している。同様の成形のものが幕末の遺構から出土しているが、IIIb期やVa期から出土したものに比べると胎土の精製度は低く、胴部が長く肩から背中にかけての丸みが少なく、袴を着けているものである（写：左）。他の遺跡では写真右と同様のものは、17C末～18C中葉にかけ出土している。

1115 虚無僧



天蓋を被り袈裟と三衣袋（さんえぶくろ）を身に着け、尺八を吹いている像を本器種とした。天蓋を被り顔が見えないタイプ（写：左）と童子顔が見えるタイプ（写：右）がある。

東大構内ではIVb期～VII期、VII期～VIIIc期で確認されている。下限がVII期の遺構からはDQ系とDD系のM2f型で顔が見えない小形のタイプが出土している。VIIIc期からはDD系のM2e型で童子顔が見えるタイプのものが確認されている。京都市法性寺の幕末から明治の廃棄土坑から出土した型の中に、VIIIc期から出土したものと同形の型が出土している。新宿区尾張Vの18C中葉の40-4Y-3からM2e型で顔の見えないタイプが出土している。17C末～18C中葉頃までは顔の見えないタイプが主で、19C前葉から童子顔が見えるタイプが多く確認されるようになる。

1116 獵師



ほそく頭巾に脚絆を着け、左膝を立て獵銃を構えている像を本器種とした。

東大構内ではVIIIa～VIIIb期、19前葉～19C中葉で確認されている。19C前～19C中葉の工14SK140からは、DQ系のM2o型で器壁が厚く硬質感があり右手部分に径8mmの孔を有するものが出土している（写：右）。VIIIa～VIIIb期の工14SK101からは、DQ系でM2e型の彩色施釉された像が（写：左）、相伴資料に同様の装飾を施した両手を挙げた狐が出土している。SK101から出土した本器種は狐拳遊びの人形とおもわれる。台東区御徒町三の下限が18C中葉の1号木樋からDQ系でM2o型ものが出土しており、背面には方喰紋と裾には忠臣蔵の羽織にある鋸齒紋が表現されていたもので、おそらく仮名手本忠臣蔵に登場する早野勘平をモチーフとしたものと思われる。

1117 猿曳き



猿を肩に乗せた旅姿の像を本器種とした。

19C前葉（or 下限1703年）の工14SK335で確認されたのみである。本例はDD系のM2f型で全体に朱色の彩色痕が確認されている。他の遺跡をみると、文京区日影町IIの18C後葉～19C前葉に比定された36号、渋谷区千五の1830～1878年代に比定された0395号からDD系のHf型で無釉のものが出土している。いずれもDD系で19C代出土のものである。

1118 福助



頭額が大きく、福耳で袈を着け正座をする像を本器種とした。

東大構内ではVIIIc期、VIIId期、19C～近代で確認されている。VIIIc期の家畜SU02から出土したものは、DQ系でM2e型であるが底部の調整は他のものと異なり浅く凹ませ際をヘラで調整している（写：左）。VIIId期の工14SK295からはDD系でM2e型が出土している。（写：右）。DQ系、DD系とも無釉である。出土例の多い器種で算盤や扇をもつものもある。

1119 笛吹



右手を口にあて膝を屈めた像を本器種とした。穿孔された口を僅かに突き出し何か吹いている動作をしている。笛吹きとしてあるが便宜的につけた器種名である。

東大構内では 18C 後～ 19C 前葉で確認されている。DQ 系の M2e 型で工 14SK337 から出土したものである。モチーフは明らかでないが出土例の多い器種である。

1120 若衆



武家若衆髷に振り袖、袴、袴をつけた像を本器種とした。

東大構内ではⅧa 期～Ⅷd 期の工 14SK292 で確認されているのみである。DQ 系の M2e 型で、全体に赤色の塗彩痕が観察される。

1121 姉様



鳥田髷を結び、振袖にだらり結び帯を締め座る像を本器種とした。袴人形と対になり袴雛ともいわれている。

東大構内ではⅧb 期、Ⅷa～Ⅷb 期で確認されている。Ⅷb 期は設備 AD35-2 から出土した M2f 型と外来 SK137 から出土した M2e 型で、頭部が挿し首式のものである (写: 左)。前記した M2f 型や M2e 型で挿し首式のものは後出する資料にはみられない。Ⅷa 期～Ⅷb 期の工 14SU381 からは M2e 型が出土している。興味ある資料に千代田区溜池の 17C 末～ 18C 第 2 四半期 B-62 から底部が径 2cm 程穿孔されたものが出土している。港区牧野家墓所の八代藩主忠寛、明和 3 (1766) 年没の墓から本器種と袴人形が複数出土している。18C 中葉～ 19C 前葉の遺構からの出土例が多い器種である。確認された本器種はすべて DQ 系である。

1122 太夫・花魁



鳥田髷を結び小袖にだらり結びの帯また、襦袢 (うちかけ) 姿で袂 (つま) を取り立つ像や前帯 (結び目が前) で、袂を取り立つ像を本器種とした。

東大構内では 19C 前葉～中葉の小石川 SK25 で確認されたのみである。像は M2f 型で彩色施釉された小形のものである。文京区本郷追分の 18C 後半～ 19C 初頭の 1 号大型土坑から、前帯で髪に笄を挿した像、襦袢姿の像が出土している (写真)。尾張Ⅲの 18C 前～ 18C 中葉に比定された遺構から襦袢姿の像が出土している。また、茨城県鹿島町内 No67 の 18C 中葉に近い前葉に比定された幼児の墓 (二基) から 5 点出土している。いずれも DQ 系で M2e 型である。

1123 お多福



頭額が大きく、頬が膨れ鳥田髷を結び羽織を着て座る像と、角隠しをしたものを本器種とした。

東大構内ではⅧc 期で確認されている。工 14 の SU2 で確認されたものは、DQ 系で M2e 型で、底部は浅く凹ませ際をへらで調整している。前記した家畜 SK2 で出土した福助と同様の底部調整である。19C 代前葉～ 19C 中葉の遺構からの出土例が多い器種である。

1124 三味線弾き



三味線を弾き座る像を本器種とした。着物姿と小袖に袴を着けたものがある。

東大構内ではⅧa～Ⅷd 期で確認されている。Ⅷa～Ⅷd 期の工 14SU292 からは、DQ 系で Hf 型の粗い作りのものと、Ⅷd 期の工 14SK295 上からは M2f 型で彩色施釉された小形のもので出土している (写: 中央)。また、下限が 19C 中葉の工 14SK398 からは、DD 系で二重亀甲形の中に「亀」の刻印が付いたものが出土している (写: 右)。18C 後半に比定された文京区本郷追分 23 号からは、DQ 系の M2e 型のもので出土している (写: 左)。渋谷区千五の 1860 年～ 1878 年代に比定された No.0841 からは、「楽正」と刻印が付いた DQ 系で M2e 型の施釉されたものが出土している。

1125 裸婦



性の表現がある裸の婦人像を本器種とした。
 東大構内ではⅥ～Ⅷd期で確認されている。下限がⅦ期の工 14SU18 から Hf 型でリアルな性表現のある像が出土している (写: 右)。Ⅷa 期の給水 AJ35-1 からは Hf 型で、お腹が膨らみ手足を広げた像が出土している (写: 左)。19C 前～19C 中葉の工 14SU378 から M2e 型で片膝を立て手拭いを持ち身体を洗う仕草の像が出土している。すべて DQ 系である。写真左の像と同様のものが、18C 後半に比定された文京区本郷追分3号土坑から出土している。

1126 おぼこ・禿



肩まで切り揃えたおかっぱ髪で振袖にだらりの帯や立矢結び帯姿の女子を本器種とした。おぼこと禿の判断が不確かなため同器種としておく。
 東大構内ではⅧd期の工 14SU392 で確認されている。DQ 系の M2e 型である。像は振袖に立矢結びの帯、髪はおかっぱ風のものであった。図示した資料は千代田区武蔵岡部藩の 18C 末～19C 前葉に比定された 005 号から出土しもので DQ 系の M2e 型の像である。

1127 唐子



髪型は唐子頭で朝鮮通信使の楽士の衣裳を着けた像を本器種とした。
 東大構内ではⅣb～Ⅷd期で確認されている。すべて DQ 系で M2e 型のものである。Ⅳb～Ⅶ期の工 14SU63 からは、右手を振り上げ太鼓を打つ仕草の像が確認されている。新宿区尾張Ⅲの 18C 中葉に比定された遺構から工 14SU63 の像と同形のもので出土している。Ⅵ期～Ⅶ期の工 14 SU18 からは片膝を付き座る像が (写: 左)、また、同地点Ⅷa 期～Ⅷd 期の SK292 からは彩色、施釉されたものが出土している (写: 右)。Ⅵ期に比定された農総 SK01 からは TD 系の M2e 型の象に乗った唐子が出土している。

1128 ぶら人形



短い腕と足を広げお腹が膨らんだ童子像を本器種とした。本来は短い手足に布若しくは紙で Hf 型の手足を繋いだものとおもわれる。墓の調査事例では本器種の手足が確認されている。
 東大構内ではⅥ～Ⅷd期で確認されているが、Ⅷa～Ⅷd 期が最も多い。Ⅷa～Ⅷb 期の工 14SK101 からは複数出土している。DQ 系の M2e 型のもので江戸のみで出土する人形である。多種多様な人形が出土するなか、江戸遺跡で最も多く出土している器種である。墓に副葬されている事例も多い。日影Ⅱの第 20 号遺構から目、眉、鼻、口、髪を描いた良好の資料が出土している。

1129 這子



幼児が腹這いになっている像を本器種とした。
 東大構内ではⅧ期の給水 AJ34-2 で確認されているのみで、像は DQ 系の M2f 型である。出土事例の少ない器種である。豊島区巣鴨や渋谷区千五の明治期の遺構から JC 系のものが出土している。

1130 狎抱き童子



着物を着た童子が狎(犬)を抱いている像を本器種とした。
 東大構内では、Ⅷa 期～Ⅷd 期で確認されているが、すべて DD 系の M2e 型で鉄釉で目や口、斑を描き部分的に緑釉で彩色し透明釉を施したものである。中空とあるが空間は狭く中実と報告されている例もある。嘗人形(なめにんぎょう)と云われている人形である。江戸遺跡で出土例の多い器種である。新宿区尾張Ⅵの 18C 前葉～18C 中葉に比定された遺構から TD 系で M2e 型の、狎を抱いて座る童子の像が出土している。

1131 亀乗り童子



亀の上に腹ばいになった童子が乗っている像を本器種とした。
東大構内ではⅧb期、Ⅷc期で確認されている。M2e型（上下合わせ）で器壁が非常に薄い作りである。江戸遺跡で出土する大半がDD系である。Ⅷb期中のH21-2からは、胎土の色調がピンク系の赤色を呈したものが出土している（写：左）。Ⅷc期の工 14SU2（から出土した本器種の亀の腹部には、亀甲形の中に象形文字風の「亀」の刻印が付されていた（写：右）。

1132 狎乗り童子



片袖を脱いだ童子が狎（犬）に乗っている像を本器種とした。
東大構内ではⅧa期～Ⅷb期で確認されている。DD系のM2e型で彩色、施釉されたものである。中空であるが空間は狭い。Ⅷa～Ⅷb期の工 14SK101、19C前葉のSK301から出土している。

1133 面持ち童子



獅子や猿、狐などの面を持っている坊主頭の立像と、烏帽子を被っている像の二種を本器種とした。
東大構内ではⅣb期～Ⅶ期、19C初頭～近代で確認されている。Ⅳb～Ⅶ期の工 14SU63からは、DQ系でM2f型の獅子頭を持った立像（写：左）、また、19C初頭の教育SK81からはDQ系でM2e型の烏帽子姿で狐面を持ち座る像が出土している。19C初頭～近代の工 14SK200からは、DD系でM2e型で背面に「亀」の刻印が付いた像が出土している（写：右）。千代田区溜池の1710～1720年代廃棄土坑B-118からはDQ系でM2e型の烏帽子を被った像が出土している。確認された本器種のDD系は坊主頭で、DQ系は烏帽子を被ったものである。

1134 金太郎



熊の背に童子が乗っている像を本器種とした。
東大構内ではⅧc期の家畜SU2で確認されているのみである。胎土は黒褐色を呈したDZ系でM2e型のものである。他の遺跡をみると、文京区駒込鯉縄手の19C中葉の7号土坑から家畜SU2で出土のものと同様のものが、また、新宿区新宿六丁目の19C後葉の170遺構からDQ系のM2f型で一部を緑釉で装飾したものが出土している。

1135 桃持ち童子



頭巾を被り片膝をたて桃をもった童子の像を本器種とした。
東大構内では18C末～19C初頭、下限がⅧd期で確認されている。工 14SU189（写真）と、同地点のSK3から出土したもので、いずれもDQ系のM2e型である。新宿区尾張XⅡの19C前葉～中葉に比定された遺構から同形のものが出土している。多くは東大編年のⅧ期にあたる時期にみられ、出土例の多い器種である。

1136 獅子舞



鉦（しころ：獅子に付いている布）のついた獅子頭を頭上に置く、また被るなどしたものを本器種とした。
東大構内ではⅧc期、19C前葉で確認されている。Ⅷc期は樹木園SU01から出土したもので、DQ系でM2e型の全身を赤く塗彩した像である（写真）。19C前葉は御殿49号からは、DD系でM2e型、獅子頭の鉦から顔を覗かせている像が出土している。他の遺跡でも19C前葉～中葉で多くみられる器種である。

1137 鯛抱き童子



大きな鯛を抱えた童子を本器種とした。
東大構内では DD 系、M2e 型の像が病棟遺構外で確認されているのみである。他の遺跡をみると、新宿区正見寺の 18C 後葉に比定された 263 号墓、また群馬県八ツ場ダム下田の天明 3 (1783) 年の浅間山の噴火により埋没した 1・2 号畑から姉様や唐子等と共に出土している。出土例の多い器種で大半が DD 系で M2e 型である。

1200 動植物

1201 狛犬



前肢を揃え伸ばして座る像を本器種とした。像は台座があるものとないものがある。

東大構内では 17C 末～18C 前葉、18C 後葉～19C 中葉で確認されている。17C 末～18C 前葉の中診 E29-1 からは台座に座る阿形の像で無釉のものである(写:右)。18C 後葉の工 14SK99 からは台座がないタイプで透明釉に緑釉を流し掛したものが出土している(写:左)。また、19C 前葉～中葉の工 14SK140 からは台座がないタイプで眉目は焦茶の顔料で描き施釉したものが出土している。東大構内から出土した本器種はすべて DD 系の M2f 型である。新宿区尾張区 18C 後葉～19C 中葉に比定された 171-2F-1 からは DQ 系の M2e 型で、台座に「楽正」の刻印が付された像が出土している。

1202 獅子



狛犬に似た像で後ろ足を跳ね上げた姿勢をした像を本器種とした。

東大構内では VIb 期～VIII 期の工 14SK3 で確認されている。獅子は TD 系の像である。体部は M2e 型で、頭部、耳、鬣(たてがみ)は別作りで貼付している。口は阿形に開口、目、鼻、耳は穿孔し表現している。おそらく置物として創られたものと思われる。土製では M2e 型のものが豊島区巣鴨の 18C 中葉～19C 中葉の C-3 区 637 号から出土している。

1203 猿



猿を模した像を本器種とした。馬や亀、舟に乗った猿なども本器種とした。

東大構内では IVa 期～VIII 期で確認されている。顔は M2f 型で身体は Hf 型が大半である。IVa 期中診 F34-11 からは DQ 系で Hf 型と M2f 型の施釉されたものが出土している(写:右 2)。同時期の病棟 SK3 からは M2f 型で透明釉を施した DD 系の言わ猿が出土している。17C 末～18C 前葉の工 14SK415 からは Hf 型で無釉の船乗り猿、VIa 期では挿鉢を持った猿、VII 期の設備 AE39-1 からは透明釉と緑釉を施した親子猿、18C 末～19C 初頭の遺構から M2e 型の特猿が出土している。遺構外であるが磁器製のものが確認されている。動物の中で最もモチーフが多種で出土例が多く、連綿と続き出土する器種である。

1204 犬



犬を模した像を本器種とした。猿に次いで多く出土する器種である。土製と陶器製がある。

東大構内では IVa 期、17C 末、VI 期、18C 後葉～19C 中葉で確認されている。IVa 期の病棟 SK3 からは M2f 型で薄手で硬質感があるものが、また 17C 末の樹木園 SU83 からは Hf 型で単純な作りのものが出土している。いずれも DQ 系である。その後 VI 期まで確認されず、VI 期の病棟 SK593 から DD 系の M2e 型の上手のものが出土している(写:右)。同、DD 系では 19C 前葉の御殿 49 号から、京都法性寺から出土した型と同形のものが出土している。DQ 系のものは 18C 後葉～19 中葉にかけ多くみられるようになる。材質の異なるものでは TD 系の Hf 型は 17C 後葉(写:右 2)、M2e 型は Vb 期、18C 後葉、VIIIc 期で確認されている。

1205 馬



馬を模した像を本器種とした。本器種には房飾りのある飾馬と鞍のみの鞍馬がある。

東大構内では IVa～IVb 期、VII 期～VIII 期で確認されているが、ピークは VIIIa～VIII 期にみられる。IVa 期の病棟 SK3 からは DD 系で M2f 型、キラが多く硬質感のある鞍馬が出土(写:右)、同遺構からは JB 系の色絵の飾馬が出土している。IVb 期の家畜 SK9 からは DQ 系で Hf 型のものが出土している(写:左)。VII 期の工 14SK330 からは M2f 型の DD 系の飾馬が出土している。VIIIa～VIII 期になると亀甲形の中に「番」に似た文字の刻印がついた飾馬や、出土例の多い台付きの鞍馬(写:中央)が出土する。いずれも DQ 系の M2e 型で無釉のものである。

1206 狐



狐を模した像を本器種とした。稲荷狐をはじめ狐拳、振袖狐、袴狐など擬人化されたものがあり、比較的多く出土している器種である。

東大構内ではⅥ期～Ⅶ期、Ⅶa～Ⅶc期で確認されているが、Ⅶa～Ⅶc期にピークがみられる。Ⅶc期の家畜SU2からはM2o型の稲荷狐が複数出土(写:左)、また同遺構からDD系の小型の稲荷狐も出土している(写:中)。19C前葉の御殿49号からDD系の彩色施釉されたM2f型の小さな狐が出土している。Ⅶa～Ⅶb期の工14SK101から両手を挙げた狐拳の狐が出土している(写:右)。最も古いものは、丸の内三丁目の元禄11(1698)年以前の26号溝から出土したM2f型で器壁が薄く銀彩のあるものである。

1207 牛



牛を模した像を本器種とした。臥牛と立牛があるが臥牛が多い。

東大構内ではⅦc期、Ⅶd期、19C前葉～19C中葉、近代で確認されている。出土する時期幅が少ない像である。Ⅶc期の工14SU2からはM2e型の立牛が(写:右2)、同地点のⅦd期のSU396からM1o型の紅牛と謂われているものが出土している(写:左2)。いずれもDQ系のものである。18C後半～19Cの病棟ST3320からはDD系でM2f型のものが出土している(写:右)。19C前葉の工14SK338からはM1o型のDZ系(黒褐色の胎土)で、眉間に大黒様と宝珠がついたものが出土している(写:左)。また同地点の近代遺構のSK480からもSK338と同様のものが出土している。臥牛は全てM1o型である。

1208 猫



猫を模した像を本器種とした。

東大構内では18C後葉、Ⅶa～Ⅶd期の遺構で確認されている。出土した多くはDQ系のM2e型のもので、横向きに坐り顔を正面に向けたものである。19C前葉～中葉の工14SK378から背に白色と薄い緑で梅花文様を描き施釉したものが出土している(写:右・中央)。DD系のものは18C後～19C初頭の工14SK381から、M2f型で無釉の蹲るタイプの小形のものが出土している(写:右2)。中診の遺構外から招き猫の一部が出土している。招き猫には「丸メ」、「本丸メ」の刻印が付いたものがあり、新宿区水野原からは「丸メ」、文京区千駄木三北からは「本丸メ」が出土している。

1209 兎



兎を模した像を本器種とした。

東大構内では19C前葉～中葉、近代で確認されている。すべてM2e型のDQ系の像である。Ⅶd期の工14SU392からは耳を立て座る像(写:中央)と同地点の19C前葉のSK258からは丸く蹲り、耳と尾の部分を穿孔した像が出土している(写:左)。また近代遺構からは羽織を着け杵を持ち座る像が出土している(写:右)。

1210 鼠



鼠を模した像で榎などに乗っているものも本器種とした。

東大構内ではⅦb～Ⅶc期の遺構で確認されている。出土例は少ないが土製と磁器製のものが出土している。山上会館(年代不明)からHf型のJZ系のものが出土している。また同地点の39号遺構からはM2e型で彩色されたDD系のものが出土している。Ⅶb～Ⅶc期の工14SK188からはM2e型のDQ系で尾部に穿孔を有するものが出土している。また、同地点のⅦc期のSU2からは彩色、施釉された榎乗ったものが出土している。

1211 狸



狸を模した像を本器種とした。

東大構内では19C中葉の工14SK22で確認されているが1点のみの出土である。DQ系のM2e型で、背中全体を赤茶色に彩色されているものである。現在も東京神田須田町にある柳森神社の授与品とされている親子狸と同様のものがあるが、出土例はみな小型のものである。新宿区弘方町の廃棄年代が19C中葉の762号から同様のものが出土している。

1212 虎



虎を模した像を本器種とした。
東大構内遺跡からは出土はしていない。新宿区払方町の廃棄年代が19C 中葉の762号からM2f型の器壁が薄い虎の像が出土している。報告書に「竹に獅子」とあるが「竹に虎」と思われ、和藤内（わとうない=加藤清正）の虎退治を表現したものと思われる。

1213 象



象を模した像を本器種とした。
東大構内では19C 前葉～19C 中葉の工14SK140で確認されているのみである。資料はDQ系のHf型で無袖、耳、鼻、尾は別作り貼付け、口は工具で切れ込みを入れ表現している。共伴資料にゾウの面模がある。

1214 鳩



鳩を模した像を本器種とした。
東大構内ではIVa期、18C 後葉～19C 初頭で確認されている。IVa期中診F34-11で確認されたものは、DQ系でM2e型（空間部分狭い）、丁寧なナデ磨き整形された重量感のあるもので、振ると音が鳴るものである（写：右）。18C 後葉～19C 初頭の工14SU381からは、DQ系、M2e型のものが出土している。東大構内ではIVa期以降18C 後葉まで出土していない。他の遺跡をみると日影IIの19C 初頭～19C 中葉の20号地下室から工14SU381と同様のものが出土している。

1215 鶏



鶏を模した像を本器種とした。
東大構内では17C 末、18C 後葉、19C 前葉で確認されている。17C 末の教育SK18からはJB系の色絵磁器の鶏が出土している。18C 後葉の外來SK168からは、M2e型で左胴部に大きな穿孔のあるものが、またVIII期の給水AJ-34-1からはM2e型、底部に穿孔のあるものが出土している。いずれもDQ系のものである。19C 前葉の家畜SU2からは黒褐色のHf型のものが出土している（写：左）。土製のM2e型ものは大半に大きな穿孔がみられる。本器種は磁器製は17C 末にみられるが、土製のものは18C 後葉以降確認されることが多い。

1216 鴛鴦（おしどり）



鴛鴦（おしどり）を模した像を本器種とした。
東大構内ではV期、VIIa期～VIIId期で確認されている。V期の病棟SK3715からは、JB系でM2e型の色絵磁器が出土している。VIIc期の工14SU2からは、DD系M2e型で白、朱、黒色の彩色痕のあるものが出土している（写：左）。同地点のVIIa～VIIId期のSK293からは、DQ系でM2e型（上下合わせ）、彩色施釉された丸みのある浮き人形と謂われている像が出土している（写：右）。

1217 木菟（みみずく）



木菟（みみずく）を模した像を本器種とした。
東大構内ではIVa期で確認されているのみである。資料は病棟SK3から出土したもので、胎土はピンク系の淡赤色を呈したHf型のものである。他の遺跡をみると新宿区尾張IXの18C 末～19C 初頭の124-2K-1からDQ系のM2e型のものが出土している。また、文京区日影IIの18C 中葉～18C 後葉の30号地下室からはM2f型で透明釉に緑釉を流しかけたDD系のものが出土している。新宿区發昌寺の19C 前葉～中葉の幼児の墓15号墓からはM2o型と思われる陶器製の像が出土している。但し、陶器の木菟の製作年代は17C 後半～18C 前半とある。

1218 亀



亀を模した像を本器種とした。出土例が多い器種である。東大構内では 17C 末～18C、19C 初頭、ⅧC 期で確認されているが、19C 前葉にピークがみられる。17C 末～18C 初頭の教育 SU84 から DQ 系の M2e 型の透明釉が施されたものが出土している。また同地点の 19C 初頭の SK81 からは M1f 型で足は別作りで貼付けているのものが出土している。同時期で同成形ものが工 1SK1 から出土している（写：左）。また、同時期の工 14SU2 からは M2e 型で彩色施釉された、尾がついた養亀タイプのものが出土している（写：右）。いずれも DQ 系である。ⅧC 期の家畜 SU2 からは甲羅に緑釉を施した DD 系で M2e 型のものが出土している（写：中央）。

1219 蛙



蛙を模した像を本器種とした。東大構内では Vb 期、Ⅶ期、19C 前葉～19C 中葉で確認されているが、19C 前葉～19C 中葉にピークがみられる。Vb 期の外来 SK137 からは M2e 型で無釉、器壁が厚く中空部の広い DD 系ものが出土している。DD 系では Hf 型で上部のみ緑釉を施した単純な作りのものが 18C 中葉と 19C 前葉から出土している（写：中央）。Ⅶ期の工 14SK330 からは Hf 型で鉄釉や緑釉、胡粉を使い全体を装飾した特異なものが出土している（写：左）。また、同地点の 19C 前～19C 中葉の SK319 からは彩色、施釉された浮人形が出土している（写：右）。いずれも DQ 系である。

1220 鯉



鯉を模した像を本器種とした。東大構内では IVa 期、Ⅷb 期～Ⅷd 期で確認されている。IVa 期の病棟 SK3 からは JB 系の M2e 型ものが出土している。Ⅷc 期の工 14SU396 からは DD 系の M2e 型で、下地の白色のほか朱色、黒色痕のあるものが出土している。また、同地点の SU295 上からは DD 系の M2e 型で、朱色の彩色痕のある土鈴状になったものが出土している（写真）。土製品のピークはⅧb 期～Ⅷd 期にみられ、大半は DD 系の M2e 型である。

1221 鯛・鯛車



鯛を模した像で背鰭が明確で尾鰭が広く表現されたものや台の上に鯛が乗っている鯛車などを本器種とした。東大構内ではⅧc 期の家畜 SU02 から出土した小さなものと 2 中 SK2193 から出土している 2 点のみである。いずれも DQ 系 M1f 型である。新宿区尾張藩Ⅸの 18C 末～19C 初頭の遺構から DQ 系の M1f 型タイプのものが海老や鯛などと共に出土している。1780 年～1802 年代の渋谷区千五の 0784 号遺構から DD 系の M2f 型の鯛車が出土している。

1222 金魚



金魚を模した像を本器種とした。鯉の体部は細長いのに対し、体長が短く幅が広く丸みのあるもので尾鰭の二箇所凹みにあり跳ね上がっているものを金魚とした。東大構内では、病棟の改葬層（年代不詳）から DD 系の M2e 型のものが出土しているのみである。文京区日影町Ⅱの 19C 初頭～19C 中葉に比定された 20 号地下室から病棟から出土したものと同形のものが出土している。底部には二重亀甲形の中に「亀」の刻印が付いているものである。

1223 蟬



蟬を模した像を本器種とした。東大構内ではⅧa 期～Ⅷc 期で確認されている。Ⅷa 期～Ⅷc 期の工 14SK140 で確認されたものは DD 系で M1f 型、背面中央を指頭大に凹ませ、紐孔を形成しているものである（写：右）。同地点のⅧb 期～Ⅷc 期の SK188 から DQ 系の M1f 型のものが出土している（写：左）。

1300 その他

1301 達磨



達磨の像を模したものを本器種とした。
東大構内ではⅧa～Ⅷd期で確認されている。Ⅷc期の工14SU2で確認されたものは、赤色に彩色された精巧な作りのものである(写:右)。Ⅷa～Ⅷd期の工14SK292からは両手を頭の上に挙げた、「達磨狐拳」といわれているものが出土している。いずれもDQ系のM2e型で、赤色の彩色痕がみられる。

1302 首人形



首と顔のみで完成されたもので、首部に棒を差し込むための穿孔があるものを本器種とした。
東大構内では18C前葉で1点確認されたのみである。確認されたものは工14SK43から出土したもので、DQ系のM2e型でモチーフは狐である。新宿区尾張藩Vの18C中葉に比定された遺構から複数出土している。モチーフは多種ある。

1303 獅子頭



獅子の頭を模した像を本器種とした。
東大構内ではⅧa期～Ⅷc期で確認されている。Ⅷa～Ⅷc期の家畜SU02や工14SK101、山上包含層で確認されている。工14SK101から出土したものは、前歯中央に大きな穿孔を有するものである(写)。いずれもDQ系のM1o型で、頭頂部に角をもち両目は大きく穿孔されている。

1304 面



面と同様の構造を模したものを本器種とした。
東大構内ではⅣa期、Ⅵ期～Ⅶ期、Ⅷc期で確認されている。Ⅳa期の病棟SK3や中診F34-11、6号組石からは、DQ系のM1o型の大黒様が出土している。病棟SK3から出土したものは紐孔が確認される(写:左)。また、Ⅵ期～Ⅶ期の工14SU18からはDD系の般若が出土している(写:右)。般若の裏面中央には紐状の粘土を貼付し紐孔を作り出している。Ⅷc期の家畜SK2からは胎土が黒褐色を呈する狐が出土している。

1305 陽物



男性の性器を模したものを本器種とした。出土例は極めて少ないものである。
東大構内では年代が捉えにくいⅣb期～Ⅴ期 or Ⅷa期の工14SU176から1点出土しているのみである。資料はDQ系のHf型で細部の表現が精緻で硬質感のあるものである。同様のものが新宿三栄町の19C第3四半期廃絶の遺構から出土している。

2000 器物

2001 碗



高台から緩やかに湾曲しながら立ち上がる製品を本器種とした。
東大構内ではⅡ～Ⅳa期、Ⅴ期～Ⅷd期で確認されているが、ピークはⅧ期である。胎質は土器、磁器、陶器があり、型成形(型押し・型打ち)、ロクロ成形がある。土器をみると、Ⅱ期～Ⅲa期の病棟SK607、Ⅳa期の病棟SK3で確認されたものはDD系の、ロクロ成形で文様は緑釉と鉄釉で描き厚く透明釉を施したものが出土している。この時期のDD系は緑釉、鉄釉、透明釉の三種の釉が主流であるが、Ⅷ期になると緑釉のみのものが多くなる。DQ系は、Ⅳb～Ⅶ期で総釉のものが出土しているのみで、多くはⅧa期～Ⅷd期である。JB系はⅢa期～Ⅷ期にかけ散見するがピークはⅣa期～Ⅴ期にかけてである。Ⅲa期やⅣa期で見られるのは染付碗に無文の白磁碗が主で、Ⅷ期になると紅皿と謂われている鍋や蓮弁の文様を施した小さな白磁碗が大半である。TD系の碗はⅣa期、Ⅴ期～Ⅵ期にかけ僅かに出土し、18C後葉～19C初頭、Ⅷc期にかけ、腰が張り、口縁部が玉縁状の灰釉碗や灰釉に白泥を流しかけた碗が多くみられるようになる。JC系が出土するのは主に明治期である。

2002 皿



器高が低く、口縁部径が広い平状の製品を本器種とした。
東大構内ではⅣa期、Ⅳb期～Ⅷd期で確認されているが、ピークはⅧ期である。胎質は土器、磁器があり、ロクロ成形と型成形がある。Ⅳa期～Ⅳb期で確認されたのはDD系の施釉製品(緑釉、鉄釉、透明釉)である。DD系は早い時期から出土しているが、最も多く出土するのはⅧa期～Ⅷd期で、この時期は文様を付け彩色施釉したものや、「亀」、「楽」、「万」等の刻印を有するものが出土している。DQ系のものが確認されるのはⅧa期～Ⅷd期で、内面に文様を施し彩色施釉した型成形のものが主流となる。JB系はⅤ期～Ⅵ期で確認されているが僅かである。JC系の製品が出土するのは主に明治期である。本器種の主流は彩色施釉された土器で、磁器は僅かである。

2003 鉢



上方が開く碗形、桶形、筒形を呈する製品を本器種とした。
東大構内ではⅣb期～Ⅵa期、Ⅷa期～Ⅷc期で確認されているが、Ⅷ期がピークである。胎質は土器、磁器があり、ロクロ成形と型成形がある。Ⅳb期、Ⅵa期で確認されたのは緑釉と黄褐色釉を使ったDD系のものである。DQ系のもはⅤa期で出土した、内外面に透明釉を施したものが最も古く、Ⅷa～Ⅷc期になると口縁部が波状を呈するものや、素焼きで口縁部に鏝をもつ植木鉢形をしたもの、腰の張った丸みのあるものが多く出土するようになる。磁器はⅧc期でJB系が僅かに確認されたのみである。JC系は明治期で確認されている。

2004 銚子



平碗形や半球形、半筒碗形を呈し上面に平らなドーナツ状の蓋受けを貼付たもの、注口や把手をもったものを本器種とした。
東大構内ではⅦ期、Ⅷa期～Ⅷd期で確認されている。ピークはⅧ期である。胎質は土器のみで、型成形とロクロ成形があるが大半は型によるもので、注口や把手は手捻りで貼付ている。Ⅶ期で確認されたDD系のもは、六角形を呈し注口と把手をもつ施釉されたものである。Ⅷ期になるとDD系のもは緑釉のみのものと、透明釉に緑釉で文様を施したものが確認される(写:右)。DQ系はⅧa期～Ⅷd期出土のものが多く、白色に塗彩した上に緑釉で装飾したものや(写:左)、無釉で赤色に塗彩したもの等が出土している。

2005 瓶



強く窄まる頸部を有し首が短く胴部が長い袋物製品を本器種とした。胴部は瓢箪形、辣蕪形、六角形や胴部が凹んだものなど多種ある。
東大構内ではⅢb期～Ⅳa期、Ⅵ期～Ⅷd期で確認されているが、ピークはⅧ期である。胎質は土器、陶器、磁器があり、ロクロ成形と型成形がある。Ⅲb期、Ⅳa期の病棟SK3からはTE系(写:右2)とJB系が出土している。TD系は、Ⅷd期から銅緑釉や柿釉を施したロクロ成形の筒形状のものが出土している。土器をみると、DD系はⅦ期～Ⅷ期にかけ緑釉のみで装飾した六角瓶や、瓢箪に馬の文様を施したものや、凹んだ胴部に布袋がある布袋徳利(写:右)、また柿釉を施した筒形状のものが出土している。六角瓶や布袋徳利には「亀」の刻印を有するものがある。また、DQ系はⅥ期で胴部に指頭大の凹みをもつ施釉したものが確認されている。Ⅷ期になると胴部を白色で塗彩した上に梅枝文様等描き施釉したものが出土している(写:左)。

2006 壺



胴部や肩部径が大きく扁平で、頸部が短く口縁部径が小さい製品を本器種とした。

東大構内ではIVa期、IVb期、17C末～18C初頭、VIIa期～VIIb期で確認されている。胎質は土器と磁器と陶器があり、ロクロ成形と型成形がある。JB系のものはIVa期の病棟SK3から赤絵の鬢付け油壺が、19C前葉の工14SK301から唐草と花文様を施した型成形のものが出土している。TD系は、銕絵染付のものがIVb期の病棟SU445から出土している。土器は19C前葉の工14SK301からは透明釉に緑釉を流しかけたDD系のものが出土している(写真)。DQ系は17C末～18C初頭の教育SU84から、ロクロ成形で肩に梅花文が押印された素焼きのものが、また同胎質、同文様の茶釜が出土している。VIIa期～VIIb期からロクロ成形で鉄釉が施された精緻なものが出土している。本器種はDD系は少ない。

2007 片口



口縁部に注口を有する鉢形の製品を本器種とした。

東大構内では18C後～19C前葉、VIII期で確認されている。胎質は土器のみで、ロクロ成形と型成形がある。DQ系は18C後～19C前葉の工14SK337からロクロ成形で内面に梅枝文を描いた型成形のものが出土している。またDD系は19C前葉のSK252から柿釉を施したものと、VIII期の給水AJ34-2から内外面緑釉が施された型成形のものが出土している。

2008 急須



注口を有し横または後ろのいずれかに把手を有する蓋付きの茶器を本器種とした。

東大構内ではVII期～VIIIc期で確認されている。胎質は土器、陶器、磁器が出土している。VII期～VIIIc期の工14SK402から型成形のTD系のもので、DQ系の白化粧した上に梅枝文を描いた型成形のものが出土している。19C前葉の工14SK140からは、DD系で透明釉に緑釉で装飾したものが出土している。DQ系はVIIIc期の工14SU396から型成形で全体を白化粧し赤色で花卉を描き施釉したものが出土している(写:左)。明治期の御殿7号からはJC系のものが出土している。

2009 土瓶



蓋付きで注口と持手を付けるための把手を有する製品を本器種とした。

東大構内ではVII期～VIIId期で確認される。胎質は土器、陶器で、型成形とロクロ成形がある。大半は3個の脚を有し、すべてが施釉されている。DD系のもはロクロ成形で鋸歯文様などを施し緑釉で施釉しているものが大半である(写:左)。白化粧したうえに緑釉で装飾した型成形のものや透明釉に緑釉を流しかけたものなどが出土している。DQ系のもは全体に白化粧し緑釉で装飾したもので(写:右)、彩色のみで施釉したものが出土している。TD系は白化粧したうえに鉄絵で山水文様を描き施釉したものが、VIIa期～VIIb期の工14SK101から出土している。

2010 鍋



鉢形もしくは皿形を呈し、内部に蓋を受けるための段差をもち、口縁部左右対称に耳をもつ製品を本器種とした。また、注口をもつ製品(行平鍋)も本器種とした。

東大構内ではVII期～IX期で確認されているが、VIIa期～VIIId期の出土例が多い。胎質は土器と陶器でロクロ成形であるが、耳は手捻りで貼付している。DQ系のものが主流で、施釉と無釉のものがある。陶器製のもは柿釉が施されたもので、東大陶磁器分類のTZ-33-aにあたるものであるが、小さなものはミニチュアの可能性もあることから記述しておく。

2011 釜・茶釜



口縁部が直立し鑊をもつ丸底、若しくは平底を呈するものは釜とし、口縁部がすばまり体部が袋状で鑊をもつ丸底、若しくは平底を呈するものを茶釜とした、二つのタイプを本器種とした。

東大構内ではVII期～VIIId期で確認されている。2タイプとも胎質は土器で、型成形である。DD系の釜は、19C前葉の御殿49号とVII期～VIII期の工14SK402で確認されている(写:右)。釜は鑊から上部にかけ緑釉を施したものである。また、DQ系の釜は、VIIa～VIIId期の工14SK293で確認されている。また、DQ系の茶釜はVII期～VIII期の工14SK402で確認されている(写:左)。釜形土製品と謂われているものは、以前はミニチュア扱いであったが、現在は東大陶磁器分類のDZ-5-cに分類されているものである。

2012 播鉢



内面に播目をもつ鉢形製品を本器種とした。
東大構内ではIVa期～IX期で確認されている。胎質は土器と陶器があり、ロクロ成形が大半である。IVa期の病棟SK3からはTE系と柿釉を施したDD系のものが出土している。同地点のIVb～Vb期のSK1328からは、TE系の底部径が極めて小さく器高が高いものが出土している。VII期、VIIIa～VIIId期から出土するTE系のものは、器高が低く口径が広いタイプのものである。DQ系のロクロ成形で底部径が大きいものは、IVa期、Va期で確認されているが、19C前葉まで散見する。DQ系で施釉されたものは、Va期とVII期で透明釉のみのものが確認されているが、18C後葉～19C中葉になると花卉等の文様を内面に描き施釉した玩具の様相を呈したものが多くなる(写:右)。土器と陶器のものがIVa期からIX期と連続と続き出土し、出土例の多い器種である。

2013 蓋



中央に摘みのある平状の製品を本器種とした。
東大構内ではIIIa期～VIIId期で確認されている。胎質は土器、磁器、陶器で、大半のものが型成形である。JB系のものはIIIa期と19C前葉で確認されている。TD系のものはVII期、VIIId期、19C前葉で確認されている。DQ系のものは17C末からみられ、IVa～VIIId期まで散見する。素焼きでやや大きく厚みのない釜蓋形(写:上段左)のものは釜形土製品(DZ-5-c)と共伴することが多い。DD系のものは摘み周りに花卉を施し緑釉と透明釉を施したものとや緑釉のみのものが、VIIIa期～VIIId期で多く確認されている(写:下段右)。出土例の多い器種である。

2014 七厘・焜炉



胴下部に一つの風口を有する鉢形製品を本器種とした。
東大構内ではVIIIa期～VIIIb期、19C前～19C中葉、近代で確認されている。胎質は土器のみで、ロクロ成形、型成形、手捻り成形がある。DD系の七輪は19C前葉の工14SK348から透明釉に緑釉を流し掛けした型成形のものが出土している(写:中央)。灰落とし、風口、脚部は貼付たもので、底部に「京万」と書きされたものもある。DQ系はVIIIa期～VIIIb期、近代で確認されている。工14SK291で確認されたものは、ロクロ成形で、灰落としと爪は貼付し、外面に文様を施し施釉したものである(写:右)。病棟ST3441で確認されたものは、内外面が灰黒色を呈し、灰落とし部分を赤色に塗り火を表現したものである(写:左)。

2015 石臼



石臼を模した製品を本器種とした。
東大構内ではIVa期で確認されている。胎質は土器のみで、ロクロ成形である。IVa期中診F34-11から出土したものは、DQ系で中央に穿孔と側面に引き手孔を有し、キラが顕著で硬質感のあるものである(写:右)。御殿の包含層から挽き目と中央に凹みをもつ石臼を模した型成形の小さなものが出土している(写:左)。新宿区尾張Ⅲの17C末～18C初頭に比定された57-3P-1からDQ系のものが出土している。千代田区溜池の18C第3四半期～19C前葉の遺構から型成形で挽き目の溝に黒漆が残存したものが出土している。新宿区自證院第20号墓からは石製(砂岩)の石臼が、多くの人形や飯事道具共に出土している。

2016 竈



上部に釜や鍋のをせる円形の孔をもち、前面に焚き口を有するものを本器種とした。
東大構内ではIVa期、VII期、18C後半～19C前葉、VIIId期で確認されている。胎質は土器のみで、型作りと板作り成形がみられる。IVa期中診C28-2からは、板作り成形で赤色の塗彩痕と銀彩、磨き調整、上面には二つの菊花が押印されたものが出土している。共伴資料に赤色に銀彩された釜形土製品があり、竈とセット関係にあると考えられる資料である。VIIId期の工14SU295から出土したものは、双房形で、釜置き部と焚き口は竈で開けている。前記した竈とは異なり稚拙である。新宿区北山伏町の報告書の第2節の項に、単房形の竈と釜形土製品、蓋が共伴して出土している、新宿区一行院の墓の資料が掲載されている。

2017 器台



上部に鏝を有し、内側中央に底部まで円孔を有する形状のものを本器種とした。
東大構内ではIVa期、IVb～VII期、VIIIa～VIIId期で確認されている。胎質は土器と磁器で、ロクロ成形と型成形がある。IVa期の病棟SK3からはJB系のものが出土している。IVb～VII期の工14SU63からはDQ系の鉄釉を施したものが出土している。また、同地点のVIIIa～VIIId期の工14SK292からは上面に文様を描き施釉したものが出土している。同地点の遺構外からは型成形で無釉の脚の高いものが出土している。新宿区尾張Vの17C末～18C初頭と尾張Ⅲの18C中葉の遺構からは、DD系の透明釉に緑釉を流し掛けしたものが出土している。

2018 硯



硯を模したものを本器種とした。
東大構内ではⅧa～Ⅷd期、19C前葉、Ⅸ期で確認されている。胎質は土器のみで、型成形である。Ⅷa～Ⅷd期の工14SK293から出土したものは、硯の海と陸部には赤色の塗彩痕がみられる。同地点の19C前葉のSK252からは、白色の塗彩痕がみられものが出土している。いずれもDQ系で型成形、無軸である。

2019 水滴



水滴を模したものを本器種とした。
東大構内では18C末～近代の工14SK359から出土した一点のみである。胎質は土器で、型成形である。資料は、彩色施釉の菊花をモチーフとしたものである。

2020 銭貨



小判や二朱銀等、当時の銭を模したものを本器種とした。
東大構内ではⅧa～Ⅷd期で確認されている。胎質は土器のみで、型成形である。Ⅷa期～Ⅷd期の工14SK101からは、南鐐二朱銀の模倣で表裏面に「○銀座常賣」「此南鐐八口 □小判一兩」と陽刻されているものである。八枚で一両になる二朱銀の模倣である。同時期中の申診2号組石からも同様のものが出土している。小判を模したものはⅧc期の工14SU2から出土している。文京区日影町Ⅱの19C初頭～19C中葉の28号から「一分銀」と陽刻されたものが出土している。いずれもDQ系である。

2021 五銚鈴



密教道具の五銚鈴の模倣を本器種とした。
東大構内ではⅦb～Ⅶ期で確認されている。胎質は土器で、型成形である。Ⅶb期～Ⅶ期の工14SU382から出土したものはDQ系のM2o型で無軸のものである。文京区日影町Ⅱの19C初頭～19C中葉の28号地下室から同様のものが出土している。

2022 袖でんぼ



袖の形をした容器を本器種とした。
東大構内ではⅣb期、Ⅳb～Ⅶ期、Ⅷa期で確認されている。胎質はDD系の土器で、型成形である。上下合わせの型成形で蓋とセットである。身は黄色釉のみで外面に袖肌を表現し、蓋は黄色釉と緑釉(葉)からなる。また、Ⅳb～Ⅶ期の工14SU63からは身と蓋が共に出土している。Ⅳb期の病棟SP3784とⅥa期の外來SK152、Ⅷa期の工1SK1からは破片が出土している。

2023 香炉・風炉



内面が無軸の鉢形製品(香炉)、鉢形を呈し縁部の一部を切り取ったものを(風炉)、本器種とした。
東大構内ではⅧa期～Ⅷc期で確認されている。胎質は土器と陶器でロクロ成形である。香炉はⅧc期に比定された工14SU396でTD系のものが確認されている。香炉は堅牢で、火窓は猪目形で足は底部を抉り作っている(写真)。風炉はⅧa期～Ⅷb期の工14SK101と工14SK378でDQ系のものが確認されている。SK101のものは口縁部と底部を三ヶ所カットし、外面全体に白化粧を施し緑釉で装飾している。SK378から出土したものは無軸で、肩の張った壺型を呈し、口縁部の一部を切り取り火口を作っているものである。

3000 建造物

3001 祠



神仏を祀る建物を模したものを本器種とした。
東大構内ではIVa期、IVb～VII期、18C後葉～19C中葉で確認されている。複数のパーツからなる型成形である。屋根は別作りで、堂と基壇が一体型のものが多い。IVa期の病棟SK3からは、胡粉やキラの残存が顕著で堅牢な屋根が出土している。また、18C後葉～19C前葉の工14SK337から出土したものは屋根は別作りで貼付、前面と両側面があって底部、背面がないもので、白色、緑釉、透明釉で装飾している（写：右）。いずれもDQ系のものである。

3002 塔



三重塔、五重塔を模したものを本器種とした。
東大構内ではIVa期～VIIIc期で確認されている。胎質は土器、陶器で型成形である。DQ系とDD系、TZ系のものが出土している。DQ系はIVa期中診F34-11から無釉の屋根のみ出土している。17C末～18C前葉の外來SK291と18C前葉～18C中葉の理D3号井戸からは透明釉が施された三重塔が出土している（写：左）。VII期からは一体型（胴部から屋根まで）のM2f型で、DD系の小さな五重塔が出土している（写：中央）。VIIIb期～VIIIc期からはDQ系の一体型のM2fの五重塔が出土している。一体型のものは対角線上で接合している。病棟の遺構外から鉄釉を施した堅牢なTZ系の三重塔が出土している。

3003 城郭



城、城門、櫓等の城関係の建物を本器種とした。
東大構内ではVIIIc期、19C前葉で確認されている。胎質は土器と陶器（炆器質）のもので、型成形である。19C前葉の御殿49号からはDQ系の天守閣、大手門、櫓門、隅櫓、番所等が2セット出土している。出土したものは型成形で無釉、両側面と前面のみで底面のないタイプである。VIIIc期の工14SU2からは彩色、施釉した一体型の石垣付きの城が出土している。陶器では炆器質の小さな櫓や城壁、城門また橋が、VIII期の御殿49号や中診2号組石から出土している。総て背面の表現がないものである（写：左）。

3004 橋



橋を模したものを本器種とした。
東大構内ではVb期、VIb期～VII期、18C末～19Cで確認されている。胎質は土器と陶器があり、型成形である。土器ではDD系とDQ系のものが出土している。DQ系は橋板と欄干部が一体型の型成形のものが多く、DD系では橋板は型成形で、欄干と支柱は手捻り成形で貼付しているものである。下限がVIIIc期の工14SK3から白色と緑釉で部分的に装飾しているものが出土している。DD系は、Vb期の外來SK290やVIb期～VII期の工14SU382から透明釉と緑釉で装飾したものが出土している（写：前左）。黒褐色を呈したDZ系の橋は同質の灯籠とともに18C末～19Cの中診2号組石や工14SU381から出土している（写：後列）。陶器では炆器質の小さなものと別作りの欄干部を白色に彩色した、太鼓橋が19C前葉の御殿49号から出土している（写：右）。

3005 塀・袖垣・石段



塀、袖垣、石段等を模したものを本器種とした。
東大構内ではVII期～VIIIc期、19C前葉で確認されている。胎質は土器で型成形と板作りがある。19C前葉の工14SK338からは白色や薄緑で部分的に彩色し施釉した、袖垣と飛石、樹木を表現したものが出土している。VIIIa期～VIIId期の工14SU293からDQ系でM1o型の石垣つき石段が出土している。石段は透明釉に緑釉を流し掛けた丁寧な作りのもので内側に「三吾」と墨書されている（写：左）。

3006 民家・庵



茅葺き屋根の建物を模したものを本器種とした。
東大構内ではVIa期、VIII期、19C前葉で確認されている。胎質は土器で、型成形である。VIa期の外來SK174からはDD系のものが確認されており、屋根は透明釉、緑釉、鉄釉で装飾し、器壁は極めて薄い作りである（写：左）。19C前葉の御殿49号ではDQ系の彩色、施釉された小さな民家（写：右）と鉄釉を施した屋根が出土している。

3007 灯籠



灯籠を模したものを本器種とした。
東大構内ではⅦ期、18C 後葉～19C 前葉、Ⅷa 期～Ⅷb 期で確認されている。胎質は土器で、型成形である。Ⅶ期、18C 後葉～19C 初頭の遺構からは DD 系で無釉の小さな灯籠が出土している（写：左）。18C 後葉～19C 前葉の工 14SK337 から DQ 系で彩色、施釉されたものが 2 点出土しているが一つの竿部には「楽正」刻印があるものである（写：右）。Ⅷa 期～Ⅷd 期の工 14SK293（写：中央）や中診 2 号組石からは型成形の黒褐色を呈したものが出土している。

3008 鳥居



神社の鳥居を模したものを本器種とした。
東大構内ではⅦ期、18C 後葉～19C 前葉、Ⅷ期で確認されている。胎質は DQ 系の土器で型成形である。Ⅶ期の工 14SK330 からは施釉された小さなものが出土している。18C 後葉～19C 前葉の工 14SK337 からは、彩色施釉された、笠木の反りが大きいものが出土している。

3009 御輿



御輿を模したものを本器種とした。
東大構内ではⅧa 期～Ⅷb、期Ⅷc 期で確認されている。胎質は土器で型成形である。Ⅷa～Ⅷb 期の SK101 のものは、対角線上で接合されているものである。Ⅷc 期は SU2 から出土したものは、SK101 のものより大きく担ぎ棒を差し込む為の孔と頭頂部に飾りを挿すための孔を有するもので底部開口型である。いずれも DQ 系で型成形である。

3010 舟



舟を模したものと、舟に人物が乗り船遊びや釣りをしているもの本器種とした。
東大構内ではⅣa 期、Ⅷd 期、19C 前葉である。胎質は土器のみで DQ 系と DD 系があり型成形である。Ⅳa 期の病棟 SK3 からは、舟は型成形で工具で細部を表現し人物や道具類は手捻りで貼付し、透明釉と緑釉で装飾した DD 系のものが出土している。Ⅷ期の御殿 49 号から出土したものは DQ 系で人物が乗っているものである（写：右）。Ⅷd 期の工 14SU392 からは、赤色に彩色し施釉したものが出土している。型成形であるが内部の凹部は工具で粘土で抉り取り整形している（写：後列）。

3011 庭園・背景



池状の形に松島、橋などつけて庭園を模したものを本器種とした。
東大構内ではⅥb～Ⅶ期、19C 前葉で確認されている。胎質は土器で、手捻り成形と型成形である。Ⅵb～Ⅶ期の工 14SU382 からは、手捻り成形で脚をもつ盤状の中に松等をあしらひ、透明釉と緑釉、鉄釉で装飾した DD 系ものが出土している。同様のものが尾張上 V の 18C 中葉の遺構から出土している。19C 前葉の御殿 49 号からは DQ 系の塀に松を表現したものが出土している。

3012 仕切り盤



大きな盤や鉢の中央に蛇行する仕切りを有するものを本器種とした。
東大構内ではⅦ期～Ⅷd 期、明治中葉で確認されている。ロクロ成形と作作りがある。
Ⅶ期の設備 AE39-1 からは、体部がやや湾曲した鉢形を呈した DQ 系でロクロ成形のものが出土している。Ⅷd 期の工 14SU295 上からは、型成形で底部径が大きい盤状を呈し、中央に蛇行する仕切り痕があるものが出土している。胎土は DZ 系の黒褐色を呈したものである（写真）。本器種は以前、陶磁器分類の DZ-5-b に分類されていたものであるが、今回から箱庭道具として取り扱うこととなった器種である。

4000 遊具
4001 土鈴



鈴を模したもので球状や巾着状を呈し紐孔をもつものを本器種とした。
東大構内ではIVa期、VI期～VII期、VIIa～VIIc期確認されている。胎質はすべてDD系の手捻り成形である。IVa期の病棟SK3から出土したものが最も古い(写:中央)。出土した多くのものは、外郭が円状を呈するがVIIIb期～VIIIc期の工14SK188から出土したものは巾着型である(写:右)。千代田区有楽二のS20(1630～1640年代)から出土した頭部が蓮花状したものが、江戸期で最も古い出土例である。千代田区丸の内三丁目の元禄11年以前の26号溝からも同様のものが出土している。連続と続き出土し、出土事例の多い器種である。

4002 独楽



中央に棒を差し込むための孔を有し逆円錐形を呈するものを本器種とした。
東大構内ではII期～IIIb期で確認されている。II期～IIIb期の病棟SD1103からと農共溝SU3から出土している。いずれも類似した形状をしたもので型成形、キラが顕著で硬質感があるものである。新宿区尾張IXの18C末～19C中葉に比定された125-2K-1・125-2K-2からDQ系で型成形(上下合わせ)のものが出土している。

4003 笛



吹いて音がでる構造をもつものを本器種とした。
東大構内ではVIb期、18C後葉～19C前葉、VIIIb期～VIIIc期、明治期で確認されている。型成形でDQ系とDD系のものが出土している。モチーフではDQ系は「鳩」が最も多く、次いで「福良雀」である。他には「お化けの金太」、「ひょっとこ」がある。DD系は「鳩」のみである。成形法をみるとDQ系は上下型合わせ、DD系は左右合わせで江戸のものに比べ小振りである。VIIIc期のSU2からはDQ系の鳩と福良雀が出土している。出土例の多い器種である。

4004 碁石形土製品



碁石と同様の形状を呈したもので碁石の代用品として作られたものを本器種とした。
東大構内ではIVa期、17C末～18C前葉、18C末～19C初頭、VIIa～VIIc期で確認されている。胎質は土器で、DQ系の手捻り成形である。IVa期の病棟SK3から出土したものが最も古い。白色と黒色に彩色されていたものが出土しているところから碁石を意識して製作したものと思われる。VIII期の中診2号組石からは262点、VIIa期の工1SU1からは106点と多量に出土している。

4005 面模



楕円形で内面は凹状で鍾馗、鬼、猿、狐、象等多様なモチーフを模ったものを本器種とした。
東大構内ではVIb～VII期、18C後葉～19C中葉、VIIId期で確認されている。胎質は土器で型打ち成形である。VIb期～VII期の工14SU382からは、モチーフが狐で裏面に狐の顔が描かれたものが出土している。18C後葉～中葉のSK140からはモチーフが象のものが確認されているが、新宿区尾張IIIの18C前葉～18C中葉の遺構から獅子舞をモチーフとしたものが出土している。土を詰めて抜いて遊ぶものである。

4006 泥面子・芥子面



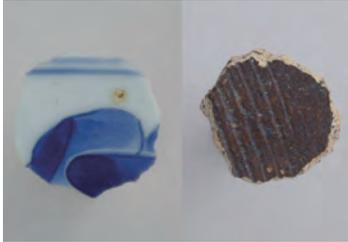
厚い円形を呈したものと楕円形(不整形)を呈するもので上面に役者の家紋、纏、力士、縁起物など当時流行したものをモチーフとしたものを泥面子とし、人面や動物の顔をモチーフとし裏面を指頭大に深く凹ませたものを芥子面(上段右端)とした。
東大構内では泥面子は18C後葉、VIIa期～VIIc期、明治期から出土しており、芥子面は18C末～近代に比定された工14SK359遺構から出土している。いずれも一枚型作りで、泥面子はDQ系で、芥子面はDD系である。台東区谷中の19C第2四半期に比定された67号墓(10才前後女子)からDD系の芥子面が56点出土している。モチーフは多種にわたる。裏面の凹んだ箇所「常」「つね」と名前と思われる文字が墨書されていた、良好の資料である。泥面子は江戸遺跡最も多く出土する器種である。

4007 土玉



球状したものを本器種とした。
東大構内では18C 後葉～19C、19C 前葉、Ⅷa 期、Ⅷa～Ⅷb 期、Ⅷa～Ⅷd 期で確認されている。胎質はDQ系の手捻り成形で、大きさは多様である。19C 前葉の工14SK10からは大小6点出土している。また、家畜SU02からは径が32mmと大きいものが出土している。東大構内から出土した土玉の大きさの平均値は約22mmである。

4008 円盤状製品



陶磁器の破片を二次的加工を施した小さなものを本器種とした。
東大構内ではⅢa 期、Ⅲb 期、17C 後半、IVb 期、Ⅷa 期、19C 前葉で確認されている。陶器を再利用したものはⅢa 期の病棟SK1962・1965とⅢb 期の御殿255号で、医研からは播鉢を再利用したもの等が出土している。法文では17C 後半とIVb 期からJB系が、Ⅷa 期の工1SU01からはJB系の皿を転用したものが出土している。最も多く出土した地点は医研SK2190である。御殿の包含層(年代不明)からはJB系とJA系(中国)のものを転用したものが確認されている。

4009 車輪状製品



中央に孔を有する円盤状を呈する製品を本器種とした。
東大構内ではⅡ期に比定された病棟-2154で確認されている。1点のみの出土である。資料はDD系の型成形で上面に草花文様を配し、上下の縁を面取りし全体を丁寧に調整し緑釉で装飾している。

* 出土数が少ない器種についてはピークは確定は困難なため出土例を記入また東大構内遺跡で出土していないものや例が少ない場合は他遺跡の出土例を載せた。年代は報告書に記載されたものを記入した。

* 写真はCD-ROMに収録している

5. 技法コード

人形・玩具全てにまたがる成形技法として *H*: 手捻り、*M*: 型作り、*W*: ろくろ、*B*: 板作り、*A*: 加撃の5種を設定した。また、人形-主に近世の人形-はさらに型の枚数と内部構造 *f*: 中実、*o*: 底部開口、*e*: 中空を組み合わせて8種に細分した(4図)。

成形技法

H (手捻り): ろくろや型を使わずに手を使って粘土で形を作ったもの。手捏ねともいう。人形、器物、建造物、遊具に見られる。細かい部分に窺で調整を加えたり、部分的に型を使用するのも本類とする。

M (型作り): 型を使用し成形したもの。1枚型と2枚型がある。人形、器物、建造物、遊具に見られる。型の内側に雲母をまき、粘土を押し付け、少し乾いてから型の縁を叩いて型から離す。2枚型はこれを表半面と裏半面を作り、前後もしくは左右、斜めで合わせ、接合面を指、窺などで調整する。人形では頭部と胴部を別型で作るなど、複雑な形のは複数の型を接合して組み立てるものもある。

M1: 1枚型

M2: 2枚型, もしくは複数枚の型を使用するもの

W (ろくろ): ろくろを使用し成形したもの。器物にみられる。

B (板作り): 板状の粘土を貼り合わせ成形したもの。粘土板を作り、ある程度乾燥させ接合面に泥しように塗り接合する。建造物にみられる。

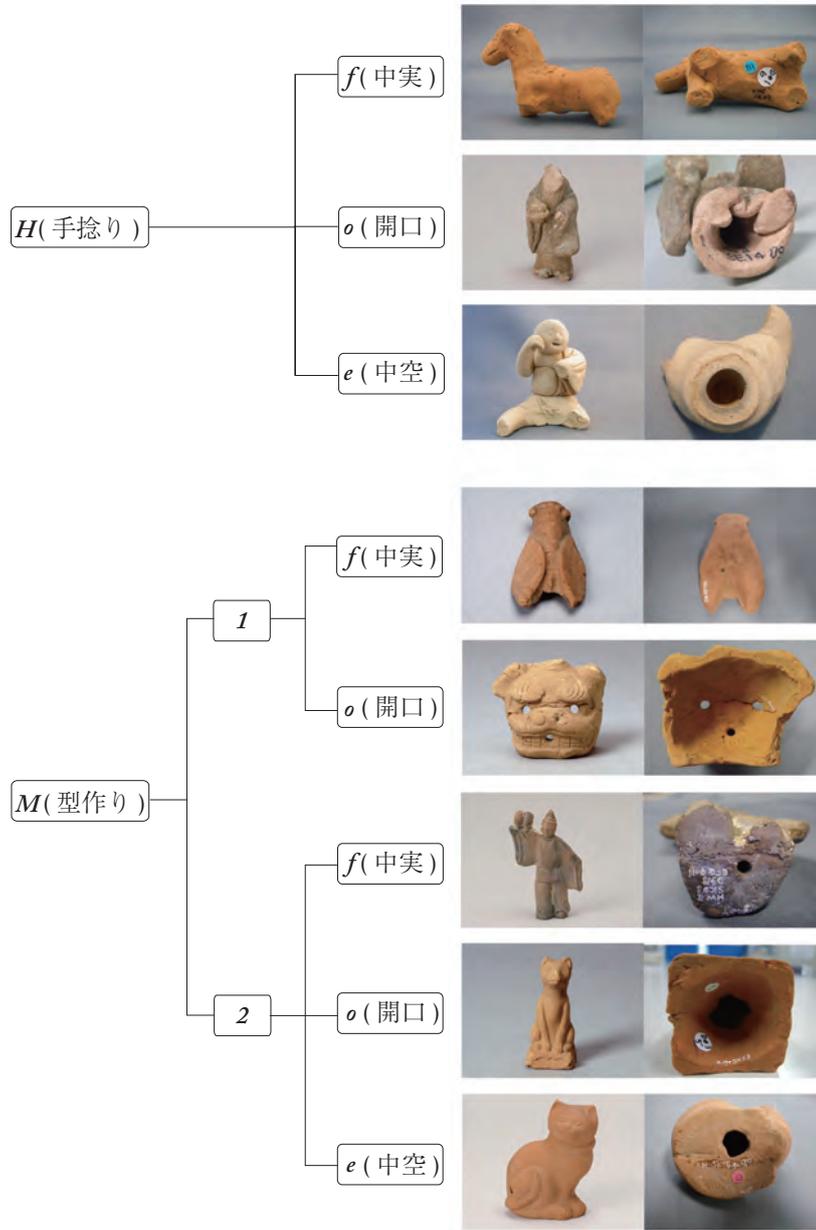
A (加撃): 陶磁器の破片の周囲を細かく打ち欠き円形に加工したもの

内部構造

f (中実): 内部が粘土で充填されているもの

o (開口): 底部もしくは背面など開口する面を有するもの

e (中空): 底部を有し内部は空洞のもの



4 図 人形分類概念図

本稿の出土地点については以下のように省略して表記した。なお分類時に東大構内において良好な資料が確認できなかった遺物については、他遺跡の報告書から引用させて頂いた（以下、50音順）。

東京大学構内遺跡

医研：医学部教育研究棟地点（東京大学構内遺跡調査研究年報2）

IML：インテリジェント・モテリング・ラボラトリ地点（教育学部総合研究棟地点・インテリジェント・モテリング・ラボラトリ-地点）

外来：医学部附属病院外来診療棟地点（医学部附属病院外来診療棟地点）

家畜：農学部家畜病院地点（東京大学構内遺跡調査研究年報1）

教総：教育学部総合研究棟地点（教育学部総合研究棟地点・インテリジェント・モテリング・ラボラトリ-地点）

給水：医学部附属病院給水設備棟地点（医学部附属病院地点）

共同溝：共同溝地点（医学部附属病院地点）

工1：工学部1号館地点（工学部1号館地点）

工14：工学部14号館地点（工学部14号館地点）

御殿：御殿下記念館地点（山上会館・御殿下記念館地点）

樹木園：農学部生命科学研究附属小石川樹木園・根圏観察地点（東京大学構内遺跡調査研究年報7）

数理：大学院数理学研究科Ⅱ期棟地点（東京大学構内遺跡調査研究年報2）

設備：医学部附属病院設備管理棟地点（医学部附属病院地点）

中診：医学部附属病院中央診療棟地点（医学部附属病院地点）

2中診：医学部附属病院第2中央診療棟

農7：農学部7号館A棟Ⅰ期

農共溝：農学部共同溝地点（年報6）

病棟：医学部附属病院病棟建設地点（東京大学構内遺跡調査研究年報2）

山上会館：山上会館（山上会館・御殿下記念館地点）

法文：文学部3号館地点（法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡）

理7：理学部7号館地点（理学部7号館地点）

他遺跡

圓應寺：圓應寺跡

尾張Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅸ・ⅩⅡ：尾張藩上屋敷遺跡Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅸ・ⅩⅡ

尾張Ⅴ：尾張藩上屋敷Ⅴ

尾張Ⅸ：尾張藩上屋敷Ⅸ

鹿島町内No.67：鹿島町内No.66遺跡（神野向遺跡）・No.67遺跡（神野遺跡）

北山伏町：北山伏町遺跡

春日第Ⅵ：春日町第Ⅵ地点

三栄町：三栄町遺跡

自證院：自證院遺跡

正見寺跡：東京都新宿区崇源寺・正見寺跡

千五：千駄ヶ谷五丁目遺跡

千駄木三北：千駄木三丁目北遺跡

仲御徒町三：仲御徒町三丁目遺跡

一橋：江戸－都立一橋高校地点

發昌寺：發昌寺跡

弘方町：弘方町遺跡

法性寺跡：法性寺跡

本郷追分：本郷追分

牧野家墓所：港区濟海寺長岡藩牧野家墓所

丸の内三丁目：丸の内三丁目

武蔵岡部藩：和泉伯太藩・武蔵岡部藩上屋敷遺跡

八ツ場ダム下田：下田遺跡

谷中：谷中三崎町遺跡

東京大学構内遺跡出土人形・玩具の年代的推移について

小林照子

はじめに

東大構内では膨大な量の陶磁器が出土しており、その研究成果の一つとして東大編年が提示されている。ここでは東大編年における指標遺構出土の資料を中心に、成形技法、胎質、器種の3点から人形・玩具類の年代の変遷を考察したい。またそれに加え出土分布状況と胎質の割合から階層別の特徴、器種別様相からは社会の意識の変化を抽出することも副次的な目的としている。分析の対象は現時点までに報告書刊行、または遺物の実測が終了している約1400点の人形・玩具である。なお分類基準についての詳細は本編「東京大学構内遺跡出土人形・玩具の分類」、年代の段階設定については「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」(堀内1997)を参照されたい。

1. 成形技法の様相

人形・玩具類の年代と成形技法に深い関係があることは異論を持たない。しかし成形技法だけではなく、もう一つ年代判別の重要な手がかりとしてあげたいのは胎土と焼成である。DQ系の胎土には大きく二種類が観察される。胎土の色調が鈍く混入物があり厚手で硬度が高い一群と、色調が明るく緻密な胎土をもち薄手で軟質な一群である。この差は焼成窯の違い、水簸の技術の進歩など技術的、年代的な違いを表していると考えられる。しかし土人形は小さく形状が複雑なため、色調、硬度は同一固体でも部位により異なる。扱う資料は考古資料という性格上、破片資料が多く明確な判別が困難なため、分類の要素に加えることができなかつた。ここでは技法と胎土の変化が一番顕著に表れる土師質の人形において、各成形技法の推移と胎土の変化をみていきたい(1表)。

Hf型の推移

DQ系ではⅣ期からⅧ期、DD系ではⅦからⅨ期に比定される遺構で確認されている。器種に偏りはみられず、稚拙な技術で単純な形をひねり出した、信仰の要素の強い資料に多くみられる。大半が無釉だが、DQ系のⅣ期とⅦ期に全体に厚めの透明釉を施した資料が観察される。Ⅶ期のものは彩色の上に厚く釉を施している点がⅣ期とは異なっている。同様の釉をかけた資料はM2f型のⅣ期にもみられる(1図)。



1図

Ho型の推移

R系でⅢb期、DD系ではⅤb期に比定される遺構で各1点ずつ確認されている。器種はR系は1109(西行)、DQ系は1104(寿老人)である。R系で確認されているのは、灰褐色の胎土をもち、焼成が非常に堅緻な資料である。病棟SE326から布に包まれた状態で出土している。体部は板状に成形した粘土板を丸め、片側で接合し筒型に成形している。部分的に型を用いていると思われる箇所もあり、成形技法には疑問が残



2図

る。表面に布目が観察され、布目の一部が貼り付けた荷物の上にまで残っていることから、衣服の意匠として成形後につけられたものと思われる（2図）。布目が観察される資料は同じくⅢb期のDQ系M2e型でも確認されている。傘がはがれた位置には櫛状工具でつけた櫛目が観察される。DD系の1104（寿老人）は粘土塊を円錐状の工具に巻き付け体部を成形し、袖と足を貼り付けている。

He型の推移

DD系のⅢb、Ⅴ、Ⅷ、Ⅸ期に比定される遺構で確認されている。1114類（坊主人形）のみにみられる成形技法である。Ⅲb、Ⅴ期の資料は非常に精製された白色胎土を有し、丁寧な作りであるが（3図左）、Ⅷ、Ⅸ期になると胎土に小礫が混ざり、造作も粗雑なものになり初期の端正さはみられなくなる（3図右）。



3図 坊主人形

M2f型の推移

DQ系、DD系ともⅢb期からⅧ期に比定される遺構で確認されている。器種に偏りはみられない。京都ではM2f型の人形がⅢa期には存在することから、江戸にはすでに完成された技術が入ってきていたと考えられる。Ⅲ期からⅣ期にかけては、奥行の浅い扁平感のある形状を呈しているものが多い。Ⅳ期になるとDQ系、DD系とも施釉の資料があらわれる。これらはⅦ期以降の彩色の上に薄い透明釉をかけた一群とは異なり、彩色はみられず全体に厚めの透明釉を施している。部分的に緑釉でアクセントをつけるものもある。DQ系の施釉の資料は、いずれも赤色粒子を含み、赤みの強い褐色の胎土が共通して観察される。Ⅶ期以降になると大半が3cm前後の小形の資料になる（4図）。粘土の節約のためか、10cm前後の資料の大半はM2e型となるため、中空にする方が困難な小形のものだけがM2f型で作られるようになるのであろう。



4図 小型の天神

M2o型の推移

DQ系ではⅢa期からⅧd期に比定される遺構で確認されている。DD系ではⅧc期に比定される遺構で1点、遺構外で1点確認されているのみである。8割が1109（西行）もしくは1206（狐-稲荷狐）である。Ⅲa期に比定される病棟SP883から出土した西行は人形の中で最も早い段階で確認された資料である。立体的な作りだが背面はナデ調整され平坦である（5図）。胎土は鈍い橙褐色を呈し赤色粒子を含んでおり、焼成は堅緻で硬質である。Ⅲb期には病棟SD458の天和の火災の廃棄資料を含む焼土層から、表面に布目を有した西行の袈裟と足と思われる破片が出土しており（6図）、同型の資料から中央から頸部にかけて円錐形の穿孔を有する形状と思われる。胎土は橙褐色で赤色粒子を含み表面は雲母が目立つ。Ⅳ期以降は2枚の型合わせで頭部差し込み、または体部と頭部一体型で底部を有さない形状となり、多様性はみられなくなる。Ⅳ、Ⅴ期とⅦ、Ⅷ期の違いは胎土と焼成である。Ⅳ、Ⅴ期では鈍い橙色で赤色粒子を含む胎土を有し、焼成は良好で硬質感があるが、Ⅶ期では色調は明るくなり胎土の混入物が減る。Ⅷ期になると混入物は



5図 背面無紋の西行（右）



6図 西行足部

ほとんどみられず、焼成はあまくザラザラとした砂質感があるものとなる。本技法は最も早い時期から見られ、Ⅳ期以前は技法に多様性が見られること等から、江戸在地で生まれた技法の可能性が考えられる。

M2e 型の推移

DQ系ではⅣa期からⅨ期、DD系ではⅤb期からⅨ期に比定される遺構で確認されている。器種に偏りはみられない。Ⅳa期にみられるM2e型の資料は病中F34-11から出土したDQ系の1214（鳩）である。大形で振るとかすかに音がするため、内部の空洞部分にガラが入っていると思われる。M2e型ではあるが、ほぼ中実と言えほど内部の空間がせまく重量感がある。焼成は良好で表面は滑らかである。DD系でもⅤb期の指標遺構である外来SK137から1219（蛙）が確認されているが、器壁は非常に厚い（7図）。Ⅵ、Ⅶ期になると器壁は徐々に薄くなっていくが、目立って薄くなるのはⅧ期からである。水簸の技術が進み胎土の混入物が減ったため、薄く作ることが可能になったこと、広益国産考（農山漁村文化協会1997）に伏見人形から型を取り地元で複製を作ること奨励しているように、生産者層が専業生産者から副業生産者にまで広がっており、粘土の節約という意味合いもあると考えられる。生産量も増加し、Ⅷ期では人形の7割がM2e型である。赤みの強い橙色、もしくは明橙色の胎土を有する資料が多い。表面はざらざらとした砂質感がある。



7図 蛙

M1f 型の推移

DQ系ではⅢ、Ⅳa期とⅦ、Ⅷ期、DD系ではⅧ、Ⅸ期に比定される遺構で確認されている。器種はⅢ期では1304（面）、ⅦからⅧ期では1200（動物形）、1100（ひと形）である。DQ系でⅢ、Ⅳ期に確認されている面の裏面は凹み、型に押しつけた時の指頭圧痕が残る。成形は非常に丁寧である。胎土は橙色で赤色粒子を含む。焼成は良好で表面に雲母が観察される。Ⅶ、Ⅷ期に確認される資料は裏面が平坦なものや凸レンズ状に盛り上がるものが確認される。成形は雑なものも多く、胎土の色調は橙褐色または赤みの強い橙色を呈し、混入物は少なく表面はざらざらしている。DD系で確認される資料は1218（亀）と1223（蟬）である。成形はDQ系に比べ概して丁寧な資料が多い（8図）。



8図 蟬

M1o 型の推移

DQ系のⅧb、Ⅷc、Ⅸ期に比定される遺構で確認されている。確認される器種は1207（牛-伏牛）、1303（獅子頭）である（9図）。DQ系の胎土は精製度の高い明るい橙色で、砂質感があるものが多い。



9図 獅子頭

以上各成形技法の推移をみてきたが、DQ系、DD系に共通する最も大きな流れはM2f型からM2e型への成形技法の推移であるといえる。時期的にはⅦ期を境としている。この大きな流れと並行して限定的な器種の製作技法であるHf型、He型、M2o型がみられ、Ⅶ期以降にM1f型、M1o型が加わる。またDQ系の胎土の変化はⅧ期以前と以後で顕著である。Ⅷ期以前は鈍い橙色で赤色粒子を含む胎土を有

し、焼成は良好で硬質感があるが、Ⅷ期になると混入物はほとんどみられず緻密な胎土を有し、焼成はあまくザラザラとした砂質感があるものとなる。

2. 器種別様相

ここでは各段階ごとの器種の変化をみていきたい(2～5表)。

I期(1610～1630年代)

人形・玩具類の出土は確認されていない

II期(1630～1640年代)

人形・玩具類で最初に確認されるのはDD系の4009(車輪状製品)である。病棟-SK2154出土、型成形で中実である。片面に草花文様の陽刻がなされ、彩色の痕跡がある非常に丁寧な作りである。裏面は無紋で中央に孔を有すること、片面のみ装飾を加えていることから車類の車輪と思われる。

III期(1650～1670年代)

人形が登場する。

最も早いのはⅢa期に登場するDQ系の1109(西行)でM20型である。Ⅲ期はまだ人形・玩具類の出土は少なくDQ系では1109(西行)と1110(袴人形)、DD系では1114(坊主人形)、JA系では1200(鳥)、JB系では1100(ひと形)が確認されている。JB系の人形は高麗聖人とよばれ、背面に大きな穿孔を有するもので、灯芯押さえとされているものである。

器物で確認されているのはDQ系の・2016(竈)、DD系の2001(碗)である。竈はⅧ期までDQ系のみ建造物はDQ系の3001(祠)、遊具ではDQ系の4001(碁石)・4009(円盤状製品)が確認されている。円盤状製品の用途は不明である。

IV期(1680～1700年代)

動物の意匠が現れる。

DQ、DD系に確認されている1203(猿)・1205(馬)に加え、DQ系では1204(犬)・1214(鳩)・1217(木菟)、DD系では1218(亀)、JB系では1215(鶏)、TD系ではが確認されている。DQ系の猿は庚申信仰に関連してか、三猿、馬乗、樹上のものなど様々な意匠が存在する。ひと形で新たに加わる器種はDQ系DD系共通のものとして1102(恵比寿)・1103(大黒)など民間信仰にちなんだモチーフが確認されているほか、DQ系の1101(天神)・1105(布袋)・1108(狸々)・1113(蹴鞠人形)、DD系の1111(力士)である。また器物で新しく加わる器種はDQ系では2005(瓶)・2012(播鉢)・2013(蓋)・2015(石臼)、DD系では2002(皿)・2003(鉢)・2004(銚子)・2012(播鉢)、JB系では2001(碗)・2005(瓶)・2006(壺)、TD系では2001(碗)・2006(壺)・2013(蓋)である。碗の8割はJB系でしめられている。

V期(1710～1740年代)

DQ系には1100(瓢箪から駒)のような諺をモチーフとしたものや、1112(朝鮮通信使)など、風俗から題材をとった器種が現れはじめる。

新たに加わる器種は人形ではDQ系の1112(朝鮮通信使)・1121(姉さま)、DD系では1104(寿老人)・1109(西行)・1130(狎抱き)・1218(亀)・1219(蛙)である。姉様は他の女性像がⅧ期以降にしか確認されていない中、早い段階で現れる。器物はDQ系の2003(鉢)、DD系の2005(瓶)、JB系の2002(皿)。建造物ではDQ系の3004(橋)が新しく加わる器種である。

VI期(1750～1770年代)

DQ系では人形、器物、建造物ともほとんど変化がみられず、遊具のみ新たに4003(笛)・4006(泥

面子)・4007(土玉)が加わる。DD系では新たに1101(天神)・1204(犬)・2014(七輪)、3006(民家)が加わる。DD系、DQ系に共通してみられる

一般的に18世紀後半から器種、出土量とも増加し始めると言われているが、実際に増加が見られるのはⅦ期以降である。

Ⅶ期(1780～1790年代)

この時期の特徴として、女性像、児童像のバリエーションの増加を含む器種の増加があげられるほか、18c末から19c初頭に比定される遺構からは、福助、桃持ち等招福のイメージをもつものが現れ、信仰色がかなり薄れてくることである。狎のモチーフが現れるのもこの頃であり、安産、子どものお守りだった犬が、愛玩の対象としての役割に変化していく。

DQ系では1118(福助)・1125(裸婦)・1127(唐子)・1128(ぶら人形)・1133(面持ち)・1301(達磨)である。見て楽しむだけでなく、ぶら人形のように手に持って弄ぶ人形もあらわれる。動物では1206(狐)・1208(猫)・1215(鶏)・1219(蛙)などが加わる。養蚕の技術の発展に伴う猫絵の流行に並行し、土人形でも猫が登場する。この時期はまだ片手を上げる招き猫のものはなく、正面または横を向いて座るものか、伏せている意匠のもので、毬をもつものもある。器物を見るとDQ系では2001(碗)・2014(七厘)・2017(器台)・2021(五胡鈴) DD系では2009(土瓶)である。DQ系の碗はJB系、DD系の製品に比べ遅い登場であるが、今まで他の産地のものを使っていたものも、在地で作るようになってきたということであろう。実際に使われている道具は一通り確認される。建造物ではDQ系では3004(橋)・3008(鳥居)、DD系では3005(塀)・3007(灯籠)・3011(庭園)、遊具ではDQ系では4006(面模)、DD系では4003(笛)が加わる。

Ⅷ期(1800～1860年代)

器種、量とも爆発的に増加する。特徴的なのはDQ系の人形にDD系とまったく同じ意匠があらわれる点である(10図)。「広益国産考」に記されているようにDD系の人形から型をとったものか、単純に製品を模倣したものか、またその両方なのであろう。オリジナルを主張するために刻印が登場するのも本時期からである(11図)。人形のブランド化の始まりといえるだろう。

人形で新たに加わるのはDQ系の1119(笛吹き)・1120(若衆)・1123(お多福)・1124(三味線弾き)・1207(牛)・1209(兎)・1210(鼠)・1211(狸)・1213(象)・1216(鴛鴦)・1219(蛙)・1223(蟬)・1302(首人形)・1305(陽物)、DD系の1117(猿曳き)・1118(福助)・1124(三味線弾き)・1206(狐)・1216(鴛鴦)・1220(鯉)・1223(蟬)である。この時期には人形の数だけモチーフがあるといえるほど多様化が進む。以前からある恵比寿、狐は鯛乗り恵比寿、稲荷狐などバリエーションが増える。また拳遊びをモチーフにした狐・獵師など娯楽の要素の強いモチーフ、裸婦、陽物など卑俗な表現のモチーフがあらわれる。信仰色はますます薄れ、招福を主



10図 同一意匠の亀乗童子



11図 刻印「亀」(9図右)

とする個人利益を願うモチーフが全盛となる。丸い肢体の犬、丸顔の恵比寿等、形状も一様に丸みをおびたデザインに変わり、より愛玩性を強調する形状に変化している。器物はDQ系では2002(皿)・2004(銚子)・2007(片口)・2008(急須)・2010(鍋)・2011(釜)・2018(硯)・2019(水滴)・2020(銭貨)・2023(香炉)、DD系では2006(壺)・2007(片口)・2008(急須)・2014(七厘)・2022(柚でんぼ)である。寺子屋の普及の影響なのか、文具、銭貨なども現れ、読み書き算盤が生活に溶け込んできたことが感じられる。柚でんぼは実際に柚味噌を入れて売った容器であろう。建造物ではDQ系の

3003（城郭）・3006（民家）・3007（灯籠）・3009（御輿）・3010（舟）・3011（庭園）・3012（仕切り盤）である。遊具ではDQ系の4006（泥面子-芥子面）が追加される。

Ⅸ期（1880～90年代）

DQ系では1104（寿老人）・1220（鯉）DD系では1137（鯛抱き）・1222（金魚）・2015（石臼）、JC系では2005（瓶）・2008（急須）である。JC系の器物類が増加するが人形類はまだ確認できない。

明治以降

JC系の1000（ひと形）、JB系とJC系の2002（皿）・2005（瓶）が出土している。下限を昭和12年にもつ数埋SK12からJC系の1000（ひと形-童子）は陶塊に彩色したような簡素な作りの人形である。明治中葉以降になると、土師質の人形は減少し、磁質の人形はJC系のみになる。JB系では土師質と共通するモチーフは作られていなかったが、JC系では土師質と同様の器種が多く確認される。19世紀末から20世紀前葉に操業されていたとされる瀬戸市の西茨1号窯からは、招き猫、福助、這子、鯉、稲荷狐などが出土しており、その意匠も土師質のものとはほとんどかわらない。

以上段階別に器種の出土状況を述べてきたが、大きく3段階の変遷をみることができる。Ⅲ期からⅣ期の俗信に関わる神仏、動物を中心とする初期、Ⅴ期からⅥ期の風俗に題材を求める中期、Ⅶ期以降の招福ものを題材とする後期である。招福物を題材とする人形はその後も新たな材質を加えて作られ続け現代まで続いている。

3. 胎質割合の様相

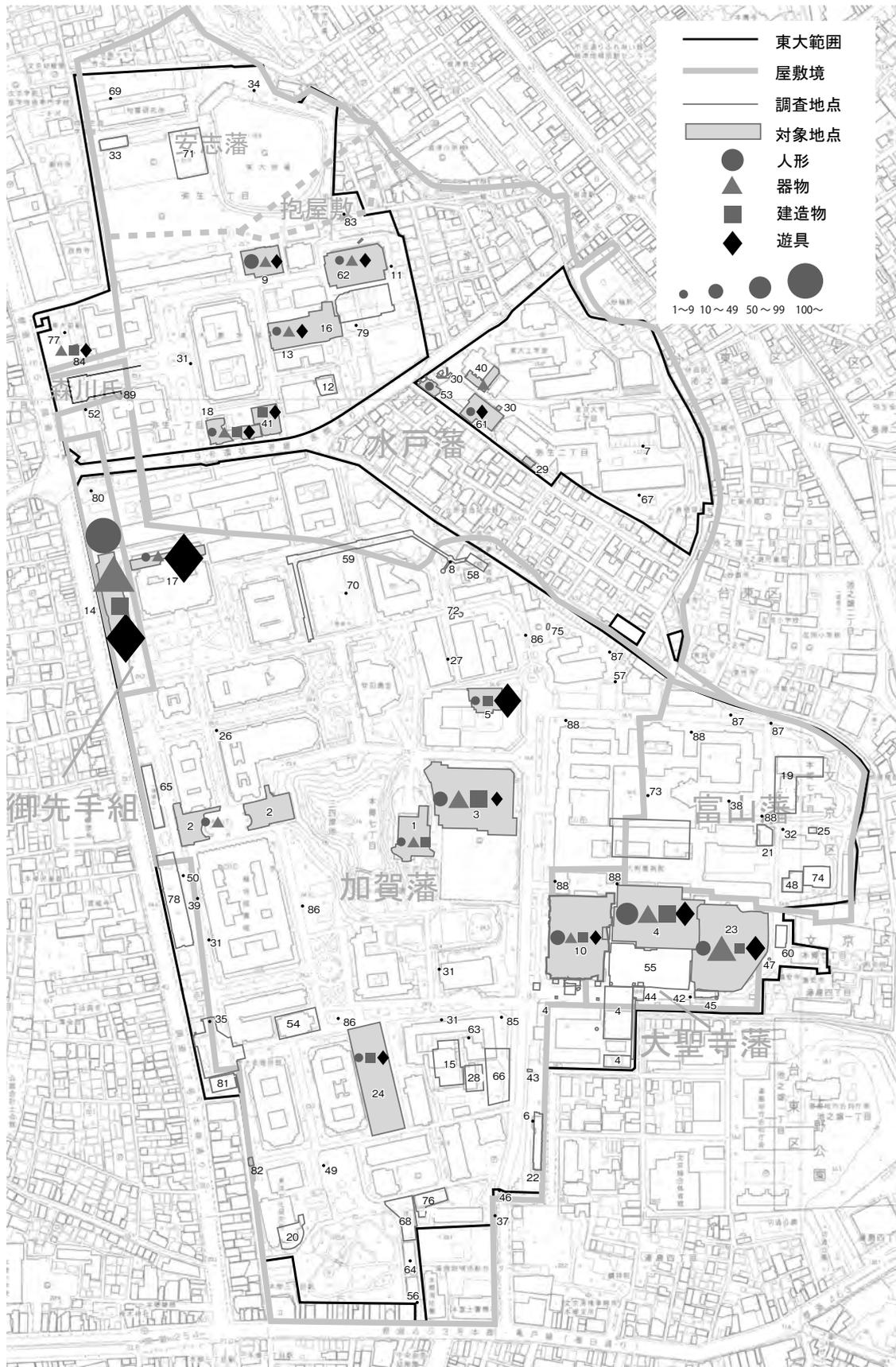
一般的に近世の磁質の人形は鑑賞用もしくは調度品で、遊びものの土師質の人形にくらべ高級品という認識がある。胎質と出土地点に相関関係はみられるのだろうか。また、それは年代により変化していくのであろうか。ここでは出土分布、胎質割合と出土地点の関係、年代別胎質割合の変化をみていきたい。

（1）出土分布

まず地点ごとの出土状況を表したものが12図である。

出土数全体をみると、圧倒的に多いのは御先手組屋敷跡の工14地点で全体の53%を占める。ついで大聖寺藩邸跡で22%、加賀藩邸跡18%、水戸藩邸跡6%である。組屋敷からの出土数が他地点より飛び抜けて多い。病棟地点は大聖寺藩邸跡にあたり、人形・玩具が多数確認されているが病棟C2層からは加賀藩邸内の天和の火災の廃棄資料が出土し、医研地点の遺物と接合している。このことから御殿内のゴミは支藩へ持ち出して捨てていたと考えられ、御殿内で人形玩具の出土が少ないのは、最終的な廃棄場所が御殿の外であるという点にも起因していると思われる。

器種別にみると、最も出土数の多い工14地点ではDQ系を中心とした人形、器物、建造物、遊具の全てが確認されている。これと対照的なのは加賀藩邸内の表御殿跡である医研地点である。4004（碁石状製品）が数点出土したのみで人形は近代の資料が数点、器物、建造物は全く確認されておらず生活感がほとんど感じられない。理7地点でも4004（碁石状製品）が100点以上まとまって出土しているほかは、箱庭に使われたと思われる陶質の人形と3002（塔）が1点ずつ出土したのみで、玩具としての人形・器物は確認されていない。加賀藩邸内で人形・玩具類の出土が多いのは、十代藩主前田重教の正室、寿光院のために建てられた梅之御殿跡である御殿下地点である。ここではDD系の大型で上手の人形や大型の3003（城郭）、3000（建造物-番屋）などの箱庭道具が2セット出土しており、他地点とは異なる出土状況である。また御殿下地点からは4006（泥面子）が出土していないのも特



12 図 人形・玩具類の出土分布

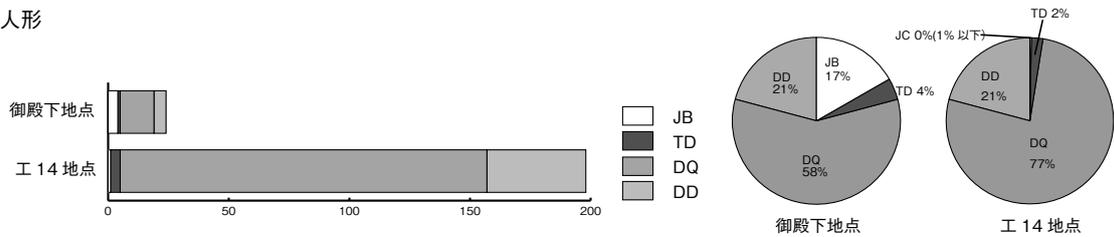
微的である。

(2) 胎質割合と出土地点

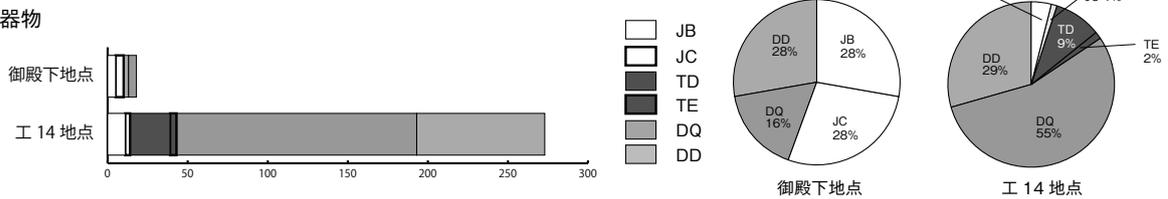
では次に遺跡の性格の異なる2地点での比較をするために、御先手組屋敷である工14地点と十代藩主前田重教の正室、寿光院のために建てられた梅之御殿跡である御殿下地点において人形と器物の胎質別出土状況を比較してみたい。出土量はいずれも工14地点が圧倒的に多く、人形では御殿下地点は工14地点の12%、器物では御殿下地点は工14地点の6%にしか満たない。次に胎質の割合を比較する。人形の胎質割合は御殿下地点では土師質が79% (DQ系58%・DD系21%)、磁質はJB系17%、陶質はTD系4%である。工14地点では土師質が98% (DQ系77%・DD系21%)、陶質はTD系2%、磁質はJC系のみでJB系は確認されていない。磁質と陶質の人形の出土数だけをみると御殿下地点の人形の出土数は工14地点とほぼ同じである。御殿下地点以外でのJB系の人形の出土は、病棟地点、教総地点の2地点のみである。病棟地点は後述するように加賀藩邸内の遺物が廃棄されていた場所でもあり、JB系の人形の出土地点は限られているといえよう。

しかし、器物では若干その様相が異なっている。器物の胎質割合は御殿下地点では土師質が44% (DQ系16%・DD系28%)、磁質は56% (JB系28%・JC系28%)と5割以上が磁質だが、工14地点では土師質84% (DQ系55%・DD系29%)、磁質5% (JB系4%・JC系1%)、陶質11% (TD系9%・TE系2%)

・人形



・器物



13図 御殿下地点と工14地点における人形と器物の胎質割合

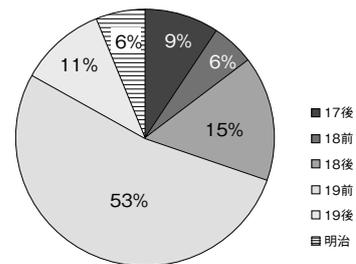
系1%)と土師質が8割以上を占める。磁質と陶質の器物の出土数では、工14地点は御殿下地点の2倍の出土がみられる。また磁質、陶質の器物は地点に関わらず満遍なく出土しており、出土地点による差異は認められない(13図)。

(3) 年代別推移 (14~18図)

次に年代により出土量と産地別胎質の割合はどう変化しているかをみていきたい。

17世紀後半

出土量は全体の9%を占める。人形に確認される産地別胎質はJA、JB、TD、DQ、DD系である。各胎質の割合は磁質15%、陶質4%、土師質81%。18世紀以降に比べると磁質の割合が高い。磁質の人形は器壁が薄く、細かな破片が多いため未報告資料が多い。



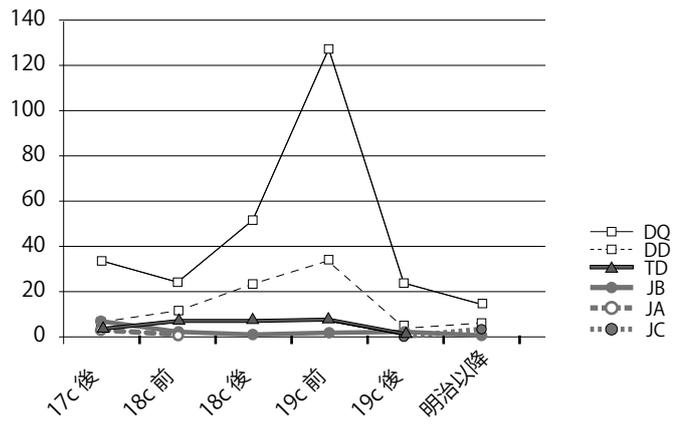
14図 年代別出土数

そうした破片を含めると磁質の割合はさらにあがると考えられる。JA系の人形が確認されるのはこの時期だけである。JB系の人形の破片には輸出用の高級磁器とされる柿右衛門様式の人形が含まれている。土師質の産地別内訳はDQ系が84%と大半がDQ系である。器物に確認される産地別胎質はJB、TD、TE、DQ、DD系である。各胎質の割合は磁質49%、陶質15%、土師質36%と圧倒的に磁質の割合が高い。特に碗(2001)は90%がJB系で構成されている。宝暦4(1754)年に著された『進物便覧』(神戸大学附属図書館デジタル・アーカイブ)の上巳節句の項に「一、京大坂にて近年やきもの錫物をいろいろひな道具に工出せり」とあり、一般的に節句道具にやきものの器が用いられるようになるのは18世紀後半と思われるが、大名藩邸ではかなり早い時期から節句道具などに陶磁質の器を使用していたと考えられる。

18世紀前半

出土量は全体の6%と17世紀後半より減少する。人形に確認される産地別胎質はJB、TD、DQ、DD系である。各胎質の割合は磁質2%、陶質12%、土師質86%。磁質の人形の割合が減少し、土師質の割合が若干高くなっている。土師質の内訳は、DD系は若干増加しているが逆にDQ系は減少し、人形全体の出土数の減少につながっている。

器物に確認される産地別胎質はJB、TE、DQ、DD系である。各胎質の割合は磁質29%、陶質7%、土師質64%と磁質の割合が大きく減少する。出土数からみるとDQ系の出土数はほとんど変わっていないが、JB系の減少が大きく器物全体の出土数につながっている。

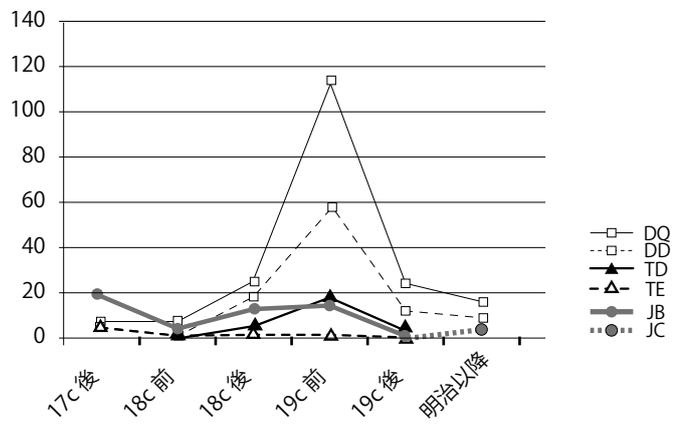


15図 人形における胎質割合の変化

18世紀後半

出土量は全体の15%と増加する。一般的に18世紀後半から器種出土量とも増加し始めると言われているが、実際に増加がみられるのはⅦ期以降からである。人形に確認される産地別胎質はTD、DQ、DD系である。各胎質の割合は磁質0%、陶質6%、土師質94%。磁質の人形はほとんど確認されず、大半が土師質となる。器物に確認される産地別胎質はJB、TD、TE、DQ、DD系である。各胎質の割合は磁質20%、陶質12%、土師質68%。陶質の割合が増加している。出土数の推移からみると、磁質、陶質とも増加しているが、土師質の増加の方が著しいため土師質の割合の増加につながっている。

器物に確認される産地別胎質はJB、TD、TE、DQ、DD系である。各胎質の割合は磁質20%、陶質12%、土師質68%。陶質の割合が増加している。出土数の推移からみると、磁質、陶質とも増加しているが、土師質の増加の方が著しいため土師質の割合の増加につながっている。

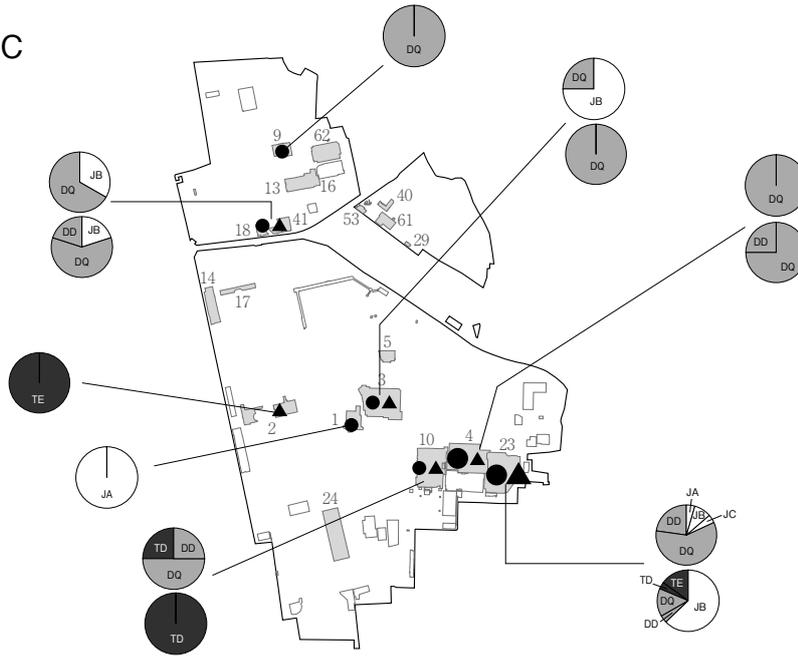


16図 器物における胎質割合の変化

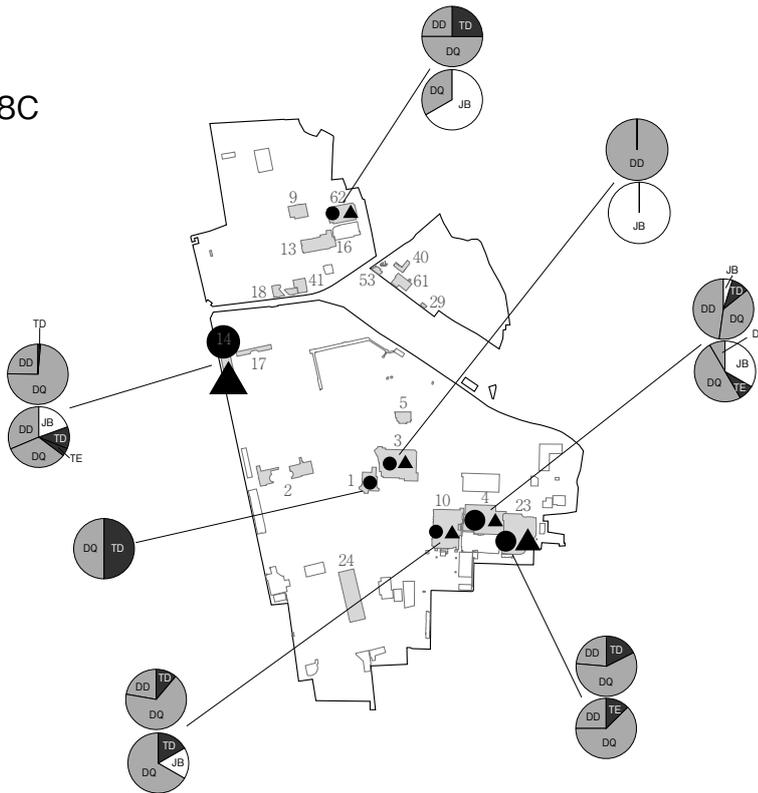
19世紀前半

出土量は全体の全体の53%と爆発的に増加する。人形に確認される産地別胎質はJB、TD、DQ、DD系である。各胎質の割合は磁質1%、陶質3%、土師質96%。大半が土師質になるのは、陶磁質の人形の出土数がほとんど増減していないのに比べ、

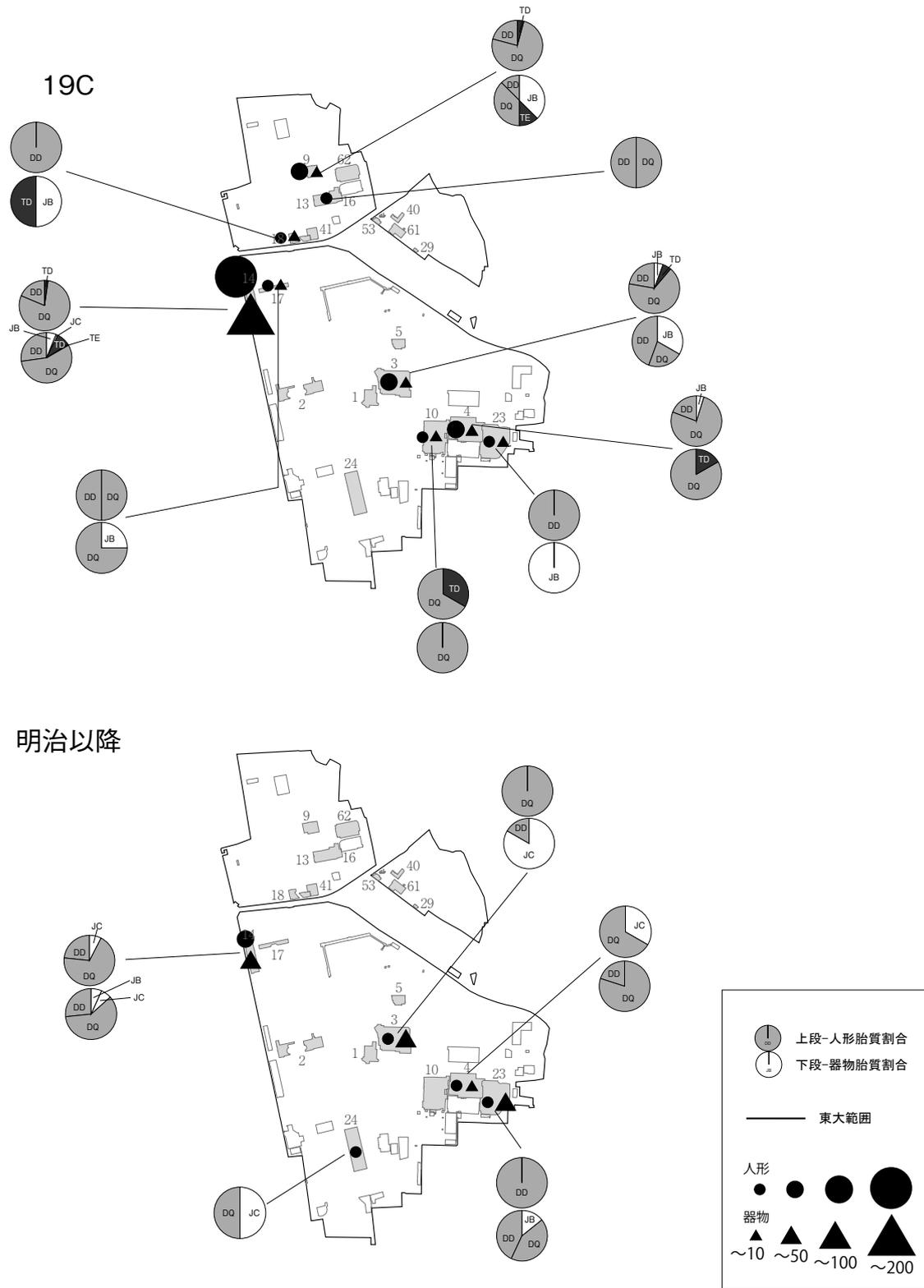
17C



18C



17図 胎質割合の変遷(1)



調査地点名：1. 山上会館 2. 法文 3. 御殿下 4. 病中 5. 理7 9. 家畜 10. 外来
 13. 農7 17. 工1 18. 教総 23. 病棟 24. 医研 41. IML

18 図 胎質割合の変遷（2）

土師質の出土数が大幅に増加しているためである。土師質内の産地別内訳はDQ系が79%と8割近くにのぼる。DD系の出土数の増加と、DQ系の出土数の爆発的な増加のためである。器物に確認される産地別胎質はJB、JC、TD、TE、DQ、DD系である。各胎質の割合は磁質7%、陶質10%、土師質83%。JB系の出土量は18世紀後半から変化はないがTD系は増加しJB系を上回る。人形同様DQ系の増加が著しい。DD系も大きく増加しているため、全体で土師質の割合が大きく上昇している。

太田南畝の『半日閑話』の安永7(1778)年11月の項に「本所みどり町伏見屋仙右衛門はじめて深草焼を鬻ぐ」(日本随筆大成編集部編1993)とあるように、18世紀末から伏見人形は販路を広げ江戸にも店を開いている。DD系の増加はこれを裏付けているといえよう。

19世紀後半(1850年代～幕末)

1850年代から幕末までの20年弱を19世紀後半とした。出土量は全体の11%。20年弱と短い期間としては決して少なくはない数字である。

人形に確認される産地別胎質はJB、DQ、DD系である。各胎質の割合は磁質4%、陶質0%、土師質96%。TD系がみられないのは遺存状態のよい資料がなく報告例がないためである。土師質内の産地別内訳はDQ系が85%とDQ系が9割近くを占める。器物に確認される産地別胎質はJB、JC、TD、DQ、DD系。JC系があらわれ、TE系は姿を消し、播鉢(2012)は土師質で花模様などの彩色を施した実用性を持たない製品のみになる。各胎質の割合は磁質7%、陶質7%、土師質86%。器物でもDQ系が大半を占めている。

明治以降

出土量は全体の6%である。これは出土量の減少のためではなく、調査例自体が少ないためである。人形に確認される産地別胎質はJC、DQ、DD系である。各胎質の割合は磁質14%、陶質0%、土師質86%。磁質の人形はJB系からJC系にかわる。器物に確認される産地別胎質はJB、JC、TD、DQ、DD系。各胎質の割合は磁質19%、陶質3%、土師質78%。磁質ではJC系がJB系を上回っている。人形、器物どちらも土師質は減少傾向にある。

4. まとめと今後の課題

以上人形・玩具の様相を成形技法、器種、胎質ごとにみてきたが、ここからみえてくる人形の出現と衰退について考えてみたい。人形で最も早い時期にあらわれるのはDQ系の西行である。人形の出土が少ないⅢ期に西行は数点出土している。なぜDQ系の初期にあらわれる人形が西行なのだろうか。西行といえば平安時代の歌人だが、民俗語彙としての西行では、諸国を遍歴するということから、物乞い・巡礼・職人などを指す。Ⅲ期に確認される西行は瓦質といえる資料が存在しており、成形技法も前述したように瓦成形との類似点が多い。民俗語彙としてのサイギョウの記録や調査の中に「埼玉県幸手市ではかつて瓦屋が何件もあり、瓦職人には流れ者が多く、その渡り職人をサイギョウと云った」との聞き取り調査もあり、DQ系の人形発祥と瓦職人の関わりは深いと考えられる。このサイギョウ=渡り職人という民俗語彙は関東周辺に限られている(花部1996)。伏見人形に伝わる西行の効能は、盗難よけまたは疝気の呪禁とされている(藤森2008)が、初期のDQ系の西行とDD系の西行では異なる意味合いを持っていたと考えられる。このことは西行の例にとどまらず、同じ器種でもDQ系とDD系とは異なる意味合いをもつものが存在するといえるだろう。

人形の衰退については明治以降のJC系とDQ系、DD系との器種の一致にみられるように、土師質の人形が、安価になった磁質の人形に市場を奪われたと思われる。今戸焼窯元の尾張屋7代の金澤春吉氏は「投げるとすぐに毀れて仕舞から疝の虫の根が切れると弱いのを特色として尊重歓迎された

ものが、ブリキ細工の出現で今戸人形は弱いからだめだと親が子供にもたせなくなった。-中略- 楽焼の繪の具は鉛が入るので毒だと言われて居ます -中略- 繪の具が毒だとあって問題となり遂に禁止されました」(日本郷土玩具協会 1942)と語っている。明治33年に施行された有害性著色料取締規則に打撃を受けた土人形は、ブリキ製品や明治中期頃から玩具生産に乗り出し、第1次大戦の輸出玩具ブームによって飛躍的に生産をのばしたJC系の人形に取って代わられていく様子が語られている。この推移が出土資料からもみてとれるのである。

木立氏は、石沢氏が文献史料から、信仰人形から始まり愛玩、節句人形へと広がる歴史的展開を示したことを受け、近世の土人形を、人形以前の「ひとの姿をかたどったモノ」の歴史から偶像、明器、形代、玩具の役割全てを持ったものとして定義した(木立 2008)。では人形の役割が形代から玩具へと交差し入れ替わる瞬間はいつなのだろうか。その画期の萌芽は成形技法の変化と器種の変化が起こるⅦ期にみられる。副業生産者の参入による生産量の増加と招福を願うことのできる生活のゆとりがⅧ期の爆発的な出土量の増加へつながっていったと考えられる。

今回分析したデータは東大構内遺跡内の大名屋敷と御先手組屋敷という階層差の少ない資料にとどまっている。今後は町屋、寺社地の資料などを含む、江戸遺跡全体の資料化を進めたい。また文献、民俗例も加味した細かな理解を進め、近世の人形・玩具の様相をつかんでいきたい。本稿を作成するにあたり下記の方々にご教示いただきました。ここに感謝申し上げます。

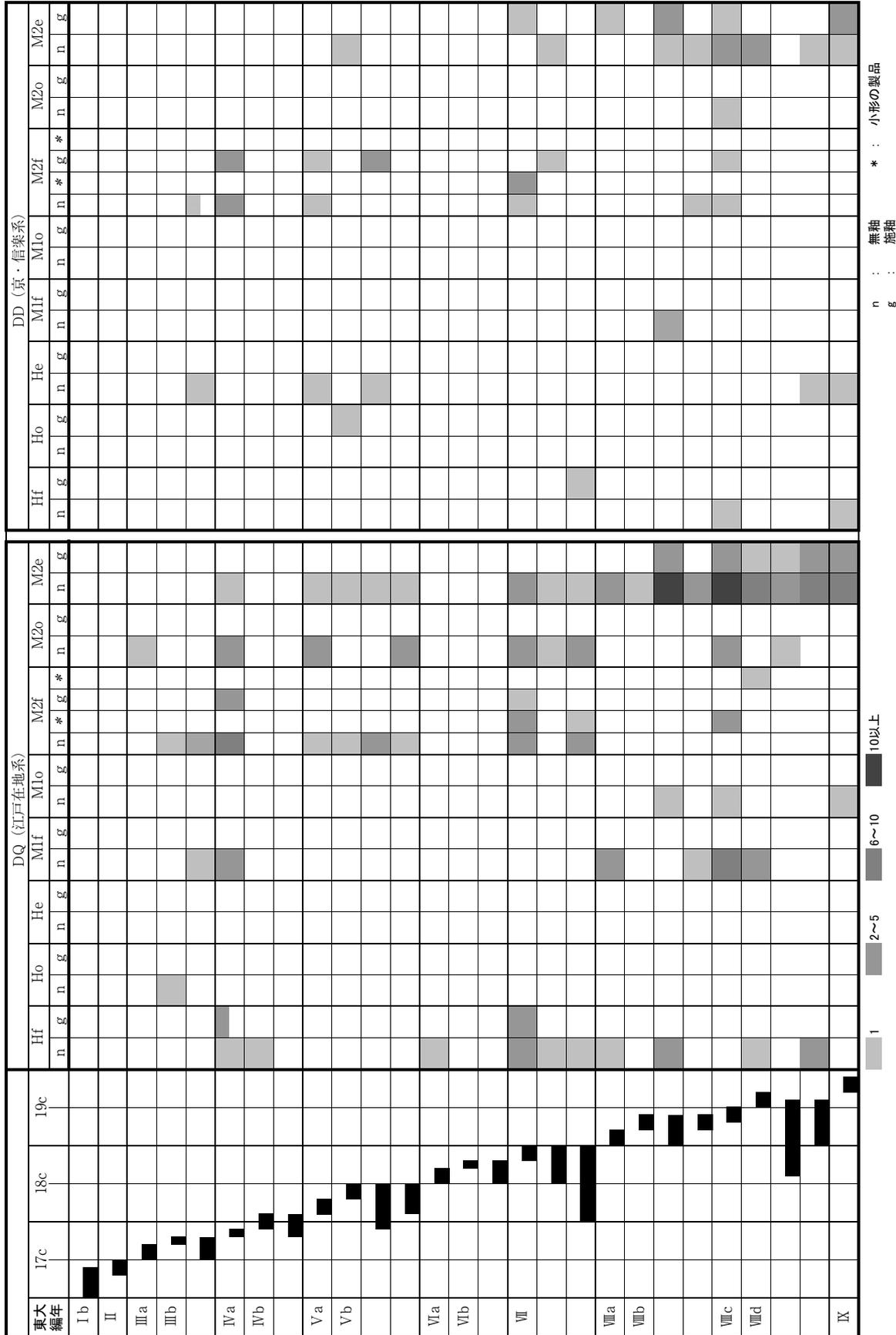
(有)丹嘉、小川望、川村紀子、小林謙一、小林すみ江、小松(武部)愛子、中野高久、能芝勉(敬称略)

【引用・参考文献】

- 茨城県鹿島町教育委員会 1992『鹿島町内遺跡発掘調査報告XⅢ-鹿島町内No.66遺跡(神野向遺跡)・No.67遺跡(神野遺跡)-』
- 大成可乃 2011「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(2)」『東京大学構内遺跡調査研究年報』7 東京大学埋蔵文化財調査室
- 川村紀子 2008「大阪出土の土製品」『土人形が見た近世社会』関西近世考古学研究16 関西近世考古学研究会(株)武蔵文化財研究所 2006『東京都千代田区有楽町二丁目遺跡』
- 木立雅朗 2008「考古学から見た土人形の出現と展開」『土人形が見た近世社会』関西近世考古学研究16 関西近世考古学研究会
- 神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ 住田文庫 進物便覧 (<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/directory/sumita/00020377/>)
- (財)大阪市文化財協会 2009a『大阪城跡X』
- (財)大阪市文化財協会 2009b『瓦屋町遺跡発掘調査報告』
- (財)京都市埋蔵文化財研究所 2004『平安京左京北辺四坊』第2分冊
- (財)京都市埋蔵文化財研究所 2011『法性寺跡』
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002「下田遺跡」『ハツ場ダム発掘調査集成(1)』
- (財)東京都教育文化財団東京都埋蔵文化財センター 1994『東京都千代田区丸ノ内三丁目遺跡』
- 三省堂 1998『大辞林』
- 新宿区北山伏町遺跡調査会 1989『北山伏町遺跡』
- 新宿区教育委員会 1987『自證院遺跡』
- 新宿区厚生部遺跡調査会 1993『圓應寺跡』
- 新宿区大日本印刷遺跡調査団 1998『東京都新宿区市谷左内町遺跡I』

- 新宿区払方町遺跡調査団 1999『東京都新宿区払方町遺跡』
- 新宿区南元町遺跡調査会 1991『發昌寺跡』
- 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会 1997『千駄ヶ谷五丁目遺跡』
- 大成エンジニアリング(株) 2005『東京都新宿区崇源寺・正見寺跡』
- 台東区文化財調査会 2000『谷中三崎町遺跡(正運寺)』
- 台東区教育委員会 2009『仲御徒町三丁目遺跡』
- 東京大学構内雨水調整池遺跡調査会 1994『本郷追分』
- 東京大学遺跡調査室 1990『東京大学本郷構内の遺跡理学部7号館地点』
- 東京大学遺跡調査室 1990『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1990『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1997『東京大学本郷構内の遺跡 農学部家畜病院地点』東京大学構内遺跡調査研究年報1
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1999『東京大学本郷構内の遺跡出土陶磁器・土器の分類(1)』東京大学構内遺跡調査研究年報2
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2004『東京大学本郷構内の遺跡 農学部校舎(7号館)地点』東京大学構内遺跡調査研究年報4
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2005『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院外来診療棟地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2006『東京大学本郷構内の遺跡 理学系研究科附属植物園研究温室地点』東京大学構内遺跡調査研究年報5
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2005『東京大学本郷構内の遺跡 工学部1号館地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2006『東京大学本郷構内の遺跡 工学部14号館地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2008『東京大学本郷構内の遺跡 農学部共同溝地点』東京大学構内遺跡調査研究年報6
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2011『東京大学本郷構内の遺跡 農学部生命科学総合研究棟』東京大学構内遺跡調査研究年報7
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2011『東京大学本郷構内の遺跡 教育学部総合研究棟地点 インテリジェント・モブリング・ラボラトリー地点』
- 東京都江戸東京博物館 1997『館蔵資料報告1 今土焼』東京都江戸東京博物館調査報告書第4集
- 東京都埋蔵文化財センター 1998『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅲ』
- 東京都埋蔵文化財センター 2000『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅴ』
- 東京都埋蔵文化財センター 2001『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅵ』
- 東京都埋蔵文化財センター 2002『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅷ』
- 東京都埋蔵文化財センター 2003『千代田区永田町二丁目遺跡』
- 東京都埋蔵文化財センター 2005『新宿六丁目遺跡』
- 東京都埋蔵文化財センター 2006『尾張藩上屋敷跡遺跡ⅩⅡ』
- 東京都埋蔵文化財センター 2006『尾張藩上屋敷跡ⅩⅡ』
- 東京都埋蔵文化財センター 2007『和泉伯方藩・武蔵岡部藩上屋敷跡遺跡』
- 東京都埋蔵文化財センター 2009『千駄木三丁目北遺跡』
- 東京都埋蔵文化財センター 2011『巢鴨遺跡』
- 東京都港区教育委員会 1986『港区済海寺長岡藩牧野家墓所発掘調査報告書』

- 都内遺跡調査会 1996『溜池遺跡』
- 都内遺跡調査会 1997『駒込鰻縄手御先手組組屋敷』
- 都立学校遺跡調査会 1999『日影町Ⅱ』
- 都立学校遺跡調査会 2000『日影町Ⅲ』
- 都立一橋高校内遺跡調査団 1985『江戸－都立一橋高校地点発掘調査報告書』
- 中野高久 1998「刻印・窠書きからみる「玩具類」」『江戸在地系土器の研究』Ⅲ 江戸在地系土器研究会
- 中野高久 2011「江戸遺跡における「亀」在印資料の流通と展開」『江戸時代の名産品と商標』吉川弘文館
- 成瀬晃司 1997「江戸遺跡出土資料による磁器碗・皿の変遷－文様、銘款を中心に－」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1 東京大学埋蔵文化財調査室
- 成瀬晃司 2000「加賀藩本郷邸内『黒多門邸』出土陶磁器の様相」『竹石健二先生・澤田大多郎先生還暦記念論文集』日本郷土玩具協会『鯛車』54号
- 日本随筆大成編集部編 1993『日本随筆大成第1期 半日閑話－太田南畝－』第8巻 吉川弘文館
- 農山漁村文化協会 1997『広益国産考（大蔵永常）』日本農書全集14
- 能芝勉 2008「京域 江戸時代の土製品」『土人形が見た近世社会』関西近世考古学研究16 関西近世考古学研究会
- 能芝勉 2011「京都伏見・深草産の土師質製品について」『江戸時代の名産品と商標』江戸遺跡研究会
- 花部英雄 1996『西行伝承の世界』岩田書店
- 藤森寛志 2008「土人形の歴史と民族－伏見人形を中心として－」『土人形が見た近代社会』関西近世考古学研究16 関西近世考古学研究会
- 文京区遺跡調査会 1999『春日町遺跡第Ⅵ地点』
- 文京区遺跡調査会 1999『諏訪町遺跡』
- 平凡社 2000『やきもの辞典』
- 堀内秀樹 1997「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1 東京大学埋蔵文化財調査室
- 堀内秀樹 2004「東日本における軟質施釉陶器の生産と流通」『軟質施釉陶器の成立と展開』関西近世陶磁研究



1表 人形における成形技法の推移

東京大学構内遺跡調査研究年報 8
2009・2010 年度

2012 年 5 月 31 日発行

編集・発行 東京大学埋蔵文化財調査室
東京都目黒区駒場 4 - 6 - 1
<http://www.aru.u-tokyo.ac.jp>
印刷 (有)平電子印刷所
